
遊戯王 3大英雄集結、未知なる時空を超えた絆!!

トマト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遊戯王 3大英雄集結、未知なる時空を超えた絆！！

【Nコード】

N21790

【作者名】

トマト

【あらすじ】

イリアステル、プラシドとの壮絶な戦いの末、中断されてしまったWRGP。遊星達は何時か近い内に復活する大会に向けて時間の限り腕を磨き続けていた。

そんなある日、突如として彼等の前に姿を現した謎の男、パラドックス。彼は謎の白紙のカードを使って、『スターダスト・ドラゴン』を一とするシグナー達の5体のドラゴンを奪い去ってしまう。

パラドックスの目的がデュエルモンスターズや腕の立つ決闘者を抹殺することだと知った遊星達は彼を追って、ドラゴン達を取り返

す為、彼の野望を打ち砕く為にいざ過去へと飛ぶ。

そこで彼等が対面する嘗ての偉大な決闘者達。果たして彼等は上手く結託し、奪われたドラゴン達を奪い返す事が出来るのか!?

今、遊戯王界、史上最大の戦いが幕を開ける!!

これは昨年公開された映画、『遊戯王 超融合、時空を超えた絆』を見る事が出来なかった馬鹿が描く、映画版のリメイク小説です。映画本編とは色々とずれがありますので、どうぞご注意下さい。

携帯電話でもご覧になることは出来ませんが、カード名の読み仮名が一部妙な形で表示されますので、パソコンでご覧になることをお勧めします。もし携帯電話でご覧になるのであれば、文字の大きさを最小にすることを推奨致します。

それではどうぞお楽しみ下さい。

TURN・00 闇より出でし絶望（前書き）

今回私の休息という事でこれを投稿しました。初めましての方は初めまして、トマトです。

遊戯王歴は小学生から、未だワイルドラプターが強かった時代からこのゲームを続けております。因みに一番好きなカードはコマンド・ナイト。理由は使い易いから。

正直自身は全くありません。長年続けておりますが、所々ルールを解って無い所がありますので、もし間違えておりましたらどうぞ遠慮なく教えて下さい。

それでは始まります。

TURN・00 闇より出でし絶望

ゲームの歴史。それは遙か5000年も昔、古代エジプトにまで遡るといふ。

古代に於けるゲームは人間や王の未来を予言し、運命を決める魔術的な儀式だった。……それ等は闇のゲームと呼ばれた。

今、千年パズルを解き、闇のゲームを受け継ぐ正義の番人になるうとする少年がいた。

光と闇、2つの心を持つ少年の名を人は……遊戯王と呼ぶ。

東西南北、4つのデュエルアカデミア。それは強い決闘者を養成する為に建立された学園。デュエリスト

そこで生徒達は決闘を学び、勇気を学び、友情を学び 様々な出会いを通じて、様々な困難を乗り越えて一流の決闘者を目指す。

今、1人の明るい太陽の様な少年が自分が最も信頼するHEROを連れてこの学園を訪れた。

果たしてこの少年は3年という長く短い学園生活で何を見出すのか……。

全く新しい次なる世代、GXの始まりである。

ライディングデュエル 決闘疾走。それはスピードの世界で進化した決闘。デュエル

そこに命を掛ける伝説の赤き竜の痣を持つ選ばれし決闘者達。デュエリスト

時にぶつかり合い、時に励まし合い、数々の苦難を共に乗り越え、彼等は堅い絆を築き上げていった。

そんな彼等を人々は……5D'sと呼んだ。

デュエルモンスターズ。それはデュエルモンスターズカードを駆

使して戦う決闘者と呼ばれる者達の戦いの儀。

プレイヤーの命令を忠実に聞き従う1000を超えるモンスターカード。時に雷を呼び、時に炎を呼び、決闘者がモンスターや自分をサポートする際に使用する魔法カード^{マジック}。窮地の時でさえ、そのたった1枚で逆転を可能にしてしまう可能性を持つ罠カード^{トラップ}。これ等を駆使して行つのがデュエルモンスターズである。

時は2XXX年。最強の決闘王^{デュエルキング}と謳われた武藤遊戯の時代から何百年と経つた世界。

時代の時が進む毎に科学が発展していくこの世界。それに比例してデュエルモンスターズも新しく、よりハイレベルに進化を遂げていった。

カードに描かれたモンスターがまるで本物の様に飛び出す立体映像^{ソリッドグレイ}システム。それを小型に、より手軽に決闘出来るように、とKC（海馬コーポレーション）^{デュエルディスク}が作り上げた決闘盤。

だが変わっていったのは決してシステムだけでは無く、カードの種類も時代が進めばそれに比例してどんどん増加していった。

聴^{スリル}て決闘は更に進化。新たに生み出された超スピードの中で行われる、緊張感溢れる決闘疾走。それまでの決闘を覆してしまう程の影響を与えたシンクロモンスター。

様々な進化の道を進んでいったデュエルモンスターズはその末に

……戦争の国々の兵器として、軍事用につつつけの兵器と化してしまった。

忠実に命令に従い、人間を遙かに超えた力を持つモンスターは最高の兵士。魔法も罠も実に戦争向きで皆直ぐに実用化を目指し、長い年月を経てそれを実現させてしまう。

老若男女に愛されたデュエルモンスターズは一転して悪魔の様に人々に牙を剥き、数多くの人達を傷付け、その命を奪い取ってしま

った。

その被害の大きさはこれまでの重火器なんて問題にならない程大きく、どれだけ命が奪われようと、その戦争は治まる気配を見せなかった。

だがその裏ではまた別の問題が人知れず浮かび上がって来ていた。兵器として実態化させた強力なモンスター達は人間が完全に制御出来る物では無かったのだ。

結果、制御し切れなくなったモンスター達はまるで逆鱗にでも触れたかの如く暴走。戦争処では無くなってしまったが、止めるには時既に遅く……。

その時を持って、進化し続けてきたデュエルモンスターの歴史も幕を閉じてしまったのだった……。

「何故だ……何故こんなことになってしまったんだ!？」

火事のように赤く染まった空の下、瓦礫に手を着いた黒色の長い髪の青年がこの世界の現状を嘆いた。

眼前には暴れ狂う数々のモンスターが、まるで特撮怪獣番組の様に街を破壊し尽くしていく。

陸を歩き、手に持った弾丸に限りの無い銃を乱発する『コマンドー』。他にも『機械の巨兵』、空を舞う『カイザードラゴン』。町を燃やし尽くそうとする『暗黒火炎龍』や『プロミネンスドラゴン』。

中には攻撃力2000越えの『閻魔界の霸王』、『邪帝ガイウス』、『デビルマゼラ』。終いには『ブラック・デーモンズ・ドラゴン』といった決闘中でも凶悪極まりなモンスター達まで見受けられた。

彼等の破壊活動は止まることを知らない。このまま世界が滅亡するその瞬間が来るまでは……。

「!!! しっかりしてっ!？」

「このままでは危険だ!!! 急いで避難しなければ!？」

その後ろでは、彼を慕う数人の男女がそんな青年を何とか非難させようと頼に汗を垂らして行動に勤しんでいる。

だがそんな彼等を潰そう、と数体のモンスターがその巨体を歩み寄らせてきた。

特に先頭を走る紫色のモンスター、その姿は数千年前に滅んだという恐竜を想わせるが、その首はなんと二頭。

「くそつ、二頭を持つキングレックスだ!!!」

「後ろには『ドラコドン』に『ブラキオレイドス』まで居るぞっ!」

「あつちには『ワイルドドラプター』に『プラグティカル』も!?!」

他にも数体の恐竜族モンスター達が此方に鋭い目を向けている。

……青年達は一先ず此処から逃げ出した。

人間達には何も出来なかった。彼等にモンスターを食い止める術は何一つ無かったのだ。

実体化させてしまった彼等はゲームと同じく、倒さない限り消滅しない。

だがそれを倒す味方モンスターは1体と居ない。魔法や罠だけでは倒し切れなかった。

使えば単発系のカードは消滅、永続系は敵と化した『青い忍者』や『赤い忍者』によって蹴散らされてしまい、こうして人間達には迎撃する為のカードが無くなってしまったのだ……。

「俺達はこの先一体どうすればいいんだ……」

電気を失った歪んだビルの中、彼等はモンスターの攻撃を掻い潜り、此処に上手く逃げ込んでいた。

誰もが疲れ切った表情、絶望に打ちひしがれた暗い顔。

モンスターという絶対に勝てない怪物、残り少ない人類、軍から奪ってきた残り僅かな食糧と薬、と様々な問題が彼等の頭を痛めさせた。

此処だって何時襲われるか。または限界がきてこのビルが崩壊す

るのが先か。それとも食料が尽きて案外飢え死にかもしれない。絶望的な最後を考えれば幾らでも浮かび上がる。

希望の光は全くと言って見付からないというのに……。

「どうしてこうなってしまったの……」

「決まってるんだろ！？ 馬鹿な政府共が戦争をおっぱじめちゃったからだ！！」

膝を抱えて座る長髪の女性が悲しそうに呟くと、それに過敏に反応したボサボサ頭の青年が拳を握って吠えた。

ぎりぎりとながら籠る握り拳、彼の叫びは本当に悲痛だった。

「もう俺達、死にまうのかな」

「止めてよ。そんな縁起でもないこと言わないで」

次々に口から出てくる悲しい言葉の数々。もう誰もが生への希望を見失ってしまった。

黒髪の青年はもうこの場で泣きたくなかった。

だがそれは仕方が無いこと、この状況なら大人子供関係無く泣きたくなる。

(本当にどうしてこんなことになってしまったんだ)

先程あの長髪の女性がぼやいたことを彼は心の中で呟く。

そしてこうなってしまった原因を幾つか考え始めた。

戦争を始めたのは政府。一体誰がそれにデュエルモンスターズを利用したと言いついたというのだろう。

いや、先ずデュエルモンスターズを立体映像システムを使って実体化させるといふ所から間違っていたのではないだろうか。

そんなことしなくてもデュエルマップさえあれば決闘は出来る。

そんな大それたものを使う必要などない。最初からそんな物造らなければ良かったのだ。

いや、そもそもデュエルモンスターズなんて物さえ無ければ良かったのではないか……。

……青年達の心に大きな闇の影が宿った瞬間だった。

聴てそれは更に大きな闇を呼び、この世界に於いて史上最大、時空をも超えた最大級の戦いを引き起こすことになるのであった……。

T U R N - 0 0 闇より出でし絶望（後書き）

今回の最強カード

【邪帝ガイウス 星6 / 闇属性 / 悪魔族 / A T K 2 4 0 0 / D E F 1 0 0 0】

『このカードのアドバンス召喚に成功した時、フィールドに存在するカードを1枚除外する。除外したカードが闇属性だった場合、相手のライフに 1 0 0 0 ポイントダメージを与える。』

半上級の悪魔族モンスター。相手のライフが1000以下ならこのカード自身を除外して止めを刺す事が出来る。

但し、アドバンス召喚でしか効果を発動しないので、『始皇帝の陵墓』で召喚しても効果は発動出来ない。上手くモンスターを揃えて召喚しよう。

トマトとしては、直接攻撃時に特殊召喚する事が出来る『バトルフェーダー』や、無条件で特殊召喚出来る『ジエスターコンフィー』等と組み合わせるのがお勧めである。

T U R N ・ 0 1 スピード・ウォリアー

決闘疾走は超高速の中で行われる決闘。そこで決闘者達は身体に掛かる負担に耐えながら決闘を行う。

だがこの決闘は従来のそれとは異なるルールが幾つかある。その中でも特に違う点は、D・ホイールを用いる点と、S p を使用するスピードスヘルことだろう。

D・ホイールとは、決闘者が搭乗する決闘疾走専用のバイクのことであり、様々な機種が存在している。

D・ホイール専用会社が造った特注品や様々なパーツを利用して造り上げた自家製のオリジナルD・ホイール。プロ決闘者になればスポンサーが着き、その機種の選択や費用までも無条件にサービスしてくれる。

そしてS pとは、決闘疾走でのみ使える魔法カードのことである。この魔法カードを使用する際、スピードカウンターS P Cという物が必要になる。これは互いのターンのスタンバイフェイズに1個ずつ加算され、最大12個のS P Cを貯め込むことが可能。それを取り除くことでS pを発動出来るのだ。

更に決闘疾走で互いのフィールド魔法として常時発動されている『スピードワールド2』の3つの効果にも必要になってくる。手札のS pを見せることを条件に、4個取り除くことで相手のLPに800のダメージ。7個取り除くことでデッキよりカードを1枚ドロー。10個取り除けば、場のカードを1枚を無情に破壊することが出来るのである。

そしてこれは一般の高速道で行われる。

突然高速道が変形を始めた。更に周辺にはそれを伝えるように警報ブザーが鳴り響いている。

そう、これはこの道路が決闘疾走に使用される為、避難しろという合図なのだ。

決闘疾走が始まれば、乗用車は立ち入りを禁止される。そこで走行を許されるのは疾走決闘者、所謂Dホイラーだけである。

聴て2台のバイクが見えてきた。赤と白の2台のD・ホイールだ。赤い方は二輪の物。しかも決闘盤を取り外すことが出来るハイブリッドだ。白い方は大きなモノサイクルのD・ホイール。これもやはりハイブリッドだ。

それに搭乗している2人の決闘者。赤い方に乗るのは濃い紺色の上着に茶色の手袋を嵌め、赤いヘルメットを被っている青年。彼の左頬には黄色いマークと呼ばれる不適合者の証が刻まれている。白い方には長身の男性、同じく純白の服とヘルメットに身を包み、黄色い頭髪がメットのの下から覗いている。

そしてその目は獣のようにキラキラと輝いていた。彼等は自慢のD・ホイールを走らせるその瞬間を今か今か、と待っていた。

そして2人の準備が出来たことを確認した決闘システムが発進のカウントダウンを告げるシグナルにライトを点けた。

「行くぞ遊星!!」

「ああ! 来い、ジャック!!」

「『スピードワールド2』、セット!!」

2人のD・ホイールの液晶画面に浮かぶ『DUEL MODE』という文字、そして浮かび上がる『スピードワールド2』、4000という数値で表されるLPライフポイント以外何も表示されていない決闘フィールドの映像。

そして遂に発進の時が来た。シグナルの赤いランプが点く。

「決闘疾走、アクセラレーション!!!」

2人の掛け声と共に2人の決闘疾走が始まった。

「いよいよ始まったね。遊星とジャックの決闘疾走!!」
「うん。2人はライバルだから、きつと良い決闘になるわ」

それを離れた少し離れた場所で観戦する者達が居た。遊星、そしてジャックと呼ばれる決闘者の仲間である彼等、計5人の男女達だ。此処で遊星達を含め、彼等を少し紹介していこう。

先ずは不動遊星。今現在コースとなった高速道を走っている決闘者の1人だ。

物静かで冷静な青年。決闘の実力も彼等の中では特に高く、整備し顔負けの腕前のメカニックでもある。

更に彼は誰よりも仲間やカード達との絆を大切にする好青年であり、世間には彼に憧れる者も少なくは無い。当然仲間からの信頼も厚い

現在はキングの称号を持つ、世界でも5本の指に入る決闘者である。

デッキは『シンクロン』と名の付くモンスターを主体にしたシンクロデッキ。切り札は白く美しい身体を持つ『スターダスト・ドラゴン』。

次はジャック・アトラス。遊星と同じく現在走行している決闘者であり、遊星にとっては永遠のライバルであり、無二の親友である。自信家な性格をしており、それを象徴するかのようにデッキも真っ直ぐ^す力で敵を押し伏せるパワーデッキを使用する。その圧倒的な力は、キングである遊星に勝るとも劣らない。そもそもかつてのキングは彼だったのだ。

切り札のカードはやはり力を武器にして戦うジャックらしい高い攻撃力と強力な効果を兼ね備えた『レッド・デーモンズ・ドラゴン』である。

そして先程何処かワクワクした声を上げた緑色の髪をした2人の少年少女。彼等は双子の龍亞と龍可、アカデミア小等部に通い、遊星やジャック達を実の兄の様に慕う子供の決闘者だ。

兄の龍亞は元気な少年、『D』^{ディフォーマー}と呼ばれる電子機器を模した機械

族モンスター達を主軸にしたデッキ。エースカードは装備カードで無限の可能性を見出す『パワー・ツール・ドラゴン』だ。

妹の龍可は滅多に決闘しないが、世間では天才少女と呼称される程の実力派決闘者である。カードの精霊達の声を聞くことが出来るという不思議な力を持っており、『クリボン』や『レグルス』といったモンスター達と会話することが出来る。エースカードは母のような優しさと面影を併せ持った『エンシエント・フェアリー・ドラゴン』。

「ちつきしよおっ！！ 俺だつて久々に遊星と決闘したかつたぜ！！」

「しょうがないでしょ。じゃんけんに負けたんだから。……私だつて遊星と決闘したかつたわよ」

そして双子の隣に立つ、悔しそうに拳を握るオレンジ色の髪をした低身長の青年。そしてそんな彼を呆れた目で見るとドリルカラーを巻き付けた赤髪の女性。

青年の名はクロウ・ホーガン。鉄砲玉クロウを自称する決闘者であり、トリッキーな特殊効果を持つ鳥獣族モンスター、『BF』を操る熱血漢だ。読み書きを全てカードで学んだという彼はデュエルモンスターズを深く愛しており、その実力もとても高い。

子供の面倒見も良く、優しい青年でもある。そんな彼のエースカードは『ブラック・フェザー・ドラゴン』。相手からの効果ダメージを吸収してプレイヤーを守る、正に彼を写した様なモンスターである。

「だからってお前、何でシャボン玉なんて吹いてんだよ？」
「……別に」

クロウの言葉も気にせず、赤髪の女性はシャボン玉をムスツとした顔で吹き続けた。

彼女は十六夜アキ、植物族を主体としたデッキを扱う女性決闘者である。

嘗ては決闘の行為現実世界に具現化するサイコパワーという力で

周辺を破壊する黒薔薇の魔女として世間から畏怖されていた。

だが遊星との出会いを経て、本当の意味で救われた彼女は変わった。魔女の仮面を外し、本来の心優しいアキに戻ってからは、遊星達（主に遊星）の手助けにその力を使うようになり、最初は敵として遊星達と知り合った彼女だが、今では良き仲間として学校が終われば彼等と共に日々を過ごしていた。

切り札のエースカードは漆黒の身体と薔薇の花弁で彩られた翼を持つ『ブラック・ローズ・ドラゴン』である。

勿論2人も遊星やジャックと同じく自前のD・ホイールを持った決闘者。

だが今回はじゃんけんという公平なジャッジにより、決闘疾走はお預けされてしまっていたのだ。

だからであろうか、彼等2人は不機嫌だった。

……特にアキ。彼女は遊星とジャックが決闘疾走すると決まった際、ジャックを恨めしそうな目で見詰めていた。

「まあまあ、今回は遊星とジャックが決闘疾走するって皆で決めたんだから文句言わないの。さあ、いよいよ第一コーナ、先攻後攻を決める大切なカーブだよ」

そんな2人を宥めるのはパソコン画面と睨めっこしていた青い髪の青年、名はブルーノ。

彼の役割は他の者達のように決闘ではない。遊星達のDホイールの修理や改良を任されているメカニックなのである。

しかもその腕前は一級品。遊星をも上回るその腕前は、これまで遊星達が如何に改良を施しても越えられなかったスピードの壁を難なく越えてしまう程だ。

遊星と仲間になった順番では1番最後だが、今では彼等に無くてはならない存在である。

彼等7人は遊星を筆頭にあるチームを組んでいる。数日前から開催されているWRGP（ワールド・ライディングデュエル・グランプリ）に出場する為に結成されたチームである。

それがチーム5D's。世界の強豪チームに引けを取らない個性溢れる素晴らしいチームである。

現在とはあることで中断されてしまったWRGPだが、これから何時再開されるか解らない為、今もこうしてチーム5D'sは練習決闘に励んでいるのである。

……話は戻る。

現在、決闘疾走を行っている2人はブルーノの言う通り第一コーナーに取り掛かろうとしている。実はこの最初のコーナーは決闘疾走に於いて中々重要なポイントなのだ。

決闘疾走は最初のコーナーを先にクリアした者に先攻が与えられる。先手を取るには相手より早く曲がらなければならないのだ。勿論スピードを上げ過ぎればクラッシュする可能性が高くなる。

相手より速く、そして的確にコーナーをクリア出来た決闘者に先攻という名誉が与えられるのである。

そして今回先にそれをクリアしたのはジャックの方であった。

「先攻は貰ったぞ。俺のターン!!!」

先にコーナをクリアしたジャックが高らかに自分のターンを宣言しながら、デッキからカードを1枚ドロウする。

カードを1枚引いて、ジャックの手札は6枚。ドローフエイズが終われば、次はスタンバイフェイズだ。2人のSPCが1つプラスされた。

そしてモンスターを召喚出来るメインフェイズに移行する。

「俺は手札から『インターセプト・デーモン』を召喚!!!」

【インターセプト・デーモン 星4 / 闇属性 / 悪魔族 / ATK 1400 / DEF 1600】

ジャックが召喚したのはラグビー選手のような悪魔族モンスター、インターセプト・デーモンだ。モンスターは後ろを走る遊星を指でクイクイと挑発する。

「更にカードを2枚伏せ、ターンエンドだ」

そして彼は2枚のカードを伏せ表示で場に出す。当然それが何のカードなのか、遊星には解らない。

ジャックはそこでターンエンドを告げ、ターンの権利を遊星に移した。

「俺のターン！」

ターンの権利をジャックから受け取った遊星、彼も自分のターンを開始を宣言しながらカードをドロウ。

そしてSPCが2人に加算される。これでSPCは2つとなった。そのまま遊星のメインフェイズ。後攻である彼のターンからは攻撃が可能となる。

(ジャックのインターセプト・デーモンは攻撃を仕掛けられると相手に500ポイントのダメージを与える特殊効果を秘めている。それなら此処はどうするか……。)

遊星は自分の手札にはどんなカードがあるのかを確認すると、その中の1枚に手を伸ばした。

「相手のフィールドにモンスターが存在し、俺のフィールドに存在していない時、このカードをレベル4として特殊召喚することが出来る。来いつ、『レベル・ウォリアー』！」

【レベル・ウォリアー 星3 4 / 光属性 / 戦士族 / ATK 30
0 / DEF 600】

呼び出されたのは全身を赤い服で包み込んだ、某戦隊の赤いヒーローを想わせるモンスター。

格好良く登場はしたが、いかんせん攻撃力が低く、ジャックのモンスターの足元にも及ばない。

「特殊召喚。遊星め……いきなりシンクロを狙っているのか!？」
だがジャックはそんな貧弱なモンスターでも警戒していた。

それは遊星という強豪を相手にしているからという理由に加え、

特殊召喚からの様々な戦法を繰り出せることを彼は把握しているからだ。

遊星がこれだけで終わる筈が無い。恐らくあの手札には次なる一手が隠されている筈。ジャックはそう予測していた。

「更に俺は手札のモンスターを1枚墓地に送り、チューナーモンスター、『クイック・シンクロン』を攻撃表示で特殊召喚！」

【クイック・シンクロン チューナー/星5/風属性/機械族/A
TK 700/DEF 1400】

刹那、遊星は西部劇のガンマンのような容姿のチューナーモンスター、クイック・シンクロンを召喚。

「遊星の奴、ジャック相手にいきなりシンクロする気だな」

「でも、クイック・シンクロンはシンクロンと名の付いたチューナーを素材とするシンクロモンスターにしか使えないわ」

「レベル・ウォリアーのレベルは4。クイック・シンクロンは5。

現時点で合計レベル9、でも遊星のデッキにそんなモンスターは…

…」

「でもまだ遊星は通常召喚を行っていない。だから新しくモンスターを召喚することが出来る」

パソコンからの映像でフィールドを確認していた仲間達が口々に遊星の次なる手立てや彼の思考を自分なりに考え始めた。

最初の声はクロウ、次は龍可、そしてアキ、ブルーノと続いている。

やはり最後のブルーノの言う通り、実はクイック・シンクロンではなく、この後行うと思われる彼の通常召喚の方が鍵になってくるのかもしれない。

そんなことがサイドで行われているとも知らず、遊星はそのままプレイングを続けていった。

「更に俺はチューナーモンスター、『ジャンク・シンクロン』を召

喚！！」

【ジャンク・シンクロン チューナー/星5/闇属性/戦士族/ATK 1300/DEF 500】

今度は子供くらいの大きさをしたオレンジ色の整備士のようなモンスターが遊星の場に現れた。

「更に！ ジャンク・シンクロンの召喚に成功した時、墓地に存在するレベル2以下のモンスターを一体、守備表示で特殊召喚することが出来る。蘇れ、『レベル・ステイラー』！！」

【レベル・ステイラー 星1/闇属性/昆虫族/ATK 600/DEF 0】

墓地からまた遊星の場にモンスターが特殊召喚された。今度は天道虫のような姿をしたモンスターだ。

どうやら先程のクイック・シンクロンを特殊召喚する際に墓地に送ったモンスターが、このレベル・ステイラーだった様だ。

「モンスターをたつた1ターンで四体召喚しただとおっ！！？」

遊星の場を見たジャックの口から、驚愕の言葉が出てきた。

無理もない。普通モンスターの召喚は1ターンに1体、特殊召喚ならその制限が無いとはいえ、まさかこの1ターンだけで4体ものモンスターを召喚するとは、流石のジャックも予想の範囲を完全に越えられてしまったのである。

（流石は遊星。僅か1枚もカードを無駄にすること無くこの布陣を作り上げた。……だが俺も負けん！！）

だが怯んではいけない。遊星の反撃は此処からが本番なのだ

「全力で行かせて貰う！！ 行くぞジャック！！！」

「来い、遊星！！！！」

「俺はレベル4となったレベル・ウォリアー、レベル1のレベル・

ステイラーにジャンク・シンクロンにチューニング!!」

やはり始まった、チューナーを軸にモンスターのレベルを合わせて上級モンスターを召喚するシンクロ召喚。そして今回その合計はレベル8。

モンスター達が次々に星と化していき、その星は新しいモンスターの形に構成されていく……。

「集いし闘志が怒号の魔人呼び覚ます。光さす道となれ！」

「シンクロ召喚!! 粉碎せよ、ジャンク・デストロイヤー!!」

現れたのは遊星の言葉通り、魔人の名に相応しい巨大なメカニカルな戦士だった。

呼び出された戦士は、その場で構えていた剣を振り翳し、ジャンクのほうにスツと向ける。

【ジャンク・デストロイヤー 星8/地属性/戦士族/ATK 2600/DEF 2500】

「ジャンク・デストロイヤーの効果発動! このモンスターのシンクロ召喚に成功した時、シンクロに使用したチューナー以外のモンスターの数までフィールド上のカードを破壊することが出来る!! 俺が使用したモンスターは2枚、よって2枚のカードを破壊することが出来る!! 俺が選択するのはインターセプト・デーモンと右側のリバーカードだ!!」

選択されたカードに向かって、破壊しようとしてジャンク・デストロイヤーが突進を仕掛ける。

「『タイダル・エナジー』!!」

その攻撃がジャックの2枚のカードに迫る。

「甘いぞ遊星!! お前がモンスター効果の発動したこの瞬間、畏

カード発動!!」

「何っ!?!」

だがジャックも負けてはいない。

ジャンク・デストロイヤーが選択していた右側の伏せカードがオーブン、紫色の罫カードがその正体を現した。

「永続罫、『デモンズ・チエーン』!!」

次の瞬間、突然出現した謎の鎖にジャンク・デストロイヤーは絡め取られ、その動きを封じられてしまった。

もがいて何とか振り解こうとしているが、雁字搦がんじがひめにされたそれは2500以上の攻撃力を持っているジャンク・デストロイヤーでさえも、その鎖はビクともしなかった。

「このカードの効果によりジャンク・デストロイヤーの効果を無効化、攻撃も行えなくなる。当然効果が封じられた為、俺の選択された2枚のカードは無傷だ!」

「やるな、ジャック」

ジャックの言葉に反応したのか、彼の場のインターセプト・デーモンも悪魔らしく意地悪そうに笑みを浮かべる。

破壊出来ず、攻撃まで封じられてしまったのは遊星にとっても大きな誤算。

だが今は悔しがるよりも、今のジャックのプレイングを褒め称えるべきだ、と遊星はニヤリと笑った。

「だがまだ終わっていない!! 俺は墓地のレベル・ステイラーの効果を発動。自分の場のレベル5以上のモンスターのレベルを1つ下げることでのモンスターを特殊召喚することが出来る。俺はジャンク・デストロイヤーのレベルを1つ下げ、レベルステイラーを墓地より再び特殊召喚!!」

【ジャンク・デストロイヤー 星8 7/地属性/戦士族/ATK
2600/DEF 2500】

再び姿を現すレベルステイラー。また遊星のフィールドの壁が厚くなる。

当然まだフィールドにはチューナーモンスターのクイック・シンクロンが存在している。2体目のシンクロモンスターが召喚されるのはジャックにも解りきっている。

「さあ来い、遊星！！ お前が言う全力を俺にぶつけてこい！！」
「行くぞジャック！ 俺はレベル1のレベル・ステイラーにチューナーモンスター、クイック・シンクロンをチューニング！！」
再びモンスター達が空を舞い、上空で新しい命として生まれ変わっていく。

因みにレベルの合計は6。充分強力なモンスターを呼び出せる。
「集いし力が大地を貫く槍となる。光さす道となれ！！」

「来るか！？」

「シンクロ召喚！！ 砕け、『ドリル・ウォリアー』！！」

【ドリル・ウォリアー 星6 / 地属性 / 戦士族 / ATK 2400 / DEF 2000】

現れたのは。右腕に巨大なドリルを装備した戦士、ドリル・ウォリアーだった。

これで遊星のフィールドには、2体のシンクロモンスターが出揃ったことになる。

「すっげ〜ぜ遊星！ ジャンク・デストロイヤーがやられても、直ぐまたシンクロモンスターを出しやがった！！」

「さっすが遊星！！ やっぱり遊星は強いや！！」

クロウが遊星のプレイングに興奮し、龍亞も彼と共に胸の高鳴りが抑えられなくなる。

隣で龍可とアキがやれやれと首を左右に振ったが、それも気にせず彼等は熱くなり続けた。

ブルーノはそれを見て、あはは、と笑うことしか出来なかった：

…。

「ドリル・ウォリアーのモンスター効果発動！！ 攻撃力を半分にすることで相手に直接攻撃ダイレクトアタックすることが出来る。『ドリルシユート』」
「！！」

【ドリル・ウォリアー 星6 / 地属性 / 戦士族 / ATK 2400
1200 / DEF 2000】

遊星の掛け声と共に目を輝かせて攻撃を仕掛けるドリル・ウォリアー。

「だがこの瞬間、俺のインターセプト・デーモンの効果が発動。このモンスターが表側攻撃表示の場合、相手の攻撃宣言時に相手ライフに500ポイントのダメージを与える！！」

だがそれと同時にジャックのモンスターも効果を発動。インターセプト・デーモンはその両腕に込めた輝きの玉を遊星に向かって投げ付けた。

それは見事に遊星のD・ホイールに命中し、彼のライフポイントから500の数値を削り取った。

【遊星 LP4000 3500】

「だが、ドリル・ウォリアーの攻撃でジャック！ お前は1200ポイントのライフを失う！！」

「甘いぞ遊星！！ 俺は手札から『バトルフェーダー』の効果を発動。相手の直接攻撃を無効にしてこのモンスターを特殊召喚。更に相手のバトルフェイズを終了させる！！」

「何だと！？」

【バトルフェーダー 星1 / 闇属性 / 悪魔族 / ATK 0 / DEF 0】

だがその攻撃さえもジャックは読んでいたのか、遊星のドリル・ウォリアーの攻撃も簡単に防いでしまった。

しかも自分は新しいモンスターを召喚。遊星の攻撃を終了させた上に新しくモンスターを召喚するというアドバンテージを充分過ぎる程に彼は稼いだ。

「すごいわ。ジャックも全然負けてない……」

「遊星も確かに凄いけど、ジャックもやっぱり凄い決闘者ね」

先程は冷めた瞳でクロウと龍亞を見ていたアキと龍可だったが、自分達も彼等2人と同類なのだということを思い知らされた。

何時の間にか自分達の身体も熱くなってきていたのだ。どうやらこれは周囲に感染してしまう物らしい……。

「やるなジャック。今回はお前の方が一枚上手だったな」

「冗談言つな！ 貴様がこんなことで挫ける筈も無かるぞ。さあ、決闘を続けるぞ！！」

「ああ、望む処だ！！」

決闘疾走はまだまだ序盤。

彼等2人のデッキの中で、2体のドラゴンが目覚めの脈動を打ち続けていた……。

TURN・01 スピード・ウォリアー（後書き）

今回の最強カード

【ジャンク・デストロヤー 星8 / 地属性 / 戦士族 / ATK 26
00 / DEF 2500】

『「ジャンク・シンクロン」+チューナー以外のモンスター1体以上
このカードがシンクロ召喚に成功した時、このカードのシンクロ
素材としたチューナー以外のモンスターの数までフィールド上に存
在するカードを選択して破壊する事ができる。』

チューナー縛りのあるシンクロモンスター。だがその特殊効果は
中々強力。

少なくともカードを1枚、最大4枚まで破壊する事が出来る。『
ジャンク・シンクロン』自身には低レベルのモンスターを蘇生させ
る効果がある為、それなりの活躍が期待出来る。他にも『クイック・
シンクロン』でも召喚させる事は可能。これらのカードをデッキに
投入しているのであれば、投入する余地は十分にある。

トマトとしては、『チューニング・サポーター』でのシンクロが
お勧め。破壊出来てドロウも出来る。正に一石二鳥。上手く『地獄
の暴走召喚』等で3体に増やしてシンクロすれば、3枚ドロウ。『
シンクロ・キャンセル』を使えば再び破壊とドロウが行える。現在
採用率の高い『スターダスト・ドラゴン』を力で殴り倒せるのも評
価出来る。

TURN・02 クリムゾン・ヘルフレア（前書き）

トマトです。こうして3話目となる訳なんですけど、やっぱり難しいですね。決闘内容を考えるのってホント大変です。

特に手札が大変。彼等の手持ちカードでこつこつやって逆転させようと考えてたら、翌々思い出すと手札が足りないなんて事がしょっちゅう。何時の間にか使い切ってる事もあります。

Spも大変、私はゲーム版を意識して書いてますが、誰がどのSp使ったかなんてもう覚えてません。もう決闘疾走なんて書かねえ。全部スタンディングにするぞ！！

これ等は遊戯王小説作者側にとつての大きな壁ですね。もし何処かおかしければ、どうぞ教えて下さい。

TURN・02 クリムゾン・ヘルフレア

遊星とジャックの決闘疾走。現在、LPの残量で考えれば4000ポイントと3500ポイントでジャックの方が有利だが、フィールドを見て推察すれば、遊星の方にも十分に勝機がある。

何しろジャックの場には攻撃表示の『インターセプト・デーモン』と遊星の『ジャンク・デストロイヤー』の動きを封じている永続罫の『デモンズ・チェーン』。

そして先程遊星からの攻撃を見事に防いだ振り子の様な姿をした『バトルフェーダー』。未だその正体を隠し続けている謎の伏せカードが1枚。

だが、それに対し遊星の場は強力なモンスターが2体。動きを封じられているとはいえ、攻撃力2600を誇るジャンク・デストロイヤー。

更に相手への直接攻撃を可能とする『ドリル・ウォリアー』。どちらもジャックの場のモンスターの攻撃力を大きく上回っている。

そして2人のSPCは互いに同じ2つ。現在は遊星のメインフェイズ2。

……まだまだ戦いはこれからである。

「俺は場のドリル・ウォリアーのモンスター効果を発動！」

遊星の効果発動の宣言に反応したドリル・ウォリアーの身体が薄く輝き始めた。

「手札を1枚捨てて、次の自分のスタンバイフェイズまでこのカードをゲームから除外する事が出来る」

遊星は説明の通り残り2枚の手札の中から1枚を選択し、それを墓地に送る。

すると輝いていたドリル・ウォリアーは、その場から忽然と姿を

消してしまった。

これで遊星の場に残ったのは動けなくなったジャンク・デストロイヤーだけとなってしまった。

「俺は更にカードを1枚セット！　そしてもう一度ジャンク・デストロイヤーのレベルを1つ下げ、墓地の『レベル・ステイラー』を守備表示で特殊召喚！！」

【ジャンクデストロイヤー　星7　6/地属性/戦士族/ATK
2600/DEF　2500】

今回三度目の登場のレベル・ステイラー。ドリル・ウオリアーと入れ替わる形でこのモンスターは遊星の防御の為に守備表示で特殊召喚された。

ドリル・ウオリアーを一時的に失った遊星だが、これでまた彼の防御の壁は厚みを取り戻した。

「これで俺のターンは終了する。ジャンク、お前のターンだ！！」
「良いだろう！　俺のターン！！」

遊星は6枚の手札全てを消費してこのターンの終わりを告げた。そしてターン権は再びジャンクに戻り、受け取った彼は新しくカードを1枚ドロウする。

また互いのSPCに1つカウンターが加算され、2人のD・ホイールの液晶画面に表示されたSPCのストックの数字は2から3に変わった。次の遊星のターンからは、『スピードワールド2』の第一の効果が発動が可能となる。

「ふん、遊星！！　先にエースモンスターを召喚させて貰うぞ！！」
「何っ！？　まさかもう既に手札にチューナーモンスターがあるのか！？」

そしてジャンクのメインフェイズ。引いたカードを確認して笑みを浮かべると、ジャンクは遊星に向かって、切り札の『レッド・デームズ・ドラゴン』の召喚を宣言した。

遊星の表情が驚きで歪む。今この状況であるのモンスターに出て来られるのは都合がとて悪いと理解しているから。あのモンスターの恐ろしさを身をもって知っているからだ。

「俺は手札からチューナーモンスター、『フレア・リゾネーター』を攻撃表示で召喚!!」

【フレア・リゾネーター チューナー/星3/炎属性/悪魔族/A
TK 300/DEF 1300】

ジャックの手札から召喚されたのは攻撃力の低い悪魔族モンスターだった。音叉の様な物を持った何処か可愛らしいモンスターだ。だがこいつは先程ジャックが言った、切り札のエースモンスターを呼び起こす鍵となるチューナーモンスターなのだ。

「来るのか、レッド・デーモンズ・ドラゴンが!？」

「行くぞ、遊星!! レベル1のバトルフェーダー、レベル4のインターセプト・デーモンにレベル3のフレア・リゾネーターをチューニング!!」

手に持った音叉をカチンと鳴らし、フレア・リゾネーターは3つの星の輪を形成。そこへ他の2体のモンスターが飛び込み、彼等も5つの星となってそれ等と結合する。

それを見た遊星は冷や汗を頬より垂らし、ジャックは高く右腕を上げてモンスターを辺りに知らしめる様に高らかに叫んだ。

「王者の鼓動、今此処に列を成す。天地鳴動の力を見るがいい!!」

「シンクロ召喚! 我が魂、レッド・デーモンズ・ドラゴン!!」

そしてこの決闘場を支配しかねない強力ドラゴンが姿を現した。

赤と黒の巨大な身体。全てを引き裂く鋭い爪と全てを噛み砕く鋭い牙。その顔は正に名前の通りデーモンをイメージさせる悪魔の龍。

ジャック・アトラスのデッキが自分の魂と叫ぶ程の絶対的信頼を得ているこのモンスター、振り翳す力は何者も寄せ付けない程圧倒的な物。

その名はレッド・デーモンズ・ドラゴン。

【レッド・デーモンズ・ドラゴン 星8 / 闇属性 / ドラゴン族 / ATK 3000 / DEF 2000】

「遂に出た！ ジャックのレッド・デーモンズ！！」

「どうやら今回の決闘はジャックの方が遊星よりも上手だったみたいだね。ジャックの方がフィールドでもLPでも優勢だ」

「……ブルーノ、今のっでもしかしてギャグなの？」

龍亞がコースとブルーノのパソコンの画面を交互に見合わせながら、また声を上げた。

先程から続く興奮の連続で、今となっては少年は腕をぐるぐる回したりと、どんどんそれが行動に表れてきている。

因みにブルーノの下らないギャグに突っ込んだのは龍可だ。

恐る恐る少し引き攣った顔で覗き込む彼女に対し、ブルーノは返答せずに無言のまま画面の方に顔を移す。

「アキ……シャボン玉って綺麗だな」

「……そうね」

残されたクロウはしょうもないギャグに興奮がすっかり冷め、最初から冷めていたアキは再びシャボン玉をふわふわと吹くのであった……。

出現したレッド・デーモンズ・ドラゴンは遊星の場に存在しているどのモンスターよりも攻撃力が高い。攻撃すればどちらも軽く撃破する事が出来るだろう。

「更に墓地に送られたフレア・リゾネーターの効果を発動！ このモンスターをシンク素材として使用した時、召喚されたシンク口

モンスターの攻撃力は300ポイントアップする!!」

【レッド・デーモンズ・ドラゴン 星8/闇属性/ドラゴン族/A
TK 3000 3300/DEF 2000】

「行くぞ遊星!! レッド・デーモンズでジャンク・デストロイヤーに攻撃!!」 『アブソリュート・パワーフォース』!!」

ジャックの攻撃宣言と共にレッド・デーモンズの右腕に灼熱の炎が宿り、業火の鉄槌と化したそれが、上空より遊星のモンスター目掛けて一気に振り下ろされた。

鎖に縛られたジャンク・デストロイヤーは何の抵抗も出来ず、その攻撃の前にデーモンズ・チェーンの鎖と共に光の粒子となって儂く散っていった。

レッド・デーモンズ・ドラゴンの攻撃力は3300ポイント。ジャンク・デストロイヤーの攻撃力は2600ポイント。

その差700ポイントが遊星のライフポイントから削り取られる。

「だがこの瞬間、俺は伏せていた畏カード発動!!」

「何いつ!!!?」

「畏カード、『スピリット・フォース』!!」

発動されたのは先程のデーモンズ・チェーンの様な永続系の罫では無く、一度だけ使える単発系罫。

ダメージステップに発動可能なカードがこのスピリット・フォースだ。

それは遊星の前で光の壁を作り、先程のバトルで彼が受ける筈だった超過ダメージを彼の前で塞ぎ止めてしまった。

当然彼に与えられたダメージは0。モンスターこそ破壊されてしまったが、遊星自身のLPには全く影響は与えられなかった。

「このカードは俺への戦闘ダメージを0にし、その後俺の墓地に存在する守備力1500以下の戦士族チューナーを手札に加える事が出来る。俺は墓地に存在する、『ジャンク・シンクロン』を手札に

戻す！」

遊星の何も無かった筈の手札に1枚のモンスターカードが舞い戻ってきた。

当然先程加えたジャンク・シンクロンだが、このカードは凡庸性が高く、遊星が使えば正に無限の可能性を導き出すカードなのだ。

例え自分の場にレッド・デーモンズが存在しているとはいえ、相手はあの遊星。一寸たりとも油断は出来ない。

そもそも次のターンには、彼の場合にドリル・ウォリアーも戻ってくるのだ。尚更油断出来ない。

「くそつ、俺はこれでターンを終了する!!!」

ジャックは仕方なくターンエンドを宣言。此処でターンの権利が遊星に戻ってきた。

「俺のターン！ この瞬間、除外していたドリル・ウォリアーが俺のフィールドに復活する。舞い戻れ、ドリル・ウォリアー！」

S P C が 4 になると同時に蘇るドリル・ウォリアー。これで再び遊星の場に2体のモンスターが並ぶ。

だが攻撃力ではやはりレッド・デーモンズには及ばない……。

「この瞬間、ドリル・ウォリアーのもう1つのモンスター効果を発動！ この効果で除外されていたドリル・ウォリアーが俺のフィールドに帰還した時、俺は墓地からモンスターカードを手札に加える事が出来る!!! 俺は『クイック・シンクロン』を手札に戻す」

ジャックにカード名を宣言して更にモンスターカードを手札に戻す遊星。これで遊星の手札はドローカードを含めて3枚となった。

先程のターンで手札を使い切った筈の遊星だが、僅かな間で3枚も回復してしまった。

これが遊星のプレイングの腕前、レッド・デーモンズがフィールドに存在しているとはいえ、ジャックもこれにはうかうかと気を抜けない。

確かに遊星の手札の内、2枚は判明しているが、それでも残り1枚はまだ不明なのだ……。

「俺は更に手札から『S p・エンジェル・バトン』を発動!!」
だが此処で遊星は唯一判明していなかった1枚を此処で発動させた。

「どうやらそれはS pだった様だ。緑色のカードがフィールドに出現する。」

「……クロウ、エンジェル・バトンって何？」

「エンジェル・バトンはデッキからカードを2枚ドロウして、その後手札からカードを1枚捨てる。所謂手札交換カードだ」

「それじゃ遊星の手札は一気に変わっちゃうって事!？」

「そついう事だね」

龍亞の質問に尤もらしく人差し指を伸ばして説明するクロウ。

流石に決闘疾走歴が戦っている2人とそう変わらないだけあつてか、彼のS pに関する知識は彼等に負けず劣らず豊富だ。

だが問題は龍可の言う通り判明していた遊星の手札がすっかり様変わりしてしまうという事。これはジャックにとつても痛手だろう。手札が解つていればそれ相応の対策を考えた戦略が立て易くなる。だが手札を入れ替えられてしまうとまた手札が解らなくなつてしまふ。

やはり遊星という男、一筋縄ではいかないらしい……。

「S P Cを4つ取り除き、エンジェル・バトンの効果で俺はデッキから2枚ドロウ。その後1枚を墓地に送る。更にチューナーモンスター、『ロード・シンクロン』を召喚!」

【ロード・シンクロン チューナー/星4/光属性/機械族/A T
K 1600/DEF 800】

遊星の場に呼び出されたのは工事現場などで見掛けるロードローラーに酷似したモンスター!。

それを見た瞬間、ジャックは遊星が何を行おうとしているのか直ぐに解った。

「来い、遊星！ 貴様のスターダストと俺のレッド・デーモンズ、どちらが上か今こそはつきりと白黒付けてやる！！」

「ロード・シンクロンは『ロード・ウォリアー』以外のシンクロ素材として使う時、レベルは2つダウンする！！」

【ロード・シンクロン チューナー/星4 2/光属性/機械族/
ATK 1600/DEF 800】

「レベル6、ドリル・ウォリアーにレベル2、ロード・シンクロンをチューニング！！」

レベルが下がった途端にシンクロ召喚を行う遊星。2体のモンスター級のレベルの合計は8。

当然召喚されるのはロード・ウォリアーではなく、遊星の切り札のドラゴン。

「集いし願いが新たに輝く星となる。光差す道となれ！！」

レベルの星で形作られた輝きの輪にドリル・ウォリアーが飛び込んだ。

轟てドリル・ウォリアーもレベルの星となり、8つの星が遊星の切り札モンスターを構成していく。

……そしてそれは一体の美しい白銀の龍と化した。

「シンクロ召喚！！ 飛翔せよ、『スターダスト・ドラゴン』！！」

【スターダスト・ドラゴン 星8/風属性/ドラゴン族/ATK
2500/DEF 2000】

大きく咆哮し、完全姿を現した遊星の切り札、スターダスト・ドラゴン。

破壊効果を自分をリリースする事で無効にし、プレイヤーを守る
美しきドラゴンがこのモンスター。

これまで幾多の困難に陥った遊星を救ってきたスターダスト。

……だがその表示形式は

「何いつ！？スターダストを守備表示だとお！！？」

「……………」

何と守備表示。

困惑するジャック、無言のまま召喚された2体のドラゴンを見据
える遊星。

一体どういう考えでこの陣形を選んだというのだろうか……ジャッ
クには訳が解らなかった。

「どういう事だ？ 遊星は何でスターダストを守備なんかで出した
んだ？」

この事は勿論パソコン画面から決闘の状況を見ていたクロウ達か
らも見えていた。

そして彼等も悩んでいた。何故遊星は攻撃力の方が高い筈のスタ
ーダストを守備表示で償還したのか……。

「単純にレッド・デーモンズの攻撃からLPを守る為なんじゃない
の？」

「それでもこれまでの遊星からは考え難いわ。今までだって遊星は
ジャックのレッド・デーモンズ・ドラゴンに対しては真つ向から攻
撃表示で受け止めて来たわ。何か別の考えがあるんじゃないかしら
？」

龍亞も自分なりに答えを出してみるが、どうもじっくりこない龍
可が異論を唱える。

だがそう言ったものの龍可にも遊星の意図は全く解らない。一体
彼が何を思っただスターダストを守備表示にしたのか……。

「もしかして、レッド・デーモンズの特効効果を無効にする為なん
じゃ…………？」

「いや、でもレッド・デーモンズ・ドラゴンとのバトルに負ければスターダスト・ドラゴンは効果を発動する前に倒されてしまうよ。でも確かにその効果と何か関係あるのかもしれない」

その時、何か思い付いたかの様にアキがあっ、と声を上げた。

アキの言うレッド・デーモンズ・ドラゴンの特殊効果とは、守備表示モンスターを攻撃した時に相手の守備表示モンスターを全て破壊する効果の事だ。スターダスト・ドラゴンはそれを無効にして破壊する事が出来るのだ。

だがそれもブルーノの言う通り、直接守備表示のスターダストに攻撃されれば、スターダストは効果を発動する事無く破壊されてしまうのである。

「遊星……お前はどうかやってレッド・デーモンズを倒すつもりなんだ？」

クロウの呟きも虚しく、画面の中の遊星は無表情のままD・ホイールを操縦しながら決闘疾走を続けた……。

「更に俺は手札のモンスターカードを墓地に送って、クイック・シンクロンを特殊召喚！」

遊星のクイック・シンクロン、二度目の登場。ポンチヨを纏い、帽子や衣服の僅かな隙間からぎろりと輝く眼が見える。

「レベル1のレベルステイラーにレベル5のクイック・シンクロンをチューニング」

遊星はまたもやシンクロ召喚を宣言。今日四度目のシンクロ召喚である。

そのレベルの合計はドリル・ウォリアーの時と同じ6。

だがもう遊星のEXデッキにはドリル・ウォリアーは存在していない。
ない。

「集いし願いが更なる力を紡ぎ出す。光差す道となれ！！」

「シンクロ召喚！！ 轟け、『ターボ・ウォリアー』！！」

遊星の宣言と共に出現したのは馬力の強いエンジンを噴かせる赤い戦士、ターボ・ウォリアーだ。

その攻撃力はスターダストのそれと同じく2500ポイント。だがやはりジャックのレッド・デーモンズの3300ポイントには僅かに及ばない……。

【ターボ・ウォリアー 星6 / 風属性 / 戦士族 / ATK 2500 / DEF 1500】

「凄い、遊星またシンクロ召喚だ……」

「これで4回目よ。未だ決闘は始まったばかりだって言うのに、何だかもう10ターン位経った気がするわね」

龍亞は興奮を通り越して今や落ち着いてしまっていた。

アキの言う通り、未だ4ターン目だというのにまるで10ターン近く経ったように感じる。その証拠に龍亞もアキ達も決闘を直接行っていないというのに頬や額から冷や汗が流れてくる。

しかも今遊星が出したターボ・ウォリアー、これもまたこれまでの例に洩れず侮れない特殊効果を秘めたモンスターだ。

此処から更に戦いは激しくなっていく、と此処に居る者は皆そう予想した。

「行くぞー！！ターボ・ウォリアーでレッド・デーモンズ・ドラゴンに攻撃ー！！」

遊星の指示で飛び出すターボ・ウォリアー。その巨大な腕が真っ直ぐレッド・デーモンズに伸びる。

だがその攻撃力は2500ポイント、レッド・デーモンズには800ポイント及ばない。

それなのに何故攻撃を仕掛けるのか……ジャックにはその理由が解っているからか、少々苦い表情をしている。

「くっ!? ターボ・ウォリアーはレベル6以上のシンクロモンスターに攻撃を仕掛けた時、そのモンスターの攻撃力を半減させる効果を持つ!」

「その通り! 『ハイレート・パワー』!」

そう、ジャックの言う通り、実はターボ・ウォリアーにはレベル6以上のシンクロモンスターを攻撃した時にそのシンクロモンスターの攻撃力を半減させる特殊効果を持っているのだ。

レッド・デーモンズはターボ・ウォリアーの両手から放たれた不思議な波動に力を抑え込まれ、その攻撃力が半減する。

【レッド・デーモンズ・ドラゴン 星8/闇属性/ドラゴン族/A
TK 3300 1650/DEF 2000】

「行け、ターボ・ウォリアー!! 『アクセル・スラッシュ』!」
付き伸ばされる深紅の腕、その鋼の手は鋭いナイフと化し、レッド・デーモンズの身体を突き刺そうとする。

だが次の瞬間、レッド・デーモンズは突然空に向かって大声で咆哮を上げ出した。

大気が震え、一瞬遊星のD・ホイールの走行が不安定になる。
しかし問題はそこではなかった。

【レッド・デーモンズ・ドラゴン 星8/闇属性/ドラゴン族/A
TK 1650 2800/DEF 2000】

「何っ!? レッド・デーモンズの攻撃力が上がった!」

何と、突然レッド・デーモンズの攻撃力が咆哮と同時に1150ポイント上昇。再びターボ・ウォリアーの攻撃力を上回ってしまった。

流石の遊星もこれには驚き、これまでずっと冷静に無表情を突き通してきたが、此処で彼の表情が完全に驚愕の物に変わった。

【ジャック LP4000 2850】

だがその代償は大きく、ジャックのLPはプライドの咆哮のコストとして大幅に下がってしまう。

しかし彼は自分の行動に何の後悔もしていない。

寧ろレッド・デーモンズを守る事が彼にとっては自分のライフ以上に重要なのである。

しかも遊星の切り札である、ターボ・ウォリアーを撃破する事に成功したのだ。それだけの価値は充分に有ったと言えよう……。

(しかも遊星のフィールドはこれでスターダストだけとなった。手札も伏せカードも存在しない。例えレベル・ステイラーを特殊召喚した所で、俺の有利に変わりない！)

そして遊星にはもうスターダストのカード以外残されていない。

これでは次のターンには確実に遊星の場はガラ空きとなり、彼は次にドローする1枚のカードだけでレッド・デーモンズを退けなければならなくなる。当然それは遊星程の決闘者と言えど困難極まりない筈。

つまりジャックの圧倒的優位は、まるでどっしりと立つ山の様に揺るがない物となったのだ……。

「スターダストのレベルを1つ下げ、墓地よりレベル・ステイラーを守備表示で特殊召喚！ ……これで俺のターンは終了だ！！」

【スターダスト・ドラゴン 星8 7/風属性/ドラゴン族/ATK 2500/DEF 2000】

そしてジャックの予測通り、遊星は何も出来ずターンを終了させた。

「ははははははははっ！！ 俺のターンだ！！」

高笑いをしながら自分のターンを告げ、カードを引くジャック。

「俺は手札から『ミッド・ピース・ゴーレム』を攻撃表示で召喚！」

【ミッド・ピース・ゴーレム 星4/地属性/岩石族/ATK 1600/DEF 0】

召喚されたのは一体の岩石族モンスター。ゴーレムの名に相応しく、岩が集まったゴツゴツとした身体が特徴的なモンスターだ。

その攻撃力は1600と中々高く、これでまたジャックのフィールドの守りが厚くなってしまった。

遊星はどんどん不利な状況を強いられていく……。

「レッド・デーモンズ・ドラゴンでスターダストを攻撃！ アブソリュート・パワーフォース！」

再び振り下ろされる炎を宿した拳の一撃。攻撃対象に選択されたのは勿論スターダスト・ドラゴンだ。

これを受ければスターダストだけでは無く、守備表示のレベル・ステイラーもその巻き添えを受けて特殊効果で破壊されてしまう。

「遊星のスターダストがやられちゃう!?」

「やっぱし、この決闘疾走はジャックが勝つのか!？」

遊星の圧倒的不利な状況を見た龍可とクロウが声を上げた

ブルーノのパソコンの画面からも、この決闘の状況は良く解る。

遊星にはこの攻撃を防ぐカードは場に残されてはいない。

「……残念だったなジャック。俺はこの時を待っていた!!」

「何いつ?!?!?!?」

攻撃が炸裂しようというその瞬間、何と遊星が表情に笑みを浮かべた。

これにはさしものジャックも驚いた。遊星の場には確かに何も無い筈だ。

彼のフィールドにはスターダストとレベル・ステイラーの2体

のモンスター。伏せカードは無くSPCも1つだけ。手札にもカードは無く、他にカードがあるのは……。

「ま、まさか墓地から!？」

「そう。俺は墓地の『シールド・ウォリアー』を除外してこのバトルでの破壊を無効にする!!」

「何だとおおおおつ!!?」

そう、遊星は墓地からカードを発動させたのだ。

そのカードとはモンスターをバトルから守るシールド・ウォリアー。

レッド・デーモンズの攻撃は墓地から突然現れた盾を持つ戦士に防がれ、スターダストの戦闘破壊に失敗してしまった。

「まさか、さっきのエンジェル・バトンでシールド・ウォリアーを墓地に!？ その為にスターダスト・ドラゴンを守備表示で!？」

「そしてレッド・デーモンズ・ドラゴンの効果が発動する。守備表示モンスターを全て破壊する効果、そして同時にスターダストの効果も発動する!!」

「しまった!!!!?」

レッド・デーモンズ・ドラゴンの守備表示モンスターを破壊する特殊効果は強制効果。これはプレイヤーの意思に関わらず発動してしまう効果だ。

そしてスターダストの破壊を無効にする効果がレッド・デーモンズの破壊効果をトリガーとして発動する。

「スターダスト・ドラゴンをリリースする事で破壊効果を無効にし、それを破壊する事が出来る!!」
『ヴィクティムサンクチュアリ』
!!」

レッド・デーモンズの効果を無効にする為、その巨体を押さえ付けようとスターダストがしがみ付いた。

レッド・デーモンズはもがき苦しむが、スターダストの聖なる守

りに完全に動きを鎮静させられ、聽て2体とも光の粒子となってフィールドから消滅した。

2体の切り札のドラゴンは、揃ってフィールドから退場していった……。

T U R N ・ 0 2 クリムゾン・ヘルフレア（後書き）

今回の最強カード

【レッド・デーモンズ・ドラゴン 星8 / 闇属性 / ドラゴン族 / A
TK 3000 / DEF 2000】

『チューナー+チューナー以外のモンスター1体以上

このカードが相手フィールド上に存在する守備表示モンスターを攻撃した場合、ダメージ計算後相手フィールド上に存在する守備表示モンスターを全て破壊する。

このカードが自分のエンドフェイズ時に表側表示で存在する場合、このターン攻撃宣言をしていない自分フィールド上のこのカード以外のモンスターを全て破壊する。』

星8のシンクロモンスターで攻撃力3000。強烈なモンスター効果を持っているがそれ相応のデメリット持ちモンスター。5D・s世界ではジャック・アトラスだけが持つレアカードという設定。当然ジャックが決闘をする場合、8割近い確率で登場し、相手の場を蹴散らすという活躍を見せ、フィニッシャーになる事も多い。

だが実際には結構手に入り易い。ジャンプ付録やパック、更にはターミナル仕様の物とかなりの種類がある。その為値段はかなり安く、私の近くの店では300円以下という低価。因みに『スターダスト・ドラゴン』は1000円以上。かなり不遇。因みにトマトはその進化形態の『セイヴァー・デモン・ドラゴン』のレリーフ仕様を僅か70円（パック半額日だった）でゲットしたというエピソードがある。

使用する際は『光の護封剣』や『光の護封壁』等のロックや攻撃封じカードに注意。攻撃出来ずに大切なモンスターを犠牲にしてし

まったくという道は、殆どのレッド・デーモンズ使いが必ず歩む道である。

どうもおはようございます、トマトです。皆様風邪なんか引いてませんか？ 最近は結構寒くなってきましたが……？

さて、今回からいよいよ映画の方に突っ込んでいきたいと思えます。未だ遊星とジャックの決闘は続いています、今回で少し中断という形に……。

それより皆様、何かご不満とかないでしょうか？ 書き方とか書き方とか書き方とか！？ 読み難いとか解り難いとかどれがどのキヤラだとか！？

正直最近はこの事ばかりが頭に浮かんで仕方が無いです。どうにも私はK氏が仰るように非常に繊細というか、揺れやすい性格をしている様で……ああ情けない。

何かしらご不満や決闘に於いて疑問点がありましたら、どうぞ感想やメッセージにてご質問下さい。それではどうぞ。

互いのドラゴンが場から消滅し、鎮静化された2人のフィールド。『スターダスト・ドラゴン』、そして『レッド・デーモンズ・ドラゴン』の2体が光の粒子となって墓地に送還されたお陰だ。

それを見た遊星は顔に笑みを作り、ジャックは「おのれっ！」と拳を握り締めながら憤慨する。恐らくまんまと彼の作戦に引っ掛かってしまった自分が情けないのだろう。

確かに遊星の此処までのコンボの手口、どれも1枚でも欠ければ行えなかったコンボだ。

『クイック・シンクロン』からの3体ものシンクロモンスターの召喚。『スピリット・フォース』によるモンスター回収。そして『シールド・ウォリアー』やスターダストの存在。

全てが偶然だと言えばそこまでだが、この展開は全て遊星の計算済みの行動だったと考えると、遊星という決闘者の奥深さが解るという物だ。恐らくジャックが今一番それを感じていることだろう……。

（遊星め……俺のレッド・デーモンズの自爆を狙っていたのか！？ こうして何度も戦っているとやはりこいつは敵に回すと最も恐ろしい敵になるということがよく解る）

「どうしたジャック！ まだお前のバトルフェイズだぞ！」
「言われなくても解っているー！」

遊星の声に反応したジャックが決闘疾走を続ける。

まだ戦闘を行っていない『ミッド・ピース・ゴーレム』がその巨腕を利用して遊星の場に残された『レベル・ステイラー』を撃破した。

これで遊星の場には何も存在しなくなり、傍から見れば手札やS PC、そしてモンスターが場に存在しているジャックの方が優勢に

見える。

だがまだ遊星には残されている物がある。それは

「これで俺のターンは終了だ！」

「この瞬間、効果で墓地に送られたスターダスト・ドラゴンが復活する。蘇れ、スターダスト！！」

スターダスト・ドラゴン、遊星の最高の相棒だ。

スターダスト・ドラゴンには効果で墓地に送られたターンのエンドフェイズに特殊召喚される効果がある。

それが今発動し、再び遊星の許に返り咲いたのだ。

そして遊星にターンが移行する。

「俺のターン！」

遊星のドローと共にまた加算されるSPC。これで遊星のSPCは2、ジャックは6となる。

「俺はスターダストでミッド・ピース・ゴーレムに攻撃！ 響け、
『シューティング・ソニック』！！」

スターダストから吐き出された音速の衝撃波がジャックのモンスターを打ち砕く。当然攻撃表示で召喚されていたミッド・ピース・ゴーレムが破壊されたことにより、ジャックのLPは大きく減少する。

【ジャック LP2850 1950】

「俺はカードを1枚伏せ、ターンエンドだ」

「俺のターン！！」

一気にモンスターもライフも失い、今度はジャックの方が劣勢に立たされた。

破壊効果を防ぎ、尚且つ攻撃力2500を誇るスターダスト。流石のジャック・アトラスと云えど、このモンスターを打ち破るのはかなり難しい。

「俺はモンスターをセット。さらにもう1枚伏せる。これでターン

エンド！」

やはり攻撃を仕掛けるよりは防御に徹した方が得策と考えたのか、ジャックはモンスターと伏せカードを1枚ずつセットして、自分のターンの終わりを告げてしまった。

当然、次は遊星のターン。遊星はジャックのらしくない消極的なプレイングに疑問を抱きながら、無言のままデッキから1枚カードを引いた。

（一体何を伏せた？ モンスターは兎も角、あのリバーズカード。決闘疾走では魔法はS pが主流、つまり伏せる必要性は殆ど皆無。ならばやはり罠か……だがブラフという可能性もある）

遊星の思考が深く考えれば考える程、ジャックのプレイングから導き出される答えが幾つも浮かび上がってきた。

どれも確かに可能性があるが、どの答えにも確証は存在せず、逆に自分のプレイングを見失わせる。

（だが、どちらにしる攻撃しないことには何も始まらない。スターダストが存在している限りジャックの発動する破壊系カードは意味を為さない。それなら……）

考えた末、結局攻撃することが道を拓くことに1番適していると判断。決めるや否や、遊星はスターダストの攻撃を高らかに宣言した。

「スターダストで守備モンスターを攻撃！ 『シューティング・ソニック』！！！」

再び放たれる白銀の波動状攻撃。それは真つ直ぐにジャックの場の伏せ表示のモンスターへと見事に炸裂。リバーズカードに阻まれることも無く、遊星の攻撃は確かに決まった。

だが攻撃が炸裂した筈のそれは、何故かまだフィールドに留まり続けていた。

「破壊出来ない？ ……まさかそれは」

「そつだ！ 俺の伏せていたモンスターは『ダーク・リゾネーター』だ！！！」

【ダーク・リゾネーター チューナー/星3/闇属性/悪魔族/A
TK 1300/DEF 300】

姿を現したのは先程ジャックが使用した『フレア・リゾネーター』と酷似したモンスターだった。

このモンスター、ダーク・リゾネーターは実は戦闘では一度破壊されない特殊モンスターであり、それがどれ程の攻撃力を秘めていたとしても無関係で堪えることが出来るのだ。

流石のスターダストもこのモンスター効果までは無効に出来ない。ジャックは見事に攻撃を凌ぎ、場にモンスターを残すことに成功した。

「……俺はこれでターンを終了する」

「俺のターン！」

これ以上することも無く、遊星はターンの権利をジャックに移した。

受け取ったジャックはこれまでと同じ様に高らかな宣言と共にデッキからカードをドロウする。

「この瞬間、俺は伏せていた畏カードを発動！！」

「ドロウを終えた途端、ジャックがカードの発動を宣言。」

彼のモンスターとは別に伏せていたカードが表を上げる。

「畏カード、『ロスト・スター・ディセント』！」

正体を現す赤紫色のカード。それはシンクロモンスター専用の蘇生カードであった。

「このカード効果により、自分の墓地に存在するシンクロモンスターを表側守備表示で俺のフィールドに特殊召喚する！ 再びその姿を現せ。我が魂、レッド・デーモンズ・ドラゴン！！」

ジャックが腕を高く掲げると、彼の決闘盤のセメタリーゾーンから一筋の光が伸び、その輝きの中からスターダストと共に消滅した筈のレッド・デーモンズが出現した。

【レッド・デーモンズ・ドラゴン 星7/闇属性/ドラゴン族/A
TK 3000/DEF 0】

「この効果で特殊召喚したシンクロモンスターはレベルが1つ下がり、表示形式も変更出来ず、攻撃力も0となる」

「どうやらこれはロスト・スター・デイセントのデメリットの様だ。しかしこれではレッド・デーモンズは攻撃が出来ない上に、このターン攻撃を行っていないこのカード以外の自軍のモンスターを破壊するというデメリット効果が場のダーク・リゾネータを破壊してしまう。」

その上、守備力はスターダストの攻撃力より僅かに低く、これでは次のターンで確実に攻撃を受けて、再びレッド・デーモンズは墓地に埋葬されてしまうことになってしまっただろう。

「どういつつもりだジャック！」

「当然、このままでは俺は終わらん！！更に手札からSpを発動！」

「だがやはりジャックは此処で足を止めず、次なる一手を打つてきた。」

Spだ。

現在ジャックのSPCは8、これなら大抵のSpは発動可能。ジャックは残された僅か2枚の手札の中から抜き取った1枚の緑色のカードを決闘盤のカードスロットに差し込んだ。

「Sp・サモン・スピダー！」SPCを3つ以上存在している時、手札よりレベル4以下のモンスターを特殊召喚することが出来る！俺は手札から「シンクロ・ガンナー」を守備表示で特殊召喚！」

そしてそのまま最後の手札もモンスターのセットゾーンに綺麗に横にして設置される。するとイラストに描かれていた通り、ジャックのフィールドに背中にタンクのような物を背負った銃士が出現した。

【シンクロ・ガンナー 星1/地属性/機械族/ATK 0/DEF 0】

「シンクロ・ガンナーのモンスター効果を発動！ 俺の場のシンクロモンスターを除外して、相手に600ポイントのダメージを与える！！ 俺はレッド・デーモンズ・ドラゴンを除外する！！」

守備表示で存在していたレッド・デーモンズが赤い粒子と化し、シンクロ・ガンナーの銃口から遊星に向けてシャワーの様に撃ち出された。

「うぐっ！？」

【遊星 LP3200 2600】

遊星はそれを真ともに浴び、衝撃と共にLPを奪われる。当然これもスターダスト・ドラゴンで無効にすることは出来ない。

ぐらりと乗っているD・ホイールが揺れ、遊星は今日何度目かのバランスを崩し掛けるが、何とかこれを堪えて走行を続ける。

「ねえ。何で今のターン、ジャックは普通にシンクロ・ガンナーを召喚しなかったの？ あのターン、まだジャックは召喚してなかったのに……」

遊星とジャックが繰り広げる決闘疾走の素晴らしさに目を奪われ続けていたクロウ達。

そんな時、龍亞が今のジャックのプレイングを見て、疑問に思ったことをポツリと呟いた。

「何言ってるのよ。もしシンクロ・ガンナーを普通に攻撃表示で召喚したら、次のターンに確実に遊星のスターダスト・ドラゴンの攻撃を受けちゃうでしょ。そうしたらどうなると思ってるの？」

「あ、そっか……」

それを呆れ果てた目と声で説明する龍可。今彼女は本当にこれが自分の兄なのか、と頭が痛くなるのを感じた。

だがその説明の甲斐もあってか、龍亞にもジャックのプレイングの意味が解つたらしい。龍亞は「あっ」と口を大きく開けた間抜けな表情をして手をポンと叩いた。

「シンクロ・ガンナーのステータスはあまりにも低い。攻撃力2500のスターダスト・ドラゴンの攻撃を受ければ、ジャックはその瞬間に負けてしまう」

「だからジャックは態々Spを使って、シンクロ・ガンナーを守備表示で特殊召喚したのね」

パソコンのキーを叩きながら、ブルーノがもし普通に召喚していたらどうなっていたのか、という予測を説明。アキもシャボン玉を吹くのを止めて、その液晶画面に映る白いD・ホイールを駆る男を見詰めた。

「だが、ジャックの野郎がシンクロ・ガンナーを使用した本当の訳は――」

「俺のターン！」

何時の間にかターンは遊星に移っていたらしく、彼はターンの開始を宣言する。

ドローを終え、SPCのカウンターにまた1つ加算させ、メインフェイズに移行。

「俺は手札から『スピード・ウォリアー』を召喚！」

【スピード・ウォリアー 星2 / 風属性 / 戦士族 / ATK 900 / DEF 400】

遊星の手札より、新たなるモンスターが呼び出される。身軽そうな、正に風と一緒に走るといった戦士系モンスターだ。

「更にスピード・ウォリアーは召喚されたバトルフェイズにその攻

撃力を倍にすることが出来る」

【スピード・ウォリアー 星2 / 風属性 / 戦士族 / ATK 900
1800 / DEF 400】

バトルフェイズに移った遊星の場のスピード・ウォリアーの攻撃力が2倍に上昇。僅か900ポイントしか無かった攻撃力が、一気にレベル4モンスター並みの高い攻撃力を得た。

それに合わせて、スピード・ウォリアーの周りを白いオーラのような物が覆う……。

「行け、スターダスト・ドラゴン。ダークリゾネーターに攻撃！！
響け、『シユールディング・ソニック』！！」

バトルフェイズ最初の攻撃、遊星は先ずダーク・リゾネーターを狙って攻撃を仕掛けた。

だが先程と同じく、一度の戦闘ではダーク・リゾネーターは破壊されず、モンスターは腕をクロスさせて、何とかスターダストの攻撃を堪える。

これでは先程のターンをなぞっただけだが、今度の遊星の場にはまだ他にも攻撃可能なモンスターが存在している。それが今先程召喚したスピード・ウォリアーだ。

「続けてスピード・ウォリアーでダーク・リゾネーターを攻撃！
撃ち碎け、『ソニック・エッジ』！！」

攻撃指令を受けたスピード・ウォリアーは素早くダーク・リゾネーターの懐へと飛び込む。そのままカポエイラと呼ばれる腿方を活かした蹴り技で一気にダーク・リゾネーターを跳ね飛ばした。

二度目の攻撃に対してのダーク・リゾネーターの効果は意味を為さず、キックを受けたダーク・リゾネーターはそのまま撃破され、墓地に送られる。

「俺はこれでターンを終了する。ジャック、お前のターンだ！」

【スピード・ウォリアー 星2 / 風属性 / 戦士族 / ATK 180
0 900 / DEF 400】

「良いだろう、俺のターンだ!!」

スピード・ウォリアーの攻撃力が元の900ポイントに戻った処でジャックのターン。デッキから1枚カードを引いてドローフェイズを終了。スタンバイフェイズへと移行する。

「この瞬間、シンクロ・ガンナーの効果で除外していたシンクロモンスターがフィールドに戻ってくる。再び力を取り戻し、このフィールドを制圧するのだ! 我が魂、レッド・デーモンズ・ドラゴン!!!」

先程遊星を撃ち抜いた赤い粒子が再びジャックの場に集束し、それは纏て一体の龍を形作る……。

赤と黒の巨体、再びレッド・デーモンズがジャックのフィールドに三度舞い戻った。

しかもそのステータスは蘇生される前と同じく元の高いステータスに回復している。フィールドから一度離れた為、ダウンしていた攻撃力やレベルがリセットされた様だ。

恐らくこれが先程シンクロ・ガンナーを使用したジャックの真の目的。遊星にダメージを与えることでは無く、再びレッド・デーモンズの力を取り戻させることこそが彼の目的だったのだ。

だが遊星もそれには気付いているだろうが……。

兎に角、これで再び2人の場に2体のドラゴンが出揃った。

「俺はシンクロ・ガンナーを攻撃表示に変更し、スピード・ウォリアーにバトルを挑む!」

「っ!?!」

だが、ジャックは何故か復活したレッド・デーモンズでは無く、攻撃力が低いシンクロ・ガンナーで攻撃を仕掛けた。

「迎え撃て、スピード・ウォリアー! カウンター・ソニック・エッジ!」

当然攻撃力が0のシンクロ・ガンナーでスピード・ウォリアーを撃破出来る筈も無く、ジャックはむざむざ自分のモンスターとLPを失ってしまう……。

【ジャック LP1950 1050】

だが、ジャックがそこでバトルを終わらせる筈も無く、遊星には直ぐ様次なるバトルが待ち構えていた。

「行くぞ遊星、レッド・デーモンズ・ドラゴンでスピード・ウォリアーに攻撃！ 『アブソリュート・パワーフォース』！！」

力を取り戻したレッド・デーモンズが復活して早々、遊星のスピード・ウォリアーに攻撃を仕掛けてきたのだ。

その右腕に宿りし炎が遊星のモンスターを打ち砕いた時、遊星は2100ポイントもの大きな超過ダメージを受けることになり、一気にジャックのLPを追い抜いて、残り僅か500ポイントとなってしまう。

だが遊星は何の手も打たないまま、むざむざとスピード・ウォリアーをジャックに破壊させてしまった。

「さあ遊星！ レッド・デーモンズ・ドラゴンとスピード・ウォリアーの攻撃力差、2100ポイントのダメージを受けて貰うぞ！」

「そうはいかない！ 俺はこの瞬間に畏カードを発動する。畏カード、『ガード・ブロック』！！」

遊星の発動させた畏は、先程の『スピリット・フォース』の際と同じく遊星をその不思議なバリアで守り、受ける筈だったダメージを無かったことにしてしまった。

確かにモンスターは撃破されたが、遊星は上手くLPを守ったのだ。

「くっ！？ ダメージステップが発動されるプレイヤー防御の為の畏カードか！？」

「それだけじゃない。俺はガード・ブロックのカード効果でデッキ

から1枚ドローする」

更にカードを1枚ドローする遊星、これで彼の手札は今引いたカードが加わって1枚。

しかも次の自分のターンのドローフェイズで再びドローすれば、2枚にまで手札を回復することが出来る。

つまり遊星はこの罠カード1枚で、LPを守ると同時に手札をも回復してしまったのだ。

今のバトルで、遊星とジャックの場には互いの切り札である2体のドラゴンしか存在していない。後はどれだけ自分のドラゴンを守り、尚且つ相手のドラゴンを倒せるか、である。

そしてこの決闘も、終焉の時が近付いてきている。

「あれ？」

「ん？ どうしたブルーノ？」

そんな時、決闘疾走を離れた場所で観戦していたブルーノがパソコンの画面を見て眉を寄せた。

クロウが一体どうしたのか、とブルーノに尋ねると、彼は眉を寄せたまま、曇った表情で他の者達にこう言った。

「何か……別の何かが遊星達の居る決闘レーンを走ってる。しかも直ぐ近くだ！ このままじゃ遊星達と正面衝突する……！」

「ん？」

そんな時、前を走るジャックの視界に何か映った。

バイクだ。

自分の乗る『ホイール・オブ・フォーチュン』と同じく純白のD・ホイールが前方からやって来ている。

しかもそれは物凄いスピード。まるで拳銃から撃ちだされる弾丸の様に此方に向かって真っ直ぐに向かってくる。あれは明らかに自分達のマシン目掛けて突っ込んできている。

このままでは正面衝突、このハイスピードでクラッシュすれば下

手すれば即死する可能性が高い。

「い、いかん!? 避ける遊星!」

「なっ!」

ジャックの叫びを聞き、遊星も前方からやって来る暴走D・ホイールに気付く。

2人は慌てて車体を壁際に倒し、レーンの真ん中を開けて道を拓いた。

謎のD・ホイールはその拓かれた2台の隙間を真っ直ぐに駆け抜け、その場に急ブレーキを掛けて走行を停止させる。

その荒々しいブレーキはゴムの焦げた匂いと、レーンに黒い跡を刻み付け、遊星達のD・ホイールもその場で停止させてしまった……。

「何だ貴様はあつ!?! 今このレーンは使用中だ。一体何のつもりで此処を走っている!?!」

「お前は何者だ? 何故、今俺達のD・ホイールを狙って飛び込んできたんだ!?!」

ジャックそして遊星の順に今突っ込んできたD・ホイールに向かって怒号を浴びせ掛ける。

流石に今の走行はやり過ぎだと感じたのだろう、何時もは落ちて着いていて温和な遊星でさえもその声を荒げて眼前のバイクに登場するD・ホイールを睨み付けた。

2人のピリピリとした鋭い視線を向けられた男。金色の長髪とノースリーブの茶色の服。奇妙な仮面で顔を隠した男は落ち着いた態度でD・ホイールを降りると、低く冷たい声でこう言った……。

「我が名はパラドックス。時空の破壊者であり、時空の救世主なり

……」

TURN・03 星屑のきらめき(後書き)

今回の最強カード

【スターダスト・ドラゴン 星8/風属性/ドラゴン族/ATK
2500/DEF 2000】

『チューナー+チューナー以外のモンスター1体以上

「フィールド上のカードを破壊する効果」を持つ魔法・罫・効果
モンスターの効果が発動した時、このカードをリリースする事でそ
の発動を無効にし、破壊する。

この効果を適用したエンドフェイズ時、この効果を発動するため
にリリースされ墓地に存在するこのカードを自分フィールド上に特
殊召喚する事が出来る。』

星8のシンクロモンスターであり、破壊効果に対して抜群の防御
性能を誇る。効果発動時、墓地に送られてしまうが、結局そのエン
ドフェイズには自分の場に特殊召喚される為、デメリットも殆ど無
い。

殆どのデッキに投入されている『聖なるバリアー ミラーフォー
ス』や『奈落の落とし穴』、『ライトニング・ボルテックス』など
からこのカード1枚を墓地に送る事で守りきれぬ。面白い事にスタ
ーダストの効果をスターダストで防ぐ事も出来る。攻撃力も250
0と中々高く、戦闘面での活躍も見込める。

しかもこのカードは効果モンスターの効果を無効にする『スキル
ドレイン』発動中でも効果を適用する事が可能だったり、本当に
凡庸性が高く、それは現在EXデッキに採用される率の第1位を誇
る程。

但し、除外系には全く体勢が無い為、墓地に送られている間に『

D・D・クロウ』で除外されたり、突っ込んだら『次元幽閉』で除外される等、万能という訳でもない。『マクロ・コスモス』が張られた状態で呼び出すのは控えたいものだ。

アニメでは遊星の切り札として登場。その効果や攻撃で何度も遊星は窮地を脱してきている。因みによく誰かに盗られたり狙われたりするカードでもある。

その為、一部のファンの中では本作ヒロインである十六夜アキ以上にヒロイン扱いされており、彼女のヒロインっぽい描写も中々少ない為、スターダストの方がヒロインという者も存在しているらしい。あのキシヤーという奇声でヒロインと言われても私にはピンとこないのだが……。

更にどうでもいい話だが、スターダストの和約である星屑とはほろつき星、つまり流れ星の言葉であり、決して『星のごみの竜』という訳ではない。

T U R N ・ 0 4 カードを駆る死神（前書き）

お久しぶりです、トマトです。最後の更新から約1週間、実際には1週間と1日ですけど。

今回から漸く本格的にパラ様が関わってきます。そしてブルーノ君が『E・HERO エアーマン』になっていきそう……な気がします。ごめんねブルーノ。

因みに今回は決闘は殆ど皆無。一応めっちゃくちや最後の方で決闘は行いますが、それもなんと1ターンも描かれてはおらず。パラ様のメイン止まり……。

……なんて、此処で語っていても仕方ありませんよね。それではどうぞ、ご覧下さい。

今回からサブタイの前にTURNを付けることにしたトマトでした。

T U R N - 0 4 カードを駆る死神

「パラドックス……だと？」

遊星は彼のただならぬ気配と怖気を感じながら、その名前を眼前に立つ男に向けて吐き出した。

「貴様の名前など、どうでも良いっ！ 聞かせて貰おうか、俺達の決闘疾走を妨害した訳を！！」

そしてジャックも、自分にとつて最も神聖な決闘疾走を妨害され、あまつさえ命をも失い掛けた。その怒りの全てを声に籠めて、眼前に立つパラドックスと名乗る男に叩き付けた。

「……………」

だが仮面に隠れた顔から彼の思考を察することは不可能。その上声も出さない為、パラドックスの外見からでは何も悟れない。

長い金色の頭髪。ジャック並みの長身。表情を隠す不気味にも中央を境目にした白と黒の仮面は、まるでランプに使用されるジョーカーのようだ。

更にその身体全体から感じられるゾワゾワとした肌を一瞬にして凍り付かせるような気配。まるで身体だけが氷河期にでも遡ったかのようにで気味が悪い。

本当にこの男は人間なのだろうか、ひやりとした感情が遊星達の中に湧き上がる。

そんな中、遊星はちらりと別の方に視線を移した。先にはブルーノやクロウといった、他の仲間達がそこで待機している。

恐らく彼等も遠く離れたあの場所からブルーノのパソコンの画面越しでこの光景を眺めている筈。

ならば今此処でこの男の目的や正体を少しでも聞き出して、彼等にも情報が行き渡るようにしなければならぬ。遊星は直ぐに口を開こうとした。

「くつ!? 何とか言ええつ!?!?」

しかし遊星が口を開く前に、パラドックスの重圧に耐え切れなくなったジャックが、遊星に代わって拳を震わせながらパラドックスに尋ねた。

「パラドックスとかいったな!! 貴様は何の目的で俺達の前に現れた!! 貴様の目的は一体何だ!?!?」

真っ直ぐ右の人差し指を伸ばし、眼前の怪しい男を鋭い目で睨むジャック。

隣では遊星も同様の目付きで静かにパラドックスの仮面を見詰めている。

「……目的か。今はまだ答えないでおこうか、今の汝等なんじらに伝えるには少し酷過ぎるだろうからな」

そして漸くパラドックスが口を開いた。

仮面の所為で口は見えないが、確かに今彼は自分の口で名乗り以外で初めて喋った。

「酷だと!? 一体どういうことだ!?!?」

そんなパラドックスに追求したのは遊星だ。

彼の目的は何であれ、恐らくそれはこれまでに戦ってきた強敵達とは次元の違う邪悪さを遊星は感じていた。

地縛神を操るダークシグナー、彼等を陰で操っていたレクス・ゴドウィン。町の支配を企んだロットン一味。そして今壮絶な戦いを繰り広げているイリアステル。

どれもこれも確かに強敵だった。

だが眼前に立つ彼は、彼等以上の……それも比べ物にならない程の大きな暗黒の様な野望を抱いている気がしてならなかった。

「それを汝等に伝えるつもりは我には無い」

しかし、このパラドックスという男、どうにも食えない奴で自分のことを中々明かそうとしない。

まだ遊星達には彼の目的処か、彼が誰なのか、その顔すら解っていないのだ。

遊星とジャックは解らないことだらけのパラドックスに苛立ちを感じ、思わず口の中で小さくチツと舌打ちをする。

「……だが、この時空に来た目的だけは教えてやろうか」
「この世界……だと？」

パラドックスはそう彼等に告げると、自分の右手を大きく開き、空高く掲げた。

するとその手に向かって緑、赤、青、黒、白の五色の光が集束。纏てそれは彼の手に5枚のカードを齎した。

「な、何だ！？ あの5枚のカードは！？」

「何も描かれていない……白紙のカードだと！？」

だがそれ等のカードはどれも絵柄もテキストも存在していない。つまり白紙のカードだった。

エラーカードという物は確かに存在しているが、誤植等が見受けられることがあるだけで白紙のエラーカードなんて聞いたことが無い。

長い間デュエルモンスターズと関わってきた遊星とジャックだが、流石にあんなタイプの物は見たことが無かった……。

「我がこの時空にやって来た目的は、この世界を守りし5つの強大なる力を奪う為……」

その時、パラドックスの持つ5枚のカードが突然怪しい五色の光を放ち出した。

その光は真っ直ぐ、それぞれ様々な場所に向かって伸びていき、何とその1つの青い光はD・ホイールと一体化していた遊星の決闘盤のモンスターセットゾーンに伸びてきた。

「何っ！？」

謎の光を浴びたのは、先程の決闘時からずっと遊星の場に残されていた『スターダスト・ドラゴン』のカード。青い光がすっぽりと遊星のカードを覆い尽くしてしまった。

「な、何だこの光は!？」

「っ!？」

しかし、それだけでは無かった。同じ様なことが右隣りでも起きていたのだ。

遊星の右隣に居たジャック。彼のD・ホイールに設置していた決闘盤、そこにも一筋の光が伸び、ジャックのカードを一枚を隠す様に包んでいた。恐らくそのカードは遊星のスターダストと同じく、彼の最も信頼するモンスターのカードを包み込んでいるに違いない。そしてその他3つの光は、真っ直ぐ同じ場所へ向かって伸びている……。

「何だよっ!?!? この光!?!？」

「私達のデッキに……!?!？」

「一体……一体何が起きているの!?!？」

その3つの光の先ではクロウ達にも同じ様なことが起きていた。クロウ、アキ、龍可のEXデッキ、そこへそれぞれの光が伸びてきていたのだ。

だが、直接この怪しげな光を浴びているのは、それぞれ彼等の切り札であるドラゴンのカード。『ブラックフェザー・ドラゴン』、『ブラック・ローズ・ドラゴン』、『エンシエント・フェアリー・ドラゴン』の3枚だ。

この人知を超えた有り得る筈の無い光景にクロウ達はすっかり困惑。パラドックスの話聞いていない一体これから何が起きようとしているのか、見当も着かなかった……。

(まさかこの光は……!?!?)

その時、遊星の頭にこの光の狙いが断片だが浮かび上がってきた。この光はスターダストやレッド・デーモンス等のシグナーのドラゴンカードを狙ってきている。あの光の先では、クロウやアキのカードも自分達と同じ様に光に包まれているに違いない。

間違い無くパラドックスの言う5つの強大な力とは……シグナーの操る5体のドラゴンのこと。

そして彼はそれ等を奪うと言った。

「マズいっ！！ ジャック、急いでこの光からカードを外すんだっ！……！！？」

気付いた時には遊星は思わず叫んでいた。

本当なら此処に居るジャックだけで無く、龍可やアキ達にもこの声を届かせたかっただろうが、この非常事態。一刻を争う今、兎に角近くに居るジャックにだけでも今自分が確信した敵の目的を伝えておきたかった。

「……もう遅い！」

だが、遊星の言葉も虚しく、パラドックスの一言と共に彼のこの時空の計画が起動してしまった。

突然カードに伸びていた光が更に強く輝き出し、光の側に居た彼等は視界を一瞬の間、完全に奪われてしまう。

そして再び両目を開けた時、驚くべき光景がそこにはあった。

「なっ！？ 俺の『レッド・デーモンズ・ドラゴン』が！！？」

先ずその光景に気付いたのはジャック。彼は自分の決闘盤を見た時、自分の眼を疑った。

確かにそこには自分の大切なカードがセットされていた筈。

しかし今はそれが無い、此処にあった筈のレッド・デーモンズ・ドラゴンはジャックの許からすっかり消え失せてしまっていたのだ……。

だがそれだけでは無い。

「ねえっ！？ 俺のブラックフェザー・ドラゴンがデッキの中にも何処にもねえっ！？」

「私のブラック・ローズ・ドラゴンも！？」

そう、クロウ達のカードも何処かへと消失してしまっていたのだ。慌てて自分の服のポケットや決闘盤を隈なく捜すが、やはり当たりのカードは何処にも見付からない。

「まさかっ!?! 龍可のカードも!?!」

「龍亞…… エンシエント・フェアリー・ドラゴンがあ……」

龍亞もそんな2人を見て、もしかと思い、妹の方を慌てて振り向くと、そこには、自分のデッキを抱え、特に大切なカードが無くなっただけを涙目で訴える龍可が居た。

龍可も自分の大切なカードを失ってしまったのだ。

それを見た龍亞の顔が、そんな馬鹿な、と困惑の表情で曇る。

「まさか皆のカードがいつぺんに無くなるなんて……」

カードを直接失わなかったブルーノも、これにはショックを隠せなかった。

まさかあの一瞬の間に彼等から3枚ものカードを奪ってしまうとは……。

普通なら考えられない話だ。

「兎に角、俺達もあっちに行くぞ! 遊星達と合流するんだ。あいつ等ももしかしたらカードを奪われちゃってるかもしれないねえ。ブルーノ、急いでレーンの入り口を封鎖しているゲートのロックを解除だ!」

「わ、解った」

だが何時までもうじうじしている訳にもいかず、クロウは皆を引っ張る為に自ら進んで前が出る。

ブルーノにはレーンへの侵入を防ぐゲートの解錠を頼み、自分は遊星達の許へ向かう為に自分の愛車である黒と黄色のD・ホイール、ブラック・バードの許へ急いだ。

「クロウ、私も行くわ」

「俺も!」

「私も行く!」

……思わずクロウは引き攣った顔でブラック・バードを見た。

残された者達がただ黙って待っている筈も無く、アキや龍亞、龍可も彼に付いていくと言って1人乗りのクロウのブラック・バードに乗り込もうとする。正直これで動かすのは、幾ら馬力のあるマシンといえども大きな負荷が掛かる。

先ずこれだけの大人数、その内2人は子供だが、それでも多いことには変わりない。全員乗って無事に走れるのか、そもそも全員乗れるかさえ怪しい。

「アキ。お前、自分のD・ホイールはどうした？」

「ガレージに置いてきたわ」

「……そうかよ」

恐る恐る呆れた表情で、自分と同じくD・ホイールを持つアキに尋ねるクロウ。

だがアキはさも当たり前とでも言うかの様に「無い」とはっきりクロウに告げた。

もはや4人乗り確定である。

「どうやって乗りや良いつてんだよ……」

クロウの苦勞混じりの溜め息が、ハアという声と共にその場に洩れた……。

「……頂いたぞ。この世界を守りし、5つの強大なる力」

そう言ったパルドックスの高く上げた右手には、先程の5つの光が集まっていた。どれも未だにその色鮮やかな輝きを失ってはおらず、どれも美しく輝き続けていた。

「遊星！ お前等、カードは大丈夫かああっ！！？」

「クロウ！ それにアキ達も！」

そこへやって来るクロウやアキ達。彼の愛車であるブラック・バードが、よたよたと覚束無い走りを披露しながら此方へと向かってきている。

……もうこんな無茶な4人乗りは金輪際止めよう、とクロウがこの時思っていたのは内緒だ。

「大変だよ、遊星！！ さっき突然変な光が龍可達のデッキを照らしたと思ったら、突然皆のドラゴンのカードが消えちゃったんだあ！！！」

「何イツ！！？」

「やはりそつちもか！！」

ブラック・バードから龍亞の大声が、遊星とジャックの耳に入ってきた。どうやら遊星の悪い予感の的を射ていた様だ。

現に隣に居るジャックも大切なレッド・デーモンズを奪われている。他の者達も同じ様にカードを奪われたのだろう。恐らく全てはあの光が元凶、あれ等が彼等からカードを奪っていったのだ。

臆て、パラドックスの手に集まっていたその光も輝きを失っていき、今まではつきりと見えていなかった彼の右手がうっすらと見え始めてきた。

その手には数枚のカードが扇状に納まっている。まるで決闘の手札の様だ。

そして光が治まる。

「あれは、俺達のカードじゃねえか！？」

「私のエンシエント・フェアリーが……」

「ブラック・ローズ・ドラゴン！！」

パラドックスの手にあったのはクロウ達から奪われたドラゴン達のカード。それを見付けた途端、クロウやアキ達は一齐に叫び出した。

どれも彼等にとって大切な、相棒とも言えるカード達だ。誰もが必死の形相で自分のカードを見詰め、パラドックスを睨んだ。

「貴様あつ！！ 俺達のカードを……返せつ！！！！」

拳をプルプルと振わせたジャックが、誰よりも早く、物凄い剣幕でパラドックスに噛み付いた。

ジャック・アトラスにとって、レッド・デーモンズ・ドラゴンは自分の魂といつても過言ではない。そんな大切なカードを他人に握られているなんて、山の様に高いプライドが決して許さない。

勿論、他の者達にとつても自分のドラゴンカードは、ジャックと同じ位に大切にしている。そんなカードを奪われたままにはおけない。誰もが今直ぐに取り戻したいと考えていることだろう。

「汝等のカードは二度と戻ることは無い。この5枚のカードは全て我等の計画の為に……ん？」

だが、何故かパラドックスの声に微妙な音が入った。仮面を被っている為、表情が解らないのではつきりとした事は言えないが、明らかにそれは疑問を含んだ声だった。

そう。彼は自分が奪ったカードを見て、あることに気付いたのだ。小さい様でとても重要なこと。

自分が奪ったカードは4枚。どういう訳か、1枚足りなかったのだ……。

「お前が捜しているのはコレか」

その時、遊星が1枚のカードをパラドックスに見せ付けながら口を開いた。

彼の手に優しく握られた1枚の白いカード。それはレッド・デーモンズ・ドラゴンやブラックフェザー・ドラゴンと同じく遊星にとつての相棒。スターダスト・ドラゴンのカードだった。

遊星だけは、上手くスターダストのカードをパラドックスの魔の手から守り抜いていたのだ。

「お前の狙いを理解して直ぐ、俺はスターダストのカードを懐に隠した。だからスターダストのカードを守り抜くことが出来たんだ」

そう言つて、スターダストのカードを手早く自分のデッキに戻す遊星。恐らく今の彼から先程と同じ手段でカードを奪い取るのは不可能だろう。

「スゲーぜ、遊星！」

「やっぱり遊星は凄いや！」

それを見たクロウや龍亞達は、歡喜の声を上げ、遊星の肩や頭をぺしぺしと叩いた。勿論ジャックや龍可、アキも先程までは苦い表情をしていた筈が、今は僅かに笑顔が戻っている。

自分達のカードが奪われてしまったとはいえ、こうして1枚でも大切なカードを守れたことは充分賞賛に値するのだ。

「ほお……我が光の呪縛からカードを守ったか」

驚きの声を上げるパラドックス。

だがそれには、感心や興味といった物も含まれている様に遊星には感じられた。仮面の下では笑みを浮かべているに違いない。

とはいえ、まだ彼はスターダストを狙っている。

それを心から理解しているからか、遊星も表向きには静かに笑みを浮かべているが、同時に闘志を秘めた鋭い目をパラドックスに向け続けている。

もしかしたらそれさえもパラドックスは同じなのかもしれない……。

「念の為に聞いておこう。我にそのスターダスト・ドラゴンのカードを渡してはくれないか？ そうすれば我はこの時空より、直ちに姿を消す」

「断る」

遊星に向かって、正しくは彼の持つカードに向かって手を伸ばし、ゆっくり歩み寄ろうとするパラドックス。

だがそれを遊星はぴしゃりと拒絶。もはや遊星の目付きは、完全に敵を見る鋭い眼と化していた。

「フフフ。やはりか……ただで渡す筈もないか」

そんな彼の態度を見て、やれやれと首を振るパラドックス。

「それより、アキ達のカードを返せ！！ それまではお前を何処にも行かせはしない！！」

「そうだ！ 俺達のカード、全部返して貰うぜ！」

今度は遊星がパラドックスに向かって手を伸ばした。人差し指だけが伸ばされた右手は、真っ直ぐに彼の持つレッド・デーモンズ達のカードに向けられている。

クロウも拳を握って、彼の仮面を憎々しそうに睨んだ。

その後ろでは同じ様にパラドックスを見詰めるアキとジャック。

心配そうに遊星を見る龍可。そんな彼女を身を呈してでも守ろうとする龍亞。

そしてパラドックスは、そんな彼等を前にしてもまだ自然な振る舞いを保ち続けていた……。

もし、今此処でパラドックスがスターダストのカードを諦めて退散しようとしても、遊星達は彼を逃がしはしないだろう。

勿論、パラドックスにはそのつもりは毛頭無いのだろうが。

もはや、彼等はお互いに相手を逃すつもりは無い。

「フム。お互いに退くつもりはない……ということか」

「当たり前だ！」

パラドックスが静かに笑い出す。

一体何が可笑しいのか遊星達には想像も付かないが、兎に角一瞬たりとも気を抜くことは出来なかった。

気を抜いた瞬間に彼の手によつて、自分達は一瞬で全滅させられる。それ位のことを彼は軽々と行ってきそうな気がしてならないのだ……。

……だからこそか、遊星達は先程の遊星の言葉を区切りに誰も喋ることが出来なかった。

暫くの間、パラドックスの威圧感によつて維持される沈黙。遊星達には喋る処か、手を動かすことさえ出来ずにいる。

冷や汗が垂れる。呼吸もだんだん荒くなつていく。両足が言う事を中々聞いてくれない。

この宇宙の様な空間が続く無言と無動作の時間。これを解除出来るのはただ1人。

「……よし、ならこうしよう」

……威圧感をその身体より発している、パラドックス本人だけだ。「この時空では決闘が全ての正義を司っている。ならば……決闘に運命を任せるとするのは如何かな？」

「決闘だと!？」

パラドックスは何と遊星達に決闘を持ち掛けてきた。

困惑する遊星達。まさか此処で決闘を持ち出してくるなんて、思いもしなかったからだ。

「所謂アンティールだ。これから行う決闘に勝った方が、5枚のカード全てを手に出来る」

「じゃあ、私達が負けたら……」

パラドックスの決闘の補足ルール説明に声を上げたのはアキだ。

アキは横目で恐る恐る遊星を見た。彼の顔がパラドックスの言葉を聞き、一瞬だけ引き攣つたのを見逃がさなかったのだ。

つまりこの決闘に自分達が負ければ、遊星はスターダストのカードを失う。確かに勝てばパラドックスから4枚全てを奪い返すことが出来る……。

もし勝てれば……の話だが。

しかし、決闘の勝敗以外に彼からカードを奪い返す手段が自分達に存在するだろうか……。

「良いだろう。その決闘、俺が受ける！」

「遊星っ!?!」

だが、その言葉を受け入れ、なんと遊星が決闘を承諾した。

アキの声と共に一斉に遊星に注がれる全員の驚愕の視線。パラドックスだけはやはりな、という様子だったが……。

「俺のスターダスト・ドラゴンと、皆のカードを賭けて決闘だ、パラドックス!!」

再び右手で、今度はパラドックス自身を指差す遊星。

「良いのか？ 我に負ければ、汝は大切なカードを失うことになるのだぞ？」

「それでも、俺は皆のカードをお前に奪われたままにはおけない。皆のカードは俺が奪い返す！」

遊星は敢えて自ら勝負受けた。

仲間達が全力で戦えないという理由もあるのだろうが、それ以上に彼等の決闘との絆を奪わせたままにしておくことが彼には出来ない。

今、彼からカードを取り戻せるのは、自分しか居ないのだ。

「フフ、そこなくてはな……」

次の瞬間。白と黒の光と共に突如パラドックスの腕に異形の決闘盤が装着される。

それを見た遊星も、自分のD・ホイールより決闘盤を外し、左腕に装着する。

決闘を行うのは遊星とパラドックスに決定。2人は一定の距離を取り、普段決闘疾走が行われるこの決闘レーンで、スタンディング・デュエル起立決闘を行う体勢に入った。

「頼むぞ、遊星！」

「俺達はお前が勝つって信じてるぞ！」

遊星の少し後ろで、ジャックとクロウが声援を上げる。

そんな彼等の声を聞き、遊星も2人に向かってコクンと頷いた。

そして決意した。

大切な仲間達の為にも、この決闘……絶対に負けられないと。

(遊星。お願いだから負けないで……)

アキも、心の中で彼の勝利を祈った。

自分達のカードを取り返して欲しい、とではなく、遊星に負けな
いで欲しいと……。

「行くぞ、パラドックス!!」

「来い、歴戦の決闘者の1人。不動遊星よ!!」

「「決闘!!!」」

そして決闘の幕は上がった。

先行はパラドックス、彼のドロークールが決闘の始まりを告げる鐘となった。

「我のターン！」

一体どんなカードを彼は使用するのだろうか。億の単位を軽く超える程の種類を誇るデュエルモンスターズ、遊星にはこの時点で彼の

戦略を知ることが不可能。

つまりこの最初のターンは、遊星にとってパラドックスの戦略を知る、最初のチャンスなのだ。

話は戻る。パラドックスは決闘を続けた。

カードを引いた彼はそれをそのまま手札に加え、更にその6枚の手札から1枚のカードを選び、こう告げた。

「我は『宝玉獣 サファイア・ペガサス』を攻撃表示で召喚!!」

TURN - 04 カードを駆る死神（後書き）

今回の最強カード？

【ブラック・ローズ・ドラゴン 星7 / 炎属性 / ドラゴン族 / A T
K 2400 / DEF 2000】

『チューナー+チューナー以外のモンスター1体以上

このカードがシンクロ召喚に成功した時、フィールド上に存在するカードを全て破壊する事ができる。

1ターンに1度、自分の墓地に存在する植物族モンスター1体をゲームから除外する事で、相手フィールド上に存在する守備表示モンスターを攻撃表示にし、このターンのエンドフェイズまでその攻撃力を0にする。』

別名リセット。そのあだ名の通り、主に不利な状況をリセットする時に使われることが多いカード。その為に植物族デッキ以外でもこのカードがデッキに組み込まれていることは少なくは無い。寧ろEXデッキに入っていて当然の様な域にまで達している。植物族デッキにチューナーが入っているなら、是非ともこのカードを投入しよう。『一族の結束』が投入されているなら、少し話は変わってくるのだが……。

そんな強力効果の為か、つい最近まで制限カードになっていた。しかし最近無制限に復帰。2枚以上持つていて、制限だから必要無いと売却してしまった人は涙をのんだことだろう。

因みに私ことトマトとしては、このモンスターが動物なのか植物なのか知りたい処。ドラゴンというのだから普通に動物なのか、案外翼が薔薇の花弁なので植物添い手扱われるのか（それなら植物族で表すだろう）、正直言い分によっては私はどっちにでも転びそう

である。

だがもし、実はポケ○ンのフシギ○ネみたいな真ん中に位置するモンスターなんだよ、といった場合、私はどう反応すればいいのかリアクションに困る。

更に更にどうでも良い話だが、このカードを扱う決闘者は知つての通り十六夜アキ。最近結構遊星とのカップリングでプッシュされている様に見えるのは私だけであろうか？

当初から遊星がアキを悲しみから救うという中々の恋愛フラグを立てていたが、最近それが著しくバンバンと立ってきている。

救われてからというもの、アキが遊星達の許に訪れた際、大抵は「遊星、居る？」の一言から始まり、遊星が居なければ肩を落とす。遊星がブルーノとエンジン作成に夢中になっていた際には嫉妬の面も見せた。しかも龍亞にからかわれて大人げない態度を振る舞う始末。

更にDホイラーとしての免許を取る際、それまでの過程がずっと遊星にべったり。スケートのシーンなんてもはやデート。龍亞と龍可が「自分達は邪魔だ」と言う程であった。更にその後、遊星は自らアキの初決闘疾走の応援として、彼女に最も大切な『スターダスト・ドラゴン』を貸し与えている。これはこれまでとは違い、遊星自らが貸し与えている。

極めつけはED。もはやこれは狙っているだろうスタッフよ。

なんと遊星とアキのツーショットがいやに多い。最近のEDはもはやカップル化している。何2人きりでお互い抱き締め合ってるの、と言いたい位にべったり。他のキャラはまるで無視。数秒前に流れた遊星とシェリーの絡みは霞むんじゃないだろうか……。

という位に何故かプッシュされている遊星×アキのカップリング。私の方でも一応アキは遊星に恋心を抱いているという設定だが、果たしてテレビではこれからどう発展していくのだろう。私は正直イリアステルとか機皇帝だとか、そんなことよりもこっちの方が気になっしょうがない。

遊戯王にはヒロインは後に女性モンスターによってその座を追い
やられるという悲しいジレンマがあるが、果たして今作はそれを乗
り越え、無事に彼等は結ばれるのだろうか……？

……何時の間にかブラック・ローズ・ドラゴンの説明から完全に
離れてしまったなあ。

TURN・05 鉄壁の布陣（前書き）

たった一言だけ、眠いです……むにゃむにゃ。

パラドックスに奪われたジャック達の持つ4枚のドラゴンのカード。

それを奪い返す為、唯一自分のカードを守り抜いた遊星が立ち上がり、パラドックスとアンティルールで決闘することに。

今、遊星の『スターダスト・ドラゴン』とパラドックスの4枚のドラゴンカードを賭けた、決闘の幕が今上がった。

先行はパラドックスから。彼は静かにカードを1枚ドロウする。

遊星にとって、未知なる相手の手の内を知る為の大切な初ターン目。そんな重要なターンでパラドックスが手札より召喚したのは1体の獣族モンスターだった。

「我は手札より『宝玉獣 サファイア・ペガサス』を攻撃表示で召喚」

「何っ！？ 宝玉獣だと！？」

遊星の驚きの声と共に出現するパラドックスのモンスター！

その名に恥じぬ美しい純白の身体と、鋭くサファイアで構成された一本角を兼ね備えたモンスター！

空想動物を模した姿でこの世に生を受けた。その名もサファイア・ペガサス。

【宝玉獣 サファイア・ペガサス 星4 / 風属性 / 獣族 / ATK 1800 / DEF 1200】

「ほ、宝玉獣だと！？ 一体どうなつてやがるんだ！？」

「どういうこと……何故パラドックスがあのカードを！？」

「宝玉獣 サファイア・ペガサス。まさか、あのシリーズのカード

をこの目で見られるとは……」

しかし、召喚されたサファイア・ペガサスを目の当たりにして、驚愕したのは遊星1人だけではなかった。

クロウやアキ、そしてジャック。龍可もその小さな両手を口元に当てて目を見開いている。

「ねえ、何で皆あのモンスターに驚いてるの？ あのカードってそんなに凄いカードなの？」

ただ1人、龍亞だけを除いて。

あのモンスター、サファイア・ペガサスを見たことが、龍亞自身にはこれまで一度もない。

確かにあのモンスターは子供の自分の眼から見ても綺麗なモンスターだと思うが、所詮それだけのモンスターにしか見えない。

龍亞には何故、皆がそこまであのモンスターの登場に驚愕するのか、理由が解らなかった。周囲を見渡すと遊星を含め、誰も驚愕の表情から戻って来てはいない。

何が一体そこまで驚けるのか、龍亞は表情を歪めて首を傾げた。

「あのモンスターはな、龍亞」

そんな中、クロウが声と身体を震わせながら龍亞に話し掛けた。

龍亞はクロウの震えた顔を見上げる。

「かつて伝説と謳われた『宝玉獣』シリーズの1枚。俺達のドラゴンのカードと同じく、この世に2枚と存在しない伝説のレアカードだ！」

「……う、嘘おおおおっ!?!」

クロウの言葉を聞き、龍亞も他の者達と同じく驚きの表情を取った。この世に1枚という言葉に龍亞は驚きの全てを隠せない。

この驚愕の事実を聞いた龍亞は、改めてパラドックスのフィール

ドに出現したサファイア・ペガサスを先程とは違う視点から眺めた。
「サファイア・ペガサスの特殊効果を発動。このモンスターの召喚に成功した時、デッキ、手札、墓地より宝玉獣と名の付くモンスターを1体選択し、永続魔法カード扱いで場に出す事が出来る。さあ、仲間の宝玉獣を呼べ、『サファイア・コーリング』!!!」

更にパラドックスは召喚したサファイア・ペガサスのモンスター効果を発動。

彼の足元、サファイア・ペガサスの背後に琥珀、「Amber」と呼ばれる宝玉が出現した。

「我は『宝玉獣 アンバー・マンモス』を永続魔法カード扱いでフィールドに出す。更にカードを2枚セット、これで終了だ。……さあ、汝の番だ」

呼び出された宝玉を囲むように出現する2枚のリバーズカード。

それ等を場に出し、パラドックスはターンの終了を宣言した。

「何で!? あの宝玉獣って、この世に1枚しかないレアカードなんでしょ!? なんであいつはそのシリーズを2枚も持つてるの!?」

「そんなこと俺が知るか!? こっちが聞きてえ位だぜ!!!」

まさかの2枚目の宝玉獣を前にして、先程までの呑息さが嘘の様に龍亞は驚き続けた。

どうしてどうして、と彼はクロウのズボンを掴んで揺さぶりながら尋ねるが、やはりデュエルモンスターズに詳しい彼でも、そこまでは解らない。

クロウは龍亞の小さな手を振り解き、強い口調で彼を怒鳴った。

「私の記憶が正しければ、あの宝玉獣シリーズは全てヨハン・アンデルセンという決闘者が所持していた筈。トップスの図書館にあった本で読んだことがあるわ」

その中、アキが自分の記憶に残っていた宝玉獣に関する情報を語り出す。

まさか偶然読んだ本の内容が、こんな場面で活用出来るとは夢に

も思わなかっただろう……。

因みにトップスとは、此処ネオドミノ町の都市の中でも、最も発展した人口の多い都会の地域である。

「ということは、パラドックスがそのヨハン・アンデルセンっていう決闘者なの？」

龍可がアキに恐る恐る尋ねるが、彼女もそこまで宝玉獣やその決闘者に詳しい訳ではない。

流石にそこまでは……と、アキは龍可に向かって、残念そうに首を横に振った。

「フンッ、そんなことはどうでも良いっ……！」

だがその時、突然ジャックが彼等の暗い思考をぶっ飛ばす様に強く叫んだ。

「例え奴が宝玉獣シリーズを扱おうと、そのヨハンという決闘者だろうと、そんなことはこの決闘には関係無い！！ 遊星、そんな下らん事などに惑わされず、奴を倒すことだけを考えるんだ……！」

そして直ぐ様遊星を見詰め、ジャックは更に熱く語った。

猛獣の様な鋭い目をしているが、その目は遊星への信頼で満ち溢れている。

そんな彼の言葉を耳にしたからか、遊星の目付きが勝負を諦めない決闘者の物に変わった……。

「俺のターンだ！」

そしてデッキに手を掛け、トップのカードを引く。

確かにジャックの言う通りだ。遊星は何時の間にか未知の相手ということと、その使用する伝説のレアカードという二重の重圧に自分を見失い掛かっていた。

だが、今のジャックの言葉で彼は完全に吹っ切れた。自分は自分の決闘をするだけ、それ以外に考えることは、大切な仲間達のカードを取り返すこと。たったそれだけで良い。

遊星は何事にも怯えることなく、左端のカードを手を取った。

「俺は『マックス・ウォリアー』を攻撃表示で召喚！」

【マックス・ウォリアー 星4 / 風属性 / 戦士族 / ATK 180
0 / DEF 800】

召喚されたのは、1体の戦士族モンスター。手には法師が持つ、
杓杖によく似た武器を構えている。

「更に装備魔法、『ファイティング・スピリッツ』！」

【マックス・ウォリアー 星4 / 風属性 / 戦士族 / ATK 180
0 2100 / DEF 800】

「このカードは装備モンスターの攻撃力を相手フィールド上のモンスターの数×300ポイントアップさせる。更にマックス・ウォリアーもバトルを仕掛けた時、そのダメージステップの間だけ攻撃力を400ポイントアップすることが出来る。これで攻撃力はサファイア・ペガサスを十分に上回る、『スイフト・ラッシュ』！」
続いて発動されたカードが、マックス・ウォリアーの士気を高める。

そのままマックス・ウォリアーは武器を振り回し、伏せカードも恐れずにパラドックスのサファイア・ペガサスに飛び込んだ。

「我はこの瞬間に伏せていた罠カードを発動。永続罠、『光の護封壁』！」

「なっ!？」

だがその次の瞬間、マックス・ウォリアーの攻撃は謎の光り輝く壁によって弾かれてしまった。

「光の護封壁は、私のライフを1000ポイント単位で支払い、その攻撃力以下の汝のモンスターの攻撃を封じる永続罠カード」

「ま、まさかお前は」

「そう、私の払うライフコストは……3000ポイントだ！」

【パラドックス LP4000 1000】

突如として現れた頑強な壁が遊星の攻撃を阻む。

奥では弾かれたマックス・ウォリアーをペガサスがほくそ笑んでいる。

「これで遊星は攻撃力3000ポイント以下のモンスターで攻撃出来なくなっちゃった」

「だがこれで奴のライフは風前の灯！ 一気に決めてしまえ、遊星！」

戦いを傍で観戦していたクロウやジャックの声が響く。

クロウの言う事も尤もだが、ジャックの言う事も正しいといえは正しい。

他の仲間達を見たところ、アキと龍可はクロウ派。単純な龍可はジャック派の考えの様だ。

(……何故だ?)

だが遊星だけは違った。

彼だけは他の仲間達と比べ、少し違う考えをしていた。彼の戦略の意図、それに疑問を覚えたからだ。

遊星は頭に浮かんだ疑問の回答を自分なりに導き出すとするものの、結局納得のいく回答は導き出すことは出来ず、取り敢えずバトルフェイズを終了させる。

「カードを1枚伏せて ターンエンドだ」

仕方なく遊星は此処でターンを終了。次なる相手からの一手を待った。

「私のターンだが、此処でもう1枚の伏せカードを発動させて貰おう」

「何っ!？」

だが、その前にまた別のカードがこのエンドフェイズという奇妙なタイミング正体を現した。

「永続罫、『神の恵み』」

表になつたのは赤紫色をした罨カード。1人の女性が雨という恩恵を受けているイラストがその中心に描かれている。

「このカードの効果で、我はデッキからドロ―する度にライフを500ポイント回復する」

「ライフ回復カード!？」

「そして我のターン、カードドロ―。これで我のLPは500ポイント回復する」

【パラドックス LP1000 1500】

これが神からの恵みなのか、天から注がれた幾つもの光の滴がパラドックスの傷付いたLPを僅かに回復させた。

もし、これがこのまま続けば、5ターン後にはパラドックスのライフは完全に回復し、それ以後は永久に回復し続けてしまう。少ない内に何とか削り切りたいものだが、攻撃は封じられている。

「奴め、遊星の攻撃を封じている間にライフを無限に回復していくつもりか!！」

ジャツクの言う通り、このままではパラドックスのライフは手が付けられない程に回復してしまう。

(何とかあの護封壁を破壊しなければ……)

だが遊星の手札にあの守りを打ち破れるカードは無い。あるのは3000ポイントには到底とどかない僅かな攻撃力のモンスターと、今は役に立たない魔法カードだけ。伏せているのも破壊用のカードではない

今の遊星に出来ることは、パラドックスの攻撃を凌ぎつつ、ロツク回復コンボを打ち破れるカードを待つことだけであった……。

「我は『宝玉獣 アメジスト・キャット』を攻撃表示で召喚」

「また宝玉獣のカード!」

パラドックスのメインフェイズ。手札より召喚されたのは、桃色の気高い猫モンスターだった。

先程召喚されたサファイア・ペガサスと同じく、このモンスター
の金色の首飾りにもその名の通り宝石のアメジストが埋め込まれて
いる。

【宝玉獣 アメジスト・キャット 星3 / 地属性 / 獣族 / ATK
1200 / DEF 400】

【マックス・ウォリアー 星4 / 風属性 / 戦士族 / ATK 210
0 2400 / DEF 800】

だが、パラドックスのモンスター召喚と同時にマックス・ウォリアーの攻撃力も更に300ポイントアップする。

確かにパラドックスの守りも堅いが、遊星のモンスターも相手の場にモンスターが増えれば増える程、強化されていくのだ。

少なくとも、今パラドックスの場に出ている2体のモンスター達では、マックス・ウォリアーを戦闘で破壊することは出来ない筈……。

「フフ……我はこのアメジスト・キャットで汝を攻撃する！」

「何っ!? 俺のマックス・ウォリアーの方が攻撃力は高い筈だ!」

「確かに……だが我の出したアメジスト・キャットには特殊効果がある。それは、攻撃力を一時的に半減させることで、汝に直接攻撃することが出来る！」

「なっ!?!」

【アメジスト・キャット 星3 / 地属性 / 獣族 / ATK 1200
600 / DEF 400】

遊星の視線がアメジスト・キャットに移った次の瞬間。モンスター
の鋭い爪が遊星の胸をズバツと切り裂いた。

「うぐああああああああああつ！！？」

【遊星 LP4000 3400】

攻撃を受けると同時に削られる遊星のライフ。

だが問題はそこではない。攻撃を受けた遊星は、まるで本当に攻撃を受けたかの様に片膝を付いて、口から苦痛の声を上げている。

更に驚くべきことがもう一つ。

「見て！ 遊星の胸が！」

アキが、突然苦しむ遊星の身体のある部分を指差した。

「遊星！？ お前、その傷……！？」

そして彼女の指が指し示した先にあった、ある物を見たクロウが心配そうに遊星に声を掛ける。

なんと、遊星の胸には3本の引っかけ傷が付けられていたのだ。

……アメジスト・キャットの持つ、鋭い爪による傷が。

「ひいっ！？ ゆ、遊星の胸から、ち、ちちちち、血があああ……！！？」

爪で引き裂かれた服から見える遊星の肌。それを見た龍亞が青い顔をしてそこを指差した。

流石に子供に赤い流血は過激過ぎたようだ。同じく子供の龍可も顔を両手で覆い、自分の視界を閉じてしまっている。

「くっ！？ この決闘はイリアステルやダークシグナー達との戦いと同じ様に……痛みが実際にプレイヤーを襲うのか！？」

胸を押さえていた遊星の右手の平に彼の赤い血が付着している。

そしてこのナイフで身を切られたかの様な現実の痛み。間違いないこの決闘は衝撃や痛みが現実の物となる危険な決闘。

そのあまりの痛みに遊星は、苦しそうに固く眼を瞑った……

「やべえぞオイッ！ 遊星の奴、めっちゃ苦しそうだぞ！？」

「クロウ！ 遊星の許に行くぞ！」

そんな仲間を見兼ねて、遂に我慢出来なくなったクロウとジャツ

クの2人が遊星の許へ向かおうと飛び出した。

……だが。

「うおおおおつ!!!?!」

「がつ!?! 痛つてえ、顔打った……。何だよ、この壁みてえのは!!!?!」

謎の透明な障壁によって2人の歩みは強制的に止められてしまった。

文字通り見えない壁。それが彼等の進路を完全に断ち、遊星に近寄る事を禁じてしまったのだ。

2人は何とか遊星に近寄ろうと、目の前にあると思われる壁を破壊しようと素手で殴り付けるが、どうにもそれはビクともしない。

「ちつきしょ! これじゃあ遊星を助けに行けねえじゃねーか!!!?!」

「おのれええつ……このジャック・アトラスをコケにしよつて!!!」

「そんな……」

「じゃあ、遊星はどうなつちゃうのさ!? あんな決闘を続けてたら、死んじゃうよお!!!」

「遊星。私達のカードなんて良いから、お願い……無事に帰ってきて……」

仲間を助けることが出来ないと知り、悔しがるジャックとクロウ。それを聞いた龍亞は傷付いた遊星を見詰め、龍可はこの辛い決闘を前に目を覆った。

そしてアキは遊星の帰還を心から願う。

「我はカードを1枚伏せ、ターンを終了する」

「くっ……うぐっ!?!」

パラドックスのエンドフェイズ。2枚の手札を残し、彼は立ち上がる事に難儀している遊星にターンを移す。

もはや遊星とパラドックス、2人の決闘には誰も介入することは出来ない。

誰にも邪魔されず、決闘の決着が付くその時まで、遊星はこの苦

痛から逃れることは出来ないのだ……。

「どうした？ まさか汝ともあるう決闘者が此処で諦めるのか？」

「だ、誰がっ……俺のターンだ！」

「フフ……そうだ。そうこなくてはな」

遊星はドロ宣言をしながらカードを1枚、デッキよりドロ。

手札にそれを加え、今ある手持ちのカードであの防御壁を打ち破る方法を必死に考えた。

そしてある事に気付いた。

この方法なら光の護封壁を破壊出来ずとも、攻撃を仕掛けることは出来る……。

「俺は手札の『スピード・ウォリアー』を墓地に送り、魔法カード、

『ワン・フォー・ワン』を発動」

「ほお、モンスターを特殊召喚する為の魔法カードか……」

「俺はこの効果で、デッキよりレベル1のモンスターを特殊召喚する。現れよ、『チューニング・サポーター』！」

【チューニング・サポーター 星1/光属性/機械族/ATK 100/DEF 300】

遊星は先ず呼び出したのは、まるで中華鍋の様な帽子を被った奇妙なモンスターだった。

だが当然、レベル1の為にステータスは非常に低い。これでは護封壁を突破して攻撃することは叶わない。

そもそも、こんな貧弱なステータスでは、相手モンスターを倒すことさえ出来ないが……。

「更に俺はもう1枚、手札から『調律』の魔法カードを発動！ このカードは俺のデッキから『シンクロン』と名の付くチューナーモンスターを1体選択し、そのモンスターを手札に加える。そしてその後、俺はデッキトップからカードを1枚墓地に送る」

遊星はデッキより、凡庸性の高い『ジャンク・シンクロン』を選

択。

そのままそのカードを加え、効果通りデッキの1番上からカードを墓地に送った。

「そして俺は今加えたジャンク・シンクロンをそのまま召喚する！」

【ジャンク・シンクロン チューナー/星3/闇属性/戦士族/ATK 1300/DEF 500】

「ジャンク・シンクロンのモンスター効果を発動。このカードの召喚に成功した時、墓地からレベル2以下のモンスターを1体、守備表示で特殊召喚することが出来る。蘇れ、スピード・ウォリアー！」

【スピード・ウォリアー 星2/風属性/戦士族/ATK 900/DEF 400】

遊星の召喚したジャンク・シンクロンは、彼の場に2体の戦士族モンスターを齎した。

どれも確かに攻撃力は低く、光の護封壁を突破することは出来ない。

だが、チューナーモンスターであるジャンク・シンクロンが場に存在していることから、彼が次に何をすることも自然に解る。

「そして俺の場のチューニング・サポーターの特殊効果を発動。このモンスターをシンクロ素材として使用する場合、このモンスターをレベル2のモンスターとして扱うことが出来る！」

「ほお。汝お得意のシンクロ召喚、という訳か……」

勿論、それはパラドックスも承知の上。

彼の嘲け笑う様な声を聞き、遊星の表情は微妙に曇る。

戦略が見透かされている様なこの嫌な感覚。彼の取る戦術も相まって、遊星の身体を襲うビリビリとした重圧が増す。

「くっ……俺はレベル3のジャンク・シンクロンをレベル2となつたチューニング・サポーターにチューニング!!」

仕方なく遊星は戦略の手筈通り、シンクロ召喚を行った。

ジャンク・シンクロンが自らの身体を使って3つの星のリングを形成。

更にその中心に向かって、レベル2のスピード・ウォリアーが飛び込んだ。

「集いし星が新たな力を呼び起こす。光差す道となれ!」

今回召喚されるのは、青い身体をした力強い鉄拳の戦士。遊星の持つ数多くのシンクロモンスターの中でも、スターダスト・ドラゴンに次ぐ活躍を見せてきた……。

「シンクロ召喚! 出でよ、『ジャンク・ウォリアー』!!」

【ジャンク・ウォリアー 星5 / 闇属性 / 戦士族 / ATK 230
0 / DEF 1300】

その名もジャンク・ウォリアー。

屑くずや塵こみという言葉をも嫌う遊星。このジャンク・ウォリアーは、そんな彼の心を象徴するモンスターだ。

「更にシンクロ素材となったチューニング・サポーターが墓地に送られたことで、俺はカードを1枚ドロウ! そしてジャンク・ウォリアーの特殊効果を発動。『パワー・オブ・フェローズ』!!」

遊星の二重コンボが炸裂。まずはシンクロ素材となったチューニング・サポーターのドロウ効果。

そして次の瞬間、彼の場に存在していたジャンク・ウォリアーとスピード・ウォリアーが、突然淡い白の輝きに包まれた。

「シンクロ召喚に成功したジャンク・ウォリアーは、俺の場のレベル2以下のモンスターの攻撃力だけその力を上げる。俺の場にはジャンク・シンクロンの効果で特殊召喚されたスピード・ウォリア

ーが存在する！」

【ジャンク・ウォリアー 星5 / 閻属性 / 戦士族 / ATK 2300 3200 / DEF 1500】

スピード・ウォリアーの攻撃力の数値、900ポイント分がジャンク・ウォリアーに加算される。

これで攻撃力は光の護封壁の設定数値である、3000ポイントを上回った。

「やったあ！ これでジャンク・ウォリアーはあいつに攻撃が出来る！」

「しかも、相手のライフは残り僅か1500。アメジスト・キャットに攻撃すれば、それで遊星の勝利だわ」

それを見ていた龍亞と龍可が飛び上がって、今自分達の感じている最上の喜びを表現する。

これが決まれば遊星の勝利。そう思うと飛び跳ねずにはいられなかったのだ。

「行けえーっ！！ やっちまえ遊星！！ ジャンク・ウォリアーの攻撃で決まりだぜ！！」

「これが決まれば、遊星の勝ち。もう遊星が傷付くところを見ないで済む……」

「遊星！ そんなふざけた奴、さっさとたたんでしまえ！！」

勿論、ジャックやクロウ、アキ達も、遊星が勝利に王手を掛けたことを喜んでいた。

「……………」

だが、パラドックスにはそれに対する不安を感じているようには見えない。

……遊星には、彼が仮面の下でほくそ笑んでいるように見えた。

「ジャンク・ウォリアー、アメジスト・キャットに攻撃しろ！！」

『スクラップ・フィスト』!!

TURN・05 鉄壁の布陣（後書き）

今回の最強カード

【宝玉獣 アメジスト・キャット 星3 / 地属性 / 獣族 / ATK
1200 / DEF 400】

『このカードは相手プレイヤーに直接攻撃することができる。』

この時、このカードが相手プレイヤーに与える戦闘ダメージは半分になる。

このカードがモンスターカードゾーン上で破壊された場合、墓地へ送らずに永続魔法カード扱いとして自分の魔法&罠ゾーンに表側表示で置くことができる。』

特殊な効果を持つ宝玉獣シリーズの1体。紫の宝石、アメジストを司るモンスターである。そしてこのモンスターが持つのは直接攻撃能力……半分になってしまうが。

しかし、そのステータスの低さからロックカードの代名詞とも言える『グラビティ・バインド 超重力の網』や『レベル制限B地区』。『平和の使者』をすり抜けることが出来る。これを使ってチクチク殴られる……もとい引つ搔かれると結構痛い。ライフにも心にも傷が三本付く。そして宝玉獣の特性から、『炸裂装甲^{リアクティブ・アーマー}』もそこまで怖くないのも魅力。

但し、宝玉獣デッキを組む場合は自らロックカードを投入するのはトマトとしてはあまり頂けない。何故なら宝玉獣の特性のデメリットとなり、場に残り難くなるからだ。宝玉を出したくても伏せカードでゾーン全てが埋まってしまったというのもよく聞く話である。そして何時もの余談だが、このモンスター、よく見ると微妙に肋骨が見えている。どうやらかなり痩せているらしい。

アニメでは女性、メスのモンスターとして登場していたが、もしかしたらデュエルモンスターのカード達も、女性ならダイエツトに気を配るのかもしれない……。

TURN・06 城壁壊しの大槍（前書き）

スカーレット・ノヴァ・ドラゴン。

こいつ戦闘以外で破壊出来ないんですけど、攻撃宣言時にこいつ除外して戦闘を無効に出来るんですね。

どうやって破壊するんだろう。正攻法では倒せないのではないでしょうか？ バウンスでしか倒せないのでしょうか……。

月の書使うか、スキドレ張るか……素直にブリュちゃんやトリュちゃんに頼るか？ シューティング・スターデッキの私からすれば、ちよつとこの差はあんまりかと……。

TURN - 06 城壁壊しの大槍

「『ジャンク・ウォリアー』、アメジスト・キャットに攻撃しろ！
！ 『スクラップ・フィスト』！！」

「鋼鉄の拳を振り上げ、猛スピードで敵に飛び込んでいくのは、遊星のジャンク・ウォリアーだ。」

「攻撃対象であるモンスター、『宝玉獣 アメジスト・キャット』にミサイルの様に向かっていく。」

「アメジスト・キャットの攻撃力は1200ポイント。それに対し、ジャンク・ウォリアーの攻撃力は約3倍の3200ポイント。」

「これなら『光の護封壁』を突き抜けて、パラドックスのモンスターを撃破すると同時にその残りのLP1500ポイントを全て削り切ることが出来る。」

つまり、遊星はこの一撃で決闘に勝利することが出来るのだ。

そしてその鉄拳は、見事にアメジスト・キャットを粉々に打ち砕いた。

バトルに敗れ去ったモンスターは、細かな光の粒子と化して消滅。持ち主のパラドックスには、その攻撃で発生した衝撃が、大きな砂煙を含んで襲い掛かる。

それは一瞬の内に彼の身体を飲み込み、遊星の眼前には砂のカーテンが広がった。

「終わった」

「気が張る戦いに終止符を打てたと思えば、遊星が安堵と喜びを含ませた声を上げる。」

「強く握り締められていた左の拳は柔らかく開き、重圧で強張っていた身体も、まるで空気が抜けたかのように緩んだ。」

「やったぜ！ 遊星のジャンク・ウォリアーが奴のモンスターを撃破した！！」

「これでパレードックスのライフに2000ポイントのダメージ。遊星の勝ちよ」

クロウやアキもそれを見て大喜びだ。

遊星なら絶対に勝ってくれる、と心から信じていた彼等は、まるで小さな子供の様にびよんぴよん跳び跳ねて喜んでいる。

「やったあーっ！ さくっすが遊星っ！！」

「ホント……やっぱり遊星、凄いわ！」

更には、本当に子供である龍亞と龍可も、「やったやった」と手と手を合わせながら大はしゃぎ。やんちゃな龍亞は兎も角、普段は大人びている龍可までもが、龍亞やクロウ達に負けず劣らず喜んだ。そしてジャックは無言のまま遊星に向かってサムズアップ。

遊星も彼にサムズアップで返すと、ジャックはニヤリと口許を緩ませ、「やったな」と声を出さずに賞賛の言葉を送った。

辛い戦いは終わった。唐突に始まった危険な賭け決闘は、遊星のジャンク・ウオリアーのお陰で遊星の勝利に終わった。

これでジャックやクロウ達の大切なカードを取り返す事が出来る。そう思うと遊星の口からは自然と安堵の溜め息が出た。

遊星は決闘盤に設置されていたカード達に感謝の気持ちを心で伝え、それ等を優しく外してやろうと手を伸ばす

「それが汝の本気が……まだまだ温いな」

「っ！？」

その瞬間、遊星の身体がまた強張った。それも先程と同じく、目に見えない大きな重圧に。

確かに戦いは遊星の勝利で終わった筈だった。

だがそのカーテンの奥には、確かに決闘者の人影がある。その両足を地にしっかりと着けて、遊星の方をそれはその奥から見据えて

いる。

仮面の下で不敵に笑う、パラドックスが……………。

【パラドックス LP1500】

「何！？ 奴のライフが0になっていない!?」

しかもパラドックスのLPの数値には全く変動が無い。遊星は思わず声を張り上げた。

アメジスト・キャットは確かに攻撃表示だった。遊星はそれを遙かに上回る攻撃力を兼ね備えたジャンク・ウォリアーで攻撃した。そして攻撃は確かに炸裂して、相手モンスターを粉微塵にした。

しかしどういう訳か、パラドックスのライフは全くといって良い程削られていない。あの時点で彼のライフは0になった筈。遊星の勝利に終わった筈だというのに。

「フフ、残念だったな。我はお前の攻撃と同時に伏せていたこのカードを発動させて貰った」

「っ！！ そのカードは……………」

「そう。永続罫カード、『スピリットバリア』！」

パラドックスはそう言つて、得意そうに自分の足元を指差す。

そこには、何時の間にか表側を向いた、紫色の罫カードがその正体を現していた。

「このカード効果で、私のフィールド上にモンスターが存在し続ける限り、我が受ける戦闘ダメージは0となる。私のフィールドにはまだ『宝玉獣 サファイア・ペガサス』が存在している。もう此処まで言えば汝等にもお解りだろう?」

「くっ…………… 奴のモンスターを全滅させない限り、俺は奴に戦闘ダメージを与えられない」

「そして破壊された我がアメジスト・キャットは、永続魔法カード扱いで我が魔法及び罫ゾーンに設置される」

悔しそうに再び決闘盤を構える遊星。戦いはまだ終わってはいな

かった。

再開される決闘、遊星は改めて状況を確認すべく、先ずは自分の場を見渡した。

現在は遊星のバトルフェイズ。フィールドには攻撃をし終えたジヤンク・ウォリアーと装備魔法を装備している『マックス・ウォリアー』。

そして両腕を胸の前で交差させ、守備の態勢を取っている『スピード・ウォリアー』。その背後には伏せ表示のカードが1枚。

本来なら此処は続けて攻撃を行い、残った唯一のサファイア・ペガサスを撃破しておきたい状況。

だが、遊星のマックス・ウォリアーの攻撃力では、攻撃力3000以下を完全に遮断してしまう光の護封壁を突破することが出来ない。

結局このバトルフェイズは、アメジスト・キャットを破壊するだけで終わってしまったのだ……。

(やはり、あのカードを先に何とかしなければ……)

そう考えた遊星は、残りある手札で何とか対処出来ないか、とそれを苦悶の表情で眺め始めた。

(だが、俺の手札はさつき『チューニング・サポーター』の効果でドローした『デブリ・ドラゴン』と『デュアル・サモン二重召喚』の2枚。これでは光の護封壁を破壊することは出来ない……)

せめて『サイクロン』や『大嵐』といった魔法や罠を破壊出来る強力なカードがあれば良いのだが、遊星のデッキにはそのどちらも投入されていない。

一応、魔法・罠破壊カードはデッキに投入してはいるのだが、まだそのカードはデッキの中で、手札には存在してはいない。

これ以上出来る事も無く、仕方なく遊星は此処でターンエンドを宣言。パラドックスにターン権が移り、彼はドロウ宣言と共にカードをデッキより1枚ドロウ。

「『神の恵み』の効果を発動。私のドロウと共に我がライフも50

0ポイント回復する」

【パラドックス LP1500 2000】

天から降る光の滴が、パラドックスの身体に生気を回復させていく。

傍から見ると、まるで本当に傷が治癒されているかのようだ。

このままでは、いずれ彼のライフが遊星のライフを上回るのも時間の問題だ。光の護封壁で支払ったライフコストの分も、このまま決闘が続けば全く意味を為さなくなる。

「奴め……小癩な真似をつ!!」

自分の好まない戦法を取るパラドックスに対し、ジャックは感じていた怒りの全てをひけらかした。怒りのまま体を震わせ、歯を力一杯に食い縛る。

「だが、このままじゃ遊星は攻撃も出来ねえっ! 早くあのカードをなんとかしねえと、どんどん遊星が不利になっちまう!!」

クロウも拳を握り締め、自分達には何も出来ないという無力感を呪う。……いや呪うことしか出来なかった。

アキや龍亞達も、先程の喜び様が嘘の様になり返っている。その類には大きな滴が垂れ、喉がゴクリと音を立てる。

「さて、私のメインフェイズだな。私は『幻銃士』を攻撃表示で召喚!」

【幻銃士 星4 / 闇属性 / 悪魔族 / ATK 1100 / DEF 800】

カードの設置と共に発生するおどろおどろしい青紫色の雲。暗黒という言葉がとつともなく相応しい。

それぞれ分離して3つの小さな何かを形作り、馳て3体の悪魔となって、パラドックスのフィールドに召喚された。

「どついつことだ!? 1枚のカードでモンスターが3体召喚された!?」

「フフフ。幻銃士は召喚時に自分フィールド上のモンスターの数と同じ数の『銃士トークン』を特殊召喚する。我がフィールドにはサファイア・ペガサスと幻銃士の2体、よって2体のトークンが特殊召喚されたのだ」

【銃士トークン 星4 / 闇属性 / 悪魔族 / ATK 500 / DEF 500】

【マックス・ウォリアー 星4 / 風属性 / 戦士族 / ATK 2100 / DEF 800】

それぞれ守備表示で守りを固めているトークン。どうやら攻撃表示なのは、本体である1体だけらしい。

3体の小悪魔達は、揃って遊星にケケケと薄気味悪い笑みを浮かべ、不気味な印象を遊星に植え付けようとしている。

「幻銃士の攻撃……」

銃士達が背負った武器の銃口が、真つ先に遊星のスピード・ウォリアーに向けられた。

次の瞬間、幻銃士の持つ筒型の砲が、轟音を響かせながら火を噴いた。

一瞬の内に蜂の巣にされるスピード・ウォリアー。銃撃が止むと同時に彼は、遊星のフィールドから忽然と姿を消した……。

「スピード・ウォリアーを撃破。さあ、汝のターンだ」

「くっ、俺のターン！」

遊星は曇った表情でカードを引いた。

「俺は『調和の宝札』を発動！ 手札の攻撃力1000ポイント以下のドラゴン族チューナーを捨て、新たにカードを2枚ドロウする」
遊星は手札のデブリ・ドラゴンを捨て、通常ドロウに加えて更に

カードを引いた。

だが、その2枚のカードを見た途端、彼の表情は別の物に変わった。更にそのままドロカードの1枚を伏せ表示で魔法&罠ゾーンにセツトする。

「ジャンク・ウォリアーでサファイア・ペガサスに攻撃！ 『スクラップ・フィスト』！！」

そのままジャンク・ウォリアーに攻撃を指示。指示を受けたモンスターはそれを遂行し、身構えていたペガサスをその鉄拳で、叩きつける様に上から殴り付けた。

大地を砕き、大木がバキバキにへし折れる様な音を立てて、サファイア・ペガサスは呆気なく消滅する。フィールドが全て埋まっている為、今回は宝玉と化さずにそのままカードは墓地に送られた。

だが、その衝撃はパラドックスの前で完全に遮断され、ダメージを与えるまでには至らない。

「だが、我が発動しているスピリットバリアの効果で、我へのダメージは無い」

「解っている。俺はこれでターンを終了する！」

此処で遊星はターンを終了。ターンの権利がまたパラドックスに移った。

「私のターン。神の恵みの効果で私のライフは更に500ポイント回復する」

【パラドックス LP2000 2500】

「そして幻銃士の効果を発動！！ 私のフィールド上に存在する『銃士』と名の付くモンスターの数×300ポイント、相手に直接ダメージを与えることが出来る」

「何っ！？ 直接ダメージだと！？」

「我が場に存在する銃士と名の付くモンスターはトークンを含めて3体。よって900ポイントのダメージを汝に与える。『トリプル・

が、それでも決闘を止めようとはせず、プレイを続けた。

「この瞬間、罨カード発動！ 『シンクロ・マテリアル』！！ 更にもう1枚、『エンジェル・リフト』！！」

遊星は前々のターンから伏せてあった2枚のカードをオープン。2枚の赤紫色のカードが、その姿を現した。

「エンジェル・リフトのカード効果で、俺の墓地に存在するレベル2以下のモンスターを1体、攻撃表示で特殊召喚する。俺はチューニング・サポーターを特殊召喚！」

遊星の場に再び返り咲く、チューニング・サポーター。攻撃表示で特殊召喚された低レベルモンスターが、他の2体と並んで、パラドックスの前に立ち塞がった。

「更にシンクロ・マテリアルは相手モンスターを1体選択し、このターンシンクロ召喚する場合、その選択したモンスターをシンクロ素材として使用することが出来る！ 俺が選択するのは、幻銃士！！ お前だ！！」

「っ！！」

その次の瞬間、幻銃士が謎の青い光に拘束され、身体の内自由が遊星によって、完全に封じられる。

何とか振り解こうと、幻銃士は身体をじたばたさせてもがいているが、カード効果による拘束から逃れられる訳もなく、無駄な足掻きとなってしまう。

「更に手札からチューナーモンスター、『ニトロ・シンクロン』を召喚！」

【ニトロ・シンクロン チューナー/星2/炎属性/機械族/ATK 300/DEF 100】

続いて召喚される消火器に酷似したモンスター。その低いステータスからは考えられない程、自信に満ちた態度で、他のモンスター達と合流する。

「これで手筈は整った……行くぞ！ チューナーモンスター、ニトロ・シンクロンをレベル1のチューニングサポーター。そしてシンクロー・マテリアルで選択した、レベル4の幻銃士にチューニング！」

【マックス・ウォリアー 星4 / 風属性 / 戦士族 / ATK 300
0 2700 / DEF 800】

ニトロ・シンクロンの変化した2つのリングに他の2体のモンスターが飛び込んでいく。……幻銃士は無理矢理だったのだが。

モンスター達は、一瞬の内に5個のレベルの星と化し、ニトロ・シンクロンが変化したレベル2個分のリングと重なる……。

「集いし思いが此処に新たな力となる。光差す道となれ！ シンクロー召喚！ 燃え上がれ、『ニトロ・ウォリアー』！」

そして3体のモンスターは、1体のモンスターとなって、燃え上がる火柱の如く、遊星の場に参上した。

召喚されたニトロ・ウォリアーが、遊星に向かって、まるで「自分に任せる」とでも言っているかの様に大きく咆哮する。

【ニトロ・ウォリアー 星7 / 炎属性 / 戦士族 / ATK 2800
/ DEF 1800】

「うおっしやああっ！！ 遊星の切り札の1枚、ニトロ・ウォリアーだぜ！！」

「いっけええっ、遊星！ あんな奴、そのままやつつけちゃえええっ！！」

「遊星、一気に決めてしまえっ！！！」

それに釣られてか、クロウとジャック、怯えていた筈の龍亞もニトロ・ウォリアー同様に熱く吠え出した。

この時、龍可とアキには、この場にニトロ・ウォリアーが3体居

るよつに見えたらしい……。

「更にチューニング・サポーターがシンクロ素材となった時、カードを1枚ドローすることが出来る。そしてニトロ・シンクロンも『ニトロ』と名の付くシンクロモンスターのシンクロ素材となった時、カードを1枚ドロー出来る。よつて俺はデッキからカードを更に2枚ドロー!!」

遊星のドローコンボは続き、新たに2枚のカードが彼の手札に加えられ、手札枚数は4枚となった。

それと同時に遊星の頬がフツと緩む。

「カードを1枚伏せる。そして速攻魔法、『ダブル・サイクロン』」
新たに手札から発動された魔法カード。

刹那、唐突に出現した2つの竜巻が、伏せられて間も無い遊星のカードと、パラドックスの光の護封壁を同時に吹き飛ばして、破壊した。

「このカードは、自分と相手のフィールドからそれぞれ1枚ずつ、魔法及び罠カードを破壊することが出来る! 俺は今伏せたこのカードと、お前の光の護封壁を破壊する!!」

「ほお……遂に光の護封壁を破壊したか」

「まだだ! 俺が今破壊した『リミッター・ブレイク』が墓地に送られたことで、デッキ、手札、墓地からスピード・ウォリアーを特殊召喚することが出来る! 再び蘇れ、スピード・ウォリアー!!」
速度の名を持った戦士は、まるで風のように遊星の場に帰還した。

これで彼のフィールドにはモンスターが4体。しかもその殆どが攻撃力2500ポイントを上回る強力モンスター。鉄壁の布陣、攻撃は最大の防御といった言葉があるが、これは正にそれを表している。

「シンクロ・マテリアルを使用したこのターン、俺は攻撃することが出来ない。だが次のターン、確実に俺のモンスター達がお前のライフを削り切る!!」

遊星が真っ直ぐにパラドックスに向かって指を差す。伸びた指先

は、彼の白い仮面へと向けられていた。

だが、そんな遊星の自信溢れる声や態度を前にしても、パラドックスの冷たい態度が解けることは無く、ただただ不敵に笑みを浮かべているだけであった……。

TURN・06 城壁壊しの大槍（後書き）

今回の最強カード

【ニトロ・ウォリアー 星7 / 炎属性 / 戦士族 / ATK 2800 / DEF 1800】

『「ニトロ・シンクロン」+チューナー以外のモンスター1体以上自分のターンに自分が魔法カードを発動した場合、そのターンのダメージ計算時のみ1度だけこのカードの攻撃力は1000ポイントアップする。』

このカードの攻撃によって相手モンスターを破壊した場合、相手フィールド上に表側守備表示で存在するモンスター1体を攻撃表示にしてそのモンスターを続けて攻撃することができる。』

『ジャンク・ウォリアー』に続き、シンクロ素材に制限があるモンスター、それがこのニトロ・ウォリアーである。

攻撃力は2800と高く、モンスター効果も中々強力。フィニッシュャーにもなり易い。現にアニメに於いて、何度もフィニッシュャーとなって活躍している。特に印象が強いのは、3対1という不利な状況での1ターン3キラーだろう。少し無理がある様にも見えるが、あれは素直にすごいと言える活躍をニトロ・ウォリアーはやってのけた。

間違われ易いのだが、魔法を発動してからニトロ・ウォリアーを特殊召喚した場合、攻撃力は上がらない。出してから使わなければならぬようだ。そして攻撃力が上がるのは最初の戦闘時、守備表示を破壊して、2回目の戦闘は元々の2800というのは良くある話。

因みに攻撃名は『ダイナマイト・ナックル』。効果名は『ダイナ

マイト・インパクト』。但し、このダイナマイト・インパクトというのはかなりのバリエーションがあり、ビームまで撃つことがある。何処かの羽男さん並みの技のバリエーションなのだ。

表示形式を変更するなら、『マシユマロン』等の戦闘耐性モンスターをお勧めする。戦闘で破壊した後、マシユマロンを攻撃表示にして、全軍でタコ殴りするというのはかなりの爽快モノ。

……但し、そこでダメージステップに入りますとか言われると、そこで絶望に叩き落とされてしまうので絶対とは言えない。

更にもし成功したとして、やられた相手からすれば本当にストレスがたまるので、短気な者ならその後リアルファイトに発展してしまいかもしれない。

決闘にしろリアルにしろ、そのガチな光景は正しくニトロを使っただいなマイト並み！！それがニトロ・ウォリアーである。

……オイオイ。

TURN・07 破滅の儀式（前書き）

今回でパラドックスとの初戦は終了です。中途半端な終わり方ですが、どうぞ最後までお読みください。

感想やメッセージもお待ちしております。勿論、此処はおかしいという指摘コメントも待ってますよ。

では、決闘スタンバイッ！！

TURN・07 破滅の儀式

「私のターンだ」

パラドックスはこの絶望的な状況下でさえ、声色一つ変えずにカードをドロ―。

彼の眼前にはモンスター達が、遊星を守る為、覆う様に並んでいる。しかもどのモンスターも攻撃力の高い強力なモンスター達ばかりだ。

「この瞬間、『神の恵み』の効果発動！ 私のライフを更に500ポイント回復する」

【パラドックス LP2500 3000】

パラドックスに向かって、小さな輝きと化したライフが降り注がれる。

それをまるで神聖な水でも浴びるかの様に彼は全身でそれを受け止めた。

「更に手札から魔法カード、『レア・ヴァリユ―』！」

そしてパラドックスは手札から1枚のカードを引き抜き、前のターンに破壊された『光の護封壁』をセットしていたスロットにそれを差し込む。

すると、彼のフィールド上に存在していた2つの宝玉が、鮮烈な輝きを放ち始めた。

「このカードは私の場の宝玉が2つ以上ある時、その1つを墓地に送り、私はデッキからカードを2枚ドロ―することが出来る」

「手札増強カードか！」

「そして墓地に送る宝玉を選択するのは我にあらず……それは汝だ、不動遊星」

「何っ！」

美しく輝きを放ち続ける2つの宝玉を遊星は交互に見た。

今、遊星は選ばなければならぬ。どちらを墓地に送るか、一見簡単そうに見えるこの選択。

だが、遊星にはこの選択が、まるで自分の勝敗を分かたず運命の扉の様に感じられた。

「遊星……すつごく悩んでる」

「墓地に送るということでメリットにしちまうカードも存在する。

奴の手が解らない以上、これは難しい選択だぜ」

龍亞のガタガタと震えた声。クロウも荒い呼吸で顎に垂れた汗を拭った。

「俺が選ぶのはそいつだ」

遊星は美しく紫色に輝くを指差して選択。

すると、その途端に紫の宝玉は光を失い、臆てオレンジのアンバーを残して、粉々に砕け散った。

「では、我は『宝玉獣 アメジスト・キャット』を墓地に送り、カードを2枚ドローする」

パラドックスはカードを1枚墓地に送り、その後デッキよりカードを2枚引く。

そしてドローに反応し、神の恵みの効果が再び発動。カードイラストがまた淡く輝き出した。

【パラドックス LP3000 3500】

「これで我がライフは、更に500ポイント回復する。そして永続魔法、『平和の使者』を発動する」

「また攻撃を妨害するロツクカード!？」

パラドックスのこれでもかという防御カードの連続に対し、遊星は驚きの声を上げる。

遊星の小さく短い声が発すると同時にそのカードはフィールドに

出現した。

「このカードが表示で存在し続ける限り、互いに攻撃力1500以上のモンスターで攻撃することは出来ない。これならどれほど強力なモンスターを召喚しようとする攻撃は不可能だ」

パラドックスの淡々とした説明にまた遊星が眉間に眉を寄せて声を洩らす。

これでまた遊星の攻撃は、パラドックスのカードの前に封じられてしまった……。

「そして我はモンスターとカードを1枚ずつセット。これで我はターンを終了する」

「くっ、俺のターンだ！」

パラドックスは自分の守備を守りを強化することで、更に遊星の攻撃の突破口を阻めた。

だが遊星はそれでも諦めること無く、デッキを信じてカードを引く。

「行け、『スピード・ウォリアー』！ 『銃士トークン』に攻撃しろ！ 『ソニック・エッジ』！」

そのままバトルフェイズに入り、寸座に攻撃を仕掛ける遊星。

迅速且つ強烈な回し蹴りを受け、銃士トークンは顔をへこませながらその場から消滅した。

「だが、我の場の『スピリットバリア』のカード効果で戦闘ダメージを受けない……」

「更に俺はスピード・ウォリアーをリリースし、『ターゲット・ウォリアー』を攻撃表示で特殊召喚する！ 来い、ターゲット・ウォリアー……！」

【ターゲット・ウォリアー 星5/地属性/戦士族/ATK 1200/DEF 2000】

スピード・ウォリアーが遊星の場から再び消え失せ、そこに新た

な巨兵が姿を現した。

その力強そうな姿は、まるで強固な城壁。その両肩にはそんな城を守る為に大砲が備え付けられている。

「ターゲット・ウォリアーはリリースした戦士族モンスターの元々の攻撃力分、その攻撃力を上げる。よって、スピード・ウォリアーの攻撃力、900ポイントがターゲット・ウォリアーの攻撃力に加算される！」

【ターゲット・ウォリアー 星5/地属性/戦士族/ATK 1200 DEF 2000】

「更に手札から魔法発動、『デュアルサモン二重召喚』!!!」

続けて遊星が発動した魔法カード。それはこのターンに限り、2度目の通常召喚を可能にするカードだ。

遊星の手には残り2枚のカード。二重召喚を発動したのだから、その2枚全てはモンスターカードなのだろう。

「俺はチューナーモンスター、『ターボ・シンクロン』を召喚!

そしてチューナーモンスター、『ブライ・シンクロン』を続けて召喚!」

【ターボ・シンクロン チューナー/星1/風属性/機械族/ATK 1000 DEF 500】

【ブライ・シンクロン チューナー/星4/地属性/機械族/ATK 1500 DEF 1100】

残りの空いた2つのモンスターズロットに2枚のカードを素早くセットする遊星。

するとそこに2体のモンスターが姿を現す。どちらも緑色の身体をした、『シンクロン』と名の付くチューナーモンスターだ。

片方は小柄で、車の様な姿のターボ・シンクロン。もう1体は鋭い機械の翼を持った、ブライ・シンクロン。

その2体が遊星の新たなシンクロモンスター召喚の為、フィールドに攻撃表示で召喚された。

「そして、ターボ・シンクロンをレベル5のターレット・ウォリアーにチューニング！ 集いし絆が更なる力を紡ぎ出す。光差す道となれ！ シンクロ召喚！ 轟け、『ターボ・ウォリアー』！！」

直ぐ様行われるシンクロ召喚、先ずは小型のターボ・シンクロンと大型のターレット・ウォリアーが空へ舞った。

自らの身体を使って、光の輪を形成するターボ・シンクロン。そのリングを5つの星となって潜るターレット・ウォリアー。

レベル1のリング、レベル5の星が空で真つ直ぐ直列したその時、遊星の場に3体目のウォリアーがシンクロ召喚された。

【ターボ・ウォリアー 星6 / 風属性 / 戦士族 / ATK 2500 / DEF 1500】

エンジンが備えられた赤い身体を震わせ、『ジャンク・ウォリアー』、『二トロ・ウォリアー』に続き、ターボ・ウォリアーが轟音を響かせながらフィールドに参上した。

「まだまだ！ 更に俺はチューナーモンスター、ブライ・シンクロンをレベル4の『マックス・ウォリアー』にチューニング！」

遊星のシンクロはそこで止まらず、続けて彼はシンクロ召喚をモンスター達に指示。

それを受けたブライ・シンクロンとマックス・ウォリアーは高く飛び上がり、先程のターボ・ウォリアーの時と同じく、それぞれリングと星と化す。

「集いし願いが新たに輝く星となる。光差す道となれ！」

臆てそれ等は一体の白銀のドラゴンとなり、遊星の場の中心に降り立った……。

「シンクロ召喚！ 飛翔せよ、『スターダスト・ドラゴン』！」

【スターダスト・ドラゴン 星8 / 風属性 / ドラゴン族 / ATK 2500 / DEF 2000】

宝玉に負けない輝きを放ちながら現れたスターダスト・ドラゴン。遊星の場に彼の代名詞ともいえるモンスター達が勢揃いした。

「ブライ・シンクロンをシンクロ素材に使用して召喚されたシンクロモンスターは、エンドフェイズ時までモンスター効果が無効となり、その攻撃力は600ポイントアップする！」

【スターダスト・ドラゴン 星8 / 風属性 / ドラゴン族 / ATK 2500 3100 / DEF 2000】

「凄いわ、こんな光景見たことない。遊星の場に4体のシンクロモンスターだなんて……」

「ああ。俺との決闘の際にも、遊星は何体ものシンクロモンスターを召喚したが、それでも此処までシンクロモンスターを展開させる事は無かった」

怒涛という言葉が相応しい程の遊星の召喚技術。サモンテクニック

強力なシンクロモンスターによる、鉄壁を上回る究極の布陣。それはがっちりと遊星を包んでいる。

そんな光景を前にジャックやアキ達には、呆然と驚愕の声を出すことしか出来なかった……。

「フツ、シンクロモンスターが場に4体か……やるな、不動遊星」
流石のパラドックスも、この光景には驚いたのか、僅かだが反応を見せた。

しかし、遊星には彼が驚いているようには見えなかった。寧ろ彼

は、この光景を待つていたように見える。

本当に不気味だ。この男はこの遊星の場の光景でさえも、想定範囲内だったとでもいうのか……。

「既に俺のバトルフェイズは終了し、手札も無い。これで俺のターンは終了する！」

遊星は両手を下ろしてターンを終了。

だが彼の場合は十分に強化、そして更に強固となったモンスター達の守りがある。

「この瞬間にブライ・シンクロンの効果が切れ、スターダストの能力値も元に戻る」

【スターダスト・ドラゴン 星8 / 風属性 / ドラゴン族 / ATK
3100 2500 / DEF 2000】

攻撃力が下がると同時にスターダストにはモンスター効果が戻ってくる。これでパラドックスが何かしらの破壊カードを発動したとしても、スターダスト・ドラゴンをリリースすることで、それを無効に出来る。

……遊星のフィールドは、攻略するのが不可能といえる程に強化されたのだ。

流石のパラドックスも、この布陣を攻略することは出来ないだろう。

仲間達、そして遊星も、そう心の中で考えていた……。

「では、我のターンだ……カードドロ」

しかし、この状況を前にしても、パラドックスには敗北を恐れという物が全く見られない。

彼はこの決闘からずっとこうして淡々とした態度を取り続けている。

こんな絶望的な状況を前にしても。

「神の恵みの効果発動。我のライフを500ポイント回復する」

【パラドックス LP3500 4000】

パラドックスのライフは、このターンで本来の数値である4000ポイントにまで回復。これで光の護封壁の発動コストである、3000ポイント分の回復が完了した。

「これでお前のライフは元の4000ポイントに戻った。ここからが本当の決闘の始まりだな……」

「……始まり……だと？」

遊星の静かな声を聞き、言葉を返すパラドックス。

だが、その返事は尻上がり。……明らかに疑問を含んでいる。

それを聞いて、遊星の顔も微妙に曇る。嫌な感じがしてならないのだ。

そして直ぐにそれは現実となった、パラドックスの口にした次の言葉で……。

「本当の決闘……それはあながち間違いではない。だが始まりではない」

パラドックスはスツと遊星を指差す。

「これでこの決闘は終わりだ。このターン、この時を持ってな……」
「っ!？」

その瞬間、遊星達の背筋にゾクリとした強い悪寒が走った。

遊星の目の前に立つ男。今なら解る、この男は今口元を緩めて笑っている……。

「汝はこのターンで、我に敗北する。……それでこの決闘は終了だ」

「馬鹿な!？ この状況で俺を倒すというのか!？」

パラドックスの言葉に嘘は全く感じられない。

遊星にはだんだんと、このパラドックスという男が、これまでの敵よりも一回りも二回りも恐ろしく思えてきた。

この男には自分達が出会ったことのない、未知の深い暗黒を抱えている。

それをはつきりと自覚した時、遊星の両脚はガクガクと震え出した。

「嘘だろ……この状況をひっくり返す策が、あいつにはあるってのか！？」

「有り得ん！ 遊星のあの布陣を攻略するなど……」
それを感じていたのは遊星だけではない。

パラドックスの言葉をまるで信じようとしていないクロウとジャックだが、その身体は遊星と同じ様に微妙に震えている。

龍亞と龍可に至っては、完全に怯えきってしまい、アキの服に顔を埋めてしまっている。そのアキの身体もガタガタと恐怖で震えている。

「さあ、それでは終わらせようか。我は平和の使者の維持コストとしてライフを100ポイント支払う」

【パラドックス LP4000 3900】

「そして伏せていたカードを発動、『リビングデッドの呼び声』。

墓地からモンスターを1体特殊召喚する。我は墓地よりアメジスト・キャットを再び特殊召喚」

地面の下から突然飛び出した1体のモンスター。よく見ると、それは先程遊星が選択して墓地に送ったアメジスト・キャットだった。アメジスト・キャットは文字通り息を吹き返したように凄い剣幕で遊星を睨み、威嚇を始める。

「それでは、そろそろ我のデッキの本当の姿を汝達に見せてやろう……我は場の神の恵み、スピリットバリア、リビングデッドの呼び声の3枚の永続罫カードを墓地に送る！！」

「永続罨を3枚!？」

スロットから選択したカード3枚を引き抜き、それ等を全て墓地に送るパラドックス。

すると、フィールドに存在していた3枚の永続罨カードが、ガラスが割れる音色を奏でて、粉々になって消滅した。

そのカードの破片は、真っ直ぐに空へ向かって吸い込まれ、次の瞬間には大きな火柱となって、パラドックスのフィールドに戻ってきた……。

「現れよ、深遠なる闇の炎よ。今こそ、その持てる業火でこの世の全てを焼き尽くすがいい!!」

大蛇の如く、長く赤い身体を持ち、業火を自在に操る巨大な怪物となって……。

「降臨、我が僕の一角!! 『神炎皇ウリア』!!」

【神炎皇ウリア 星10 / 炎属性 / 炎族 / ATK 0 / DEF 0】

「……何だ、このモンスターは!？」

自分達のモンスターを遥かに上回る大きさのモンスターを見た、遊星の第一声がそれだった。

突如現れたモンスターは、攻撃力が0だが、それでもこの押し潰されそうになる程のビリビリとした重圧はどうだろう。

まるで身体の上から、重りか何かを乗せられているようだ。今にも膝が挫けて、身体が崩れ落ちそうになる……。

「神炎皇ウリアは墓地に存在する永続罨1枚に付き、攻撃力を1000ポイントアップさせる」

「墓地の永続罨で攻撃力がアップするだ!？」

「我が墓地に眠る永続罨は4枚。よって、その攻撃力は4000ポイントとなる……」

【神炎皇ウリア 星10 / 炎属性 / 炎族 / ATK 0 DEF 0 4000 /

パラドックスの説明通り、彼の決闘盤のセメタリーゾーンから墓地から4つの火柱が現れ、それ等は全てウリアの口の中に飛び込んでいった。

すると、0だった筈のウリアの攻撃力は一瞬で4000ポイントにまで跳ね上がる。そしてそれを喜ぶようにモンスターは、空へ大きく咆哮する。

「マジかよ!? 攻撃力が墓地の永續罨カードの枚数で変化するモンスターなんて、聞いたことねえぞ!!!?」

「攻撃力が4000なんて。これじゃあ、遊星のどのモンスターでも敵わないわ……!」

そのけたたましい咆哮を聞き、アキの身体が、龍亞と龍可を抱えたままガクリと崩れ落ちる。

クロウも、これが自分達のよく知るモンスターの1体とは、とても考えられなかった。

……これは正にモンスター、次元の違う怪物だ。

「リビングデッドの呼び声がフィールドを離れたことで、特殊召喚したアメジスト・キャットは破壊され、宝玉となって、再び我が魔法・罨ゾーンにセットされる」

「くっ!」

遊星の気付かない間にパラドックスは別の行動を取っていた。アメジスト・キャットのカードの設置場所を移し替えていたのだ。

だが、今の遊星にはアメジストキャットは見えていない。今の彼には目の前に山の様に聳える赤い巨大な怪物しか見えてはいなかった。

(奴の場にある平和の使者の効力は、当然奴にも及んでいる。なら、奴はウリアに攻撃させる為に平和の使者を破壊しようとする筈。それまでに何とかあのモンスターを破壊する手を揃えなければ……)

遊星は、自分のフィールドに存在しているモンスターを見ながら、自分のデッキの1番上のカードを見る。そのカードが、逆転につながるカードだと信じて……。

だがパラドックスは、そんな遊星を見て、誰にも気付かれずにほくそ笑んだ。

……残りの自分の手札を眺めながら。

「っ！ 永続魔法が3枚!!」

「汝も気付いたようだな。我が次なる僕の召喚方法に……」

その時、遊星がハッと首を上げた。

それを見たパラドックスは、仮面の下でニヤリと笑みを浮かべ、1枚のカードを手札から抜き取った。

「我は場の永続魔法、平和の使者、『宝玉獣 アンバー・マンモス』、宝玉獣 アメジスト・キャットの3枚を墓地に送る！」

セットされていたカード3枚がスロットから引き抜かれ、ウリアの時と同じ様に墓地に送られる。

やはり同じ様に粉々に砕け、それ等はまた天に昇っていく……。

だが、今度は火柱ではなく、一筋の巨大な雷がパラドックスのフィールドに落ちてきた。

「現れよ、進む闇の雷よ。今こそ、その秘めた稲妻でこの世の全てを打ち砕くがいい!!」

そしてそれは、彼のフィールドでウリアに匹敵する、巨大な怪物へと形を変えていく。

「降臨、第二の我が僕!! 『降雷皇八モン』!!」

ウリアと同等の大きさを誇る降雷皇、八モンの形に……。

【降雷皇八モン 星10 / 光属性 / 雷族 / ATK 4000 / DE

F 4000】

現れる2体目の怪物。その身体に感じられる重圧は計り知れない物になっていた。

気付けば、何時の間にか空は美しい青色から、真つ暗な紫色に変貌している。それもこれも、あの2体の怪物がフィールドに出現してからだ。

まるでこの空は、今の遊星の決闘者としての心を表しているよう。この暗黒の空こそ、彼の感じている絶望の大きさを鏡の様に映しているのだ。

「攻撃力4000以上のモンスターが2体……」

絶望に打ちひしがれ、心が今にも折れそうになっている遊星。

その心には、目の前の怪物への恐怖感さえ抱いていた。

現に遊星の身体は、今にも倒れそうになっている。今彼が発した言葉も何処か震えており、彼が怯えていることがよく解る。

あの時、鬼柳京介との戦い。『地縛神 C c a p a c a p u』コカバクアブに抱いた恐怖感以上に……。

「フフ、2体……いや、違うなあ？」

彼の漸く出した言葉、だがそれもパラドックスのカードで完全に否定されてしまった。

「我は裏側表示のモンスターを反転召喚。『グレイブ・スクワーム』！」

【グレイブ・スクワーム 星1/闇属性/悪魔族/ATK 0/D
E F F 0】

前のターン、守備表示でセットされていた全身を包帯で包み込んだ悪魔族モンスターが、その正体を現す。気持ち悪いその容姿は、誰の目から見てもミイラとしか言い顯せない。

「更に我は手札から魔法カード、『デビルズ・サンクチュアリ』を発動！ 効果で『メタルデビル・トークン』を攻撃表示で特殊召喚する」

そしてまた手札から魔法を発動し、パラドックスの場には、言葉では言い表すことの出来ない、低ステータスの奇妙なモンスターが特殊召喚された。

【メタルデビル・トークン 星1/闇属性/悪魔族/ATK 0/DEF 0】

「このグレイブ・スクワームは、戦闘破壊された際にカードを1枚破壊する効果を持つ。メタルデビル・トークンも受けた戦闘ダメージを相手に移す効果を秘めている。確かにどちらも強力な効果だが、これから私の呼び出す第三の僕の前では、そんな特殊効果さえも霞んで見える……」

「だ、第三の僕だ！？ この期に及んで、まだ強力モンスターを召喚するというのか！？」

遊星はパラドックスの手札を見た。彼の手札には、まだカードが1枚残されている。

つまりそれこそが第三の僕。

「そうだ。我は場の3体の悪魔族モンスター全てをリリース！ これが第三の僕の召喚条件だ！」

直ぐに自分のフィールドに存在している悪魔族モンスター達を墓地に送っていくパラドックス。

すると、またモンスター達は粉々になって消滅し、それは一進に空へ吸い込まれていった。

「現れよ、闇の中の深き暗黒よ。今こそ、その無限の邪悪なる力でこの世の全てを制圧するがいい！！」

「降臨、我が最後の僕！！ 『幻魔皇ラビエル』！！」

【幻魔皇ラビエル 星10/闇属性/悪魔族/ATK 4000/DEF 4000】

闇となつてフィールドに舞い降りたのは、他の2体と同じく巨大な青い悪魔。その名も幻魔皇ラビエル。

「これが我がデツキの真髄。我がデツキは宝玉獣などではない！これぞ我がデツキを象徴する、神に匹敵する三体のモンスター、『三幻魔』！！」

「三幻魔……これが奴のデツキの正体」

現れたラビエルはウリアとハモンの間に立ち、3体はその巨体から脅威的な威圧感を醸し出す。そして遊星の心に更なる恐怖を植え付けた。

……拭い去ろうにも拭いきれない、絶望一色に染まった恐怖を。

「ば、馬鹿な……こんなことが現実になり得るのか……？」

「冗談じゃねえよ。攻撃力4000越えのモンスターが、たった1ターンで3体なんてよお！？」

「これまでの展開全ては、あの3体を呼び出す為の布石だったというの……？」

「龍亞……私、怖い」

「お、俺も……怖いよお」

ジャック達もその恐怖を身体一杯に感じていた。こんな絶望的なフィールドをこれまで彼等は見ることが無かった。

ジャックは呆然とその光景を眺めることしか出来ず、クロウもまたその恐怖で身体がガクンと地に沈んだ。アキは目を固く瞑って、強く龍亞と龍可を強く抱え込み、2人もアキの服を強く掴んで顔を埋めた。

この距離に居る彼等でさえも、此処までの恐怖を感じてしまっている。

それが近い距離で対峙している遊星ならば、果たしてどれ程の恐怖を感じているのだろう……。

「……そしてこの三体の幻魔を場より除外した時、我が最強の僕がフィールドに降臨する！」

しかし、それでもパラドックスはまだ遊星達に恐怖を……絶望を植え付けようとする。

今度は三体の幻魔が粉々となり、闇一色が占める太陽の無き大空へ昇る。それ等は1つに融合することで、新たな1体の幻魔モンスターを構成していく……。

その光景は正に混沌^{カオス}。時空が歪んだように恐怖で濁った遊星達の目にはそう見えた。

「業火、雷、暗黒の3つの大いなる闇の力交わりし時、混沌の中より究極の幻魔が降臨する」

「さあ、この世の全てを混沌の時代へ誘え!! 『混沌幻魔アーミタイル』……!」

パラドックスは腕を高く掲げ、最後にして最強の幻魔をフィールドに特殊召喚した。

ラビエルの巨体を軸とし、広げられたハモンの翼、向けられるウリアの顔を模した腕。

混沌の名に相応しいその巨大な身体をうねらせながら、アーミタイルはパラドックスのフィールドに参上した……。

「こ、混沌幻魔……アーミタイル」

遊星の口から、特殊召喚されたモンスターの名が零れた。

もうその呆然とした顔に何時もの真剣な彼の面影は見られない。

他の者達に於いては、もう何も言えなくなってしまっていた……。

「アーミタイルのモンスター効果。それは自分のターンでのみ、その攻撃力を10000ポイントにまで増加させる」

【混沌幻魔アーミタイル 星12/闇属性/悪魔族/ATK 0
10000/DEF 0】

アーミタイルに紫の闇のオーラが、まるで衣の様に纏われ、その攻撃力も大幅に増加。

そしてそのままアーミタイルは、赤いウリアの腕を遊星に向けた。

「どうだ、不動遊星よ。我が究極の幻魔をその目で見た感想は……」

「……………」

「……………もう声も出ないということか」

パラドックスは何も喋らなくなってしまった遊星を見て、フツと小さく笑う。

遊星は焦点の合っていないその目で、目の前の怪物を見ていた。

「汝は確かに素晴らしい腕をした決闘者だ。だが、我等の目的の前では、そんなお前達も邪魔な存在に過ぎない」

静かな笑みを浮かべたまま、パラドックスは遊星に語り掛けた。

だがそれも、彼の耳に届いているかは定かではない。未だに彼は呆然とアーミタイルを見上げている。

「この世にデュエルモンスターズなど必要ない。過去にも、そしてこれから……。汝等はこの時空で、その消滅の時を指をくわえて待つてるがいい……………」

「さらばだ。歴戦の決闘者の1人、不動遊星よ……………」

次の瞬間、遊星は身体にこれまでに無い、強い衝撃を肉体と精神の両方に受けた。

眼前で自分を守っていたシンクロモンスター達が一瞬で全滅。これまで自分と共に幾つものピンチを乗り越えてきた彼等は、たった一撃を前に跡形も無く消え失せてしまった。

更に身体がバラバラになったかと錯覚する位の激痛が走り、ドサリという音を立てて、大地に横たわった。

同時に誰かが悲痛な声で遊星と繰り返して叫び出す。……………遊星の耳にもそれが僅かに届いた。

だがそれも、意識と共に薄れてきた。同時に視界も徐々に狭くなり、臆て完全に瞼は閉ざされ、意識も何処かへ飛んでいつてしまった。

「汝のスターダストは頂いていく……」

最後に見たのは、スターダスト・ドラゴンのカードを手にし、煙の様に消えていったパラドックスの後ろ姿だった……。

【遊星 LP2500】

T U R N ・ 0 7 破滅の儀式（後書き）

今回の最強カード

【混沌幻魔アーミタイル 星10 / 闇属性 / 悪魔族 / A T K 0 /
D E F 0】

『「神炎皇ウリア」 + 「降雷皇ハモン」 + 「幻魔王ラビエル」
自分フィールド上に存在する上記のカードをゲームから除外した
場合のみ、E X デツキから特殊召喚が可能（「融合」魔法カードは
必要としない。）

このカードは戦闘では破壊されない。

このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、このカー
ドの攻撃力は自分のターンでのみ10000ポイントアップする。』

姿から見て、正に混沌^{カオス}。自分ターン時でのみだが、その攻撃力を
10000ポイントという破格の数値に変動させることが可能とい
う1ターンK i e e r に適したモンスター。巨体に恥じない凄まじい
攻撃を相手に炸裂させた時点で、どれ程劣勢な状況でもひっくり返
すことが可能になるだろう。

しかし、この召喚条件は厳し過ぎる。今回のパラ様の様に律義に
3体の幻魔を一々揃えていては、その間にやられてしまう。そもそ
も出したところで、幻魔達には破壊体制がまるでない為、召喚して
『奈落の落とし穴』や『神の宣告』でブツ飛ばされるといふ恐れも
ある。（ウリアは少し例外）

そんな過酷な召喚条件の緩和方法として、トマトはこれ等のカー
ドをお勧めする。『E ・ H E R O プリズマー』、『魔道雑貨商人』
、『ファントム・オブ・カオス』である。

プリズマーやファイトム・オブ・カオスは、幻魔達にカード名を

変えることが出来る。魔道雑貨商人は、ファントム・オブ・カオスの効果の補助として採用。全部落とし、ファントム・オブ・カオスを何らかの方法で特殊召喚すれば『地獄の暴走召喚』で素材を一気に揃えることも出来る。

更に召喚すれば蘇生召喚可能な為、その事も考慮に入れば『リミット・リバーズ』も充分投入の価値がある。『リビングデッドの呼び声』、現在なら『死者蘇生』もオーケーだ。

何度も言うが、パラ様の様に一々幻魔達を律義に出さない方が良い。単純に計算すれば、このカードを召喚するのにそれぞれカードを計12枚失う事になるのだ。あれはパラ様だから出来たこと。流石はパラ様、もしかすればそのまま単体で使った方が良いかもしれないなどと思つた人は、是非ともパラ様のアーミtailで攻撃されよう。考え方はきつと変わる筈だ。

……話は戻る。

だが、召喚したからといって油断は出来ない。このカードにも魔法及び畏、モンスター効果体制は一切ない為、『聖なるバリア ミラーフォース』では破壊され、『デイモンション・ウォール』^{マジックシリンダー}や『魔法の筒』では10000ポイントがそのまま戻ってくるという事になり兼ねない。是非とも何かしらの対策は行おう。

因みにアーミtailはアニメでは、『次元融合殺』というオリジナル魔法カードで融合されて特殊召喚されていた。正直出し難い事この上ない。

しかし、10000ポイントの戦闘ダメージを1ターンに一度与えるという効果に変わっていたので、どちらが良いかといえば、正直難しい。

しかし、どちらにせよ効果を無効にしてしまう『スキルドレイン』を発動されれば何も出来なくなってしまうので、もし使用している決闘者なら、対策様に『サイクロン』や『ハリケーン』は絶対に投入しておこう。

因みに名前の由来となった「アルミサエル」は、悪魔から妊婦や

胎児を守る天使として描かれている。

……アレを天使というなら、他の悪魔達、もとい天使達は一体何だというのだろうか？

TURN・08 時の魔術師（前書き）

今回は決闘無し。無しと言ったらなし。本当に何で今回は決闘場面が無いんだろう……私の方が寂しいです。

しかも最強カードも無し。だってカードが出て来ないんだもん。出て来ても全部過去に紹介したカードだし……。

何とか早めに決闘の内容が書けるよう頑張りますので、どうか皆さまこれからも見守り下さい。宜しくお願い致します。

目を開けた時、最初に目に入ったのは、見慣れない天井だった。

「此処は？」

「遊星、気が付いたのね？」

そして心配そうに顔を歪ませていた、十六夜アキの顔。彼女は今にも泣きそうな表情をしていた。

「俺は一体どうして？ それに此処は」

遊星は混乱していた。自分はどうしてこんな所にいるのだろうか。周りはベッドだらけ、それに自分の腕には、点滴用の注射針が刺されている。

ムクリと針に気を付けながら起き上がると、遊星は僅かに頭に痛みを覚える。実際になった事はないが、まるでそれは二日酔いの様に彼は感じた。

「遊星、此処は病院よ。貴方はパラドックスと決闘して……」

「っ!!！」

アキが沈んだ声でそう言った時、遊星は全てを思い出した。

次の瞬間には、思わず彼はその顔を左手で、特に目の辺りを覆ってしまう。

まるで、アキに自分の情けない顔を見られないようにするかのよう。

「遊星」

「すまないアキ……少しだけ1人にしてくれないか？」

「解ったわ。落ち付いた頃に皆と一緒に来るから」

遊星の気持ちを悟ったアキは、素直に腰掛けていた椅子から立ち上がり、そのまま病室を離れようと、唯一の出入り口のドアへ向かう。

ドアは最新式の自動ドア。アキが近付いてきたことを知ったドア

は、お通り下さいとでもいう様にその戸を横にスライドさせた。

「遊星。何でもかんでも背負い込まないで。誰も貴方のことを責めたりしないわ」

アキは遊星に聞こえないようにそう呟くと、静かに遊星の病室から退室した。

ドアはアキが通ったことを確認すると、再び外界からこの部屋を遮断する為にその戸を閉じる……。

「……っ!!」

アキが出ていった途端、遊星は手元の掛け布団のシーツを強く握り締める。

シーツに皺が寄り、そしてぼつぼつと小さな滴が、それを雨の日の地面の様に濡らした。

「くっそおおおおおおおおおっ!!!!」

遊星は此処が病院であるにも拘らず、大声を上げてシーツに顔を埋めた。

真つ暗な視界の代わりに浮かび上がってくるパラドックスの仮面そして自分を敗北へ追い込んだ三幻魔。そしてその究極の姿、『混沌幻魔アーミタイル』。

遊星は泣いた。自分の無力さを、パラドックス彼等への悔しさを。

そして、仲間達への申し訳なさから、大粒の涙を流し続けた。誰にも見られないように。小さな部屋の中、たった1人で。

「よお、遊星。元気にしてたか？」

「傷の方は大丈夫、遊星？」

2時間後、アキの言う通り、仲間達が遊星の病室を訪れた。

先頭で入ってきたのはクロウだ。続いて龍亞、ジャック、ブルーノ。

そして龍可と一緒にアキが入ってくる。これでチーム5D・Sの全員が此処に集結した。

全員が遊星の無事を喜び、その顔に笑顔を浮かべている。

「……………」

遊星には、それがとても辛かった。

「すまなかつた皆。俺は奴に勝つことが出来なかつた」

思わず口から零れ出る謝罪の言葉。

刹那、仲間達の表情もガラリと変わる。

「皆の大切なカードを俺は……本当にすまない。本当に」

「何言つてんだよ遊星！ お前はあんなに精一杯、俺達のカードの為に頑張ってくれたじゃねえか!？」

遊星の謝罪を遮って、大声を上げたのはクロウだった。

彼はベッドの上に両手を置き、強い口調と眼差して遊星に向かって声を荒げる。

「そうよ。遊星は私達の為にあんなにボロボロになるまで戦ってくれたじゃない。寧ろ私達の所為で遊星を大けがさせて……その上大切な『スターダスト・ドラゴン』のカードも……」

「遊星。俺達は誰もお前を恨んではない。寧ろ、俺達のために戦ってくれたことを感謝している」

「クロウ。龍可。ジャック……」

仲間達の慰めの言葉が、遊星の沈んでいた心を再び浮かび上げさせる。

同時に彼の沈み切っていた表情も、僅かだが明るくなったようだ。そして彼の心に巣食っていた、別の黒い何かも薄れていく……

「遊星！ 元気になったら今度こそあいつを倒そう！！ 今度は絶対に負けないよ！！」

「D・ホイールもアレから僕がちゃんと整備しておいた。何時でも遊星を乗せて走らせることが出来るよ」

「龍亞。ブルーノも……皆、本当に有難う」

聴て、遊星の表情は、普段の彼のそれと同じく、物静かな笑顔となった。

それを見たアキはフフフと微笑む。その笑顔には、一体どんな想いが込められているのだろう。

柔らかな空気が流れるこの小さな病室。その間、遊星達はパラドックスのことを忘れることが出来た。

だが、それでも彼等は感じずにはいられなかった。心にぽっかりと空いた洞穴を……。

暫くして、遊星の病室のドアが、外側よりコンコンと叩かれた。

ノックだ。

そう遊星達が考えるのと同時にドアが左に向かってスライドし、部屋の中に2人の男女が入ってきた。

「遊星、身体の調子はどうか？」

「お加減は如何ですか？」

「牛尾。それに深影さんも……一体どうして？」

「僕が教えただ。それに遊星を此処まで運んでくれたのは、深影さん達なんだよ」

「そうだったのか……迷惑を掛けてすまなかった」

セキュリティ、治安維持局に勤める人物。白い包装紙に包まれた花束を肩に担ぐ牛尾哲と、沢山入った果物籠を持つ深影狭霧の2人だ。

実は、ブルーノがゲートの解錠を頼まれた時、その際に彼は2人に頼んでゲートを開放して貰ったのだ。

そして傷付き倒れた遊星をこの病院にまで運び、入院等の手続きを済ましたのも彼等。

だから今回の事件、世間には内密にされているが、牛尾と深影はその全てを事細かに知っていた。

2人は見舞いの品を近くにあったの台に置き、部屋の片隅に置いてあった青いパイプ椅子を手に取り、遊星のベッド近くに座る。

「ああ、何つーか、散々だったな遊星」

「あ、ああ……」

頭をぼりぼり掻きながら、遊星に深刻な表情で話し掛ける牛尾。ガサツな彼からすれば、それは遊星に対する精一杯の気配りだっ

たのдарろう。

……だが、タイミングが悪過ぎた。

折角明るさを取り戻した遊星の表情が、また曇りだしたのだ。

「な、何だよ、皆揃って？ 俺、何かマズいこと言ったか？」

「……バカ」

途端に他の者達から白い目、ジト目、鋭い目で睨まれる牛尾。

そんな同僚に狭霧は、その無神経さと情けなさから深く溜め息を着く。

「良いんだ。それに俺が奴に勝てなかったのは事実だ。それに何時までも奴から目を反らしてもいられないからな」

だが、そんな仲間達を遊星が鎮静化させる。

そう言った遊星の表情は、とてもおだやかなものだった。

「遊星……」

「一度、色々と考えてみよう。奴の目的が何なのか、そして俺達から奪い取ったカードをどう取り返すか……。」

真剣な眼差しで考察を促進しようとする遊星。

仲間達は素直に、そして静かにコクリと頷いた……。

「先ず、奴はどういった理由で、俺達の前に現れたか……だ。」
ベッドの上で上体を起こした遊星が、最初の議題をあげる。

仲間達は真剣な表情で、色々とその疑問に対する自分なりの答えを捻り出していった。

「あいつ、目的がどうとか言ってるやがったが、確かこの時空に来たのは世界を守る強大な5つの力を奪う為だ……とか言ってたな」

「その強大な力というのは、確実に俺達シグナーの操るドラゴンカードだろう。だから奴は俺達から5枚のカードを奪った」

「ああ。それだけは間違いない。奴にとって、俺達のカードはどういう訳か都合が悪かった。これだけは紛れもない事実だ」

クロウとジャックの2人が、この議題をあつさりと解決する。

これに関しては、遊星も同じ意見だったらしく、それを聞くと、

首を縦に振った。

「でも、あの人妙なことを言っていたわ」

「うん。この時空とか、この世界とか……あいつよく解らないこと何度も何度も言ってたよなあ」

しかし、それに横槍を差した者がいた……双子の龍亞と龍可だ。

彼等は互いの顔を見合わせて、議題に関する更なる疑問をあげる。

「そうね。あの男、本当に妙な言い方をしていたわね。話し方が妙に他人事って感じて……」

アキもまた、そのことが心に突っ掛っていた。どういう意味なのか、全く見当が付かない。

誰もがうんうん唸って、彼の発した奇妙な言葉の意味を考えるが、どうにも中々良い考えは浮かばず、暫くはこうした沈黙のひと時が流れた。

「この時空、そしてこの世界か……。一体どういう意味なんだ」

「そうだ、遊星！ 今回の事件に関係があるかは解らないが、ちょっと気になることがあるんだ……」

「何だ？」

遊星がポツリと呟くと、牛尾が何かを思い出したのか、一際大きな声を上げる。

狭霧も同様に思い出したらしく、ジャックにアトラス様と声を掛ける。

遊星達は、素直に2人の話に耳を傾けた。

「実はな、セキュリティの方で新たに開発、管理していた新型デュエルロボ。その内の数体が突然になって行方をくらましちまったんだ。」

説明をしたのは牛尾だ。彼は身振り手振りで遊星達に説明を施す。

「デュエルロボというと、以前俺に化けて悪事を働いた、あの……」

「ええ。セキュリティが開発したライディンググロイド、今回消失したのは、その発展形です。」

深影がジャックの質問に頷いて答える。ジャックにはそのロボに

対し、苦い思い出があったのだ。

「成る程。確かにそれは気になるね。ロボットが勝手に消える訳ないし、誰かに奪われたと考えた方が自然だ。」

「だろう？　だが、悔しいことに何の証拠も痕跡も残ってないんだ……」

「しかも、以前の事件があったので、今回のロボにはそれぞれ居場所を掴む為に発信機としてマーキングを施してあるんですが、何故かどれもこれも全く位置を探知出来ないんです」

狭霧と牛尾の話聞き、ブルーノが首を傾げる。

ロボに取り付けられたマーキングでも探知出来なかったという話も、遊星達には気に掛かる。

特に遊星とクロウはそのマーキングというところに深い疑問を感じていた。何せ、自分達もまた、マーキングを付けられている者なのだから……。

「これもパドックスの仕業なのかしら？」

「証拠が無いから何とも言えないがな。俺はそう思ってる」

龍可の言葉に腕を組んで賛同する牛尾。

だが、その行為に何の意図が隠されているのか、そこまでは誰にも掴めなかった……。

「奪われた俺達のカード。意味の良く解んねえ言葉。消えたデュエルロボ。一体こいつ等とあいつに何の関係があるっていつんだよ！　まるで訳が解んねーぜ！！」

クロウがオレンジ色の頭髪をガリガリ掻きながら、怒りの感情を露わにして、そうぼやいた。

これまでに幾つか揚がったキーワードをどうにか結び付けようとしても、どうしてもちぐはぐな考えしかクロウの頭には浮かばなかった。

そしてそれは、他の者達にも言えることだった。誰もが深刻な顔をして、うんうん唸って考えている。

「もしかして……あいつ実は宇宙人だったとか！？」

「龍亞、こんな時にふざけないでよ」

「う、ごめん龍可」

流石にこんな時に冗談は頂けない。軽はずみな発言をする龍亞を龍可がピシヤリと叱った。

叱られた龍亞は、軽い気持ちで冗談を言ったことを反省する。

「っー!!」

だがその時、遊星がハッと顔を上げた。まるで何かに気付いた様子に……。

皆の視線が遊星に集まる。当の本人は、まだ自分の脳裏に浮かび上がった結論に混乱。戸惑いを感じずにはいられない様子。

ぶつぶつと何やら呟き、頭を左手で抱え、脂汗を掻いている。

「どうした遊星。何が解ったんだ？」

「ジャック……もし、もしもだ。」

心配そうにジャックが遊星の肩に軽く手を置いて尋ねる。

遊星は呼吸を整えると、ジャックに……いや、此処に居る者全員に向かって自分の考えを伝えた。

「もし奴が……パラドックスが……」

「時代や時空、時という時を自由自在に行き来出来る人間だったら？」

遊星の言葉が発された次の瞬間、場の空気は一瞬で凍り付いた。者達は口内に貯まった唾をこくりと飲み込み、遊星の言ったことを前提に物事を考え始めた。

「ほ、本気かよ遊星。お前マジでその話……?」

「まさか……本当にそんなことが? 時という時を行き来出来る人

間だなんて……」

クロウは啞然とした口が塞がらず、狭霧もその話をそのまま鵜呑みにすることは出来なかった。

他の仲間達も、未だに半信半疑。その顔はまだポカンとしていて、見ていると本当に間抜けに見える。

「でも、そう考えれば、確かに辻褄が合うわ。あの言葉の意味も、消えたロボも何処かへと、時空を越えて移動したとしたら……何となくだけど、全部繋がる。これまでの事も全部理解出来る……」

「だけど、時間軸を自由に行き来出来る人間なんて……」

人知を超えた人間。それこそが遊星が考え出したパラドックスという男の正体だった。

アキの言う通り、そう考えれば全ては上手く繋がってくれる。

だが、同時に龍可の言う通り、これは正直夢物語と笑われる位に信じられない話だ。

「でも遊星、どうしてそう思うんだい？ 君は何でそういう結論に辿り着いたんだい？」

ブルーノは、ふと思った疑問を率直に遊星に向かって質問。

すると遊星は、表情を変えることなく、真剣なそのままで言葉をブルーノに返した。

「それを説明するには、もう一つのキーワードを上げる必要がある。それは……デュエルモンスターズだ！」

エースモンスターの存在しないデッキを取り出しながら、遊星は言った。確かに彼は今、先程のキーワードにデュエルモンスターズを追加させた。

「デュ、デュエルモンスターズだとお！？」

「どうということなんだ遊星っ！？」

牛尾とジャックが驚きの声を上げる。

一体カードゲームと今回の件、何が結び付いているというのである。

遊星は仲間達の顔を一度見回すと、口を開けて話を再開する。

「奴は言った、デュエルモンスターズはこの世に必要無いと。そして奴が使ったカード、『宝玉獣』は過去のとある決闘者だけが持つという伝説のレアカード……」

「……」
「もし、奴が過去に向かい、その時代の決闘者から奪い取った物だったとしたら……」

遊星は淡々と説明を続けた。

仲間達は遊星の推測に驚くばかりで、何時の間にか言葉を発することを忘れてしまっている。

それだけ彼の言っていることは、驚愕の内容だったのだ。言葉も忘れてしまう程の……。

「デュエルモンスターズは過去にも未来にも必要無い。その言葉から、恐らく奴はデュエルモンスターズの歴史に関わる物全てを消滅させようとしている。もし、本当にそうなら……」

「過去に遡って、歴史に関涉し、その歴史を無かったことに……ってか」

「龍亞の言った宇宙人、それが最後のヒントだったんだね。信じられない話だけど、確かにそれなら全ての話は繋がる」

クロウ、そしてブルーノが、遊星の説明を受けて、彼の考えに同意と受け取れる言葉を口にする。

遊星はそんな彼等の言葉にコクンと頷き、他の仲間達の反応を伺った。

「でも……もしそうなら、パラドックスは既にこの時代から別の時代に移ったってことでしょ？ そんなパラドックスを一体どうやって見付けるの？」

「それに私達には、時空を超えるなんて事は不可能です。例え見付けられたとしても、我々では別の時代に居る彼に手を出すことは」

先ず、それに反応を見せたのは龍可、続いて狭霧だ。

すると、あ、と消え失せる様な声を出し、クロウや龍亞の肩が下

がる。

ブルーノやジャック、牛尾とアキも必死になって考えるものの、やはり良い考えは浮かばず終い。

彼等の間に再び訪れる沈黙。またクロウと牛尾が頭をガリガリと掻き耑り始めた。

「大丈夫だ」

だが、そんな心配を吹き飛ばす声が彼等の耳に入ってきた……遊星だ。

口元を緩ませた遊星が、自信満々の顔で彼等に声を掛けたのだ。

「俺に少し考えがある」

「ホントなの遊星!？」

それを聞いたアキが驚いた顔でベッドのシーツを掴む。

対して遊星は、彼女の顔をしっかりと見詰めながら、肯定の意味で頷いた。

彼はそのまま点滴を無理矢理腕から外し、ハンガーに掛けてあった紺色の上着を羽織る。

「過去に遡る方法は、今は置いておこう。まずは奴の居場所を探ることだ」

「でも遊星、どうやって……?」

今度は茶色の手袋を嵌め、外出の準備を整える遊星。

そして彼は、龍亞の質問に素直に、尚且つ手短に答えた……。

「まずは、トップスでも1番大きい図書館へ向かう。……話はそれからだ」

久し振りの更新、なんですが……

なんと、何時の間にか私の小説の書き方が変わってしまっていました。

説明文章や心情表現がスッパリ消え去り、正直行動を説明するだけの文章しか……。

どうしましょう。皆さま突然嫌いになったりしないでしょ
うか？

正直不安で不安でたまらない今日この頃です。

多分これからはこの書き方で続けていこうと思いますので、もし私を受け入れて下さるといいう方、これからはこの書き方で続けるト
マトをどうぞ宜しくお願致します。これは後に活動報告でも述べよ
うと思います。

トップスの中心に建立されたトップス中央図書館。此処には数多くの書物や資料が保管されており、図書館を利用する者達は、皆この図書館を利用するのが一般。

寧ろ図書館といえばトップス中央図書館。そう言われる程、この図書館を利用者の数は一際多かつた。

「遊星、一体此処で何を？ 何か調べ物？」

図書館の二階。様々な書物保管の本棚が広がる此処で、目の前に立つ遊星に尋ねるのは龍亞。

龍亞と遊星だけではない。

その他の仲間達も龍亞と同じく、この図書館を訪れ、今も遊星の眼前、龍亞の左右横に立っている。

「……これを見てくれ」

遊星は、先ず自分の一番近くにあった書物を棚から抜き取り、それを仲間達に見える様に差し出す。

決闘の歴史というタイトル。これはデュエルモンスターズに関する書物だ。

気の所為か、その時の遊星の顔が、アキにはいやに赤くなっているように見えた。

「皆、手分けしてこの図書館中のデュエルモンスターズ関連の本を調べるんだ。もし奴が本当に時空を移動して歴史に介入しているのなら、きつと何かの手掛かりがこの大量の書物の中に記載されている筈だ」

そう言つて遊星は手に取った本のページをパラパラと捲り、それが終われば、また新しい本に手を伸ばしていく。

「そうか。もしかしたら何かのニュースとかになって、新聞や本に採り上げられているかもしれない」

「そういうことか！ 流石遊星っ！ マジ冴えてるぜ！！」
するとブルーノに続き、クロウもちろりと舌を出して、近くの本に手を伸ばし始める。

続いてジャック、龍亞、龍可や牛尾達も周りの本を抜き取り、ページを捲り始めた。

「でも、こんな沢山の本。虱潰しに当たっていくのは手際が悪いわねえ、遊星。皆で色んな場所を探した方が良いんじゃないかしら？」
本を閉じた龍可が遊星に提案すると、遊星もそれに同意。頷いて彼女に返答する。

「そうだな。よし、俺はパソコンを利用して、何か資料が残っていないかを調べてみる」

「遊星、私も手伝うわ」

何時もの真剣な眼差しを少し潤ませながら、遊星が自分の搜索場所を口にする。

アキはそんな遊星に賛同することを仲間達全員に伝えた。

「いよっし、んじゃ俺はこの辺りでもう少し粘ってみるぜ！ おいブルーノ、手伝え！！」

「良いよクロウ。じゃあ僕は歴史関連の本の探ってみるよ」

ブルーノの高い左肩にクロウの手が置かれる。ブルーノは嫌がる素振り一つ見せずにそれを承諾する。

「龍可、一緒に探そうぜ！ 絶対にあいつの足取り、掴んでやろう！！」

「うん！」

移動するや否や、龍可と龍亞は小柄な体系を活かして、様々な低い位置の本に手を出していく。

右の棚を龍亞が、左の棚を龍可が、とそれぞれ担当場所を決めて本を片っ端から漁っていった。

「それじゃあ深影さん。一緒にあっちの方を探し」

「アトラス様。御一緒に探しましょう」

「よし、向こうの方にデュエルモンスターズの国外に関して書かれ

た本があつた筈だ。俺達はそこを探すとするか」

そう言うと、深影はジャックの右肩を両手でしっかりと抱きしめながら、国外の書物が保管されたゾーンへと向かっていってしまう。

牛尾はその後ろで手を伸ばしたまま化石の様に白くなって固まっていた。

「牛尾。諦めて一緒に探そうぜ？」

「……………うるせえ」

頭垂れた牛尾の方をポンポンと、哀れんだ表情をしたクロウの右手が叩く。

ガラにも合わず、今にも泣き出しそうな牛尾を見たブルーノは、顔に作り笑いを浮かべていた……………。

「遊星、先ずはどの時代から調べるの？」

「俺達に何の影響も出ていないところから、恐らく奴はかなり古い時代に飛んでいる可能性がある。取り敢えず、10年程ずつ遡って調べてみよう」

「解ったわ。じゃあ、私は10年前の出来事を中心に調べてみる」

「頼むぞアキ。俺は20年前と30年前を色々と当たってみる」

並んだパソコンをそれぞれ操作して当時の出来事を色々調べていく遊星とアキ。

快調にカタカタと音を出すキーボードの音が、静かな図書館の中に響いた。

「アトラス様。そちらの方は如何でしょう？」

「……………いや、こっちは、それらしい情報は無い」

深影に背を向けて創作に没頭するジャック。その凄い集中力に深影の心がキユンと揺り動く。

「そうですか。アトラス様、私は向こうの方も当たってみます。後で合流しましょう」

「……………ああ」

深影はそんな彼の真剣な姿勢を邪魔しない為にも、とその場から

離れる。

「フランス関連の書物は何処かしら……と、指で本の背表紙をなぞりながら、彼女はほとんどジャックから遠ざかっていった。

「……俺に英語は読めん」

絵柄だけを眺めるジャックの声は、深影に届きはしなかった……。「おお！ こいつは2009年版のデュエルマガジン12月号じゃねーか！！ すっげー、流石はトップス中央図書館。こんな古い本まで保管されてるんだなあ！ こんな事ならもつと前から此処に来るんだっただぜ！」

一方、クロウは自分の眼に止まった一冊の本を手に取り、小さく歓喜していた。

薄い週刊雑誌。タイトルには『DUEL MAGAZINE T
URN12』と書かれている。その表紙には、新作のストラクチャーデッキが描かれていた。

「そうか、この頃に『マシナーズ・フォートレス』が登場したのか。この頃からだよなあ、機械族がエラく強化され始めたのって……」

目的を忘れ、パラパラと興味に突き動かされながらページを捲るクロウ。

新作パック等のカード情報から、当時流行していたデッキのレシピ。捲られ続けたページは、臆て決闘者紹介のページをクロウに見せた。

「超有名な歴代の決闘者名鑑か……おお、伝説の初代決闘王『武藤遊戯』！！ 『ブラックマジシャン』のイラストも載ってやがらあ……」

クロウは開いたページをまじまじと眺めながら、此処が図書館だという事も忘れて声を上げる。

「それにその武藤遊戯の最大のライバルと言われた、伝説の『青眼の白龍』の所有者、『海馬瀬人』も……ん？ 炎の凡骨決闘者『城之内克也』？ 何で凡骨なんて呼ばれてる決闘者が武藤遊戯

・ホワイター・ドラゴン

ブルーアイズ

や海馬瀬人と同じページで、こんなにデカデカと載ってるんだ？
あ、でも確かにこいつの所有カードに伝説の『真紅眼の黒竜』が

レッドアイズ・ブラックドラゴン

」

「クロウ！」

「どわっ！！？」

背後からブルーノがクロウの肩を強く叩いた。

更にその横には、腰に両手を当てて、しかめっ面で立つ牛尾も。

よく見れば、ブルーノも眉を逆への字にしてクロウを睨んでいる。

「クロウ、真面目にやろうよ。僕達の世界全体の危機なんだ。今の

僕達には、一分一秒でさえ惜しい時間の筈だよ？」

「わ、悪かったよ。真面目にやるって……だから、な？」

「ったく……これだから決闘バカは」

2人にペコペコと謝りながら、元の棚に雑誌を戻すクロウ。

正直もう少し読みたかったという感情を我慢して、クロウ達はま

たパラドックスに繋がる情報を求めて、本棚に手を伸ばし始めた……

…。

「……にしし」

だが、そのクロウの戻したデュエルマガジンに再び手を付ける者がいた。

「すっげ〜、本当に昔のデュエルマガジンだ。今のデュエルマガジンと全然違うやー!!」

龍亞だ。

龍亞が小さな手で、自分の顔程の大きさがある雑誌をその場で開き、こっそりと眺め始める。

開いたページには、当時のプロ決闘者。プロリーグで活躍していた決闘者達が、写真付きで掲載されていた……。

「兄の遺志とデッキを継いで、プロ上位に上り詰めた二代目カイザー、『カイザー翔』。それに『おジャマ』や『アームド・ドラゴン』

、沢山のカードを駆使して戦う『万丈目サンダー』。皆カッコいいなあ〜」

『エド・フェニックス』という人物が描かれたページを開いたところで、龍亞の手がピタリと止まる。

「俺も何時か、こんな有名なプロ決闘者に……」

ウツトリとした恍惚の表情で、明後日の方を眺める龍亞。

自分の将来像を思い浮かべながら、彼はまたページを捲ろうと、それに手を掛ける。

「こゝらあつ、龍亞……!」

「ひいつ!? る、龍可!?」

しかし、それも長続きはしなかった。

龍亞の背後で、般若の如く怒りの感情を顔に隠さずに浮かべた龍可が、手を組んで立っていたのだ。

少女は龍亞の言い訳を一言とて聞かずに彼の耳をグツと掴んで、手元へ引つ張った。

「い!? 痛いって龍可!? 俺が悪かったって! もう、さぼったりしないから手を離してえ〜っ!」

「……このバカ龍亞」

耳を引つ張られながら、龍亞は持っていた雑誌をその場に落とす。そのまま2人は、未見の本棚の方に向かってしまふ……。

偶然か運命か、龍亞が落とした雑誌は、知らず知らずの内にまた新しいページを開いていた。

天性のHEROヒーロー使い 『遊城十代』という、写真も貼らていない、小さなページで。

(ふう。ちょっと目が疲れてきたわね)

約1時間近くの間、ずっとパソコンの画面を直視し続けていたアキが、眉間の辺りを指で揉み解す。

(どうにも目ぼしい情報は無かったわね。そういえば、遊星の方はどうなったかしら?)

背筋を伸ばし、自分の隣で同じように調べている遊星のことを思い出すアキ。

「ねえ遊星。そっちはどう」

休憩を兼ね、尚且つ遊星と会話することを期待し、アキは隣の遊星に声を掛ける。

「ゆ、遊星っ!?!」

「……………」

アキは驚愕した。

隣で同じ様に過去の出来事を調べていた遊星が、なんと呼吸を荒げて突っ伏していたのだ。

遊星がその手で握っていた筈のマウスも、何時の間にかテーブルから離れて、振り子の様に音も無くブラブラと揺れている。

「遊星っ!?!? 大丈夫っ!?!?!」

ガタンと大きな音を立て、慌てて遊星に駆け寄り、彼の肩を揺り動かすアキ。

だが遊星からの応答は無く、彼は赤い顔をして、苦しそうに呼吸を続けるだけ…………。

アキはもしかやと思い、彼の額に手を当てる…………予想以上に熱かった。

「遊星! 貴方、凄い熱じゃない!?!」

遊星の額から感じ取った高熱にアキは思わず声を上げる。

アキなりの感覚だが、遊星は約39度近くの高熱を出していた。

「兎に角、急いで横にさせなくちゃ!?! 確か、向こうにソファアキがあっただわね…………」

アキは、女性ながら男性である遊星の肩を担ぎ、彼の身体をソファアキの方に持つていく。

(重い…………それに熱くて汗ばんでる。よっぽど辛いよね。遊星、貴方はこんなになるまで無理をしていたの?)

伝わった熱で熱くなる身体。アキは力無く自分に凭れ掛る遊星を歯を食い縛りながらソファアキまで運んだ。

ソファアキに横たわる遊星は、熱で顔を赤くして、荒い呼吸を精一杯整えている。

(遊星の分も私がやるしかないわ)

辛そうにしている遊星を見た、アキの表情が険しくなる。

アキは彼の額に水で湿らせた自分のハンカチを置くと、そのまま自分の使用していたパソコンの方では無く、遊星の使っていたパソコンの方へと、足を進めた。

「……ア、アキ」

「遊星？ 気が付いたの!？」

「あ、ああ……俺はどうしたんだ？」

その時、横たわっていた遊星が声を上げた。

そのまま彼は、頭にハンカチを乗せたまま、上体を起き上がらせる……。

「駄目よ遊星！ まだ寝てなくちゃ。貴方、凄い熱なのよ？」

「大丈夫だ……くっ！」

上体を起こし、立ち上がろうとする遊星だが、右手で頭を抱えて、直ぐにまた座り込んでしまった。

固く眼を瞑り、その顔からは脂汗を流している。

「無理をしないで遊星。後は私が調べておくから、貴方は此処で休んでいて？」

「うっ……うあ」

遊星の両肩を優しく手で押さえ、アキは再び彼を横にさせ、冷たいハンカチを額に乗せる。

熱で微妙に潤んだ遊星の瞳。それはアキに申し訳ないという自分の気持ち告げていた。

「すまないアキ。お前も疲れているだろうに……」

「良いのよ。貴方には色々世話になっているし……それに言ったでしょ？ 何でもかんでも背負い込まないでって。私だって貴方の力になりたいんだから」

「……へ？」

横になった遊星は、キョトンとしながら目をぱちぱちと瞬く。その口も間抜けにも微妙に開いている。

そんな遊星にアキは顔を真っ赤にして背を向けた。

(私だったら、何を言ってるの!?)

そのままアキは予定通り、遊星の使用していたパソコンへ近寄っていく。

彼に自分の顔を見られないよう注意を払って。

「アキ、ちよつと待ってくれ……」

だが、そんなアキを遊星力の入らない手を伸ばして呼び止める。

「な、何?」

真っ赤な顔のまま、声を掛けられたアキは、遊星の方を振り向く。見ると、横になり、浮かせた右腕をプルプルと震わせた遊星が、何かを伝えようと頑張っていた。

「ブルーノに……奴の手掛かりが……見付かったら……ブルーノに……伝えてくれ……」

息絶え絶えの遊星。その荒い呼吸を続ける口から、彼はなんとか言葉を絞り出す。

だが、もはや体力の限界なのか、僅かに開かれた彼の目は、今や焦点が合っていない。

「何を……? 何を伝えたらいいの?」

「モ、モーメ……クスブ……」

そこまで言った次の瞬間、遊星の右腕がパタリと落ちた。

驚いたアキが遊星の様子を伺うと、彼は何時の間にもやら、落ち着いた呼吸で眠りこけていた。

「……眠っちゃったのね」

静かに眠りに就く遊星の顔を見て、思わず溜め息を着くアキ。

そのまま遊星の分まで過去の出来事を調べようと、彼のパソコンの許へ歩み寄る。

「さてと。休憩にはならなかったけど、色々と良い物も見れたし、

私も頑張ろつと……」

そう言うとアキは遊星の握っていたマウスをしっかりと握り、彼が触れていたキーボードに手を置く。

カタカタと音を立てながら、アキは小さな笑顔を浮かべて、彼の開いていたページを開いた……。

「あつた！ 皆、見付けたよ。パラドックスの手掛かりを！！」
約20分後、唐突にこの階中にブルーノの明るい声が響いた。

それを聞き付けた仲間達は、直ぐに彼の許へ集合する。

「見付かったのかブルーノ！！ 奴の手掛かりが！？」

「うん！」

ジャツクという言葉に頷くブルーノ。その時のブルーノの表情には、自信の笑みが浮かんでいた。

そのまま彼は、素早く持っていた新聞を台の上にバツと広げる……。

「あれ？ そういや遊星の姿が見当たんねーけど」

そんな中、クロウが姿を見せない遊星に疑問を感じ、首を左右に振りながらそれを声に出す。

龍亞や龍可達も、そういえば、とあちこちに視線を移していくが、結局遊星は何処にも見付からない。

「おい十六夜、お前遊星と一緒に調べてたんだろ？ あいつはどうしたんだ？」

「あの……遊星はねー」

眉をへの字にし、牛尾達に対して申し訳なさげに口を開くアキ。

一斉に仲間達の視線が、ブルーノの新聞からアキの顔に向けられる。

アキは話した。遊星が高熱を出して倒れたこと。今は安静にして眠っていること。

仲間達は信じられないといった顔をするが、アキのその辛そうな顔を見ると、信じざるを得なかった。

「遊星……俺達に隠れて無理してたんだね」

「あの馬鹿っ！ 何時だって何でもかんでも自分独りで背負い込みやがって……何でもっと俺達を頼ってくれねーんだ！！？」

龍亞の落ち込んだ声。クロウの悲痛な声が、彼の拳が台を叩き付けると同時に仲間達の心にずしりとのしかかる。

普段はどんな機械でも修理する器用な遊星。そんな彼の不器用な部分、今の彼等にはとても辛かった。

「ブルーノ、話を続ける」

「あ、うん」

そんな時、唯一真剣な顔をしたジャックが、ブルーノに話を続けるよう促した。

だが、そう言う彼の拳は微妙に震えており、彼もまたクロウと同じく、やり切れない思いを抱えていることが解る。

ブルーノは、そんなジャックの思いを悟ってか、仲間達に自分の発見したパラボックスの足取りを説明を再開した。

「先ず、この新聞のこの記事を見て！」

ブルーノは、そう言っただけで新聞の記事、特に写真の部分を指で差す。仲間達は、微妙に指で覆い隠されてしまったその部分を覗き込むようにして眺めた。

「こりゃあ、かなり前の記事だな。20年以上も前の新聞だ」

「プロリーグ中、突如乱入した謎の決闘者。その決闘者とプロ決闘者の1人が決闘し、プロ決闘者の敗北と同時に会場が謎の爆発で崩壊。……酷いわ、見に来ていた観客やプロ決闘者を含めて、大勢の人がこの事故で亡くなってるわ」

当時の記事に思ったことを率直に口にする牛尾。深影はその内容に悲しそくに声を上げる。

新聞には1枚のモノクロ写真が張り付けられていた。崩壊し、面影が全く無くなってしまった、当時のプロリーグ会場として利用されていた海馬ドームの写真。

被害総数は300人以上。その驚愕と悲痛の出来事に龍可は口元を両手で覆う。

「確かにそれも悲劇的だけど、僕が一番見て欲しいのは此処なんだ」「ん？」

そう言つと、ブルーノは今度は別の写真を指差した。

どうやら、偶然見付かつた観客の遺留品のカメラに納まつていた、写真の1枚のようだ。観客が決闘を撮影するのに使つていたのだらう。追記としてその持ち主は、死亡していると記載されてある。

「なにになに？ 会場を襲つた謎の決闘者……つてオイツ！？ こいつは」

「あああああゝつ！！！！」

写真の説明文を読んでいたクロウが、その内容の驚きに声を上げる。

思わず新聞を仲間のことも考えず、持ち上げてしまつた位だ。

龍亞もクロウの持つていた新聞記事を僅かな隙間から覗き込み、同じ様に口を大きく開けて驚いている。

「この写真に写つてる謎の決闘者つて、デュエルロボじゃん！！？」
「何いつ！！！！？」

そう、指差されていた写真。それは当時その会場を襲つた決闘者の姿が写されてたのだ。

偶然に写つた為か、少々ブレてしまつてはいるが、龍亞の言葉通り、それはデュエルロボに間違い無かつた。

牛尾も慌てて自分の眼でそれを確認するが、やはりそれはデュエルロボ。自分達が取り扱う予定だつた物と全く同じ姿のそれが、最悪の事件を引き起こした犯人として取り上げられていたのだ。

「ということは、この事件はパラドックスが引き起こしたということか」

「つまりこの時代の事件が起きる前に此処へ向かえば、奴をフン捕まえることが出来るつてわけだな！」

パラドックスが時空移動が可能な人間だという事が発覚したと解つた刹那、クロウが拳を強く握つて声と身体を震わせる。

「でも、結局それはパラドックスがこの時代に関涉したつて事が解つただけでしょ？」

「そう。結局僕が見付けだしたのは、あいつがこの時代に向かつた

ということだけ。これを防ぐ方法はまだ見付かっていないんだ」

龍可の声に反応したブルーノの表情が曇る。

しまったと龍可が口を覆った時には、また仲間達の表情が曇り切っ
ってしまっていた。

「 そうだわ、ブルーノ」

「 ん？ どうかしたの？」

そんな時、アキが思い出した、とブルーノに声を掛けた。

「 さつき、遊星に言伝を頼まれていたの。もし、パラドックスの足
取りを掴めたら、ブルーノに伝えてくれて」

「 遊星が？ 一体何をだい？」

ブルーノの顔が遊星の言伝という言葉聞き、ほんの僅かに明る
くなる。

期待をしているということはアキも直ぐに理解出来たが、対して
自分の表情は少し暗くなる。

完全に聴き取ることが出来なかったのだから。

「 それがはっきり聴き取れなくて、それにその後直ぐ遊星も寝込ん
じゃったし」

「 と、兎に角、遊星は何て言ったの？」

頬に冷や汗を垂らしながら、ブルーノは再度アキに尋ねる。

アキは口元に人差し指を当てながら、一生懸命遊星の言葉を思い
出す。

「 えっと……モ、モーメン……クスプって」

「 ……何それ？」

顔を赤くするアキ。正直、彼女はとても恥ずかしかった。

クロウもジャックも深影も龍可も、誰もかれもが頭の上に「？」
を浮かべている……。

「 モーメン……クスプ……」

唯一、ブルーノを除いて。

そして次の瞬間、彼は一気に解き放たれた。

「　　そうか、モーメントエクスプレス社だ!!!」

「流石だよ遊星！　これなら、本当に時空を超えることが出来るかもしれない!!」

明るく、1人で盛り上がるブルーノ。その表情は、まるで水を得た魚の様に生き活きとしている。

アキを含めた他の者達はまだよく解っていない。

だがそんな彼等のことも気にせず、ブルーノは興奮を抑えずに言葉が続けていく。

「ジャック、遊星を病院に運んで！　クロウ、急いでサテライトに戻るよ！　他の皆も手伝って!!」

「お、おいおいブルーノ、落ち付けて！　何をそんなに興奮してるんだよ。俺達にも解るように話させて」

「落ち着いてなんかいられないよ!!」

今や、クロウの声も燃える様に興奮したブルーノには届かない。

だが、呆気にとられ続けている訳にもいかず、仕方なく彼等も行動に移り始めた。

まずはブルーノが先頭を走り、続いて遊星を背に担いだジャック。そしてアキや牛尾達。最後にクロウも表情を歪ませたまま、移動を始める……。

(遊星、君は本当に凄いよ。ここまでの事を考えられるなんて……)

「　　僕達は、時を超える!!」

TURN・09 活路への希望（後書き）

今日の最強カード

フルフェイス・ホワイト・ドラゴン
【青眼の白龍 星8 / 光属性 / ドラゴン族 / ATK 3000 / DEF 2500】

今回は名前しか出ては来ていないが、今回登場したカード名の中で、最も攻撃力が高かったので、今回はこれを最強カードとして紹介します。

遊戯王カードの中でも、特に名を知られているのがこのカード。リリースが存在しなかった初期ルールの時には、恐ろしい程に猛威を振るっていた。もはやこのカードを先に召喚した方が勝利と言われた程。

そこまでこのカードは対処するのが困難だったのだ。当時攻撃力で上回っていたのは、融合モンスターの『ブラック・デーモンズ・ドラゴン』。後は『落とし穴』等の除去系カードで倒していくしかなかった。現在は流石に召喚に掛かる手間などからその勢いは衰えているが、現在でもサポートカードの豊富さから、その猛威を振るい続けている。中でも『伝説の白石』ホワイト・オブ・レジェンドや『トレード・イン』、『レツドアイズ・ダークネス・メタル・ドラゴン』を組み合わせられた青眼デッキは、決まれば手が付けられない。

そして現在、この攻撃力を上回る通常モンスターは存在していない。次点は攻撃力2950の『ゴギガ・ガガギゴ』である。

そして通称、社長の嫁。その理由はアニメや漫画、と色々ある。アニメに於いては世界に4枚しか存在しない超レアカードとして登場。海馬瀬人の忠実なるしもべであるで紹介されているが、その入手方は110に通報モノ。現に原作では不幸な持ち主が1人、その人生の幕を下ろされている。（カード1枚で人生終わるってどう

よ……)

更に海馬くん。なんと自分の脅威になるからという理由で、4枚目をビリビリに破いている。同じ様に被害にあったカードとして、『ダイヤモンド・ドラゴン』がある。皆は、例え青眼の白龍を37枚持っていたとしても、絶対に破かなように。

前述の社長の嫁ということについては、神をリリースして呼び出す程の愛着を持っている。古代編でこのモンスターがキサラという女性が扱っていたという事実から、それは更にヒートアップ。ますます嫁と呼ばれるようになってしまふ。

そもそも海馬のデッキには女性モンスターが少なく、現在私の記憶でも『逆転の女神』のみしか確認できていない。それ故なのか、このモンスターが擬人化する場合は大抵白い長髪の青い眼をした大人の女性として描かれる事が多い。そしてネット小説ではよく海馬とカップリングを組んでいる……正に嫁。

一時期、私の地域で『嫁ドロー』なる遊びが流行った事がある。「これが俺の嫁ーっ！」と言ってカードをドローするのだが、十中八九海馬ならこれをドローするのだろう。因みに当時の私は『コマンド・ナイト』だった。中には『ゾンビ・キャリア』や『ダーク・ネクロファイア』を引いた、リアクションに困る者もいた……。

因みに海馬はこの青眼を3枚フルで投入しており、その他『エメラルド・ドラゴン』や『カイザー・グライダー』、『XYZマゲネツトモンスター』、更には儀式や融合とかなりバランスが悪い仕様となっている。

……それでも、遊戯よりは幾分マシだが。

TURN - 10 奇跡の方舟（前書き）

という訳で久々の更新です。何だか何時の間にか遊戯王が5D・sから6D・sに変わっていました。今更な気がするんだよなあコナミくん？

さて、今回は少しだけ決闘アリ。当然戦うのはあの人。因みにこの話は遊星が倒れてから数日後という設定です。一応小説内に書き記してはありますが……。

取り敢えず、早く遊戯や十代達の活躍を書きたいと思いつつ、私は今日も遊星を書く。書いていきます。兎に角書き続ける。

……先ず目標は、全てのシンクロウォリアーを呼び出すぞ！！！！

図書館にて、パラドックスの行方を発見して早数日。

遊星が高熱で倒れ、固いベッドに横たわっている間、ブルーノを中心としたチーム5D'sは結束してある作業に取り掛かっていた。

時空を超える為に。

ネオ童実野シティ。その安寧と世界の発展を願う最高行政機関、それが治安維持局。その本拠地にて、遊星を除くチーム5D'sの面々と、一部のセキュリティに属する人間達による、とある目的からの共同作業が行われていた。

「お前等！ この世界の命運が懸ってんだ。気合い入れて取り掛かれよ！」

物置き倉庫の様な巨大な部屋。その中心には巨大な楕円形の物体が設置され、多くのセキュリティ隊員達が、その中へ様々な機材が運んでいる。

建造物の付近では、上司である牛尾が数枚の紙を持って、各隊員に指示を出していた。

「ブルーノ、外壁の方はこれで殆ど完成だ。後は中の方を整えるだけだぜ！」

「お疲れクロウ。僕の方も、後もう少しで終わるよ」

段ボールを両手に抱えたクロウが、机の前でキーボードを操作しているブルーノに声を掛ける。少々の言葉をクロウと交わすと、彼は再び画面の方を向き直った。

「ったくよお。シップの中の調整なんてどうでも良いから、さっさと出発させて欲しいぜ」

「そうはいかないんじゃないかな？ 例え君が良くても、他の人が嫌がると思うよ？」

「……そうだな、ジャックとか愚痴りそうだな。珈琲が不味いとかどうか。あいつ、さつき深影さんから貰ったブルーアイズマウンテンをシップに積めるだけ積んでたみたいだし」
クロウの脳裏に優雅に珈琲を啜る元キング、現在金食い虫と化したジャックの姿が映る。

思い出すだけで頭が痛くなりそうになるその像を彼は頭を掻き毟ることで打ち消した。

「んで？ 時空移動プログラムの作成は上手くいったんのか？」

「うん、後もう少し。後はこれをディスクの方に転写すれば……」

沢山のケーブルが複雑に絡み合い、それ等が全てブルーノの操作する1台のパソコンへと直結されている。その画面にも同等の複雑な構図や円グラフが映し出されていた。

「龍亞、そのディスクを取って貰えるかい？」

「うん、これだよな」

龍亞は山積みになっていたデータディスクの山から目的の1枚を抜き取ると、それをブルーノに向けて伸ばす。持っていたディスクを受け取ると、ブルーノはそれをセットし、少年にお礼を一言。

その僅かな間に保存されていたデータがシステムに読み込まれ、パソコン画面上にバツと表示される。

「よし、後はモーメントエクスプレス社でダウンロードしたデータをプログラミングするだけだ」

再びキーボードに手を伸ばしたブルーノは、まるで自分の手足の様にキーを1つずつ操作し始めた。

同時に画面はまた複雑なデータを表示し、それを眺めていたブルーノ以外の者達の表情を曇らせる……。

彼等が苦笑いを浮かべ、その場を離れたのは、その直ぐ後の話だった。

「それにしても本当に凄いわね」

「あ、深影さん」

そこへ、クロウ達と入れ替わる形で、狭霧がブルーノの許を訪れ

た。声に反応し、ブルーノの首がもう一度上へ向き直る。

「以前、イリアステルの情報を手に入れる為に潜入したモーメント
エクспレス社で、偶然手に入れたワームホール原理データを利用して
時空を超えようなんて……」

「それもこれも遊星のお陰ですよ」

狭霧の感嘆含まれた声にブルーノが静かに笑みを浮かべる。その
まま、彼は画面を見ることなく、キーボードを叩き始めた。

パソコンに表示された様々なデータが、別の新しいディスクへと
次々に移されていく……。

「僕達がワームホールに巻き込まれたあの時、遊星が僕にこのデー
タも取っておくよう指示していたんです。まさかこんな形で役に立
つなんて……」

キーボードを操作していたブルーノの手が、次の瞬間ふいと止ま
る。同時に先程龍亞から受け取り、セットしてあったディスクが排
出される。

きらきらと表面を輝かせたデータディスク。ブルーノはそれを大
切にケースへと仕舞い込むと、再び狭霧の方を向いて、子供の様に
微笑んだ。

「後は移動する時代や、その座標軸を入力してシステムを起動させ
れば、理論上このタイムシップは時空を越えてタイムスリップする
ことが出来ます」

セキュリティ隊員やジャック達によって、徐々に整えられていく
タイムシップを見上げながら、ブルーノが狭霧に語る。その表情に
は、まるでプラモデルでも組み立てているかのような、現状を地味
に楽しんでいるといった笑みが浮かんでいる。

この時、狭霧は心から彼の存在を頼もしいと感じた。

「どうですか？ タイムシップの建造は捗っていますか？」

「イエーガー長官！」

そこへ、1人の小柄な男が甲高い奇妙な声で話し掛けてきた。そ
の奇妙な姿は、まるで道化師の様。

だが、そんな男に対し、狭霧は尊重する態度で敬礼を行う。

ブルーノも軽く頭を下げると、イエーガー長官と呼ばれた男も頷く程度に頭を下げた。

「フム、これが世界を救う希望のタイムシップですか。私もあの写真を見るまで半信半疑でしたが……」

自分よりも遥かに大きなタイムシップを見詰め、また甲高い声を上げるイエーガー。その小柄な体系ながらも、彼は治安維持局全体を統べる治安維持局長官として、精一杯の働きをしていた。

そもそもセキュリティ隊員を動かし、こうしてタイムシップを建造させるよう彼等に指示したのも、狭霧や牛尾に話を聞いたイエーガー本人だ。

「ですが、折角こうしてタイムシップを建造させたのです。絶対にそのパラドックスという謎の男の計画を止めて下さい！」

「勿論！」

イエーガーの声に力強く握られた拳と言葉を返すブルーノ。

「フン、当然だ!!」

更に続けて、彼等の背後より別の声が聞こえてきた……ジャックだ。

クロウや龍亞、龍可を連れだしたジャックが、腕を組んでブルーノの言葉に賛同していたのだ。

「あんな奴、俺のこの手で完膚なきまでに打ちのめしてくれ!!」

「ああ! 絶対にこの鉄砲玉のクロウ様が遊星の借りを返してやるぜ!!」

クロウもジャックの隣で拳を打ち付けている。2人の目付きは猛獣の様にギラギラと鋭く、声にも明らかに怒気が含まれていた。龍亞と龍可も、子供ながらに真剣な眼差しをしている。

大切な中間を傷付けられたからか、大切なカードを奪われたからか、今此処に弱音を吐く物は誰一人居なかった……。

彼等の頼もしい姿を見て、イエーガーがコクコクと頷く。

「皆……」

「おや?」

「おお、アキじゃねーか!」

そこへ、自動ドアを潜り、浮かない顔をしたアキがやって来た。彼女は先程まで、ずっと病室で遊星の看病を付きっきりで行っていたのだ。

「アキさん、遊星の様子は?」

「それが、まだ目を覚まさないの。今もベッドの上で眠り続けているわ。先生も、何時目を覚ますか解らないって……」

龍可にはアキが浮かない表情をしている訳が直ぐに解った。だからこそ龍可は彼女に尋ねる。

するとアキは、今にも泣きそうな声で答えた。その答えも龍可の予測した通りの答えであった。

「何で!?! どうして遊星は目を覚まさないのさ?!? 何でだよアキねーちゃん!?! アキねーちゃん遊星とずっと一緒に居たんだろ!?!?」

龍可が目を見開いて大声を上げる。ジャックが止めていなければ、龍可はアキに掴み掛っていただろう。

「落ち着いてよ龍可! アキさんにだって、そんなこと解る訳ないでしょ!?!」

「そうだけ龍可。遊星があんなつまつた事に関しては、誰にも責任は無い。……もしあるとすればあいつだけだ」

ワナワナと震えるクロウの握り拳を見て、龍可は自らの態度を反省。同時にアキに小さな声でごめんと謝罪する。

「だがどうする? 遊星の意識が回復するのを待つのか?」

「いえ、それでは手遅れとなってしまふ恐れがあります。貴方には準備が整い次第、直ぐに出発して貰い、一刻も早くパラドックスの野望を阻止して貰います」

ジャックの言葉をイエーガーがぴしゃりと否定する。

その厳しい一言を前に5D・sの面々の表情にムツとした曇りが生じた。

「じゃあ、どうすんだよ！ 遊星を置いていくつてのわか！？」

「だが、あいつ自身納得しないだろうな」

「うん、遊星は絶対に這い蹲つてでも一緒に行こうとするよ、きつと」

「それにあんな状態の遊星を1人置いていくなんて事、私には出来ないわ！」

「でも、この戦いには私達シグナーは絶対に必要だし……」

クロウ、ジャック、ブルーノ、アキ、龍可の順にそれぞれが遊星を置いていくかどうかについて口を開く。同時に龍可のシグナーという言葉に……誰も置いていくとは言わなかったが。

（遊星お願い、早く目覚めて……）

口を閉ざしていたイエーガー達も、最後まで遊星を置いて旅立とは言おうとはせず、その判断は彼等に委ねている。

そしてその次の瞬間、事件は起きた。

「な、何事ですか！！？」

「こ、これは非常用サイレン！？」

突然、この治安維持局本部一帯の転倒ランプが赤く光で部屋一杯に染め上げ、更に耳を突き刺すようにサイレンの騒音が建物全体に鳴り響いた。

「大変です！！ この治安維持局本部に何者かが侵入！！ 全ての防護システムを潜り抜けて、現在この部屋に向かって進行中です！！」

「何だとお！？ まさか俺達のシップを狙って……」

「落ち付きなさい！ 全員、今直ぐに侵入者を捕えることに全力を尽くすのです！！」

セキュリティ隊員達がイエーガーの指示に従い、次々に部屋を飛び出して侵入者を取り押さえようと向かっていく。まだ部屋は真っ赤に染まったままだ。

「深影さん、急いで監視カメラの映像を此方のモニターに回しなさい」

い！一刻も早く侵入者が何者かを突き止めるのです！」

「了解！」

狭霧が事態の現状を探ろうと、近くのキーボードを操作する。直ぐに状況が近くのワイドモニターに映し出され、その中では先程駆け出していった数十人のセキュリティ隊員達がゴロゴロと薙ぎ倒されていた。

「な、何ということでしょう！！？ 優秀なセキュリティ達が此処まで……」

「侵入者は今も此処を目指して進行中！ この部屋まで後残り数十m……」

モニターに建物の全体図が、現在深影やイエーガー達が居るこの部屋を中心に映し出される。

同時に聞こえてくる重い足音。それは間違いなく、この部屋に近づいてきていた。

誰もがその音を前に黙り込み、全ての視線がこの部屋唯一の出入り口へ一斉に向けられる。

……そして開いた。外側から来る者に反応して、自動ドアが静かに左右へ開く。

「標的ヲ見付ケタ。我々ノ計画ノ障害トナルモノハ、徹底的ニ排除アルノミ！」

エコーの掛かった、まるで変声機でも用いたかのような声。誰もが心地悪く感じる。

そこに居たのは人を象った何かだった。見た目は確かに人その物だったのだが、誰もが眼前の者は人ではないと感じた。……そもそも彼の身体は肉肌の色をしてなかったのだ。

「あれは……私達の方で開発されていたデュエルロボ！？」

最初に反応を見せたのは狭霧だった。彼女は、今眼前に仁王立ちする敵と思われる彼と、強奪されたデュエルロボの姿が非常に酷似していることに気付いたのだ。

「た、確かにあれは我々治安維持局がセキュリティを中心に開発を

進めていたデュエルロボです。……でも一体何であんな暴動を!？」
「そんなこと知るかよっ!! だが、あいつの目的は間違いなく俺達のタイムシップだ!!」

クロウの言葉を肯定するかのようにタイムシップに足を運んでいくデュエルロボ。

すると、どういう構造なのか、シップへ向けられたデュエルロボの掌底から、銃口のような物が出現。それが何を意味するか、理解すると同時にジャックが単身前へと飛び出す。

「貴様!! 一体何の真似だ!? 俺達のタイムシップに手出しはさせんぞ!!!」

「そういう事だ!! こいつは俺達の未来の希望なんだ。てめえなんかつぶ壊されてたまるか!!!」

後に続いて、クロウが出向く。その後ろにはアキや牛尾もシップを守るうとデュエルロボの進路をその身体で塞いでいる。

流石にこう4人に道を塞がれては思うように進めないのか、デュエルロボの足が止まった。

「今です深影さん! アレが我々のデュエルロボなら、強制的にシステムダウンさせて機能を停止させることが可能な筈です!」

「りよ、了解!!!」

一瞬の隙を点いて、イエーガーが深影に指示を出す。

慌ててパソコンに手を伸ばし、狭霧は指示通りにデュエルロボの動きを停止させようと、素早くキーボードを操作して、起動中の全デュエルロボのシステムをダウンさせようと試みる。

「駄目です!! 何者かにプログラムロックされていて、デュエルロボにアクセスすることが出来ません!!!」

「そ、そんなあっ!?!」

「それじゃあ、あのデュエルロボはどうやっても止まらないって事!!!?」

だが、それは出来なかった。どういう訳か、デュエルロボの全てを司るプログラムにアクセスを掛けようとすると、パソコンが

拒否反応でも起こしているかのように『ERROR』という文字が画面に表示されてしまうのだ。

何度アクセスを試みても、全く繋がる気配は無い。赤い文字で『ERROR』と表示されるだけ……。

龍亞と龍可が絶望的な声を上げて事態を嘆くが、落ち込んでいる暇は彼等には無かった。

デュエルロボが、驚いていた手を少々下へとずらしたのだ。

「ま、まさか……!!?」

「なっ!? マジかよこいつ!!?」

「障害八全テ排除スル。貴様等トテ例外デハナイ!」

デュエルロボが銃口をシップから、アキや牛尾達4人に変更したのだ。一瞬の恐怖が、ゾクリとした怖気となつて4人の背筋を走る。

「俺達諸共シップを撃つ気かよ!? 冗談になんねーぞ!!!?」

「お、おのれえええっ!!!」

ジャック達の足は微動だに動かない。正に彼等の心理は板挟み状態だった。

「や、止めるおおおおっ!!!」

「止めてえええええっ!!!」

龍亞と龍可が恐怖を無理矢理押し殺して、何とか止めさせようと叫んでいる。その目からは涙、瞼は殺される覚悟の上か、ぴっちり閉じられていた。

横では狭霧とブルーノがアクセスを繰り返したり、ロックプログラムの解除を試みたりと、必死にキーボードを操作しているが、いずれもこの窮地を脱するまでには至らない。

そして次の瞬間には、無情にもデュエルロボは銃の引き金を引こうと、腕に力を込める。

「止めるおっ!!!」

誰か上げた叫び声の直後、ズギンという通常の拳銃では有り得

ない銃声。マグナム弾でも撃ったかのような音が、この倉庫部屋一帯に響き渡った。

だが、誰一人銃弾に倒れた者は居ない。居たのは、体勢を崩して倒れ込んでいるデュエルロボ。

「皆、怪我は無いか？」

「ゆ、遊星！？ 遊星じゃねーかよー！！」

そして肩で呼吸をする紺色の上着を羽織った青年、不動遊星。クロウの声を引き金に、彼の姿を視認した仲間達は、一斉に彼に駆け寄った。

「皆、心配を掛けたな」

「うっん。遊星が起きて何よりだよ！」

「龍亞の言う通りよ。私達はずっと貴方が起きるのを待ってたんだから」

龍亞、アキの言葉に険しい表情だった遊星の顔が、まるで雪解けの様に綻ぶ。彼の背後では、同様にクロウやジャック、龍可達も皆嬉しそうに頬を指で照れ臭そうに掻いたり、目頭を拭っている。

だが、遊星の緩んだ顔は直ぐにまた元の真剣なそれへと移り変わり、立ち上がるうとするデュエルロボへ、バツと向けられた。

「遊星……」

「大丈夫だ」

心配そうに声を掛けるアキに優しく返事をする、彼はデュエルロボへと向かって、簡潔に言葉を発した。

「おい、決闘しろよ！」

遊星の口から飛び出す、デュエルロボへの挑戦状を意味する言葉。辺りの者達の表情が、喜びや安心から、一瞬で驚きの物に変わる。

「お、おい遊星」

「お前も決闘の為に造り出されたデュエルロボなら、今此処で俺と決闘しろ。全てはそれが終わってから……俺を倒してからでも遅くはないだろう!!」

クロウの言葉をも遮り、挑戦的、尚且つ挑発的な言葉を投げ掛ける遊星に仲間達は声も出なかった。

すると、デュエルロボは立ち上がり、ニヤリと厭らしい笑みを浮かべる。

更に遊星と向き合うと同時に腕を翳し、その形状を変形させる。細い腕が一瞬の内に平たく広い、高性能の決闘盤と化したのだ。

「良イダロウ。ソノ決闘、受ケテ立トウ！ 才前ヲ倒セバ我等ノ主、パラドックス様モ才喜ビニナルデアロウ!!」

「決まりだな。……交渉成立だ!!」

口元を上に向けてあげたデュエルロボが、自らの腕が変形した決闘盤に自分のデッキをセット。

同様に遊星も自分の思惑通りに事が進んだことに口元を緩めた。

「お、オイ大丈夫なのかよ遊星!？」

「遊星、お前自分が何をしたのか解っているんだろうな!!?」

だが意義を申す者も居ない訳ではなかった……ジャックとクロウだ。彼等は慌てた様子で遊星に噛み付いた。

「遊星！ 今の遊星には切り札の『スターダスト・ドラゴン』が無
いんだよ!？ エースカード無しで、あのデュエルロボに勝てるの
!？」

「それにあのデュエルロボは、セキュリティ制とはいえ、今やパラ
ドックスの忠実な僕^{しも}。実力も普通の決闘者とは、比べ物にならない
程強い筈よ」

「それにまた遊星があんなボロボロになるのは、私見たくなんかな
いよ!!」

「悪いことは言わねえ。今からでもあいつを止める別の方法を考え
れば……」

2人以外の仲間達、龍亞、アキ、龍可、牛尾達も順に遊星の戦い

を止めさせようと必死に説得した。

だが、遊星は決闘を止めようとしなない。懐からデッキを取り出し、カード一枚一枚を丁寧捲り、それ等に想いを込めていく。

「おい遊星っ！！」

遂に見るに耐えたジャックが、遊星の肩を強く掴んだ。ギョツと遊星の肩に皺が寄るが、遊星は黙々とデッキの調整に勤しむ。

「あの船は……」

「ゆ、遊星？」

その時、遊星が小さく声を上げる。

「あの船は、俺が眠り続けていた間、皆が必死になって造り上げた希望の船なんだ……」

遊星の言葉に皆が耳を傾ける……何処か申し訳なさそうな、謝罪の意思が込められた静かな声。

デッキのカードを確認しつつも、遊星はその声で言葉を紡ぎ続けた。

「もし、今此処で俺がこの決闘から逃げれば、皆が決死の思いで組み立ててくれた、あの船が壊される事になる。……そんな事は絶対にさせない！！」

そう言うと、遊星はデッキホルダーに40枚のカードで構築された自分のデッキをセット。鋭い眼差しで敵を睨み付け、仲間達を見詰めた。

「俺は絶対にあいつを倒す！！　そして皆で必ず過去へ飛ぶんだ！！！！」

遊星の強く固い決意の言葉を前には、反論する者は誰もいなかった。溜め息を着く者こそ居れど、誰も彼の決闘を邪魔しようとはしない。

「まったく、遊星は見掛けに寄らず頑固者なんだからよお。長い付き合いだが、これには呆れて言葉も出ねえぜ」

「そこまで言うなら仕方がない。だが、豪語した以上必ず勝て！俺達は此処で立ち止まる訳にはいかんのだからな！！」

「ジャック。クロウ」

半ば呆れ顔、半ば信頼を寄せた友の顔、複雑な表情で遊星に全てを託すクロウ。そして言葉は刺々しいが、心より全ての希望を委ねるジャック。

そして彼等の様に言葉ではないが、目でその気持ちをアキ達は遊星に伝えた。

彼等の熱く優しい気持ちを受け取った遊星も、グツと拳を握って応対。仲間達に必ず勝つと、その拳で彼は約束する。

そのまま彼は決闘盤を起動させ、戦いに出向こうと歩みを進めるが、それを一時引き留める者が居た。

「……ゆ、遊星ー！！」

「ん？ どうしたんだ龍亞」

龍亞だ。眉を逆への字に強く寄せた龍亞が、遊星を呼び止めたのだ。

「ちょ、ちょっと龍亞！？」

「スターダスト・ドラゴンの代わりにはならないかもしれないけど……このカードを使ってよ！」

「龍亞……」

そう言って、龍亞は真っ直ぐに自分の持つ一枚のカードを遊星に向けて腕と一緒に伸ばした。

龍可が制止させようとするが、龍亞は決して止めようとはせず、先程の遊星と同等の強い口調で言葉を飛ばす。

「俺は遊星やジャック、龍可たちみたいにシグナーじゃない。でも、俺だってチーム5D'sの一員なんだ！！ 幸い、俺のカードは奪われずに済んだ。だから遊星！ 今だけでも良いし、デッキに入れてくれるだけでも良い。俺のカードを使ってよ！！！！」

「……………」

龍亞の強い意志が籠った言葉に遊星は未だ反応を示さない。黙って、彼のその強い意志が込められたカードを見詰めるだけだ。

だが次の瞬間、遊星はスツと龍亞の頭に手を伸ばし、彼の頭に自分の右手を優しく乗せた。そのまま優しく龍亞の淡い緑色の髪を撫で上げる。

「ゆ、遊星……」

「有難う龍亞。お前の気持ち、無駄にはしない!!」

「それじゃあつ!!」

「ああ！ お前の想いが籠ったこのカード、確かに受け取った。このカードと共に俺はあいつを倒す!!」

龍亞のカードを受け取った遊星は、そのままそのカードを自分のエクストラデッキへと追加させ、決闘盤を完全起動。

そして数歩前へ出ると、待ち構えていたデュエルロボを前に自らの決闘盤を構えた。

「行くぞ!!」

「死二損ナイガ……ソノカード毎、貴様ヲ闇ニ葬ツテクレル!!」

「決闘!!!!!!」

決闘開始を2人の告げる声が響くと同時に、この部屋一帯に乾いた風が吹き抜ける。同時に彼等の決闘盤のライフカウンターに4000の数値が表示される。

「先ズ八俺ノターン。ドローカード!!」

引いたカードを加えた6枚の手札を整え、デュエルロボがその中から1枚のカードを取り出す。

「俺ハ、モンスターヲセット！ 更ニリバーズカードヲセット!!」
デュエルロボの足許に伏せ表示のカードが2枚、立体映像として出現する。

だが、他に行うことが無いのか、そのまま彼はターン終了を宣言

した。

「俺のターン!!!」

ターン権が移った遊星は、宣言と共にカードをデッキから1枚引き抜く。

僅かな時間で、引き抜いたカードと手札を確認すると、遊星は直ぐ様決闘を続けた。

「俺は手札のモンスターカード1枚をコストに! チューナーモンスター、『クイック・シンクロン』を攻撃表示で特殊召喚!!!」

【クイック・シンクロン チューナー/星5/風属性/機械族/ATK 700/DEF 1400】

青い光に包まれて、出現したるは機械のガンマン。衣服に身を包み、片目を輝かせたクイック・シンクロンが、決闘を待ち望む本物の西部ガンマンの如く、その腰の拳銃を引き抜いて構えた。

「更に俺はクイック・シンクロンのレベルを1つ下げ、墓地より『レベル・ステイラー』を特殊召喚! 来い、レベル・ステイラー!!!」

【クイック・シンクロン チューナー/星5 4/風属性/機械族/ATK 700/DEF 1400】

【レベル・ステイラー 星1/闇属性/昆虫族/ATK 600/DEF 0】

「そして手札から『セカンド・ブースター』を召喚!!!」

【セカンド・ブースター 星3/炎属性/機械族/ATK 1000/DEF 500】

次々にモンスターが並ぶ遊星のフィールド。以前の戦いで使用された天道虫と酷似したレベル・ステイラー。更に今回は巨大な白い加速装置型モンスターも、遊星の手によってこの場に召喚された。「チューナーモンスター、クイック・シンクロンをレベル・ステイラー、セカンド・ブースターにチューニング！」

召喚されて間もなく、遊星の指示で彼等は空へと飛び上がった。空にクイック・シンクロンがその身を変化させて作り出した4つの大きな輪に他の2体が飛び込んでいく。

「集いし絆が新たな地平へ誘う。光差す道となれ！」

「シンクロ召喚！ 駆け抜けろ、『ロード・ウォリアー』！！」

光輝く道（Road）より、隕石の如く大地に足を着けるプライドの高き王（Lord）の戦士。巨大で高貴なロード・ウォリアーが遊星の為にその重い腰を上げて見参した。

【ロード・ウォリアー 星8 / 地属性 / 戦士族 / ATK 3000 / DEF 1500】

「ロード・ウォリアーのモンスター効果発動！ 1ターンに一度、自分のデッキからレベル2以下の戦士族、または機械族モンスターを1体を特殊召喚することが出来る！！ 俺は、『ボルト・ヘッジホッグ』を攻撃表示で特殊召喚！！」

ロード・ウォリアーの命を受け、遊星の場へとその姿を現す1匹の機械鼠。背に針の代わりにボルトを備えた小型鼠が、更に遊星の場の守りを強固にする。

【ボルト・ヘッジホッグ 星2 / 地属性 / 機械族 / ATK 800 / DEF 300】

「そして再び墓地のレベル・ステイラーの効果を発動！ ロード・ウォリアーのレベルを1つ下げ、守備表示で特殊召喚する。舞い戻れ、レベル・ステイラー！」

【ロード・ウォリアー 星8 7/地属性/戦士族/ATK 30
00/DEF 1500】

「行くぞ！ 俺はロード・ウォリアーでセットモンスターに攻撃！
切り裂け、『ライトニング・クロー』！！」

TURN - 10 奇跡の方舟（後書き）

今回の最強カード

【ロード・ウォリアー 星8 / 地属性 / 戦士族 / ATK 3000 / DEF 1500】

「ロード・シンクロン」+チューナー以外のモンスター2体以上1ターンに1度、自分のデッキからレベル2以下の戦士族または機械族モンスターを1体特殊召喚する事ができる。」

1ターンに一度、デッキからモンスターを特殊召喚するという、圧縮&モンスター召喚という中々のメリットを得られそうなモンスター。

しかし、その効果とは裏腹に召喚のし辛さが目立つモンスターでもある。非チューナーモンスターが2体以上必要な為、ロード・シンクロンを使用する場合は3、1。または2と2の組み合わせが必要となる。クイック・シンクロンでもそれを改善するのは難しく、寧ろ此方の方が難しい。

だが、シンクロウォリアーシリーズでは最も攻撃力が高く、その攻撃力はレッド・デーモンズと同じ3000を誇っている為、戦闘に於いては中々の強さを誇っている。……但し、魔法罫の体勢は皆無な為、出した途端に奈落の穴に落ちた。コントロール奪われて逆に利用されたなんて話がありがちなので過信は出来ない。

しかも苦勞して召喚しても対象モンスターがデッキに存在していなければ、本当に攻撃力だけの木偶の坊となってしまうので、デッキの構築もかなり難しい。正にその扱いはプライドの高い王の戦士、ロード・ウォリアーと言えるだろう。

余談だが、取り敢えず今回の話が初登場となるこのロード・ウォ

リアー。

実はあの場合、以前紹介した同じ8レベルでシンクロ出来るジャンク・デストロイヤーを召喚した方がメリットがあるのだが、それは言わない約束である。

TURN・11 悪夢再び（前書き）

という訳で、決闘全開デュエルロボ編！ 因みに二話目となります。

一応今の目標として、以前申し上げました通り遊星のシンクロ・ウォリアーさん達を少なくとも一回は出すこと。そして彼等のあまり使わないカード達にも光を浴びさせてやること。……ターボさん可哀想じゃん。

しかし遊星さんの決闘が長い。そろそろ他のキャラの決闘とか書きたいところなんですけど、中々そうはいかず、とんとん拍子にはいきません。まだまだ時間が必要なようで……。

そして、もうお気付きの方がいらっしやると思いますが、小説の話のサブタイトルを全て変えました。お気付きの通り、全てカード名から取ってみました。

それっぽいものを選択しただけですので、別にそのカードが登場する訳ではありません。

それでは前書きは此処までにして、そろそろ本編へと移って頂きます。

どうぞ、ゆっくりと書いて下さい。

なるべくOCGルールに法り、書いていこうと考えているトマトでした。

「切り裂け！ 『ライトニング・クロー』！！」

遊星の命を受けた誇り高き王の戦士、『ロード・ウォリアー』の一撃が裏側にセツトされたモンスターを直撃。鋭利な一撃に引き裂かれ、コガネムシと酷似した昆虫族モンスターが消滅する。

「フッフ、『魔道雑貨商人』ノリバース効果発動！」

「っ！！」

「デッキヲ上カラ順ニ捲リ、モンスター以外ノカードヲ手札ニ加工、残リヲ墓地ニ捨テル」

モンスターを倒されたことを当然のように嘲笑し、効果発動を宣言するデュエルロボ。

そのまま彼はデッキを次々に捲り始め、引く度引く度そのカードを捨てていった。その枚数は捲る毎にどんどん増していき、次々に彼の墓地にモンスター達が埋葬されていく。

「大幅なデッキ圧縮か？」

「もしくは、墓地肥しのどちらかってトコか……」

稀に見るデュエルロボの戦術に固唾を飲み、その先の見えない行く末に冷や汗を垂らす牛尾とクロウ。彼等は手で汗を拭い、寡黙であり続ける遊星へと視線を戻す。

遊星は未だ沈黙を保ち、脳内でデュエルロボのプレイングから想像出来る戦略と、自分の知る限りの戦略と照らし合わせていた。

しかし、その膨大な戦略の数を1つに断定することが出来ず、遊星は口の中で、小さく舌を悔しそうに「ちっ」と打つ。

「フム……俺ガ加工タノハ、魔法カード『死者転生』。ヨツテ、コノカードヲ手札ニ加工ル」

そうこうしている内にデュエルロボはカードを加え終えていた。遊星にも確認出来るように死者転生のカードを提示し、その後手札

の右端にそれを加えた。

「此処デ、魔道雑貨商人ノ効果デ直接墓地へ送ラレタ、『ライトロード・ビースト ウォルフ』ノ効果が発動。コノカードガデツキカラ直接墓地へ送ラレタ時、コノカードヲ特殊召喚スルコトガ出来ル」
「何だと!？」

「ソシテ俺ハコノカードヲ2枚、墓地ニ送ツテイル。ヨツテ、2体のビースト ウォルフガ俺ノ場ニ特殊召喚サレル……」

遊星が驚いているのも束の間。突然、デュエルロボの決闘盤よりフィールドに向けて、2つの人影が出現。それは白い身体に猛犬の顔を持つ、2体の半獣人として姿を見せた。

【ライトロード・ビースト ウォルフ 星4 / 光属性 / 獣族 / A T K 2100 / DEF 300】

「攻撃力2100のモンスターが2体!! 奴はこれを狙っていたのか!？」

思わずたじろぐ遊星。そんな遊星の前に立ちはだから、荒く息を吐く2体の獣。

凶暴な彼等の姿を見た遊星は、クツと舌を打った。

「俺はカードを3枚伏せ、ターンエンド!」

遊星は仕方なくといった表情でターン終了を宣言。同時に彼の手がだらりと下ろされた。

「オイオイ。遊星の奴、手札を全部使い切っちゃったぞ。一体どうするつもりなんだ……」

「大丈夫。まだ状況的に考えても、攻撃力では遊星のモンスターの方が上よ!」

牛尾が心配そうな声を上げ、それを杞憂だと自分に思い込ませようとアキ。

仲間達は遊星の身の心配をすると気が気でなかった。龍亞は両手の拳を握り締め、龍可は彼の勝利を祈っている。

「神よおおおおおおおつ！！！！　どうか不動遊星に勝利の導きをおおおおつ！！！！！」

イエーガーも遊星の為か、はたまた自分や世界の為か、物凄い表情で白い手を合わせて龍可以上に遊星の勝利を涙をポロポロ溢しながら祈っていた。

そうしている間にも、デュエルロボは静かにカードをドロー。手札を5枚に増やし、彼はそのまま伏せカードの1枚を顕わにした。

「俺八伏せテイタ永続罨カード、『リミット・リバース』ヲ発動！
ソノ効果ニヨリ、墓地カラ攻撃力1000ポイント以下ノモンスターヲ1体、攻撃表示デ特殊召喚スル！！」

「モンスター蘇生カード！！　その為にモンスターを次々に墓地に！！？」

「俺八、『ファントム・オブ・カオス』ヲ攻撃表示デ特殊召喚！！
出デヨ、深キ闇ノ幻影！　ファントム・オブ・カオス！！！！」

【ファントム・オブ・カオス　星4 / 闇属性 / 悪魔族 / ATK 0 / DEF 0】

デュエルロボの場に現れたのは、正に暗黒の化身だった。禍々しい黒の闇が、デュエルロボの場で怪しく蠢いている。

「何なんだ、このモンスターは！！？」

その見慣れない怪物を前に驚愕を隠せない遊星。その闇の中には、何かしらの狂気が隠れていると、彼は本能的に感じ取る。

「更ニ速効魔法発動、『地獄の暴走召喚』！！」

続けてデュエルロボのもう1枚の伏せカードが、表側となって遊星を困惑させる。

「コノカード効果ニヨリ、特殊召喚サレタファントム・オブ・カオスヲ可能ナ限り、手札、デッキ、墓地カラ特殊召喚スル！！　俺八墓地トデッキカラ、2体のファントム・オブ・カオスを特殊召喚！！！！」

フィールドに出揃う3つの闇の化身。それはユラユラと蠢き、その奇怪さを周りの者達に見せ付けた。

「コノ際、才前モ場ノモンスター1体ヲ選択シテ、ソノ同名モンスターヲ可能ナ限り特殊召喚スル事ガ出来ル」

「くっ！ 俺の場に存在するどのモンスターも、同名カードは存在しない……」

「ナラ、コノママプレイヲ続行ダ……」

次の瞬間、突然デュエルロボの墓地から3体のファントム・オブ・カオスに向かつて、更に禍々しい闇が伸びた。ゴゴゴゴと不気味に唸る深い闇。

……それはこの倉庫全てをガクガクと揺らした。

「な、何なんだ、この揺れは!?!」

「あわわわわわ!?! これじゃあ、この建物全体が崩れちゃうよおおおおっ!?!?!」

揺れ動く地面に立っていられず、体勢を崩す龍亞。大人であるジヤックも片手を着いている。

他の者達も、グラグラと揺れる地震には堪え切れず、次々に片膝をガクリと着いていった。

「フッフ。ファントム・オブ・カオスノモンスター効果発動シタノダ！ 俺ノ墓地ノモンスターヲ除外シ、ファントム・オブ・カオスハコノターン、ソノモンスター同名カードトシテ扱イ、同ジ効果ト攻撃力ヲ得ルコトガ出来ル。ソシテ俺ノ場ニハ、ソノ闇ガ3体!?!?!」

全く動じずに行動を続けるデュエルロボが、墓地より3枚のカードを取り出す。

そしてそのカードをそのまま、遊星に提示。彼に何を除外したのを見せ付けるといふ形で告げた。

だがその選択したカードは

「俺ガ除外シタノハ……コノ3枚!?!?!」

「な、何だと……そのカードは!?!?!?!」

「ソウ、貴様ヲ地獄へ誘イシ3体！！ 『神炎皇ウリア』！ 『降雷皇八モン』！ 『幻魔王ラビエル』ダ！ サア、幻影達ヨ、凶悪ナル幻魔ノ姿ヘト、ソノ身ヲ変エルノダ……」

遊星にとつて、最も辛く苦い思いをしたカードであつた。

形を変えていく3体のファントム・オブ・カオス。禍々しかつた暗黒の闇は、更に禍々しい漆黒の幻魔と化し、デュエルロボのフィールドに三幻魔として降り立つたのだ……。

【神炎皇ウリア 星10 / 炎属性 / 炎族 / ATK 0 / DEF 0】

【降雷皇八モン 星10 / 光属性 / 雷族 / ATK 4000 / DEF 4000】

【幻魔王ラビエル 星10 / 闇属性 / 悪魔族 / ATK 4000 / DEF 4000】

「さ、三幻魔だと……！？」

再び見るその邪悪の威光に身体が恐怖で震える遊星。思わず自分の震える身体をその両腕で抱えた。

「三幻魔……また出やがった」

「あ、あれが三幻魔。遊星でも敵わなかつたモンスターか……」

「いえ、あれはもうモンスターではないわ。……最悪の怪物よ」

再びその姿を見て、畏怖するクロウ。始めて見たにも拘らず、身体のを止められない牛尾。龍亞と龍可を抱え込むように抱き締めるアキ。

そんな怯える彼等を見て、実に楽しく愉快そうにパラドックスは笑つた。

「ソウ、彼等八モンスターデハナイ。……闇ノ使イ、最凶ノ神ダ！

！！」

「くっ！」

狂気に歪んだ顔。奇妙な機械声を出しながら、デュエルロボは遊星を見た。

遊星も決して逃げようとはせず、精一杯目の目の敵に立ち向かった。

「俺八、神炎皇ウリアノモンスター効果ヲ発動！ 1ターンニ一度、相手フィールド上ニセットサレタ魔法、罫カードヲ1枚破壊スル。」

「トラップデイストラクション！！！」

「なっ！？」

ウリアの口から吐き出された衝撃波が、遊星の場を急襲。彼の為に伏せられていた、紫のカードが1枚、粉々となって吹き飛んだ。

「っ！！ 『くず鉄のかかし』が……」

「更ニ続ケテ俺ノバトルフェイズ！ 降雷皇ハモン、『レベル・ステイラー』ニ攻撃。『失楽の霹靂』！！」

強烈な一筋の雷が、一瞬にして遊星のレベル・ステイラーを打ち砕く。たった一筋の光の前に遊星のモンスターは消滅を喫してしまふ。

「ファントム・オブ・カオスデ呼び出サレタ幻魔達ハ、所詮ハ幻影。戦闘ダメージを与エルコトハ出来ナイ。……ダガ」

「うああああああああああああああっ！！！！？」

【遊星 LP4000 3000】

更に続けて放たれる強烈な雷が、遊星の身体を焦がす。

遊星は痛々しい悲鳴を上げ、身体から煙を上げて、ガクリと膝を着いた。

「い、一体……何が起きたんだ」

「どうして遊星のライフが！？」

「遊星の場のモンスターは守備表示！ ファントム・オブ・カオスも戦闘ダメージを与えられない筈だ！？」

苦しそくに胸を押さえる遊星。それを見守っていた龍亞やジャッ

クが、目を見開き、口を大きく開き、驚きの言葉を上げる。他の者達も、殆ど同じ表情だ。

「ハモン八相手モンスターヲ撃破シタ時、相手ライフニ1000ポイントノダメージヲ与エル。コレガハモンノ特殊効果、『地獄の贖罪』ダ」

「ライフに直接ダメージを与えるモンスター効果だと……」

「更ニビースト ウォルフデ、『ボルト・ヘッジホッグ』ヲ攻撃！」

続けて攻撃を繰り返す白い半獣モンスター。怯んで動けなくなったボルト・ヘッジホッグを無情にもその手に持つ杖で切り伏せてしまふ。

「くっ！！ この瞬間、畏カード発動！ 『ガード・ブロック』！」
刹那、遊星の前に光のボールが現れ、襲い来る衝撃を全て吸収。更にそれは光の滴と化し、遊星のデッキに降り注いだ。

「俺への戦闘ダメージを0にし、更にデッキからカードを1枚ドロ……」

「ダガ攻撃ハ、マダ残ツテイル！！ ラビエルヨ、ロード・ウォリアーヲ打チ碎ケ！」

続けて幻影のラビエルが、その巨大な腕を振り翳し、ロード・ウォリアーを襲った。

強烈な一撃、『天界蹂躞拳』の前に戦士は粉碎。遊星にダメージこそ無いが、その身体に風圧という衝撃が襲う。

「畏発動！ 『奇跡の残照』！！」
顔を覆いながら、畏の発動を宣言する遊星。

すると、先程粉々となって散っていった筈のロード・ウォリアーが、遊星の場に再び姿を現した。

「蘇生カード力……」

「そうだ。奇跡の残照の効果で、この戦闘で破壊されたロード・ウォリアーを特殊召喚する！」

「……バトルフェイズ終了」

漸く遊星に訪れる緊張が僅かに解けるひと時。思わず彼の口から止められていた吐息が漏れる。

息苦しいフィールドを前に頬の汗は止まらず、顎を伝い、地に落ちる。遊星はそれを繰り返した。

「勘違いスルナヨ？ 俺ハマダターンヲ終了シナイ」

デュエルロボの言葉に仲間達の背筋にゾクリとした悪寒が走った。「言ツタ筈ダ。コイツ等ハ、今ハ三幻魔。例エ幻影ダトシテモ、ソノ強大ナカハ本物ダ」

その言葉に今度は、遊星の背筋が襲われた。

恐怖と寒気、忘れられないあの光景に。

「ま、まさか……」

「ソウダ。俺ハ、フィールド上ノ幻魔3体ヲ除外！！ 降臨、『混沌幻魔アーミタイル』！！！！」

3体の幻魔の姿をした幻影が、今度は1つとなり、巨大な闇の塊を構成。

臆てそれは、最凶の幻魔としてフィールドに出現。闇の中の闇、混沌を司る究極の幻魔が、遊星の前にその恐ろしい姿を現した。

【混沌幻魔アーミタイル 星12/闇属性/悪魔族/ATK 10000/DEF 0】

「アーミタイルハ、自分ノターンノミ攻撃力ガ10000ポイントアップ」

咆哮する混沌幻魔^{アーミタイル}。遊星の脳裏にあの敗北が脳裏にフラッシュバックする。

「ドウダ？ 懐カシイダロウ？ 才前ヲ今一度、コノ幻魔デ敗北ニ追イヤツテクレル！！」

「くっ！！」

デュエルロボの挑発に対し、身構える遊星。

だが、流石にメインフェイズ？。バトルフェイズを終了し終えた

デュエルロボは、1枚カードを伏せ、直ぐにターンを遊星へと譲った。

【混沌幻魔アーミタイル 星12/闇属性/悪魔族/ATK 10000 0/0】

「あ、あれが最強の幻魔だったのか……」
「な、何て恐ろしい姿」

初見の牛尾と深影が、その邪悪な姿に思わず身震いする。視線も反らすことが出来ず、セキュリティでありながら、悪に恐怖してしまっていることを恥じた。

そんな中、ジャックやアキ、クロウ達5D'sの面々は、遊星を心配そうな目で見詰めている。

遊星は鋭い眼差しで、デュエルロボ、アーミタイルと対峙していた。

「確かに俺はそのモンスターに一度敗北した。……だが、俺は皆に誓った！ この決闘、必ず勝つと！！ そしてそんな俺を信じてくれているからこそ、龍亞は俺に希望のカードを託した！！」

「遊星……」

震える拳を強く握り締め、自分に言い聞かせるように熱く語る遊星。思わず呼ばれた自分の名前に反応し、小さく彼の名前を呼ぶ龍亞。

「俺は勝つ！！ お前を倒し、俺達は必ず過去へ飛ぶ！！！」

遊星は自分の目の前に立つ者達へ向け、自分の絶対勝利を宣言。

同時に機械で構成させられている筈のデュエルロボの眉間に小さな皺が寄る。

「大口ヲ叩クナ！！ アーミタイルガ出現シタ今、貴様ニ勝チ目ハ無クナツタノダ！！！」

「まだだ！！ 俺のライフが残っている限り、俺はデッキを信じて必ず勝機を見付け、掴んで見せる！！ 俺のターンだ！！！」

カードを引き、手札を増やす遊星。ドローフェイズが終わるや直ぐ、右手をロードウォリアーに翳す。

「ロード・ウォリアーのモンスター効果発動！俺はデッキから、『スピード・ウォリアー』を守備表示で特殊召喚！！更に手札から『ゼロ・ガードナー』を召喚！」

【スピード・ウォリアー 星2 / 風属性 / 戦士族 / ATK 900 / DEF 400】

【ゼロ・ガードナー 星4 / 地属性 / 機械族 / ATK 0 / DEF 0】

「気ヲ落トサセルカモシレンガ、予メニ言ツテオコウ。アーミtailルハ戦闘破壊出来ナイ特殊モンスターダ」

「なら、その邪魔なモンスターを攻撃するまでだ！！ロード・ウォリアーでライトロード・ビースト ウォルフを攻撃！！切り裂け、ライトニング・クローー！！」

フィールドに新たに2体のモンスターを呼び込んだ遊星。彼は、バトルフェイズに入るや、直ぐ様攻撃対象のモンスターを指差し、ロード・ウォリアーを走らせた。

再び稲妻の如く鋭い一撃が、身構える半獣目掛けて降り下ろされる。

「墓地ノ『ネクロ・ガードナー』ノ特殊効果ヲ発動。墓地ニアルコノカードヲ除外スルコトデ、攻撃ヲ一度ダケ無効ニスル……」

「なっ!?!」

だが、ロード・ウォリアーの攻撃は、炸裂寸前に黒い靄によって阻止。半獣モンスターを戦闘破壊出来ず、ロード・ウォリアーは仕方なく遊星の場に戻った。

「くっ……俺はこれでターンエンドだ」

「ナラバ俺ノターン。同時ニアーミtailモ、再ビソノカヲ増大サ

セル」

手札に残されたカードをチラリと見ると、遊星は素直にターンを終了した。

同時にデュエルロボが、ターン開始を宣言。余裕の表情で、デッキから更にカードを1枚引く。

「フフ、ゼロ・ガードナー……」

引いたカードを即座にセットしたデュエルロボは、ニヤニヤと笑みを浮かべて遊星の場に存在する、可愛らしい攻守0のモンスターを見た。

遊星はその笑みと言葉の意味を悟り、「くっ」と口の中で舌を打つ。

「良イダロウ、才前ノ誘イニ乗ッテヤロウ。バトルフェイズダ！」

「くっ！ ゼロ・ガードナーのモンスター効果発動！！」
デュエルロボのフェイズ移行の宣言と共に光となって消滅するゼロ・ガードナー。

それは遊星の場全てを包み込み、薄い防御の為の幕を張り巡らせる。

「このモンスターをリリースすることで、相手から受ける戦闘ダメージを発動ターンのみにする事が出来る！」

「フン、ソナナコトハ承知ノ上。俺ハ、新タニカードヲ伏セ、ターンヲ終了ダ」

エンド宣言と同時に遊星達を包んでいた幕も消滅。

余程このターンにも攻撃を仕掛けたかったのか、アーミタイルが餓えた肉食獣の様に、遊星を睨み、唾液の様な液体を地に垂らしている。

「俺のターン！」

全く怯まずにカードをドローする遊星。加えたカードを確認すると、遊星は空かさず自分の場のモンスターへと手を翳した。

「ロード・ウォリアーのモンスター効果を発動！ デッキから『チ

ユーニング・サポーター』を特殊召喚。更に手札から、『ジャンク・シンクロン』を召喚!!!」

【チューニング・サポーター 星1 / 光属性 / 機械族 / ATK 100 / DEF 300】

【ジャンク・シンクロン チューナー / 星3 / 闇属性 / 戦士族 / ATK 1300 / DEF 500】

ロード・ウォリアーが地面へと指を伸ばすと、地面より中華鍋を被った小型のモンスターが登場。

更にその横には、橙色の服に身を包むモンスターが出現。遊星の場が一気に賑やかとなる。

「そしてジャンク・シンクロンの召喚に成功した時、自分の墓地からレベル2以下のモンスターを守備表示で特殊召喚することが出来る。俺は墓地から、ボルト・ヘッジホッグを守備表示で特殊召喚!」

【ボルト・ヘッジホッグ 星2 / 地属性 / 機械族 / ATK 800 / DEF 800】

そして唯一空いていた遊星の場へ、最後のモンスターが出現。再びボルトを背に持つ鼠が、その姿を見せる。

「行くぞ!!! チューナーモンスター、ジャンク・シンクロンをレベル2のスピード・ウォリアーとボルト・ヘッジホッグ。そしてレベル1のチューニング・サポーターにチューニング!!!」

ジャンク・シンクロンの身体が猛烈なエンジン音を轟かせ、3つのレベルの輪を形成。そこへ3体のモンスターが次々に飛び込んでいく。

「集いし闘志が、怒号の魔人を呼び覚ます。光差す道となれ!!!」
聴て、彼等は1つとなり、レベル8の魔人^{モンスター}へと姿を変える。

「シンクロ召喚!!! 粉碎せよ、『ジャンク・デストロイヤー』!!!」

【ジャンク・デストロイヤー 星8/地属性/戦士族/ATK 2600/DEF 2500】

強烈なイメージを植え付ける、その力強き姿。遊星の場に2体目の強力シンクロウリアーが、特殊召喚された。

「いよっしゃあつ! ジャンク・デストロイヤーだ!!!」

「ジャンク・デストロイヤーは、シンクロ素材としたチューナー以外のモンスターの数だけ、フィールドのカードを破壊することが出来る強力モンスター-!」

「奴の場のカードは5枚! 遊星は奴のカード3枚を破壊することが出来る!!!」

勇ましいジャンク・デストロイヤーの登場に目を輝かせる5D'sの面々。

クロウは拳を握り、アキがその効果を口にする。そしてジャックがその効果は何を意味するか、2人に負けない熱さで語る。

だがそれでもデュエルロボは眉一つ動かさない。

「行くぞ!!! ジャンク・デストロイヤーのモンスター効果発動!

! 奴の場の伏せカードと、混沌幻魔アーミタイルを破壊しろ!!!

『タイダル・エナジー』!!!」

胸から必殺のエネルギー波を放とうと、腕を前でクロスさせるジャンク・デストロイヤー。

だが、その次の瞬間、効果を発動しようとした彼に悲劇が襲った。「なっ!?! 何だこれは!!!?」

「ククク……」

突然出現した黒く蠢く小さな虫達が、一斉その巨体を覆い尽くしてしまったのだ。

更に虫達はポリポリグチャグチャと音を立て、強固な身体を噛み

砕いていく……。

その凶のあまりの気持ち悪さに者達は、皆口を押さえ、顔を引き攣らせる。遊星でさえも、この光景には啞然としていた。

「……残念ダツタナ。俺ノ墓地ニ存在スル『黒光りするG』ハ、自ラヲ除外スルコトデ、召喚サレタシンクロモンスター1体ヲ破壊スルコトガ出来ルノダ」

「何っ!?!?」

「折角ノ強力モンスターダガ、残念ダツタナ」

「だが、召喚まで無効にはならない筈! カード効果は、発動する筈だ!?!」

「ソウ。ダカラ俺ハ、チェイントシテ、コノカードヲ発動サセタノダ。速効魔法、『禁じられた聖杯』!」

デュエルロボが翳した手の先には、緑のカードがその正体を現していた。

美しく気高い女性が、聖水で満ちた黄金の杯に口付けをしている。そんなイラストが描かれたカード。

「コノカードハ、モンスターノ攻撃力ヲ400ポイントアップサセ、ソノ特殊効果ヲ封ジル。ヨツテ、杯ヲ受ケタジャンク・デストロイヤーハ、ソノモンスター効果ヲ封印サレル」

【ジャンク・デストロイヤー 星8/地属性/戦士族/ATK 2600 DEF 2500】

遊星の目の前で、頭上から傾いた聖杯より聖水を浴びせられるジャンク・デストロイヤー。

昆虫達に蝕まれたその巨体は遂に力尽き、ズズンと大きな音を立てて崩れ落ちた。

「ジャンク・デストロイヤー、破壊!」

「くっ!? ジャンク・デストロイヤーが……!」

召喚して間もなく、自分の許を去ったジャンク・デストロイヤー。

遊星の顔が更に曇る。

「そんな！？ ジャンク・デストロイヤーでも駄目だなんて……」

「また遊星の場には、ロード・ウォリアーだけになっちゃったよお！！？」

「ああああああつ！！？ 何とかするのです不動遊星！！ この状況をどうにか打開して下さいっ！！？ でないとでないと、我々のこの世界がああああああああつ！！！！！」

龍可と龍亞がその驚愕に目を見開き、あまりにも絶望的な状況の前にイエーガーが暴走する。

ブルーノも「流石に此処までか」、と悔しそうな表情になり、クロウも近くのデスクに握り拳を叩き付けた。

「くっ、こうなったら」

そう言つて、遊星は残されたカード1枚に手を伸ばし、それを魔法・罨スロットへ装填。

「俺は手札から、『アドバンスドロー』を発動！ ロード・ウォリアーをリリースして、デッキからカードを2枚ドロロー！！」

刹那、遊星にはドロローのチャンスが与えられ、代償として唯一のロード・ウォリアーが消滅する。

「そんなことしたら、遊星の場には何もカードが無くなっちゃっよ！！？」

「だが、このままでは次のターン、遊星は確実に負ける。だが、このドロローで奴の攻撃を凌ぐカードをドロロー出来れば……やってみる価値は充分にある！」

大慌てする龍亞を宥める口調で喋るジャック。

だが、その心は緊張と心配に溢れている。彼自身それが不可能に近いと考えていたからだ。

それは彼の深刻な表情から読み取ることが出来る……。

そうしている内に遊星は2枚のカードをドロロー。それ等を何も無かった手札へと加え、出来る限りの戦略を練った。

「カードを2枚伏せ……俺のターンは終了だ」

遊星は加えたカード全てを場に出し、自分のターンを終える。

「フフ、ドウヤラ勝敗八決シタヨウダナ。決メテシマエ、混沌幻魔アーミタイル!!!」

カードを引いたデュエルロボは、直ぐにバトルフェイズへと移行。直ぐ様攻撃力が回復したアーミタイルに攻撃を指示する。

次の瞬間、召喚の為の素材となった神炎皇ウリアを顔面を模した左腕が、強力な破壊エネルギーを蓄え始め、そこには赤、青、黄の三色の雷が宿る……。

「全テヲ消シ去ル究極ノ一撃！ 滅べ、『全土滅殺 天征波』!!!」

遊星に向け、以前彼を敗北へと追い込んだ悪夢の一撃が放たれる。仲間の叫びも掠れる程の騒音と共に波動が突き進み、遊星を丸ごとその波動で飲み込もうとする……。

「ダメーjistステップ計算時、畏発動！ 『スピリット・フォース』!!!」

だが、寸での所で攻撃が受け止められる。

「このカードは、俺への戦闘ダメージを0にし、その後守備力1500以下の戦士族チューナーを1体、手札に加える！ 俺はジャンク・シンクロンを選択する」

墓地から呼び戻されたジャンク・シンクロンを手札に加える遊星。衝撃波は遊星にこそ届かなかつたものの、辺りの地面を根こそぎ弾き飛ばしてしまった。

「馬鹿メ。アーミタイルノ攻撃ヲ退ケヨウト、マダ2体ノビーストウォルフノ攻撃ガ残ツテイル。『ハウリング・バイト』!!!」

遊星を狙い、先ず最初の半獣が襲い掛かってきた。

その爪、その牙が遊星目掛け、無情にも突き伸ばされる……。

「遊星！」

「遊星!!!」

「神よおおおおおおつ!!!」

仲間達が必死に祈る。名前を叫び、彼の起死回生を願った。

「これが最後の賭けだ！！ 畏発動、『コンフュージョン・チャフ』
！！」
その仲間達の気持ちに応えるように、残された最後のカードが、
今表を向いた……。

「このカードは、相手が二度目の直接攻撃をダイレクトアタック宣言した時に発動可能
！ 一度目の直接攻撃をしたモンスターと、その相手モンスターを
戦闘させ、ダメージ計算を行う！！」

「何ッ！？」
「当然選択するのは、混沌幻魔アーミタイル！ そしてライトロー
ド・ビースト ウォルフ！！」

遊星がモンスター達を指差すと同時に同志討ちを開始するモン
スター達。

巨大なアーミタイル相手に半獣モンスターが特攻する形で挑んだ。
「よし！ このバトルが成立すれば、あいつは7900ポイントの
ダメージを受ける！ 遊星の勝ちだ！！」

「やったあああっ！ 遊星！！！！」
一発逆転の遊星の勝利に狂喜乱舞するクロウと龍亞。

彼等の目の前でこの戦いに幕を下ろす戦闘が繰り広げられ、その
2つの影が

「なっ！？」

「奴のモンスターが……アーミタイルが！？」

「嘘……アーミタイルが消えた？」

交差することはなかった。

戦闘が行われようとした次の瞬間、アーミタイルは光の滴となっ
てフィールドを去ったのだ。

啞然とする遊星達。彼等にはまだ何が起きたのか理解出来ていな
い。

「……アイコンボダッタガ、残念ダッタナア？」

ただ、デュエルロボが何かをしたという事以外は。

「悪いガ、罨ニチエーンシテ、『神秘の中華鍋』ヲ発動サセテ貰ッ
タゼエ？」

デュエルロボの足元に突如出現する魔法カード。

呆気にとられた遊星達を嘲笑しながら、彼はそのカードの説明を
話し始めた。

「コノカードハ、自分ノフィールド上ノモンスターヲ1体リリース
シ、ソノ攻撃力、マタハ守備力ヲ選択シテ、ソノ数値分ライフヲ回
復スル速効魔法。俺ハソノ対象ニアミタイトルノ攻撃力ヲ選択シタ
…… ツマリ！！」

【デュエルロボ LP4000 14000】

「ライフが14000ポイントだっ！！？」

「馬鹿なっ！！？」

「そんな！？」

デュエルロボのLPが、通常では考えられない破格の数値を叩き
出す。

その数値を前に遊星達の開いた口が塞がらない。

「サア、コレデモ才前ハマダ俺ヲ倒ストイウノカ？ コノ絶望的状

況デモ！！！！？」

「くっ！！」

デュエルロボの挑発を含んだ問い掛けに苦しそうに声を上げる遊
星。

だが、幾ら仲間達が彼の場を見回しても、自分を守ってくれるカ
ードは存在してはいなかった……。

TURN - 11 悪夢再び（後書き）

今回の最強カード

【リミット・リバーズ 永続罨】

「自分の墓地から攻撃力1000以下のモンスターを1体選択し、攻撃表示で特殊召喚する。」

そのモンスターが守備表示になった時、そのモンスターとこのカードを破壊する。

このカードがフィールド上から離れた時、そのモンスターを破壊する。

そのモンスターが破壊された時、このカードを破壊する。」

低攻撃力モンスター専用の蘇生系カード。だが低とはいえ、これが中々侮れない。

低い攻撃力のモンスターの中には、サーチ要因として重宝される『クリッター』や融合を加えられる『E・HERO フォレストマン』といった中々侮れないモンスターが多く、リリース要因やシンクロ素材としても利用出来る為、中々凡庸性が高く、幾つかの専用デッキでは必須カードとも言われている。

その中の一つとして、『ユベル』が上げられる。知っている人は知っているだろうが、このカードと『ユベル』はご飯と梅干並みの高相性なのだ。

他にも、十代お馴染みの『ネオ・スペーシアン』は、全て攻撃力が1000以下なので、このカード1枚で特殊召喚することが可能。ネオスの蘇生し易さも伴って、過去には『生還の宝札』と組み合わせたデッキも存在していた程。他にも低い攻撃力が多い『ディフオーマー』等でも組み込める。

効果的には『リビングデッドの呼び声』に劣るかもしれないが、このカードは十分に強力な部類に入る蘇生カードである。無制限というのも嬉しい話。

因みにイラストには『ランドスターの剣士』が描かれているが、あそこからどう繋がるのかは不明。当時は『共闘するランドスターの剣士』が存在していなかった為、普通にリリース要因として扱われるのだと思われる。

どちらにしろ『クリッター』や『ダンディライオン』の方が効果的だというのは、この時からでも変わらなかったのだが……。

TURN - 12 武闘円舞（バトルワルツ）（前書き）

まだ感想への返事も書いてないのに自分のことばかりする愚かな私。という訳で今回は中々早い更新となりました。

前回はかなり大失敗。皆さんに大きく指摘され、ちょっと落ち込みました。しかもモンスター効果を間違え、大幅に書き直すハメになってしまったという。

お陰でストーリー変更、もしかすれば大きな矛盾が出るかもしれませんが。これから先、こういうことが一体何回くらい有るのだろうか？ ちょっと先が不安になってきました。

兎に角、そういったことが無いよう、頑張らないとなあ……。よし、頑張ろう！！

因みに前回、私の記憶違いという事から、『マツシブ・ウォリアー』の効果を間違え、矛盾が出てしまいました。それを解消する為にあの時場に特殊召喚されたのは、『ボルト・ヘッジホッグ』に変更してありますのでご了承ください。

TURN - 12 武闘円舞（バトルワルツ）

「残サレタ『ライトロード・ビースト ウォルフ』デ、不動遊星ニ直接攻撃！！」

「くっ！？ うああっ！！？」

デュエルロボのバトルフェイズ。何もカードが存在していない遊星の場を半獣モンスターが侵略した。

正に速く重い一撃。遊星の腹部に叩き込まれたそれは、彼に強烈な痛みを与え、ライフを大幅に削った。

【遊星 LP3000 900】

「遊星っ！！」

「このままじゃ、遊星が負けちゃうっ！！」

血が滲む腹部を押さえる遊星を見て、龍亞と龍可が嘆きの声を上げた。他の仲間達も思わず遊星の安否を心配して、身体が僅かにピクリと動く。

だが、遊星は体勢を崩し掛けたものの、直ぐに立て直し、諦めを微塵も感じさせない眼差しで、デュエルロボ達を睨んだ。

「ホオ。マダ諦メズニ俺ニ立ち向カウカ……」

「言った筈だ。僅かでもライフが残されている限り、俺は勝利を諦めない！！ 必ず勝機を掴んでみせる！」

苦痛に顔を歪ませながらも、遊星は獣のように猛々しく吠え、強い意思を見せた。

伸ばされた指は、真っ直ぐにデュエルロボを捉え、正にそれは獲物を狙う猛獣の牙の様。

だが、そんな遊星も今のデュエルロボからすれば、小さな蟻の様な存在としか感じられなかった……。

「ハツハツハ！！　コノ状況デモ、マダ自分ハ勝テルト本気デ思ツテイルノカ！！？　哀レヲ通り越シテ、賞賛スルゾ、不動遊星！！」
高らかに笑うデュエルロボ。そんな態度に腹を立て、仲間達が小さな唸り声を上げて歯を食い縛る。

しかし、それでも遊星は冷静であり続けた。彼はこれが敵の動揺を誘う作戦だと気付いたからだ。

「フン、マアイイダロウ。俺ハ手札ヲ1枚コストニ『死者転生』ヲ発動。『魔道雑貨商人』ヲ回収！　ソシテモンスターヲセツト！　更ニカードヲ1枚伏せ、ターンエンド！！」

「俺のターン！」

デッキからカードを引き、手札を2枚に増やす遊星。確認だけ行くと、彼は直ぐにそれを場に出した。

「俺はモンスターをセツト！　これでターンエンドだ！」

何とも短い、カード1枚で終わってしまった遊星のターン。堂々とした態度がデュエルロボには余計に滑稽と感じられ、笑いが溢れた。

そして「解つてはいたが」と表情を歪ませる仲間達。イエーガなど、魂が抜け出てしまっている。

「フフ、情ケナイプレイングダナ。ソナオ前二更ナル絶望ヲ与エテヤロウ。畏カード、『リミット・リバース』！」

「2枚目のリミット・リバースだと！？」

デュエルロボの足元に出現した畏カードに声を上げる遊星。

エンドフェイズに発動されたカードは、直ぐさま効力を発揮。フィールドにモンスターを舞い戻らせようと、淡い光でデュエルロボの決闘盤の墓地を包んだ。

「リミット・リバースハ、自分ノ墓地ノ攻撃力1000以下ノモンスターヲ攻撃表示デ復活サセル永続罫。ソシテ、我ガ墓地ニ存在スルアノカードハ、自分ノターンデハ破格ノ10000トイウ数値ヲ叩キ出スガ、墓地デハソノ効果が発揮サレズ、0トナル。ヨツテ

」

吹き荒れる暴風。遊星達をも吹き飛ばしそうな強烈な風が漆黒の渦巻き、巨大なモンスターとなって遊星の前に立ち塞がった。

「『混沌幻魔アーミタイル』、復活!!!!」

再び、混沌幻魔アーミタイルとなった。

「嘘だろ……絶体絶命のこの状況で、奴はアーミタイルを呼び出すつてのか!?!」

「遊星の場には、モンスターが1体だけ。それに対して、相手には4体。……これじゃあ相手の攻撃を防ぎ切れないわ!」

再び姿を見せるアーミタイルをインチキカードと内心で野次るクロウ。冷静に状況を判断し、どれだけ遊星が不利かを口に出すアキ。龍亞と龍可は、恐怖に震える身体を互いに支え合い、ジャックは拳を握って、この状況下でも遊星の勝利を最後まで信じた。

「更ニ手札カラ、『ライトロード・パラディン ジェイン』ヲ攻撃表示デ召喚!」

【ライトロード・パラディン ジェイン 星4 / 光属性 / 戦士族 / ATK 1800 / DEF 1200】

無情にもデュエルロボの場に最後のモンスターが召喚される。白銀の髪と鎧、かつて救世主としてヨーロッパに現れたジャンヌ・ダルクを想わせる美しき容姿。剣一本を手に戦おうとする騎士が、デュエルロボの場を更に強固にする。

「イヨイヨ終ワリダナ。不動遊星……」

「……………」

「フツ、コンナ時デモ冷静デアリ続ケルカ……良イダロウ!! ピースト ウォルフ!!」

デュエルロボの指示を受け、1体の半獣が飛び出した。

狼の性質を活かし、大地を駆けるモンスター。裏側表示で正体を隠す、遊星のモンスターに素早く襲い掛かった。

「遊星つ!!!!!!?」

仲間達の叫びも虚しく、手に持った杖を横に振り回しながら、攻撃を仕掛けるビースト ウォルフ。

杖は風を切り裂き、真っ直ぐに守備モンスター目掛けて先端が振り下ろされ

「何ッ!？」

「えええっ!?!？」

空を切った。

遊星以外の者達は驚愕した。確かに攻撃は炸裂した筈なのだが、どういふ訳かモンスターは遊星の場に残されていたから。

だが確かに攻撃時に舞い上がった砂煙の奥には、攻撃された筈の小さなモンスターの影が見える。

廳て煙が晴れ、遊星が場に出したモンスターが明らかとなる。

それは頭を抱えて怯える、ピンク色の小鳥だった。

更にその奥には驚愕する者達に対し、得意そうに笑みを浮かべる遊星の姿が……。

「ソ、ソノモンスターハ!？」

「俺が場に出していたのは、『ロードランナー』! このモンスター

は、攻撃力1900以上のモンスターとの戦闘では破壊されない」

「戦闘耐性モンスターだと!？」

ビースト ウォルフの攻撃は僅かに逸れ、ロードランナーの右横に突き刺さった形で外れている。

「どうした、俺のロードランナーを破壊してみる!！」

「クッ!？」

自信満々に挑発する遊星に対し、思わず苦言を洩らすデュエルロボ。

全てが埋まってしまったフィールドを見回し、鬱陶しそうにギリギリと音を立てて歯軋りをする。

「バトルフェイズ……終了」

悔しそうに呟くデュエルロボ。遊星は思わず顔に笑みを浮かべた。「ねえ。どうして今のターン、デュエルロボはパラディン ジェイ

ンで攻撃しなかったの？」

「そうだよ、あのモンスターの攻撃力は1800。ロードランナーを倒せた筈なのに……」

龍可と龍亞、2人が今のデュエルロボの行動を不思議がって、思わず隣に居たブルーノに尋ねた。

すると優しい顔をしたブルーノが人差し指を伸ばし、先生のように彼等へ説明を施す。

「ライトロード・パラディン ジェインは、攻撃力は確かに1800ポイントだけど、攻撃する時には300ポイントアップする効果を持っているんだ」

ブルーノの説明に「ほへ」と感心の声を上げる2人。

「つまり、実質攻撃力2100になっちまうパラディン ジェインじゃ、ロードランナーを戦闘破壊出来ない。他のモンスターも全部攻撃力2100以上。だから奴は、バトルフェイズを終了せざるを得なくなっちまったって訳だ」

「成る程」

続いてクロウも説明に参加。漸く納得した2人は、更に感嘆の声を洩らした。

視線を遊星に戻してみると、それを理解し切った遊星が、笑みを浮かべて不敵に立っている……。

「ダガ、マダ俺ノターンハ続イテイル。伏セテアツタ魔道雑貨商人ノ効果ヲ発動！」

【魔道雑貨商人 星1 / 光属性 / 昆虫族 / ATK 200 / DEF 700】

反転召喚という形で表を向き、今日二度目の登場を果たす魔道雑貨商人。

「魔道雑貨商人の効果で、デッキを上から順に捲る！」

デッキに手を置き、一番上のカードを捲るデュエルロボ。

だが、先程とは打って代わり、たった1枚のカードを捲っただけで、彼は手を止めて表情を曇らせた。

「クツ、俺八手札ニ『終焉の焰』ヲ加工ル。続イテ速効魔法、『月の書』ヲ発動。コレニヨリ、再ビ魔道雜貨商人ヲセツト状態ニ戻ス……最後ニジエイノ効果デデッキカラ2枚ノカードヲ墓地ヘト送り、ターンエンドダ」

そしてターンを終了。一方的な決闘を繰り広げている筈のデュエルロボだが、彼の表情は思わしくなく、寧ろ遊星の方に余裕があった。

「よし、上手く奴の攻撃を凌いだ！」

「しかも相手はモンスターを出し切って、新しくモンスターを召喚が出来ない。これなら遊星にもチャンスがある」

ジャックとブルーノが嬉しそうに明るい声を上げる。確かな希望を感じ取った明るい声。

「俺のターン！」

そして遊星のターン。シュツと音を立てて、彼はカードを1枚引く。

「俺はカードを1枚伏せ、ターンエンドだ」

再びカードを1枚を場に出すだけで、ターンを終えてしまう遊星。だがその表情には明らかかな余裕があり、そしてデュエルロボも先程のように野次を入れることはなかった。

ターン権を渡されたデュエルロボは、黙ってカードを引き、それを手札へ加える。

「……墓地ニ2枚送り、ターンエンド」

「ふっ……俺のターン！」

悔しそうにターン終了を宣言するデュエルロボに今度は遊星が笑みを浮かべた。

そのままデッキの上からカードを引き、2枚の手札を見比べる。

無表情だった顔がフツと歪み、彼の表情が「自分には、まだ余裕がある」と皆に伝えた。

「俺はこれで、ターンエンド」

「マタカツ……俺ハデッキカラカードヲ2枚墓地ニ送り、ターンエンド!!!」

「ドロー、俺はこれでターンエンド」

「オノレ!!! 小癩ナ真似ヲ……カードヲ伏せ、エンドフェイズニデッキカラ2枚ヲ墓地ニ送り! ……ターンエンド」

たった1枚のカードを前に翻弄され、同じことを繰り返し続けるデュエルロボ。

だが今のターン、彼がカードを墓地に送った時、彼は一瞬だけだったが、確かに表情を変えた。

微妙な変化だった為に仲間達は気付かなかったようだが、遊星はそれに反応し、僅かに眉を動かす。

「俺のターン!!!」

そしてそのまま、デッキから1枚のカードを引いた。

引いたカードを確認した時、遊星の目が見開く。

「俺は手札から、『マツシブ・ウォリアー』を召喚。そして新たにカードを1枚セット!」

【マツシブ・ウォリアー 星2/地属性/戦士族/ATK 600
/DEF 1200】

遊星は自分の場に新しくモンスターを召喚。岩の様に固い筋肉質の戦士が、彼の場に呼び出される。

更に足許にも、伏せ表示のカードが1枚現れた。

「……これでターンエンドだ!!!」

「俺ノターン!」

カードを引くデュエルロボ。彼の手札が徐々に増え、現在では7枚となっている。

「フフフ! 残念ダガ、コノターンデ不動遊星! 貴様ハ終ワリヲ迎エル!!!」

「何っ！！」

だが、突然デュエルロボは勝利宣言を大きく口から飛び出させた。身体が強張り、思わず身構える遊星。仲間達もザワザワと騒ぎ始めた。

「墓地ヨリ、『ADチェンジャー』ノモンスター効果発動！ フィールド上ノモンスター1体ノ表示形式ヲ変更サセル！！ 当然選択スルノハ、オ前ノロードランナーダ！！」

「何！？ 表示形式を変更させるだとおおっ！！？」

「そんなことしたら、遊星のロードランナーが攻撃表示になっちゃうよお！！？」

デュエルロボの墓地から、半透明となった両手に旗を持つモンスターが突如出現。

ジャックと龍亞の叫びも虚しく、墓地から現れたADチェンジャーが手に持った赤旗を上げると、ロードランナーは守備表示から強制的に攻撃表示へと変更させられてしまう。

「やべえぞ！！ ロードランナーは破壊こそされないが、ダメージはしっかりと受けちゃう！！？」

「この攻撃を受けたら、遊星の負けよ！？」

「ヒイヒイヒイヒイヒイヒイヒイヒイヒイッ！！？ 不動遊星ヒイヒイヒイヒイッ！！！！？」

「ハッハッハッ！！！！ 行ケ、アーミタイル。ロードランナーヲ攻撃！」

牛尾、アキ、イエーガーの叫びを愉快に感じながら、デュエルロボは戦闘を指示。

アーミタイルはウリアの腕にエネルギーを収束させ、それを目の前で怯えるロードランナーに向けた。

「コレデ決着ダアアッ！！ 死ネ、不動遊星！！ 『全土滅殺天征波』！！！！」

巨大な光の波動が、ロードランナーごと遊星を飲み込もうと飛び出した。

仲間達の声その轟音で掻き消し、真つ直ぐに遊星に向かっていく……。

「畏発動!!! 『捨て身の宝札』!!!」

だが、炸裂する寸前に遊星は伏せていたカードを発動させた。

「そして更にもう一枚の伏せカードオープン!!! 永続畏、『強制終了』!!!」

「強制終了ダトオ!?!」

「強制終了のコストとして、俺は捨て身の宝札を墓地に送り、このターンのバトルフェイズを強制的に終了させる!!!」

刹那、放たれた波動がロードランナーに炸裂する一歩手前で消滅。同時にデュエルロボのバトルフェイズが遊星の手によって終了となり、自動的にメインフェイズ2に移行された。

「そして捨て身の宝札のカード効果! 俺のフィールドの表側攻撃表示の2体以上のモンスターの攻撃力の合計が、相手の場の一番攻撃力が低いモンスターよりも低い場合、デッキからカードを2枚ドロウする!!!」

「シ、シマッタ!? 魔道雑貨商人ガセット状態ノママダ!?!」

遊星の策略に苛立ちを隠せなくなり、正確なプレイが出来なくなつてきているデュエルロボ。遊星陣の仲間達は、逆に相手の策略を見事に利用した彼の戦術に大きく歓声を上げる。

その非常に不愉快な声にデュエルロボの神経が逆撫でされる……。

「お前が墓地にカードを送る墓地肥しをメインにしているという事から、ADチェンジャーを投入していることは解っていた。だからこそ、俺はお前の戦略を利用して貰ったのさ! ……俺達の勝利の為にな!!!」

「ググギガツ……!!!?!?!」

遊星の仕草や言動が、更にデュエルロボの怒りを駆り立てる。

デュエルロボが怒りを見せれば見せる程、遊星の顔には笑みが浮かんでいった……。

「さあ、お前のメインフェイズ2だ。次はどうする?」

「オ、オノレ……俺八魔道雑貨商人ヲ再び反転召喚。ソシテモンス
ター効果……クソツ。手札ニ『増援』ヲ加エル。更ニカードヲセツ
トシテ、ターンエンド!!! ジェインノ効果デ、デツキカラ2枚墓
地ニ送ル」

「俺のターン!!!」

手札を1枚減らし、ターンエンドを宣言するデュエルロボ。その
表情は遊星の思惑通り、怒りを含んでいる。

「奴は明らかに焦っている!!! 今がチャンスだぞ、遊星!!!」
「そんな奴、一気に畳んじまえっ!!!」

ドローカードが加わり、前のターンでは1枚だった筈の遊星の手
札が、一気に4枚まで回復。

そして次の瞬間、ジャックやクロウの助言に応えるように、遊星
は手札から1枚のカードを場に出した。

「俺は手札から、チューナーモンスター、『ジャンク・シンクロン』
を召喚!」

子供の様に飛び出すのは、橙色の服を着たジャンク・シンクロン。
同時に空いた遊星の場が青く輝き、そこにも新たなモンスターが
勢いよく飛び出てきた。

「更にジャンク・シンクロンのモンスター効果を発動! 俺は墓地
から『チューニング・サポーター』を守備表示で特殊召喚する!!!」
「レベル1、チューニング・サポーターにレベル3のジャンク・シ
ンクロンをチューニング!!! シンクロ召喚!!! 出でよ、『アー
ムズ・エイド』!!!」

【アームズ・エイド 星4 / 光属性 / 機械族 / ATK 1800 /
DEF 1200】

遊星の場にシンクロモンスターが出現。腕^{Arm}の形を模した武器^{Arms}、そ
の姿は名の通り、腕の形状をしている。

「そしてシンクロ素材となったチューニング・サポーターのモンス

ター効果で、俺はカードを1枚ドローする！　そして魔法発動、『デュアル・サモン 二重召喚』。俺はこのターン、二回目の通常召喚を行うことが出来る！！　来い、『ネクロ・リンカー』！！」

続けて、モンスターが召喚される。骸骨の面、白と紫のボロ布を身に纏う不気味なモンスターだ。

ネクロ・リンカーと呼ばれるそれは、その不気味な骸骨の面越しにデュエルロボへ、邪悪な頬笑みを向ける。

【ネクロ・リンカー　星2 / 闇属性 / 悪魔族 / ATK 600 / DEF 0】

「ネクロ・リンカーのモンスター効果発動！！　このカードをリリースすることで、自分の墓地に存在する『シンクロン』と名の付くチューナーモンスターを1体、特殊召喚する！　俺は墓地より、『クイック・シンクロン』を守備表示で特殊召喚！！」

召喚と同時に遊星はモンスターの効果を発動。入れ替わる形で墓地に存在していたクイック・シンクロンがフィールドに特殊召喚された。

「だが、この効果で特殊召喚したこのチューナーは、このターンにシンクロ素材とする事は出来ない。俺はアームズ・エイドの効果発動、このカードをマツシブ・ウォリアーに装備する！」

【マツシブ・ウォリアー　星2 / 地属性 / 戦士族 / ATK 600 / DEF 1200】

そして先程召喚されたアームズ・エイドが、マツシブ・ウォリアーの右腕に装備される。少々不釣り合いだが、巨大な腕は確かにマツシブ・ウォリアーの強力な武器となった。

「ロードランナーを守備表示に変更。カードを2枚セットして、ターンエンドだ！！」

「マタ全テノ手札ヲ……」

がむしゃらとも受け取れる遊星のプレイングを前に漸く落ち着きを取り戻したのか、デュエルロボが落ち着いた声を口から出す。

状況を正確に分析出来るコンピューターを作動させながら、彼はデッキからカードをドロ―。

直ぐに自分のプレイを開始した。

「手札カラ魔法カード、増援ヲ発動！ 再ビジェインヲ加工、更に『ソーラー・エクステンジ』ヲ発動！ 今加エタジェインヲ墓地ニ送り、デッキカラ新タニ2枚ドロ―。ソノ後、デッキカラ2枚ヲ墓地ニ送ル」

素早い手札交換を行い、同時に再び墓地を肥やすデュエルロボ。2枚目のカードを引くと同時にデュエルロボの顔に笑みが浮かぶ。

「俺ハ、ライトロード・ビースト ウォルフヲリリースシ、『ライトロード・ドラゴン グラゴニス』ヲ攻撃表示デ召喚！！」

半獣モンスターがフィールドより消え去り、代わって1体の巨大なドラゴンが姿を現す。他の『ライトロード』と同様に白い身体をした美しいドラゴンだ。

「コノモンスターハ、貫通効果以外ニ墓地ニ存在スルライトロードト名ノ付クモンスター一種類ニツキ、攻撃力ヲ300ポイントアツプサセル効果ヲ併セ持ツ！ 俺ノ墓地ニハ、ジェイン、ソシテウォルフ。更ニ効果デ直接墓地ニ送ラレタ『ライトロード・マジシャン ライラ』、『ライトロード・エンジェル ケルビム』ノ4種類。ヨツテ1200ポイントアツプスル！」

【ライトロード・ドラゴン グラゴニス 星6 / 光属性 / ドラゴン族 / ATK 2000 3200 / DEF 1600】

白い光のオーラを纏い、攻撃力を大幅に上げる白きドラゴン。同時にその口内には、白銀のエネルギーが収束されていく。

「グラゴニスデ、ロードランナーヲ」

「俺は強制終了のコストとして、ロードランナーを墓地に送る。強制終了の効果で、お前のバトルフェイズは終了だ!!!」

「オノレ……カードヲ伏セ魔道雜貨商人ヲ守備表示ニ変更シ、ターンエンド!!! 2体ノライトロードノ効果デ、デツキヨリ5枚ノカードヲ墓地ニ送ル」

「俺のターン!!!」

ドローすることで、何も無かった遊星の手札にカードが加わる。

しかし、折角加えたカードを彼は温存することなく、直ぐに決闘盤へ叩き付けるように設置した。

「俺は手札から、チューナーモンスター、『ニトロ・シンクロン』を召喚!!!」

宣言と共に遊星の場に消火器と酷似したモンスターが出現。

「更にクイック・シンクロンのレベルを1下げること、墓地より『レベル・ステイラー』を特殊召喚!」

そして最初のターンと同じく、クイック・シンクロンのレベルを利用して、天道虫を模した低レベルモンスターが呼び出される。遊星の場は次々に召喚されるモンスター達によって溢れ返った。

【クイック・シンクロン チューナー/星5 4/風属性/機械族
/ATK 700/DEF 1400】

【ニトロ・シンクロン チューナー/星2/炎属性/機械族/ATK 300/DEF 100】

「行くぞ!!! レベル1のレベル・ステイラーにチューナーモンスター、クイック・シンクロンをチューニング!!!」

クイック・シンクロン自らを使って形成した4つのリング。そこへレベル・ステイラーが飛び込み、その小さな身体を輝く星へ……シンクロモンスターへと変えた。

「集いし星が、新たな力を呼び覚ます。光差す道となれ!!!」

……紫紺の身体を持つ、鉄屑の鉄槌を振り翳す戦士に。

「シンク口召喚！！出でよ、『ジャンク・ウォリアー』！！」

赤い目を輝かせ、拳を突き出し、遊星の場にジャンク・ウォリアーが出現。白いマフラーの様な布を風に靡^{なび}かせ、遊星の場に降り立った。

「ジャンク・ウォリアーのモンスター効果を発動！自分フィールドに存在するレベル2以下のモンスターの攻撃力分だけ、ジャンク・ウォリアーは攻撃力を上げる。同時に永続罫、『エンジェル・リフト』。墓地からレベル2以下のモンスターを特殊召喚する。来い、『チューニング・サポーター』！！」

【ジャンク・ウォリアー 星5 / 闇属性 / 戦士族 / ATK 2300 DEF 1300】

「攻撃力4300ダトオ！？」

「す、すげえ……」

全ての低レベルモンスターが、ジャンク・ウォリアーに強大な力を与える。ジャンク・ウォリアー自身もその力を感じ取っているのか、拳を握り締め、大きく咆哮。

その高過ぎる攻撃力には、流石のデュエルロボも驚きの声を上げざるを得なかった。同じくパワーで押し切る戦法を得意とする牛尾も、これには驚愕を隠せない。

「そして、マツシブ・ウォリアーに装備されたアームズ・エイドの効果発動！装備を解除して、フィールドに特殊召喚する！」

【チューニング・サポーター 星1 2 / 光属性 / 機械族 / ATK 1000 DEF 300】

「レベル1のチューニング・サポーターと、レベル4のアームズ・エイドにレベル2のニトロ・シンクロンをチューニング!!」

次々に空を舞うモンスター達。同時にニトロ・シンクロンの頭上のメモリも上昇していく。

彼等はジャンク・ウォリアーの時と同じように全員が星とリングを形成し、空で1体のシンクロモンスターとして生まれ変わった。

「集いし星が此処に新たな力となる。光差す道となれ!!」

「シンクロ召喚!! 燃え上がれ、『ニトロ・ウォリアー』!!」

遊星の声に応え、大きく空に向かって叫びながら、1体のモンスターが空より降下。戦士は砂煙を大きく巻き上げ、大胆に着地する。緑の身体。力強い腕。ジャンク・ウォリアーに負けず劣らず強力な戦士。爆発的な能力を持った、ニトロ・ウォリアーが、遊星の前で今立ち上がった。

【ニトロ・ウォリアー 星7/炎属性/戦士族/ATK 2800 /DEF 1800】

「よっしゃあああつ!! 連続シンクロ召喚だ!!」

「ジャンク・ウォリアーにニトロ・ウォリアー!! 遊星のシンクロモンスター達が勢揃いだ!!」

その凄まじい光景を前に熱血するクロウと龍亞。今の彼等には、2体のモンスターがとても頼もしく見えたのだ。

「シンクロ素材となった、ニトロ・シンクロンとチューニング・サポーターの効果により、俺はデッキから2枚ドロ!! そして装備魔法、『ジャンク・アタック』をジャンク・ウォリアーに装備!!」

宇宙を徘徊する鉄屑を描いたカード。そのカードはジャンク・ウオリアーは隕石の如く、引力による勢いという力を与える。

「更に俺は、墓地のレベル・ステイラーの効果発動！ ジャンク・ウオリアーのレベルを1つ下げ、攻撃表示で特殊召喚する！」

【ジャンク・ウオリアー 星5 4 / 闇属性 / 戦士族 / ATK 4
300 / DEF 1300】

幾度となく遊星によって呼び出されるレベル・ステイラー。

しかし、こんどはこれまでの様に守備表示ではなく、攻撃表示で特殊召喚されている。

大人しかつた昆虫は、まるで牙を剥いた獣の様に攻撃的な態度を取っている……。

「バトル！ ジャンク・ウオリアーで、混沌幻魔アーミタイルを攻撃！ 『スクラップ・フィスト』！！」

強烈な拳による鉄槌、それが巨大なアーミタイルの腹部に炸裂。

同時に超過ダメージがデュエルロボを襲う。

まるで鉄球でもぶつかってきたのではないか、と錯覚する程の激痛にデュエルロボの表情が苦痛に歪む。

【デュエルロボ LP14000 9700】

「グアアアアッ!? ダ、ダガ、アーミタイル八戦闘デハ破壊サレナイ!!!」

「解っている！ 続けてニトロ・ウオリアーで、ビースト・ウォルフを攻撃!!!」

交代する形で飛び出すニトロ・ウオリアー。その手には熱い炎が宿る。

「ニトロ・ウオリアーは、自分が魔法カードを発動した時、ダメージ計算時に攻撃力を1000ポイントアップさせる！ 『ダイナマ

イト・ナツクル』！！』

【二トロ・ウォリアー 星7 / 炎属性 / 戦士族 / ATK 2800
3800 / DEF 1800】

ウォルフの杖を掻い潜り、一撃を叩き込む二トロ・ウォリアー。その破壊力を前に体勢をガクリと崩し、ウォルフは音を立てて倒れ込んだ。

「ウグオオオオオツ！？」

【デュエルロボ LP9700 8000】

【二トロ・ウォリアー 星7 / 炎属性 / 戦士族 / ATK 3800
2800 / 1800】

更にその攻撃時に起きた衝撃が、デュエルロボを襲う。

一陣の強風を前にデュエルロボは思わず頭を両腕で覆った。

「二トロ・ウォリアーのモンスター効果発動！ 『ダイナマイト・インパクト』！！」

だが、空かさず遊星の二トロ・ウォリアーの胸から放たれる赤い光線が、魔道雑貨商人を攻撃表示に変更。再びバトルを仕掛けようと、二トロ・ウォリアーが身体を唸らせている。

「二トロ・ウォリアーが相手モンスターを破壊した時、相手の表側守備表示モンスターを選択して、攻撃表示に変更し、続けて攻撃を行うことが出来る！！』」

「いよっしあっ！！！！』」

「上手いぞ遊星！！』」

遊星の説明通り、魔道雑貨商人と二トロ・ウォリアーによるバトルが唐突に開始され、防御するを与えず、魔道雑貨商人を一蹴。攻撃を受けたモンスターは軽々と撃破されてしまう。

「ウガオアアアツ!!!?」

【デュエルロボ LP8000 5400】

「クソツ、不動遊星イイツ……」

激痛に悲鳴を上げ、憎々しいとその歪んだ眼差しでデュエルロボは遊星を睨む。

「まだまだ！ 畏発動、『イクイップ・シュート』!! 自軍のモンスターに装備された装備カード1枚を相手モンスターに移し、そのモンスター同士で再びバトルを行う!! 俺はアーミタイルを選択し、ジャンク・アタックを装備させる！」

「ナ、何ダトオオツ!!!?」

ジャンク・ウォリアーに装備されていたジャンク・アタックが、まるで拘束具の様にアーミタイルに憑り付く。アーミタイルは振り解こうとするが、外れる気配はなかった。

「ジャンク・ウォリアー、再びその巨体に拳を叩き込め!! スクラップ・フィスト!!!」

その一瞬の隙を点き、再び懐へと飛び込むジャンク・ウォリアー。力を限界まで振り絞り、叩き込まれた非常に強烈な一撃がアーミタイルの内臓を抉る。

対し、攻撃を受けたアーミタイルは、その痛みを隠せず、悲鳴を上げ、更にもがき苦しんだ。

そしてその超過ダメージが、デュエルロボのライフを直撃する……。

【デュエルロボ LP5400 1100】

TURN - 12 武闘円舞（バトルワルツ）（後書き）

今回の最強カード

【ロードランナー 星1 / 地属性 / 鳥獣族 / ATK 300 / DEF 300】

「このカードは攻撃力1900以上のモンスターとの戦闘では破壊されない」

え、こいつが今回の最強カードかよ!? ……言わないで下さい。正直私も思いましたが、今回遊星を救ったということで、今回はこれを最強カードにチョイスしました。

効果は『翻弄するエルフの剣士』と同じであるが、このカードはエルフ以上に使い難い。攻撃力があまりにも低過ぎる為、普通に殴り倒されてしまうのである。一応、社長扮する正義の味方には勝てるが、彼と戦う機会は絶対と言っていい程無いだろう。

となれば、鳥獣族という事を活かして『ゴッドバードアタック』や地属性という点を活かして『地霊術 「鉄」』のコストとして使用出来るが、それなら他のモンスターでも可能。レベルが低い点を利用しようにも、同じ鳥獣族で低レベル、尚且つ強力な『シールド・ウイング』が存在している。当然アニメでもその扱い易さから『シールド・ウイング』の方が出番が多く、このカードは効果を使えぬまま破壊されるという噛ませ犬的な立場となってしまう。（その後は大抵墓地より蘇生され、シンクロ素材とされるのが一般的なアニメでの流れ）

もはや、完全なマスコットモンスターと化している。クリボン？何それ美味しいの？（失礼）

因みにその姿が『音速ダック』とよく似ている。名前も英名では

音速で走れるということになっていくらしく、もしかすれば何らかの繋がりがあるのかもしれない。

……実は数少ない、希少な地属性鳥獣族である。見付けたら撃破せずに保護しよう。きっと絶滅危惧種に違いない。

TURN - 13 ジェネレーション・チェンジ（前書き）

遂にこの5D・s章も終了。次回からは新しい章に移ります。まあ、その前に仮面ライダーの方を更新させる予定なので、また次の更新に一月位掛かつちゃうんですけど。

そもそも、この小説をご覧になって下さる方ってどれだけいるんだろう？ そんな人達が見てくれているのだろうか？ その人も決闘好きなのだろうか？ 考えれば考える程世界は広がります。

……一分悪い方に。

さて、今回は遊星が使用したことがないカードが1枚登場します。理由は色々あるのですが、取り敢えず内容の辻褄だけは『多分』あっていると思いますので、どうぞご覧ください。終盤には次世代のあの人も登場。

皆さんから、面白い決闘展開だったという言葉を聞く為に、これからもトマトは楽しい決闘展開を目指して頑張っていく予定です。どうか皆さま、ご迷惑をお掛けしますが、どうか宜しくお願い致します！

苦しみの叫びを上げるアーミタイルを前にし、フツと静かに笑みを浮かべる遊星。

対し、デュエルロボは苛立ちを隠し切ることが出来ず、非常に苦い表情で対峙している遊星を睨んでいた。ギリギリとセキュリティが口語機能の為に造った人口の歯を食い縛って、目を血走らせている。

だが、まだ遊星のバトルフェイズは終わっていない。遊星の場には、今にも飛び掛かろうとしているモンスターが2体、今か今かと自分の攻撃する機会を待っていた。

「奴のライフは、残り1100ポイント」

「遊星の場の『レベル・スティーラー』と『マツシブ・ウオリアー』の攻撃力の合計は1200!」

「この攻撃が通れば、遊星の勝ちよ!」

遊星が決闘に王手を掛けたことを声を上げて喜ぶ仲間達。ジャックとクロウは口元を緩ませ、アキは胸元で手を合わせ、遊星がこのまま勝利することを祈っている。他の者達も、誰一人表情を曇らせではない。皆、彼の勝利に表情を明るく物へと変えていた。

「行くぞ! 俺はマツシブ・ウオリアーで、『混沌幻魔アーミタイル』に攻撃!」

遊星の指示を受け、岩石の身体を持った戦士が巨大な悪魔に飛び込んだ。

小さな衝撃だが、それは的確に悪魔の身体を殴打し、デュエルロボのライフを相応の衝撃が襲った。

【デュエルロボ LP1100 500】

「やったあつ！」

削られたライフを見て、龍亞が大きくびよんびよんと飛び跳ねる。着地と同時に龍可の手を握り、妹を軸にぐるぐると回って、殆ど決定している遊星の勝利を喜んだ。

「これで止めだ！ レベル・ステイラーでアーミタイルを攻撃！」

続いて天道虫型モンスターが、その羽を広げて飛び立ち、攻撃を仕掛ける。小さな身体ながらも、昆虫はアーミタイルに一撃を喰らわせる。

「畏発動！ 『デストラクト・ポジション』！」

だが、その瞬間デュエルロボの足許に伏せられていたカードが表を向いた。同時に光となって、彼の中の白い竜が消滅していく。

「何っ！？」

「デストラクト・ポジション。コレハ、俺ノ場ノモンスター1体ヲ選択シ、ソノモンスターヲ破壊スルコトデ、ソノ攻撃力分ノライフヲ回復スル！ 選択シタ『ライトロード・ドラゴン グラゴニス』ノ攻撃力ハ3200。ヨツテ。俺ノライフハ3200ポイント回復スル」

攻撃が炸裂する直前に回復するデュエルロボのライフ。グラゴニスの身体を粒子に変え、光となったモンスターの命が彼の身体に吸収されていく。

そして小さな攻撃が炸裂した。

【デュエルロボ LP500 3700 3100】

ニヤリと浮かべた笑みが非常に憎たらしい。デュエルロボを後一歩まで追い詰めた遊星は、苦々しい表情で舌を打ち、悔しさを込めて拳を握った。

対するデュエルロボは、ライフと共に余裕を取り戻し、逆に今度は遊星に向けて、してやったりと笑みを浮かべる。

「カードを1枚伏せ、ターンエンドだ」

仕方なく遊星は残された手札を決闘盤にセットし、そのターンを終える。

同時にデュエルロボがデッキトップに手を置き、その1枚を引いた。

「おつしい〜っ！ あとちよつとだったのにい〜っ！」

「大丈夫だ。このターンを凌げれば、アーミタイルはまた攻撃力0に戻る」

「『リミット・リバーズ』で特殊召喚されたアーミタイルは、守備表示にすることが出来ない。次の遊星のターンのバトルフェイズで、あいつのライフを確実に削ることが出来るんだ」

眉をへの字に寄せ、指をパチンと鳴らす龍亞。

憤慨する龍亞の肩に手を置き、クロウが彼を安心させようと言葉で優しく宥める。

同じくブルーノも、表側になっている永續罫に目を向けながら、龍亞に説明した。

(……そうだ)

そんなクロウ達の言葉を聞き、反応する者が居た……遊星本人だ。遊星は無言のまま自分の場に裏側表示で伏せられた1枚のカードに目を向け、改めてデュエルロボのフィールドを見回す。

その表情からは安堵が伺える。取り敢えず、このターンは凌げるという自信が、その笑みには浮かんでいた。

「フフフ……」

だが、デュエルロボはそれ以上の笑みを浮かべている。思わず遊星の表情が不安で曇った。

「残念ダガ、貴様二勝利八訪レナイ。……コノカードガアル限り！」
そう言つて、デュエルロボは1枚のカードを者達に提示。気の所為か、そのカードからはアーミタイル以上の力を遊星は感じ取った。
「俺ノデッキノ切り札ハ、アーミタイルデハナイ。コノデッキノ本当ノ切り札……ソレガコレダー!!!」

デュエルロボが、自ら切り札と称するカードが彼の決闘盤に差し込まれる。

すると、出現したカードから白く輝く強烈な光が一齐に溢れ出し、遊星達の視界を一色で染めた。

「くっ！」

「ま、眩しい！」

「何なの……この光は!？」

思わず手で光を遮ろうとする遊星達。

だが、その光はそれさえも突き破って遊星達の目に白い光を届かせた。

「くっ………あ、あれは!？」

臆て、徐々に静まっていく光。その奥に遊星は1つの巨大な影を見付けた。

恐ろしい程の威光で身を包む物体。その姿は……そう、ドラゴンだった。

それも、光属性のライトロードの頂点に立つに相応しい姿をした、神の如く神々しいドラゴンだった。

「出デヨ！ 我が最強ニシテ最凶の僕！！」
『ジャッジメント・ドラゴン裁きの龍』！！！！

召喚されたモンスターは、デュエルロボのフィールドで大きく咆哮。
ジャック達は直ぐ様その轟音に耳を覆うが、デュエルロボは心地

良い音色を聴くかのように耳を傾ける。

ジャッジメント・ドラゴン

【裁きの龍 星8 / 光属性 / ドラゴン族 / ATK 3000 / DE

F 2600】

「ジャ、裁きの龍だと!？」
ジャッジメント・ドラゴン

「嘘でしょ!？ 何のコストも無しに攻撃力3000の最上級モン

スターを特殊召喚だなんて……」

そのアーミタイル以上の威圧感を醸し出すモンスターに驚きの声を上げるジャックと龍可。

「コノ裁きの龍八、自分ノ墓地ニ『ライトロード』ト名ノ付クモンスターガ4種類以上存在シテイル場合、手札カラ特殊召喚スルコトガ出来ルノダ……！」

「何いつ!?!」

「それって、殆ど無条件と変わりないじゃないっ!?!」

初めて見た、その強力なドラゴンモンスター。

そのあまりの安易な召喚条件に牛尾と狭霧は、驚愕の声を上げずにはいられなかった。

もしかすれば、シンクロ召喚よりも遥かに容易かもしれない。そんな一言が彼等の脳裏を過ぎる。

「ソレダケデハナイ。コノ裁きの龍八、1000ポイントノライフヲコストニスルコトデ、場ニ存在スル裁きの龍以外ノカードヲ全テ破壊スルノダ……！」

「全てのカードを破壊するだ?!?!」

「何だよ、そのインチキカード!? 効果強過ぎだろおおっ!?!?!」

更に裁きの龍に秘められた特殊効果を聴き、遊星達の驚愕は、より大きなものとなる。その強力過ぎる効果には、強力効果を幾つも備える『BF』^{フブラック・フェザー}を駆るクロウですら、インチキと称した程だ。

そして改めて見れば、裁きの龍の額にある2本の角が、神々しく輝き出しているではないか。

聴て、角は光を蓄えられる臨界点を超えたのか、その間で丸い光球と化していく……。

「全テヲ破壊シテシマエ……『ヘヴン・ザ・ジャッジメント』!!!!」

【デュエルロボ LP3100 2100】

次の瞬間、光は一気に解き放たれ、フィールドに存在する全てのカードをその波動で襲った。

崩壊していくフィールド。ガラスの様に音を奏でて破壊されていくカード達。遊星の場に存在していた、『ニトロ・ウォリアー』やマツシブ・ウォリアー、更には巨大なアーミタイルもその犠牲となっていく。

「くっ！ 畏発動、『シンクロ・バリアー』！」

だが、波動が全てを飲み込む寸前に遊星は伏せていたカードを発動。

構えていた『ジャンク・ウォリアー』が波動炸裂前に消滅し、その身体で薄いベールを作り、遊星を包んだ。

「自分の場に存在するシンクロモンスター1体をリリースして発動！ 次のターンのエンドフェイズまで、俺への全てのダメージを0にする！！」

「チツ！！」

波動が止んだ時、場には裁きの龍以外のカードは存在してはいなかった。

まるで戦争でも起きたかの如く、フィールドは一瞬にして焼け野原と化してしまっていた。

「そんな……遊星の場にカードが無くなっちゃった」

「このターンはダメージを受けないけど、遊星に残されたカードは……」

龍亞と龍可、2人の絶望し切った声が悲しくこの倉庫に居る者達全員の耳に届く。

そんな中、遊星は自分のデッキの一番上を見詰めていた。

「ダメーシヨ与エラレナイノデアレバ、コレ以上ノ動クノモ無駄カ。裁きの龍ノ効果デ、エンドフェイズニデッキカラ4枚ノカードヲ墓地ニ送ル。チツ、『オネスト』ガ墓地ヘ送ラレタカ……貴様ノターンダ！」

「俺のターン！」

全てのカードを失った遊星の手に新たなカードが加わる。先程まで彼が目一杯望みを託していたカード。

そのカードの名称を確認するや否や、遊星はそれを表側表示で決闘盤に設置した。

「俺は、『ミスティック・パイパー』を攻撃表示で召喚！」

【ミスティック・パイパー 星1/光属性/魔法使い族/ATK
0/DEF 0】

遊星の場に召喚されたのは、小柄な魔法使い族モンスターだった。「ミスティック・パイパーのモンスター効果発動！ このモンスターをリリースすることで自分のデッキから1枚ドロウすることが出来る。更にそのカードがレベル1のモンスターカードだった場合、お互いに確認することで、更に1枚ドロウすることが出来る！」

そう言うつと、遊星は再びデッキトップに手を置き、カードを引く。引いたカードを見て口元を緩ませると、彼はそのカードをデュエルロボへと見せ付けるように提示した。

「俺の引いたカードは、『速攻のかかし』。レベル1モンスターだ！ よって、更にもう1枚ドロウ！！俺はこれでターンエンドだ！」

そう告げると同時にジャンク・ウォリアーで形成されていた、遊星を包んでいたベルが剥がれ落ちる。それは、デュエルロボにターン権が移ったことを示していた。

引いたカードを確認し、小さく舌打ちをしてカードを引くデュエルロボ。

彼もカードを確認するや否や、そのカードを決闘盤に装填。

但し、その場所はモンスターゾーンではなく、魔法や罫をセットする為のロットだった。

「俺八手札カラ魔法カード、『貪欲な壺』ヲ発動！ 墓地ニ存在スルモンスター5枚、『ライトロード・エンジェル ケルビム』、『

ライトロード・パラディン ジェイン』、『ライトロード・ブースト ウォルフ』、『ライトロード・マジシャン ライラ』、『オネストヲデッキニ戻シ、シャッフル。ソノ後、デッキカラ2枚ドロ！』
手札枚数を僅かにだが回復を果たしたデュエルロボは、そのまま多くの手札を持つ右手を遊星へと向け、裁きの龍へと攻撃を指示する。

「裁きの龍デ、直接攻撃！！ 『ジャステイス・ジャツジメント』！！」

「この瞬間、手札の速効のかかしのモンスター効果を発動！！」

「解ッテイル！」

「相手の直接攻撃宣言時にこのカードを手札から墓地に送ることで、その攻撃を無効にし、相手のバトルフェイズを強制的に終了させる！！」

裁きの龍が吐き出した光のエネルギーを一身に受ける速攻のかかし。

エネルギーを受け切るものの、その後直ぐにかかしはポツキリと折れ、そのまま遊星の墓地へと埋葬される。

「墓地ニ4枚ノカードヲ送り、ターンエンド。墓地ニ送ラレタビル」
スト ウォルフノ効果デ、コノモンスターヲ攻撃表示デ特殊召喚スル」

デュエルロボの場に新たなモンスターが呼び出されると同時に彼のターンが終わりを告げる。

彼のエンド宣言を確認すると同時に遊星はデッキからカードを1枚引いた。

「遊星の手札にはカードが2枚」

「でもあいつのモンスターの前では、何枚カードを出しても1000ポイントのライフで抹消されちまう。一体どうするつもりなんだ、遊星！？」

「遊星……」

ジャック、クロウ、アキの3人が心配そうに声を上げる。

彼等の視線の先では、遊星が必死に自分の手札を見詰めていた。
「俺はモンスターをセツト！ これでターンエンドだ」

だが、彼等の期待に反して、遊星が行ったプレイングは単調で一般的なモンスター召喚だけであった。

横に裏側で表示されたモンスターが出現しただけで、遊星のターンは終了してしまう。

「フン、ヤハリコノ裁きの龍相手ニ八何モ出来ンヨウダナ。俺ノターン！」

カードを引くと同時に再び裁きの龍が自らの角に破壊の光のエネルギーを収束させ始めた。

「行くゾ！ 裁きの龍ノモンスター効果発動！！」

【デュエルロボ LP2100 1100】

「全テ消シ去レ！！ ヘヴン・ザ・ジャッジ」

「その効果は発動させない！ 手札から、『エフェクト・ヴェーラー』の効果を発動！ このカードを墓地に送り、相手のモンスター1体のモンスター効果をエンドフェイズまで無効にする！」

「何ダトツ！？」

だが、その光の輝きは突然勢いを失い、臆て小さくなって完全に消滅。

遊星の場には、未だにモンスターが1体残されている。

「これでお前は、ただ無駄にライフコストを払うだけに終わってしまつたという訳だ」

「オノレ不動遊星！！ ダガ、オ陰テ俺ノウオルフモ無傷！ コノバトルフェイズデ貴様ヲ葬ツテクレルワ！！ 俺ハ手札カラ、『ライトロード・ウォリアー ガロス』ヲ召喚！」

【ライトロード・ウォリアー ガロス 星4 / 光属性 / 戦士族 / ATK 1850 / DEF 1300】

デュエルロボのフィールドに再びモンスター達が並べられる。

筋肉隆々の長槍を持った兵士が、勇ましい姿で彼の場に登場した。「やべえぞ！　いくら奴の強力モンスター効果を無効にしたからって、1体のモンスターであの大群の攻撃を防ぎ切るのは無理だ！」

「そんなあつー！」

「遊星が負けちゃうのー！？」

3体のモンスターを前に悲観的な発言を発する牛尾。それに影響を受け、龍亞と龍可からも弱気な言葉が飛び出す。

隣ではジャックとクロウ。そしてアキやブルーノが、どうにか遊星がこのターンを凌げないか、と僅かな軌跡を望んで、拳を握り締めながら起死回生を願っている。

そしてモンスターが動き出した。

杖を持った半獣が、遊星の守備モンスターに襲い掛かったのだ。

素早い一閃の前に切り伏せられる遊星の守備モンスター。三輪型の小型機械族モンスターが、遊星の場から消滅する。

「だがこの瞬間、破壊された『トライクラー』のモンスター効果が発動！　戦闘によってこのカードが墓地へ送られた場合、デッキまたは手札から、『ヴィークラー』を1体特殊召喚することが出来る。俺は守備表示でヴィークラーを特殊召喚する！」

【ヴィークラー　星2/地属性/機械族/ATK　200/DEF
200】

「クソツ、小賢シイ雑魚モンスターガツ！？　ガロスー！！」

続けて飛び込んだのは先程呼び出された戦士族モンスター。

彼の長槍が、一瞬にしてヴィークラーの身体をグサリと貫いた。

「ヴィークラーにもトライクラー同様にモンスターを特殊召喚する効果がある。俺はデッキから、『アンサイクラー』を守備表示で特殊召喚するー！」

【アンサイクラー 星1/地属性/機械族/ATK 1000/DEF 1000】

「オノレエエエエエエエツッ!!!」

デュエルロボの怒りの叫びに応えるように裁きの龍が破壊の光を口から吐き出す。

白い輝きに飲み込まれ、一輪型の三男坊モンスターは高熱に焼け爛れ、粉々となって完全消滅した。

「どうした？ まだ俺のライフは残っているぞ。次の攻撃はどうする？」

「クッ！ エンドフェイズニカードヲ4枚墓地ニ送ル……」

何も出来ず、どんどんとデッキを消耗するデュエルロボ。

そこで再びターン権は遊星へと舞い戻る。

「フッ……俺のターン!!!」

デッキトップに指を置き、スッとカードを引き抜く遊星。

そのカードが自分にだけ見えるよう翻された際、彼の両目がカッと開いた。

「っ！ 来た!!! 俺がこの状況を逆転できる可能性を秘めたカード!!!」

その遊星の微妙な変わり様に仲間達がざわつく。

何を引いたのか。その笑みの意味は一体何なのか。彼等は遊星の打つプレイングを待った。

「行くぞ！ 俺は手札から、『シンクロン・エクスペローラー』を召喚!!!」

【シンクロン・エクスペローラー 星2/地属性/機械族/ATK 0/DEF 700】

引いたカードがそのまま遊星の決闘盤に設置され、直ぐにその力

ードに宿るモンスターが登場。

赤い輪の様な身体をした奇妙なモンスターだが、その効果を知る者からすれば、現状の遊星にとっては頼れるモンスターであることは一目瞭然だ。

「シンクロン・エクスプロローラーの召喚成功した時、墓地に存在する『シンクロン』と名の付くモンスターを1体選択し、効果を無効にして特殊召喚することが出来る。俺は墓地から、『ジャンク・シンクロン』を守備表示で特殊召喚する！！」

エクスプロローラーの右隣に三度登場するジャンク・シンクロン。

「更に俺のフィールドにチューナーが存在することにより、墓地から『ボルト・ヘッジホッグ』を守備表示で特殊召喚！」

そして更にその隣にまたもや姿を見せる針鼠型モンスター、ボルト・ヘッジホッグ。

遊星の場にも、合計3体のモンスターが並んだ。

「行くぞ！ レベル2のボルト・ヘッジホッグとシンクロン・エクスプロローラーにレベル3のジャンク・シンクロンをチューニング！！」

そしてジャンク・シンクロンを中心に全てのモンスターが宙を舞う。

チューナーである彼のアクセルが轟音を響かせ、他の2体のモンスターを調律していく。更にそのまま輝く星となった彼等は、新たな姿へと変化していく。

「レベル7……まさか！？」

「遊星は此処であるのモンスターを出そうとしているのか！？」

クロウとジャック、2人が思わずその光景に声を上げる。彼等には遊星が何をしようとしているのか、予測程度だが理解したのだ。

「集いし勇気が希望を守る使者となる。光差す道となれ！」

そのとても聞き覚えのある台詞と、よく似た召喚台詞に反応を見せなかった者はいない。誰しもが彼がそう告げると同時に小さな少年の顔を見たのだ。

キラキラとした目を見開き、口をポカンと開けた少年、龍亞の前で変貌を遂げる遊星のモンスター達。

そのモンスターを龍亞は本当に自分達の世界を守ってくれる、希望の使者のように見えた……。

「シンク口召喚！！ 未来の為に立ち上がれ、『パワー・ツール・ドラゴン』！！！」

【パワー・ツール・ドラゴン 星7/地属性/機械族/ATK 2300/DEF 2500】

遊星達の希望の使者は、機械の身体を持つ黄色のドラゴンであった。

腕にはドライバーやシャベルといった、その名の通り様々なツールが取り付けられている。その赤い目は、自分より遙かに強力な白いドラゴンを睨んでいた。

「龍亞！」

「っ!？」

「お前の力を借りるぞ!!！」

「あ……うんっ!!！」

龍亞は遊星に向かって満面の笑顔を向け、自分にとっての最高のヒーロー達に声援を送った。

その声を耳で受け取り、遊星達も動く。腕を大きく掲げたパワー・ツールが、彼のデッキから3枚のカードを抜き取ったのだ。

「パワー・ツール・ドラゴンのモンスター効果発動！ デッキから装備魔法カード3枚を選択し、相手はそこから1枚をランダムに選択する。そして選択されたカードは俺の手札に加わり、残りは再びデッキに戻す。俺が選んだのは、『ファイティング・スピリッツ』、『デーモンの斧』、そして『巨大化』の3枚だ！」

選択されたカード達は、裏側表示で遊星の場に立体映像として出現。

デュエルロボの表情が一瞬苦悶で歪む。

「ゆ、遊星のデッキに巨大化とかデーモンの斧とか、そんなの入ってたかあっ!?!」

「あいつ……龍亞からカードを受け取った時、密かに装備魔法を増やしていたな」

選択された装備魔法の名称に驚くクロウ。ジャックは冷静に分析し、フフと彼のしたたかな細工に笑みを溢す。

「さあ……選べ!」

「オノレツ!?! ……右端ノカードダ!」

選択されたカードが遊星の手札に加えられ、残りが光となってデッキに戻り、自動的にカードの束はシャッフルされる。

装備カードを加えた遊星は、効果処理を終えた途端、直ぐ様加えた1枚をパワー・ツールに装備させた。

「俺は手札に加えた巨大化をパワー・ツール・ドラゴンに装備!

俺のライフが相手より少ない時、装備モンスターの攻撃力を倍にする!」

【パワー・ツール・ドラゴン 星7/地属性/機械族/ATK 2300 DEF 2500】

「攻撃力4600ダトオツ!?! 俺ノ裁きの龍ヲ上回ルトイウノカアツ!?!」

攻撃力と共に大きさまで巨大化する遊星のドラゴン。大きく強化されたドライバーの腕を振り翳し、希望の使者は裁きを下す正義の白い龍に恐れを見せず突撃する。

「行くぞ! パワー・ツール・ドラゴンの攻撃、『ビッグ・クラブテイ・ブレイク』!」

強烈な一撃が裁きの龍を一蹴。ドライバーの刃に貫かれた白い龍は、呻き声を上げてズズンと倒れ込んだ。

【デュエルロボ LP11000】

「敗北、自ラノ決闘敗北ヲ確認。……機能停止シマ」
ライフが0になると同時にデュエルロボもモンスター同様、音を立ててドサリと倒れ込む。

決闘は遊星の勝利に終わり、フィニッシャーとなったパワー・ツール・ドラゴンは満足そうにカードに戻っていった……。

「遊星！」

「遊せーい！！」

決闘を勝利で収め、一息着く遊星の許へ駆け寄る仲間達。

特にパワー・ツールの持ち主である、龍亞は真つ先に遊星の胸へと飛び込んでいた。

「遊星、やったね！！」

「ああ。龍亞の貸してくれたこのカードのお陰だ」

龍亞を片手で支えながら、借りていたパワー・ツール・ドラゴンを返す遊星。

カードを受け取った龍亞は、「よくやったぞ」と受け取ったカードにスリスリと頬擦りする。

妹である龍可は、そんな兄の姿に小さく微笑んだ。

「さあ、チーム5D's。いよいよ過去へと旅立つ時です」

「ご安心下さい。このデュエルロボに関しては、我々セキュリティが責任を持って管理、調査します」

「頑張つて来いよ、遊星、クロウ、ジャック、皆！ 良い土産話、期待してるぜ」

その後ろからは、イエーガーや狭霧、牛尾達が遊星達の旅立ちを見送ろうと集まってきていた。

因みに倒れたデュエルロボは、大柄な牛尾が担いでいる。

遊星は彼等の声援を受け、小さく口元を緩ませると、仲間達が作り上げてくれた希望の船へと視線を移し、ジャックやクロウ、チーム5D'sの仲間達に自分達の旅立ちを高らかに告げた。

「さあ、行こう！ 俺たちの未来を守る為に！！ 俺達は過去へ飛ぶ！！！」

その言葉に仲間達はそれぞれ異なった反応を見せ、彼等は希望の船へと乗船していった……。

何処かの時代、何処かの国。此処は数ある世界の中の1つ。

乾いた風が吹き統べる乾いた土地。とある村の付近の荒野で、今2人の少年が決闘盤を構えていた。

片方は金髪が特徴の薄めの白いシャツを着た若い年頃の少年。もう一人は、茶色と黒が入り混じった髪をし、肥満気味な猫が首を覗かせたりユツクを背負い、赤い上着を羽織った少々奇妙な少年だ。

その赤い上着の少年は、この決闘が始まってからというもの、ずっと笑顔を崩さなかった。決闘を心から楽しんでいる。……まるで太陽の様な少年だった。

「僕は場の『カイザー・サクリファイズ』を生け贄に、手札から『地帝グランマーグ』を攻撃表示で召喚！」

少年の場に入れ替わる形で岩を操る大型のモンスターが出現。とても強力なモンスターであるということが、その剛腕やその巨大な姿から容易に想像出来る。

【地帝グランマーグ 星6 / 地属性 / 岩石族 / ATK 2400 / DEF 1000】

「うお〜！ 岩丸が使ってた帝王モンスターだ。あはっ、ホント懐かしいなあ〜」

『そんなことを言っている場合かい？ 奴を知っているなら、その強力な特殊効果も解っている筈だよ』

「ああ、解ってるって。心配すんなよ！」

「またもや赤服の少年が奇妙な言動を取っている。先程から彼の言葉には、意味が解らない物が多い。」

「赤服の彼は、まるで金髪の少年には視認出来ない何かと会話しているようなのだ。……いや、実際に彼には見えない、ある存在と赤服の少年は会話していたのだ。」

「デュエルモンスターズの精霊と呼ばれる、特別な者にしか見えない存在と。」

「決闘を続行するよ！ グランマーグの効果発動。このカードが召喚に成功した時、セットカードを1枚破壊する。僕は君の伏せカードを破壊するよ！」

「剛腕から繰り出される一撃が、赤服の少年の伏せカードを粉々に打ち砕く。」

「紫色の破片が、ちらりと金髪の少年の目に入る……畏カードだったということ彼は悟った。」

「うわっ!? 『攻撃の無力化』が!?」

「ホラ。いわないことじゃない。……さて、此处からどうするんだい十代?」

「へへっ! まあ見てろって」

「悔しそうに破壊されたそれを決闘盤のセメタリーゾーンに送る十代と呼ばれる赤服の少年。」

「更にカイザー・サクリファイスは、生け贄召喚に使用された時、このカードを再び手札に加えることが出来る。そして、グランマーグで君の『フレンドッグ』を攻撃。『バスター・ロック』!」

「うわっ!? フレンドッグ!?」

「剛腕の一撃を受け、十代のモンスターが破壊される。」

「更にその超過ダメージが、彼のライフを直撃した。」

【十代 LP2800 1200】

「フレンドッグが戦闘によって墓地に送られた時、自分の墓地から

エレメンタルヒーロー

『E・HERO』と『融合』のカードを1枚ずつ選択して、手札に加える。俺は『E・HERO バーストレディ』と融合を加える」

「僕のターンはこれで終了だ」

「よし！ なら俺のターンだ。ドロロー！！」

自分の番が回ってくるや否や、十代は直ぐ様カードをドロロー。そのカードを確認すると、突然になって小さな子供の様に喜び出し、やったやったと飛び跳ね始めた。

「行くぜ、俺は手札から魔法カード、『黙する死者』を発動！ 墓地から『E・HERO フェザーマン』を守備表示で特殊召喚する。来い、フェザーマン！」

【E・HERO フェザーマン 星3/風属性/戦士族/ATK 1000/DEF 1000】

十代の場に緑色の身体をした、翼を持つ戦士が登場。腕を前でクロスさせ、しっかりと守備の体勢に入っている。

「よっしゃあつ、反撃開始だぜ。手札から融合を発動！ 手札のバーストレディと、場のフェザーマンを融合。出でよ、My Favoriteモンスター、『E・HERO フレイム・ウイングマン』！！」

歪んだ渦の中に飛び込む2体のHERO。

すると、渦の中から2体の特徴を併せ持つ1体の別のHEROが参上した。

【E・HERO フレイム・ウイングマン 星6/風属性/戦士族/ATK 2100/DEF 1200】

「融合モンスター。……でも僕のグランマ・グの方が攻撃力は上だ」
「でも、それがそうじゃないんだなあ。更に俺は手札から、『ヒートハート』を発動！ このカードの効果で、フレイム・ウイ

ングマンの攻撃力は500ポイントアップする！」

【E・HERO フレイム・ウイングマン 星6 / 風属性 / 戦士族
/ ATK 2100 2600 / DEF 1200】

「そんなっ!?!」

『へえ、やるじゃないか』

十代が使用したカードが、フレイム・ウイングマンの心に炎を灯した。

気合の入った低い声を上げると、モンスターは低空飛行でグランマーグに向かっていく。

「行け、フレイム・ウイングマン! 『フレイム・シュート』!?!」

自らを炎の塊へと変えたフレイム・ウイングマンが、グランマーグを軽々と撃破。

グランマーグは先程のフレンドッグと同じく粉々になり、少年の墓地に沈んでしまう。

【少年 LP2300 2100】

「フレイム・ウイングマンの効果発動! 破壊して墓地に送ったモンスターの攻撃力分のダメージを相手に与える」

「えっ!?! うわあああああああっ!?!」

【少年 LP2100 0】

更にフレイム・ウイングマンの竜の様な右腕から吐き出された炎が、少年のライフを焼き尽くす。

少年は炎の勢いに怯えて頭を覆うが、その威力の前にライフを守り切ることが出来ず、残念そうにその場で両膝をガクリと着いた。

「ガツチャ！ ひっさびさに楽しい決闘だったぜ！」

十代は指を伸ばして少年に敬意を払うと、またもや太陽の様な明るい笑みをニッと顔に浮かべるのだった……。

今回の最強カード

【巨大化 装備魔法】

『自分のライフが相手より下の場合、装備モンスターの攻撃力は元々の攻撃力を倍にした数値になる。自分のライフポイントが相手より上の場合、装備モンスターの攻撃力は元々の攻撃力を半分にした数値となる。』

装備魔法の中でも、中々知名度の高いカードであり、効果も殆どイメージ通りとなっている装備カード。それがこの巨大化という装備魔法である。

装備したモンスターの攻撃力を2倍に増加させることで、モンスターの戦闘を有利にする。時には『収縮』として、相手に装備させる事も出来る。一時期これを利用した1ターンKillerが流行った事があり、多くの決闘者を恐怖に叩き落とした。

内容は、『青眼の究極竜』を『デビル・フランケン』の効果で特殊召喚し、これを装備して殴るという単純な物。

当時は『サンダーボルト』や『ハーピィの羽箒』等が制限だった為、これ等を利用したコンボは本当に脅威的であった。だからこそこの頃は、手札から使用出来る『クリボー』のカードは重宝されたのだ。現在はそのコンボの殆どが禁止カードに指定されてしまった為、永久的に封印されたが、巨大化は制限止まり（2011年3月より準制限に緩和）な為、今でもデッキによつては『団結の力』等と一緒に猛威を振るっている。

実は原作で一番最初に登場した装備魔法でもある。（多分最初の魔法でもある）その時の効果は、装備モンスターの攻撃力を20%

アップさせるといふ地味な物で、海馬の『ミノタウロス』がこれにより攻撃力が2040にアップしている。……が、直ぐ遊戯の『デimonの召喚』によつて破壊されてしまった。

他にも、映画では海馬が青眼の究極竜に使用。三幻神の一角であり、愛人とまで言われた『オベリスクの巨神兵』を相手に挑んでいる。GXでは万丈目が『早すぎた埋葬』で蘇生した『炎獄魔人ヘル・バーナー』に装備させ、1ターンキルを決めている。

因みに龍亞もこつそりと使用しており、その時はお互いのライフが同じ数値だった為、攻撃力の変動は起きず、単に『パワー・ツール・ドラゴン』の破壊無効の為の身代りにしかならなかつた……。

TURN - 14 右手に盾を左手に剣を（前書き）

という訳で、久々の更新！！ その前に漸くアンコール上映された劇場版遊戯王を拝むことが出来ました。勿論3D上映、期待は高まるばかりでした。

そして大体の感想なんですが

不完全燃焼

……残念ながら、これに尽きます。

話としては面白かった。3大主役人も本人登場で熱い。遊戯のドロシーンは感動の一言。更に更に先輩後輩の関係が完全に成り立っている。遊戯は頼れる先輩、十代は妙に一々反応するミーハー、遊星は何時も通りながらも結構喋る。

……が、どうにも話の展開が急過ぎる為、詰め込み過ぎなのがない。更に所々ルール無視したり、時空間上で矛盾が起きてたりもする。登場人物も少なく（ハネクリボーさえ見てない）、不満が残る部分は多い。

そして私が一番気に入らなかったのは、モンスターに喋らせたことだ。つまりブラマジとブラマジガール、彼等に喋らせるのは、正直気に入らなかった。

私にとって、喋るモンスターはユベルやネオス、宝玉獣など特別な事情を持ったモンスターだけにしたい。あんな、普通に会話されるのは正直気に入らなかった。私は堅物タイプ。そういった目

でモンスターを描かれるのが、あまり気に入らないタイプなのだ。

私は初期の頃からこのゲームを好んで続けている。今でも、暗黒騎士ガイアやバスター・ブレイダーが漫画やアニメで活躍していたのをよく覚えている。

今、現在アニメ等では、俗に言う子供に宜しくない描写等について問題視（よく知らない）されているが、取り敢えず遊戯王がそういった系中心、所謂大きなお友達アニメにならないことを望む。私はゲーム、友情、仲間、熱血、そういった遊戯王が大好きなのだ。遊戯王は、小から大、あるいは大人まで楽しめるものとしてこれからも続いて欲しい。

すいません、ただの独り言ですので、お気になさらずに。
では、スタートです！！

「うーん！ やっぱ、決闘の後の空気はマジ美味しいや。レッド寮に居た頃のメザシ定食やエビフライを思い出すぜ！」

晴れた青空の下、歴戦の決闘者の1人、遊城十代が大きく腕を伸ばし、背伸びして空気を一杯吸い込む。肺の中に沢山の酸素が取り込まれ、まるで水を飲んだかのように身体が潤った。

「おつ。ファラオ、お前も深呼吸か？ そうだよなあ、辺りには車もあまり通ってないし、空気が澄んでて美味しいよなあ！」

そんな彼の足元で、旅の友である自分の学生寮で寮長を営んでいたデブ猫、ファラオが口を大きく開けて鳴く。……が、呼吸のようにも見えるが、実際はただの大きな欠伸だったりする。

「ホントに十代くんは決闘が好きなんだにや〜。これでもう37回目、決闘に関しては正に疲れ知らずだにや〜？」

「まったく。ボクとしては、驚きを通り越して呆れるばかりだよ。此処まできたら、もう病気レベルだ。まあ、それでこそ十代って気がするけどね」

隣で頭を掻きながら苦笑いを浮かべているのは、ファラオの飼い主である大徳寺……の魂。

スラリとしたスリムな身体。だが微妙にその姿は半透明だ。

そして、方向性はどうであれ、十代のことを誰よりも深く愛し、支え続ける存在、『ユベル』。

やれやれと腕を組む彼（彼女？）もまた大徳寺と同様、その姿は半透明であった。

彼等も十代の旅仲間として、彼と共に今日までの日々を共に送っていた。

「だろだろユベル？ 何時でも何処でも、やっぱ決闘はサイコーだぜ！……！」

そう言つてファラオの頭を優しく撫でると、十代は改めてカバンを背負い直した。

そんな十代を見て、ユベルが静かに笑みを浮かべる。

『それより十代くん、そんなにのんびりしていて良いのかい？ 明日は万丈目くんや翔くん達が参加しているプロリーグ・ルーキー部門の決勝戦。翔くんから折角チケットを買ったのに、まさか行かないつもりなのかにや〜？』

「へっ？ そんな訳ないじゃん。折角翔が俺の為に、滅多に手に入らない超激レアのSSS席予約チケット送ってくれたんだぜ？ しかもプロになつた万丈目と翔の初決闘。これは見なきゃ損つてもんだぜ！」

十代が大徳寺に向け、学校時代から愛用していた電子機器型生徒手帳、通称PDAを提示。手の中に納まるPDAの液晶画面には、明日予定されている大会の予約チケットデータが映っていた。

「ああ、早く明日になんないかなあ！ 待ち遠しくて、今にも興奮死にしちまいそうだぜ！！」

『そんな前代未聞な死に方は、この世には存在していないんだにや』

大切にPDAをポケットに入れて、興奮を抑えることなく全て顕わにする十代。拳を握ったり、身体を震わせたりと、彼は落ち着きという言葉を知らないらしい。

その態度は、まるで散歩を待つ犬のようだと大徳寺は感じた。

だが、対し彼を支える存在であるユベルの顔は、次の瞬間曇ってしまう。

『でも十代、これは明日の午前10時に開始予定と書いている。今から此処を発つんじゃない、言い難いけど間に合わないんじゃないかい？』

「へっ？」

ユベルの一言に十代の興奮が、急転直下の勢いで一気に冷める。言うなればそう、『最終戦争』を『マジック・ジャマー』で無効に

されたような気分だ。

だが直ぐ十代は自分を取り戻し、まるで自分に言い聞かせるように言葉を繋げた。

「だ、大丈夫だって！ 3時の飛行機予約取ってあるし、まだ2時半だろ？ 今から空港行って飛行機に乗れば、明日には充分間に合うって！」

慌てながらPDAを操作して、今度は飛行機の予約チケットのデータを十代は画面に表示させる。

左手首に巻いた腕時計を確認しながら、彼はユベル、もとい自身を安心させようと説明する。

『……残念だけど十代。もう時間は既に4時を回っている』

「は？」

だが、十代の自信はユベルの一言で、恐ろしい程簡単に崩れ去った。

まるで子供が作った砂山のように。

その隣では大徳寺も言い辛そうだが、その通りだと十代にその顔で告げている。

十代の明るい笑顔も、氷河期を迎えたかのように凍り付いた。

「え、ええええっ！？ で、でも俺の時計はバッチシまだ2時半だって針が――」

慌てて腕時計を確認する十代。その目には微妙に涙が浮かんでいる。

そして緊張し切った彼の神経は直ぐに気付いた。

「止まってる……」

一定の個所から秒針長針共に微動だにしない腕時計を見て、十代が引き攣った顔でポツリと呟いた。

それを聞くと同時に、ユベルはやれやれとまたも首を横に数度振る。

『ジ・エンドだにや〜』

「う、嘘だろおおおっ！！？ どうすりゃいいんだあああああ

あああああああああつ！！！！？」

大徳寺の一言が突き刺さり、十代が嘆くように叫ぶ。

草木も生えない乾き切った大地に、十代の大声がやまびこの様に響いた。

そんな十代に呆れたのか、大徳寺やユベルに続き、ファラオまでもが再度大きな欠伸をする。

これもまた、小さく乾いた大地に響くのだった……。

そして時間は無情にも過ぎていき、聴て大会決勝当日へ……。

フルトアイズ・ホワイトドラゴン

『青眼の白龍』の頭部を模した巨大なドームは、朝から多くの決闘者及び決闘ファン達により大盛況だった。

それもその筈、今日はプロリーグ・ルーキー部門の決勝戦。当然、一番盛り上がる場面だ。

その人気は全国ネットで生中継される程。開始30分前にも関わらず、立ち見も出来ない程の大勢の人達でドームの観客席は溢れていた。

「アニキ、やつぱり来てないみたいす」

観客席の一番手前、SSS席と呼ばれる場所で水色の髪の少年、今日のリーグ戦に出場する丸藤翔こと『カイザー翔』が暗い顔をして落ち込んだ声を上げていた。

俯いた拍子に彼の丸い眼鏡が僅かにズレる。

その言葉を聞いた途端、彼とその客席に座る学園生活を共にした友人達の顔が少々暗くなる。

「そう。やつぱり十代は来ないのね……」

「ううっ！ 何でだドン！？ どうしてアニキは来てくれないザウルスウウ！？」

長身長髪の女性、アカデミア教諭を務める天上院明日香が仕方ないわね、と残念がる。

対し、黄色のアカデミア制服を着た独特の喋り方をする青年、翔

同様に遊城十代を兄貴と慕うティラノ剣山も、彼が欠席するという
ことに悲観。悲しいやら悔しいやら、涙まで流して寂しがっている。
「やっぱり彼は誰にも靡かない。その焦らしの技術、テクニク流石は十代君
彼の生き方は正にロマンと愛その物だねえ」

「あゝあ、折角十代サマの為にお弁当作ってきたのになあ。どし
よコレ」

探偵のような素振りで話すのは、明日香の兄である天上院吹雪。
残念そうに語ってはいるが、真っ赤なアロハシャツという場違い
な服装をしている故に、妹の明日香からは微妙に目を反らされてい
た。

そして長く青っぱい黒髪の少女、早乙女レイも残念そうに顔をプ
クツと膨らませ、小さな包みを両手で抱き締める。

「アニキ……」

更に時間は進み、遂に試合開始から10分前となった。

再び翔が肩を落とし、その口から十代を意味する言葉が漏れる。
学友達ともう一度出会うこと、中でも十代との再会を望んでいた
翔の態度は、本当に残念そうだった。

「……やはり十代は来なかったか」

「万丈目君！」

そこへ新たな来客、翔の対戦相手であり、同じアカデミアでオシ
リスレッド寮の質素な飯を食べた学友でもある万丈目準こと『万丈
目サンダー』が、不服そうな顔で訪れた。

その醤油の染みも軽く誤魔化せそうな黒い服は相変わらずで、翔
達に学生だった頃を思い起こさせる。

「今日はあの馬鹿に、この万丈目サンダーの更なるパワーアップを
遂げた姿を見せてやろうと思っていたのに……。これじゃあ、興奮
めもいいところだ」

舌打ちしながら頭をボリボリ掻き毟る万丈目。

その発言には翔もムツとしたのか、口を尖らせて万丈目に詰め寄
る。

「ちょっと万丈目君！ そんな言い方しないでよ！！ それにいくらアニキが此処に来ないからって、僕との決闘に手なんか抜くような真似しないでよね！？」

「誰が決勝で手を抜くか！？ 俺は全力でお前を叩き潰す！」

指を突き付けると、万丈目はそう言っただけで翔達の前から立ち去った。控室に戻ったのだらう、と同じプロ決闘者である翔はその事に直ぐ様気付いた。

「丸藤先輩、そろそろ試合開始時刻だドン。先輩も控室に戻らなくていいザウルスカ？」

「そうよ。デツキの最終調整もあるでしょう？ 今からでもデツキの見直しとかした方がいいと思うわ。何しろ相手はあの万丈目君なんだもの。貴方のデツキの内容は知り尽くしている筈よ」

「そ、そうっすね。僕もそろそろ控室に戻るっす。剣山君、明日香さん、吹雪さん、レイ、また試合終わった後で！ それと、僕の応援宜しくっす」

同様その事に気付いた剣山と明日香は翔に部屋に戻るよう促進。

翔はコクコクと頷くと、固い動きで自分の控室に慌てて戻っていた。

「翔君も随分大人になったねえ。まるで学生時代の亮を見ているようだ。これは数年後が楽しみだねえ」

「吹雪先輩、何の話してるんですか……」

走り去る後ろ姿に翔の兄である丸藤亮、『初代カイザー』の面影を見た吹雪が、指を顎に当ててウンウンと笑みを浮かべた。第三者からすれば、アロハでなければ、と心底悔やまれる格好だ。

そんな滑稽な先輩にレイは再び溜め息を着いた……。

『さあああああああつ！！ 遂にプロリーグ・ルーキー部門も決勝戦だあああつ！！ プロ決闘者の中でも、認定より1年以内の新人プロ決闘者達が熾烈な戦いを繰り広げ、遂に頂点を狙う2人が今此処に出揃ったああああああつ！！！！』

それから直ぐ、実況者の声がスピーカーよりドーム一杯に響き渡り、会場全体に決勝開始を宣言。

一瞬にしてドーム内の照明が落とされ、2人の決闘者の登場を出せる限りの大歓声で待つ。

『先ずは、此処まで全ての戦いをその力で軽く退けた脅威の決闘者！ 力と愛嬌は隣り合わせ、万丈目サンダーこと、万丈目準！！！！』

次の瞬間、全てのスポットライトが万丈目に集中。ステージに向けて歩く彼の姿を明るく照らした。

観客達の興奮は、沸点に達したお湯のように一気に上昇。湧き上がる歓声に万丈目は人差し指を伸ばした右手をグツと伸ばした。

『そして対するは、兄の想いとデッキを引き継ぎ、今や二代目カイザーの名を持つ強き決闘者、カイザー翔こと、丸藤翔！！！！』

今度は翔がスポットに照らされ、彼は観客全員から歓声と視線をその身体に湯水のように浴びた。

万丈目程ではないが、翔も手を振って彼等に応える。

臆て2人は光が集中する中央のステージに足を踏み入れて対峙。

真剣な眼差しで互いに見詰める。

同時に構えられた2人の決闘盤が起動し、決闘の準備が整った。

「行くつすよ万丈目君！」

「来い！ 二代目カイザー！！！」

「決闘！！！！！！」

観客の興奮が最高潮に達した瞬間だった。

2人の決闘者という獣が向き合った時、最高の戦いが幕を上げた。

「俺のターン、ドロー！」

先攻は万丈目。デッキから引いたカードを手札に加え、万丈目の手に6枚のカードが納まる。

「俺はモンスターをセツト。更にカードを2枚伏せ、ターンエンド！！」

「僕のターン、ドロー！！」

ターン権が廻り、カードをドロウする翔。加わった手札を確認し、目に留った1枚を手にとった。

「僕は手札から『プロト・サイバー・ドラゴン』を攻撃表示で召喚！」

翔が召喚を宣言した次の瞬間、彼の場に1体の機械族モンスターが出現。

【プロト・サイバー・ドラゴン 星3 / 光属性 / 機械族 / ATK 1100 / DEF 600】

一般的に知られる『サイバー・ドラゴン』と似ているが、その容姿は名の如く旧世代のサイバー・ドラゴン。大きさも微妙に異なっており、通常の物より少し小さい。

「プロト・サイバー・ドラゴンは、フィールド上で表側表示である限り、サイバー・ドラゴンとして扱う。更に手札から魔法カード、『融合』を発動！ 場のサイバー・ドラゴンと、手札のサイバー・ドラゴンを融合し、『サイバー・ツイン・ドラゴン』を攻撃表示で融合召喚！」

続いて魔法・罨スロットに装填される魔法カードが、翔の2体のモンスターを更に強力なモンスターへと融合させる。

二頭の首、白銀に輝く機械の身体。融合により進化を遂げた新たなサイバー・ドラゴンが翔のフィールドで咆哮し、万丈目を威嚇する。

【サイバー・ツイン・ドラゴン 星8 / 光属性 / 機械族 / ATK 2800 / DEF 2100】

「サイバー・ツイン・ドラゴンでセットモンスターに攻撃！ 『エヴォリューション・ツイン・バースト』……！」

攻撃宣言と同時に二頭の首の1つから、青白い破壊光線が放たれ

る。

2800もの高い攻撃力の前には、下級モンスターの壁も役に立たず、一瞬にして万丈目の守備モンスターは蒸発してしまう。

「だがこの瞬間、戦闘破壊された『仮面竜』マスクド・ドラゴンの特殊効果が発動！自分のデッキからレベル3以下のドラゴン族モンスターを1体、特殊召喚することが出来る。俺は再び仮面竜を守備表示で特殊召喚！」

【仮面竜 星3/炎属性/ドラゴン族/ATK 1400/DEF 1100】

万丈目の場に現れる無表情のドラゴン。翼や身体を折り畳み、守備の体勢を取っている。

「でも、サイバー・ツイン・ドラゴンは2回攻撃を行えるモンスター！もう一度サイバー・ツイン・ドラゴンで仮面竜を攻撃するっす！」

だが、特殊召喚されて早々、仮面竜は翔の強力機械族モンスターの前に消滅。

再びその竜の仮面を残し、万丈目の為にその身を粉々に散らした。「だが、仮面竜の効果を再び発動！俺はデッキから『アームド・ドラゴン LV3』を守備表示で特殊召喚する」

【アームド・ドラゴン LV3 星3/風属性/ドラゴン族/ATK 1200/DEF 900】

だが、次に呼び出されたのは3体目の仮面竜ではなく、オレンジ色の身体をした小柄な可愛らしいドラゴン。通称『レベルアップモンスター』と呼ばれるカード群の1枚であった。

そのモンスターの出現と共に翔の顔が焦りで曇る。自分のプレイングミスに気付いたからだ。

翔はその小柄な体に隠された、アームド・ドラゴンの真の姿を知っていたのだ。

「流石は万丈目先輩だドン。いきなりアームド・ドラゴンを進化させる為の布石を揃えたドン」

「仮面竜から繋げるアームド・ドラゴン。一見単純なコンボだけど、戦闘に関していえば殆ど隙が無い」

「翔君も、1ターン目から強力なサイバー・ツイン・ドラゴンを呼び出し、場を圧倒するという中々の技術テクニクを見せたけど、逆にその強力な2回攻撃の効果に捉われ過ぎたね。これじゃあ、まだ勝負の流れは解らない」

丸藤亮にも負けないプレイングを披露する翔に対し、その攻撃の更に一枚上を行った万丈目。

2人の攻防に瞬きをする暇も無く、剣山とレイが頬に冷や汗を垂らし、溜息を溢す。

「僕もカードを2枚伏せて、ターンエンドっす」

「お前のエンドフェイズ、速効魔法『サイクロン』発動！ お前の右側のカードを破壊する！」

手札のカードを殆ど使い切った形で翔はターン終了を宣言。

だが同時に発動された万丈目のカードが翔の伏せカードを破壊する。

「くっ、僕の『魔法の筒』が破壊された!?!」

「どうやら、良いカードを破壊したみたいだな。俺のターン、ドロ！」

そして再び万丈目にターン権が移り、彼のドローフェイズに突入する。

「この瞬間、アームド・ドラゴンはLV3からLV5にレベルアップする！ 出でよ、『アームド・ドラゴン LV5』！」

そのままスタンバイフェイズに入った万丈目は、空かさずアームド・ドラゴンを進化させる。

光の中で進化を遂げるドラゴン。身体も巨大かつ強固な物と化し、

能力も大幅に上昇した。

【アームド・ドラゴン LV5 星5/風属性/ドラゴン族/AT
K 2400/DEF 1700】

「くっ！ 万丈目君のアームド・ドラゴン。でも攻撃力だけなら、まだサイバー・ツイン・ドラゴンの方が勝る！」

「それはどうかな？」

現れた強力なドラゴンを前にしても、翔は慌てずに現状を冷静に分析。先ず攻撃力の数値という部分に目を付けた。

だが、万丈目はその差を理解した上で、尚且つ不敵に笑う。

その笑みが翔を凍り付かせる。彼の背筋に緊張という名の寒気がゾクリと走った。

「確かに俺も、お前が1ターン目からサイバー・ツインを呼び出すとは思ってはいなかった。翔、以前のお前からは考えられない攻撃に対するその積極性。確かにお前はアカデミアに居た頃よりも遥かに腕を上げている」

そう言つて、万丈目は1枚のカードを手取る。

「だが、それは俺も同じ。レベルアップを遂げたのは、モンスターだけではない。俺様も同様に大きく進化を遂げているのだ。手札から『レベルアップ！』を発動、アームド・ドラゴンは更なる進化を遂げる」

そのままスロットに装填されるカード。秘められたカードの効果だが、万丈目のドラゴンを更に強化する。

「出でよ、『アームド・ドラゴン LV7』」

LV5の殻を蛹の様に内側から砕き、中からLV5以上に刺々しいモンスターが姿を現した。

【アームド・ドラゴン LV7 星7/風属性/ドラゴン族/AT
K 2800/DEF 1000】

強靱且つ強力な腕や頭部を鋼のような装甲で覆い、翔のサイバー・ツイン・ドラゴンに負けない位の迫力で逆に彼等を威嚇する。その姿からは、先程まで小柄な竜だとはとても思えないだろう。

「まだだ！ 俺は更にLV7を生け贄にして、手札から『アームド・ドラゴン LV10』を攻撃表示で特殊召喚する！！ その最強の姿を見せる、アームド・ドラゴン LV10！！！！」

だが、ドラゴンの進化は止まることを知らないのか、LV7より更なる進化をアームド・ドラゴンは見事に遂げる。

【アームド・ドラゴン LV10 星10/風属性/ドラゴン族/
ATK 3000/DEF 2000】

「そ、そんな！ たった1ターンでアームド・ドラゴンを最強レベルにまで進化させるなんて!？」

万丈目の素早い連続特殊召喚の技術には、翔も冷静になれず、驚きを隠せなかった。

その攻撃力の高さがサイバー・ドラゴンを主軸としたデッキの特徴。それを軽々と越えられたのだ、驚くなという方が無理だろう。

現に驚いていない者は、このドーム内には誰一人として居ない。

『なんとこの事だあああああ！！！！ サイバー・ツインを1ターンで融合召喚し、フィールドを制圧したかに見えたカイザー翔！ だが、それを上回るパワーを万丈目サンダーは披露するうううううっ！！！！』

実況の声がその驚きをこの場に居る者達に代わって語る。

その後直ぐ、万丈目の持つ最強ドラゴンが出現したことに興奮を押しさえられなくなった観客達が、次々に立ち上がって大歓声を上げた。

「続けて畏発動、『おジャマトリオ』！ お前の場に『おジャマトークン』を3体、守備表示で特殊召喚する!！」

「いいっ！？ 嘘おっ！！？」

そこへ追い討ちを掛けるように万丈目の罫カードが発動。カードの影から、3体のトークンが出現し、空いた翔のモンスターゾーン三カ所に厚かましく居座った。

【おジャマトークン 星2 / 光属性 / 獣族 / ATK 0 / DEF 1000】

何気に3体が登場した際、『どおも〜』とか言ったような気もしたが、恐らく気の所為だろう。

「行くぞ！ アームド・ドラゴン LV10のモンスター効果発動！ 手札のカードを1枚墓地に送り、相手の場の表側表示のモンスターを全て破壊する！！！」

「ま、まずいつす！？」

巨大なドラゴンの咆哮が、衝撃波となって翔のフィールドを襲う。アームド・ドラゴンが放った一撃の前に、翔の場のサイバー・ツイン・ドラゴンを含める4体のモンスターは、一瞬にして跡形も無く消し去られた。

消し飛んだ際、トークン達が『ひでえ〜っ』とも言った気がするが、これも恐らく気の所為だろう。

「丸藤先輩のモンスターが全滅……」

「いや、万丈目君の狙いはそれだけじゃない」

あまりにも呆気ない光景に感嘆の言葉を呟くレイ。

そんなレイにシリアスな表情で、吹雪が横槍を入れた。

「更に破壊されたおジャマトークン1体につき、相手のLPを300ポイント削る。破壊されたトークンは3体、よって900ポイントのダメージを受けて貰う！！」

「くっ！？」

【翔 LP4000 3100】

「邪魔なサイバー・ツイン・ドラゴンを破壊し、尚且つ翔君のライフをも削り取る。これが万丈目君の狙いだったんだ」

腕を組んで、ウンウンと頷く吹雪。……上は真つ赤なアフロシャツなのが本当に残念だ。

それを見たレイが「ほへ」と声を上げて、再び万丈目に視線を戻した。

「更に墓地に送った『おジャマジック』の効果により、デッキから『おジャマイエロー』、『おジャマグリーン』、『おジャマブラック』を1枚ずつ手札に加える！」

だが万丈目の計らいは吹雪の予想を一回り上回っていた。

墓地に置かれた魔法カードが効力を発揮し、消耗した万丈目の手札を一気に回復させたのだ。

彼の手に5枚のカードが手札として納まる。

「おおっ！ コストを利用して更に手札増強を図るとは、大胆且つ美しい戦術。流石は我が弟子万丈目君。僕の予想の更に上をいくとは……見事だよ」

「つまり、万丈目君はアームド・ドラゴンの為の手札コストを補うと同時にデッキ圧縮、そしてダメージと破壊を同時に行ったという訳なのね」

「き、聞いてるとホントに凄く感じるドン……」

一々格好を付けて話す吹雪。

それでも万丈目の高等プレイングがどういうものであるかはよく伝わったらしく、明日香と剣山が心から感心する。同時に翔のことが心配になった。

「更に俺は手札から、『Z メタル・キャタピラー』を攻撃表示で召喚！」

続けて万丈目は通常召喚を行い、フィールドに黄色い姿をした戦車の様なモンスターを呼び出す。

翔は、勿論それには見覚えがある。『XYZ ドラゴン・キャノ

ン』を呼び出すに必要な1体で、下層部を務めるモンスターだ。

【Z メタル・キャタピラー 星4 / 光属性 / 機械族 / ATK 1500 / DEF 1300】

『おおおおおおおつとおおおお!!! 此処で万丈目サンダーが新たなモンスターを召喚! 2体の攻撃力の合計は4500、ライフが3100しか残っていないカイザー翔は、此処で敗れてしまつのかあああああああつ!!!?』

「さあ、俺のバトルフェイズだ! アームド・ドラゴン LV10で直接攻撃!」 『アームド・ビッグ・ヴァニッシャー!』

翔が考え込んでいる間に万丈目は自身のバトルフェイズに突入。先ずは巨大なアームド・ドラゴンが、その右腕に邪悪な色をした光球を作り、壁モンスターを持たない翔を狙った。

翔は直ぐ様、自分の残された伏せカードを発動させようと指を起動スイッチに掛けようとする……。

「うわあああああああああつ!!!?」

「ぎゃあああああああつ!!!?」

「きゃあああああああああつ!!!?」

だが次の瞬間、突如として爆発音がドーム全体に響き渡った。ドームの外壁の一部が大きく破壊され、その破片が隕石のように観客達を襲う。

次々に悲鳴を上げる観客達。何処からともなく放たれる光線に破壊されるドーム。その破片の直撃を受け、大怪我を負った者も居る。もう会場は大混乱だ。

「い、一体何が起きてるザウルス!？」

「兎に角此処は危険だ。急いで離れよう!」

「でも、まだ丸藤先輩達が……」

剣山達も座席から立ち上がり、脱出の準備に取り掛かる。

下のステージで戦う翔達も心配だが、今は自分達が逃げる方が先

決だった。

壁の亀裂は更に広がり、徐々にドームは崩壊に近付いている。壁は壊れ、ドーム天井にも被害が及び、証明のライトや、実況用のスピーカーまでもが、ドーム内にいる観客やスタッフ達を襲った。

「な、何なんだこの爆発は！？ このドームで何が起こっている！？」

「ま、万丈目君！ 何かヤバい雰囲気です！！」

「そんなことは俺にだって解っている！！ 兎に角、今は天上院君達の所へ急ぐんだ！！」

非常事態に決闘盤の電源を落とし、対戦相手とはいえ一時合流する翔と万丈目。

瓦礫から頭部を庇おうと、2人は頭を腕で覆いながら、どうにか明日香達が居た観客席の方に走る。

『アニキ〜！ アニキ〜！ 万丈目のアニキ〜！』

その時、万丈目の顔の右隣に1体のモンスターが出現する。黄色い身体をした、お世辞にも可愛いとは言えない、正しく醜いという言葉はこいつの為にあるのだろうと思わせる程、可愛くないモンスターだ。

その見た目も相まって、その存在は万丈目の神経を逆撫でする。

「何だこの非常時に！？ 話なら後に」

『そんなことよりアイツよアイツウ〜！ アイツがこのドームを破壊している犯人よお〜！！』

「な、何だと！？」

自らをアニキと慕う精霊、『おジャマイエロー』からの言葉を受け、万丈目は直ぐに視線を移す。

そして見付けた。スピーカーや照明等から引き起こされた火災の煙で見え辛いのが、確かに煙の奥には唯一逃げようとすらしていない人影があった。

彼は煙の中から攻撃を行っている。彼が犯人だと確信を持つのに時間は掛からなかった。

「貴様か！！ 俺達の決勝戦を台無しにしたのは！！？」

「一体、お前は何者なんだ！！？」

万丈目の言葉で翔もその人物の存在に気付いた。

彼等が言葉を投げ付けた刹那、更なる爆発で起きた爆風がその人物を覆う煙のベールを引き剥がす。

その奥に居たのは、1人の人間。

いや、人の形をした自律行動型決闘用機械人間。

「丸藤翔。万丈目準。両者、抹殺リスト二名義アリ。……抹殺スル」

遙か先の未来、不動遊星と死闘を繰り広げた者と同型のデュエルロボであった……。

TURN - 14 右手に盾を左手に剣を（後書き）

今回の最強カード

【サイバー・ツイン・ドラゴン 星8 / 光属性 / 機械族 / ATK
2800 / DEF 2100】

『サイバー・ドラゴン+サイバードラゴン

このカードの融合召喚は、上記のカードでしか行えない。

このカードは一度のバトルフェイズ中に2回攻撃する事が出来る』

見た目、名前通り、『サイバー・ドラゴン』2体を融合させた機械族モンスターである。サイバー・ドラゴンを主軸とするデッキに於いては、これを主に活かして戦うデッキが多い。

強力な2回攻撃という効果により、かなりの活躍が望める。更に光属性、機械族ということも利点に繋がり、『オネスト』、『リミッター解除』等の恩恵を受けられる。特に機械族融合にのみ使用出来る『パワー・ボンド』は有名だろう。攻撃力5600の2回攻撃は脅威の一言。そこへリミッター解除やオネストを併用すれば、攻撃力10000越えは普通。うかうかしていれば、『ハリケーン』からの1ターンKillerをされかねない。

だが、反面融合素材に制限がある為、代用モンスターが使えないという欠点がある。一般に知られる『沼地の魔神王』などが使えないのだ。

しかし、それでもこのモンスターを召喚するのに苦労はしないだろう。『サイバー・ドラゴン・ツヴァイ』、『プロト・サイバー・ドラゴン』等の存在。更に最近になって『サイバー・ドラゴン』まさかの制限から無制限への復帰。『未来融合』や『融合呪印生物光』などからの特殊召喚のし易さ。他にもサポートカードが多く、

上げればキリがない。

そして融合召喚にのみの制限なので、墓地からの特殊召喚に関しては何の制限の無い為、『死者蘇生』や『リビングデッドの呼び声』で蘇生させることも可能。かなり強力な部類に入る融合モンスターである。

アニメに於いては、カイザー亮こと丸藤亮が使用。

だが、その強力なステータス及び効果を存分に活かすこと無く破壊される描写が多い。更に当初のサイバー・ドラゴンは特殊召喚ではなく召喚緩和効果だった為、通常召喚権を行使する必要があったのだが、何故か彼はわざわざ召喚してから融合することがあった。更に『サイバー・エンド・ドラゴン』が彼の象徴とされている為に出番は少なく、それに繋ぐ為に折角のツインを融合解除したり、と結構もつたいないことをしている。(サイバー・エンドは攻撃力こそ高く、貫通効果を持つてはいるものの、正直火力方面で見れば、ツインの方が上)

余談だが、カイザー亮が手札でサイバー・エンドを召喚する事からルール違反の積み込みをしているというのはよく聞く話だが、筆者は彼がドローク時にデッキの下からカードを引き抜いている決定的シーンの画像を見た事がある。

全力を尽くすことこそがリスペクトの精神だ、と彼はよくほざくが、本当にリスペクト出来ているとアレで信じているのだろうか？

TURN - 15 ヒーロー見参(前書き)

昨日に続いて今日も更新。デュエル展開だと直ぐ文字数待って来て助かります。考えるのはめんどくさいんですけどね。

そういえば、皆さんアンコール上映はご覧になりましたか？ アシを見てこれを見た方は、一体どんな気持ちでこれを読んで下さっているんでしょう？ 取り敢えず、私は劇場版を超える勢いで作品を手掛けたい……と考えております。

皆さんに劇場版を超えていると仰って貰う為にも、トマトはこれから頑張っていきますので、どうか宜しくお願い致します。

「此処が20年近く前のネオ童実野シティか……」

「ああ。だが正確には、まだこの頃は普通に童美野シティと呼ばれていたらしい」

一方、海馬ドームから少し離れた所。此処にはこの時代の者ではない者達が紛れ込んでいた。

そう、不動遊星達、チーム5D'sだ。

彼等は無事にタイムシッパで時空を超え、この時代に辿り着く事に成功したのだ。

「だけど、もう直ぐすれば、この町も人も壊滅してしまうのね」

「ああ、親父が引き起こしてしまったゼロ・リバーズの為にな。この街の皆には、どんなに謝罪しても償いきれない俺の罪だ」

遊星とジャックの会話に介入するアキ。彼女の一言が、遊星に罪悪感を抱かせる。

ハツとしたアキは直ぐ遊星に謝罪。自分の軽率な発言をしたこと悔い、反省する。

そんなアキに遊星は大丈夫だ、と穏やかな顔で手を振った。それはアキの顔を安心感で和らげる。

「うっしやあ！ ブルーノにタイムシッパ任せた以上、俺達もやるべきことをやらねえとな！！！」

「そうだなクロウ。この世界に奴が関渉しようとしているのは間違いない。俺達は必ずそれを阻止しなければならない！」

「そして奴から……パラドックスから俺達のカードを奪い返す！！」

次の瞬間には気合充分のクロウ、続けてジャック、遊星の順に決意を秘めた言葉を発する。

それを聞いたアキ、龍亞、龍可はコクリと頷き、彼等の気合いに沿うよう頑張ろうと心に決めた。

「よぉ〜っし!!! 俺も龍可や遊星の為、ネオ童実野シティの未来の為に頑張るぞぉ〜っ!!!」

中でも龍亞は特に張り切っていた。少年らしく握り締めた両手をグツと空へ伸ばし、高々に両足でジャンプ。やってやるぞというやる気その姿からは存分に伺えた。

それを見ていた遊星達の顔が綻ぶ。

その次の瞬間だった。

「あだっ!?!」

飛び跳ねる龍亞に、突然何者かがぶつかってきたのだ。

遊星達が助ける暇も無く、衝突した龍亞はそのまま地面に倒れ込み、痛そうに尻もちを着く。彼の目尻に涙が浮かんでいた。

「あゝ、わりいわりい。大丈夫だったか?」

「痛つてえ〜……」

打ち付けた尻を摩る龍亞には、直ぐに手が差し出された。龍亞は思わずその手を握る。

だがその手は遊星の物でも龍可の物でも無く、ぶつかった者の手であつた……。

「悪かつたなあ。俺、約束の時間に間に合いそうになくて、すっごく急いでたからさあ。ホントごめんな、大丈夫だったか?」

龍亞とぶつかった者、赤い服を着た茶色の髪の青年は、龍亞や遊星達に何度も謝つた。

「いや、俺達の方こそすまなかつた。そっちは怪我は無いのか?」

「ん? ああ、俺なら全っ然大丈夫だ! こう見えても、身体は丈夫なんだ」

遊星が龍亞に代わって謝罪しようとするが、青年はニカッと笑つて自分は大丈夫であると主張。

肩や足、腰や首等をグルグルと回し、自分には何の影響も無かつたということを彼等に見せ付けた。

だが次の瞬間、何かに気付いたかのように彼の顔がハッと上がる。そして龍可の顔が微妙に傾いた。

「　　って、やっべえ！？　俺、急いでるんだった！　悪いんだけど……」

懇願の眼差しで此方を見る青年の意図に遊星は直ぐ気付くことが出来た。

「ああ、引き留めてしまつて悪かつたな」

遊星のその一言で、青年の表情がパツと明るくなる。

青年はそのまま龍亞の方を向き、彼の頭に手をポンと置いた。

「サンキュー、恩に着るぜ。それと、ホントごめんな？　さっきは痛かつたら？」

「あ、うん。俺なら大丈夫だよ。俺は元気と丈夫なのが取り柄だからさー！」

龍亞が返事と共にニツと笑つと、青年もニカツとした笑みを返した。

そして青年は、直ぐ様遊星達の前から走り去つてしまった。もうその姿は米粒の様に小さくなつてしまつている。

「あの人……」

その時、ポツリと小さく言葉を龍可が洩らした。その言葉が同じ背丈の龍亞の耳に入る。

「龍可、どうしたんだよ？」

「うん。あの人から精霊の気配を感じたの。それも沢山の精霊を……」

龍可には確かに感じられた、青年に宿る沢山の精霊の気配を。

優しい感じの気配。一見刺々しいが、とても温かい気配。彼を守ろうとする沢山の存在の気配。

彼を守ろうとしている数多くの存在を龍可は感じ取つたのだ。

「もしかしたら、彼もまた龍可と同じ、精霊が見えるのかもしれないな」

「うん」

そんな龍可に遊星が優しく声を掛ける。龍可はそれに頷いた。

「ああああああああ！！　アレだあああああ！！　ほら、ア

レアレ!!!」

そこへ割り込むように龍亞が突然になって大声を上げる。
はしゃぎ回る子供の如く、腕をブンブン振り回し、ある方向を指差していた。

「お、おい龍亞、いきなりでけえ声出すなよ？ 耳が変になっちまうかと思っただじゃねーか」

「そんなことよりアレだよ、アレ!!!」

クロウの叱りも撥ね退けて、龍亞は大声で叫び、指差し続けた。

取り敢えず視線を指差す方へと向ける仲間達。そこには彼等が求める建物が確かにあった。

「あれって、新聞の記事にあった海馬ドーム!!!」

「ああ、間違いない！ 青眼の頭部を模したドーム、あんな趣味丸出しのドームはこの辺りに二つと無い」

「……人のこと言えんのかよ」

先ず声を上げたのはアキ。続いてジャック、そしてクロウが呟いた。

確かに龍亞は自分達が探し求めていた、目当ての物を見付けだしていたのだ。

ブルーアイズ・ホワイトドラゴン
『青眼の白龍』の形をしたドーム、自分達がトップスの図書館で

確認した通りの形で、それは視線の先に聳え立っていた。

「いよっしゃあっ！ お手柄だぜ龍亞！ これである野郎の先回りが出来れば」

だがそこまで言った時、突然岩をも貫くような轟音が、彼等の耳に飛び込んできた。

何事か、と彼等が再確認すると、何と目的地である海馬ドームから朦々と黒い煙が上がっているではないか。……火災だ、火災がドーム内で起きている。

「ま、まさか奴が!?」

「急げ遊星!!! あのままでは改変された歴史通り、大勢の死人が出るぞ!!!」

「解っている。行くぞ、皆！！！！」

目を疑う様なその光景にクロウは先程の言葉を忘れ、別の言葉を口から出した。

直ぐ我に返ったジャックが遊星に発破を掛け、遊星も仲間達に声を掛ける。

彼等は大地を蹴って前へ飛び出すと、目も暮れず一進に目的地の海馬ドームへと向かっていった……。

「お、俺達を抹殺するだと……？」

崩壊が緩くなった海馬ドームの中で、万丈目準が目の前の人物に問い掛けた。

眼前の人間、いや人間に似せられて作られたロボットは、不気味な笑みを浮かべて、万丈目とその後ろに隠れる翔を、獲物を狙う猛獣の目で見詰めている。

「い、一体あいつは何者なんすか！？」

「そんなこと、この俺が知るか！ 取り敢えず、かなりヤバい奴だつてことは間違いなさそうだぜ」

万丈目の頬を伝って、汗が流れる。火災による熱さ故ではなく、冷や汗だ。

寧ろ、彼等は寒かった。

まるで身体が凍り付いたように寒い。冷たくて身体を動かすことも出来ない。蛇に睨まれた蛙状態であった。

「フフ、才前達ガソレヲ知ル必要ハナイ。何故ナラ、才前達ハ此処デ朽チ果テルコトニナルカラダ」

機械人間の言葉は更に2人の身体を強張らせる。

思わず殴打にしか使えない決闘盤をも構えてしまう程であった。

「言えっ！ 貴様の目的は何だ？ 俺達を葬ることが貴様の目的なのか！？」

「ぼ、僕達を殺して、一体何の得になるっていうんすか!？」
万丈目が吠え、翔が震えた声で叫ぶ。敵の微笑みはニタアと更にいやらしくなる。

「目的力。……フフ、良いダロウ。ソレ位ナラ教工テヤロウ」
そう言いながら、彼は腕をゆっくりと伸ばし、天上へと向ける。その先にはまだ照明が残されていた。

「我等ノ目的ハデュエルモンスターズノ完全抹殺。関ワル者ハ全テ、ソレハ」

その時、万丈目は気付いた。

彼の翳した手。その天井の下には、明日香や剣山、他の観客達が逃げ惑っている。

「しまっ」

「奴等トテ同ジコト!! コノ場ニ居ル者全員、ソノ全テトイウ全テヲ抹殺スルノガ、俺ノ目的ダ!!!」

気付いた時には既に時遅く、機械人間は翳した手から一発の破壊光弾を放ち、それを照明のスポットライトに命中させた。

当然、攻撃を受けたスポットライトは天上の壁ごと下にいる剣山達に向けて落下。

観客達が悲鳴を上げるが、もう間に合わない。落下する勢いのまま、瓦礫の破片が彼等の頭上に降り掛かった。

「ネオス!!!!!!」

だが、瓦礫は何時になっても彼等を襲うことはなかった。

思わず瓦礫を前にして目を瞑ってしまった明日香。彼女は恐る恐る目を開き、上を見上げた。

「あっ!」

そして声が出た。驚愕を意味する簡単な一言だった。

何と、自分達に降り掛かった瓦礫の破片。それを全て1体の白いモンスターが受け止めていたのだ。

「ま、まさか……」

「で、でもこんな事が出来るのって……」

避難を再開する観客達の中、明日香やレイ、剣山に吹雪達はその場を一步も動かなかった。

そのモンスター、エレメンタルヒーロー『E・HERO ネオス』には見覚えがあったし、ネオスを所持し、尚且つモンスターを実体化させるといふ芸当が可能な人物にも心当たりがあったのだ。

「よくやったぞ、ネオス！」

ネオスの持ち主と思われる者の声に反応し、ネオスが声のした方を振り向いた。

煙でよく見えないが、そこには先程の機械人間の時と同じく人影があった。今や機械人間の方も見詰める側として、ネオスの持ち主の方へ視線を向けている。

その者は徐々に姿を現し始める。前へ一歩ずつ進み、臆てその全身を彼等の前に曝け出した。

「よっ！ 久し振りだな、皆！」

アカデミア時代から変わらないオシリスレッドの制服。茶色と黒が入り混じった髪。灰色のズボン。どれもこれも明日香や翔達の懐かしい思い出と一致する。

「ア、アニキ？ アニキだよねえ……？」

思わず夢ではないかと思った翔が、現れた青年に恐る恐る声を掛ける。

「当たり前だろ？ それともお前の目には俺が遊城十代以外の奴に見えるっていいのか？ ……翔！」

「アニキイイイイイツ……！」

青年、遊城十代の最後の一言を聞くや否や、丸藤翔は彼に飛び付いた。

「やっぱり十代のアニキだドン！ アニキはやっぱり来てくれたザウルス……！」

「十代サマー……！」

客席にいた剣山やレイも十代の姿を見た次の瞬間には、その場から飛び出してステージに降りていた。

続いて明日香や吹雪も華麗に客席からステージに飛び降りる。

ステージに足を着けると同時に、彼等はそのまま十代に駆け寄った。

「アニキ!!」

「おお、剣山!」

「会いたかった、十代サマ!!」

「おいおい何だよ、レイまで……」

それぞれ右腕、左腕に絡みつくように剣山とレイが十代に抱き付く。目の前にいる翔の存在もあって、十代は身動きが取れなくなつた。

3人に揉みくちやにされる十代、だがその顔は決して嫌がってはなく、寧ろ笑顔が浮かんでいる。

そんな彼等に万丈目や明日香達も合流を果たす。

『十代、そろそろ。アイツもお待ちかねのようだ』

『ああ。解ってるさ』

しかしその次の瞬間、十代の顔つきが一変。笑顔から真剣な表情に移る。

その引き金を引いたのはユベルだ。彼の眼差しは先程から目の前の機械人間に向けられていた。

「悪いな、皆。ちょっと離れてくれ」

「ア、アニキ?」

十代は纏わり付く3人を自分から離れさせると、ゆっくりと機械人間に歩み寄る。

「歴戦の決闘者の1人、遊城十代……」

対峙する2人、同時に十代の両目がオッドアイに変色。十代が力を再発動させた瞬間だった。

「お前は何者だ。何処から来た? お前はこの世界の者じゃないな?」

「……………」

翔達は耳を疑った。十代は確かに眼前に立つ機械人間に向けて、この世界の者じゃないと言ったのだ。

対する機械人間は黙り込んでいる。黙って十代に目を向けていた。『誤魔化しても無駄だよ。君の気配は明らかにこの世界では有り得ないものだ。』

更に実体化したユベルが、十代の隣に立って機械人間に言葉で追い討ちを掛ける。

2人の鋭い目に睨まれながらも、機械人間はその口を割らない。

『どうやら答えるつもりはないみたいだよ』

「流石にそう簡単にはいかないか……良いぜ！」

そう言っていると、十代は鞆の中に両手をつっ込んだ。

「あつた！ …… ってフアラオじゃなくて！ え〜と、あつたあつた！！」

一瞬出てきた猫の頭を再び仕舞い直すと、十代は鞆の中から決闘盤を取り出した。

アカデミア製の決闘盤、オシリスレッドの赤いラインが入った決闘盤だ。

「よし、お前！ 俺と決闘しようぜ！！」

決闘盤を腕に装着した次の瞬間、十代は何を思ったのか、決闘を申し込んだ。

「ア、アニキ！？ 一体何を言ってるザウルス！？」

「決闘では誰も嘘は付けないってな！ お前が何を考えているのか、決闘で見極めてやるぜ！！」

「どつという理屈なのよ、それ……」

十代の自信満々の態度と言葉、理屈も意味も全く解らない剣山と明日香が、呆れた目で首を捻る。

同様、万丈目や翔も、十代は相変わらずだと頭を抱えた。

「う〜ん、決闘では嘘を付けない。十代君らしいとても素敵な考えだ」

「流石です十代サマ！」

が、中にはそれに納得する者、目を輝かせる者も存在した。

……吹雪とレイだ。

「さあ、俺と決闘しようぜ！！ お前と俺にしか出来ない、最っ高の決闘をさあ！！！」

既に十代はデッキを決闘盤にセットし終え、決闘の準備を整えている。

すると機械人形……いやデュエルロボも決闘盤を構え、自分の持つデッキをセット。

同時に2人の決闘盤が起動し、辺りには一陣の風が吹いた。

「マ、マジかドン？ 本当に決闘するザウルスか！？」

「まあ、アニキらしいっていえばアニキらしいけど……」

驚愕が終わらない剣山。もう驚愕を通り越して、既に呆れに突入して肩をだらんとさせている翔。

彼等の見守る中、十代とデュエルロボは決闘の構えに入った。

「良イダロウ、コノ決闘受ケテヤル。ソモソモ貴様八抹殺スル対象者ノ中デモ、最重要ノ決闘者。今此処デ、コノ決闘デ貴様ヲ葬ツテヤロウ！」

「へっ、言ってくれるな。でも俺だって負けるつもりはないんだ？

さあ、楽しい決闘しようぜ！！！」

決闘の開始宣言、「決闘」の一言を叫ぼうとする十代とデュエルロボ。

だがその寸前、突然大勢の足音が崩壊したドーム内に響き渡った。

「大丈夫か！！！」

そこへやって来る数人の人間達。その中の1人の青年の声が十代達の耳に入ってきた。

紺色の上着を羽織る青年を筆頭に、長身で金髪 of 青年。オレンジ色の髪をした青年に赤髪の女性。そして双子と思われる緑色の髪をした少年と少女。

そう、遊星達チーム5D'sの面々だ。

「うおおおおおおおおおつ！！！！ プロ決闘者のカイザー翔と、万丈目サンダー、本物だああ！！！！」

「龍亞！ そんなことは後にして！」

「おい遊星、あれを見ろ！！」

「っ！ 間違いない、デュエルロボだ！！」

呆気にとられる翔達を他所に遊星達は十代と対峙するデュエルロボに向かって走り出した。

「ちょ、ちょつと突然何なんすか！？」

「一体、お前達は何者なんだ？ それにデュエルロボとは、あの機械人間野郎のことか！？」

突然やって来た彼等の発言を耳にした翔と万丈目が、クロウやジャック達に詰め寄る。

「そんなことはどうでも良い！！ それより、お前達は早く逃げる！ これは俺達の戦いだ！！」

「そうだ、それにそのアンタ！ アンタも早く離れる、そいつはメチャクチャ危険な奴なんだ！！」

2人を退かし、逆に彼等をこの場から非難させようとジャックとクロウは叫んだ。

そして自分達の目の前で今にも決闘を始めようとしている青年、遊城十代にも言葉を発した。

「え？」

思わず遊星達の方を振り向く十代。その顔が彼等の目に映り、途端に先程の出来事が思い起こされた。

「き、君は！？」

「おお、お前等さっきの！」

先程龍亞とぶつかった人物、その人物と今日の前で立つ十代の姿は完全に一致。十代の方も遊星達に気付いたらしく、呑気にも手を振って彼等に応える。

そして直ぐ様、遊星は血相を変えて十代に呼び掛けた。

「君、直ぐにそいつから離れるんだ！！！！」

「へ？ 何で？」

間抜けな声を上げる十代。今の2人の顔は正に対照的だった。

「これは俺達の問題、俺達の戦いなんだ！ 無関係の君達を巻き込む訳にはいかない！ さあデュエルロボ、俺と決闘しろ！！！」

「良イダロウ、不動遊星。貴様モ俺ノ抹殺リスト二名前ガ拳ガツテイル。先ずは貴様カラ葬ツテヤロウ！！」

「よし、決まりだ！！！」

「オイオイ、勝手に決めんなよ！？ 入れ替わるなんて、俺はそんなこと絶対にお断りだぞ！？」

遊星はデュエルロボを指差し、十代に代わって決闘を行おうと提案。

デュエルロボは軽く承諾。遊星は前へ向かって一気に駆け出して、文句を言う十代に駆け寄る。

「さあ、俺と代わって、君は彼等と一緒に逃げるんだ！」

「冗談だろ！ これは俺の決闘だぜ？ 事情は知らねーけど、代わるなんて絶対イヤだ！」

代わろうと言う遊星を当然十代は拒む。

「だが、さつきも言った通り、これは俺達の戦いなんだ。それに奴との決闘は、ダメージを受ければ実際に痛みを伴うとても危険な決闘。そんな危険な戦いに君達を巻き込む訳にはいかない！！ 無関係な君を傷付ける訳にはいかないんだ！！」

「へえ、そいつはまた随分と嫌な決闘だな。でも、それとこれとは話が別だぜ！」

遊星が必死に説得するも、十代は全く聞き入れようとはしない。血相変えてまで説明するが、彼はニカツと笑い、真剣な遊星の調子を狂わせる。

そんな様子を遊星側、十代側の面々は離れから伺っていた。

「心配してくれてるのは解ってるんだけどさ、ホントに俺なら大丈夫だって！」

「それでも俺は君を巻き込みたくない。この世界の君を俺達の戦い

に巻き込みたくないんだ」

「心配性な奴だなあ……」

断固として引き下がろうとしない遊星を前に十代は頬を人差し指で掻く。

そしてそのまま彼の両肩を掴むと、そのまま明るい笑顔で顔に浮かべて彼に語り掛けた。

「えっと、遊星だっけ？ 俺ならホントに大丈夫だ、絶対に負けない。俺を信じろよ、遊星！」

「……………」

「どうしても俺のこと信用出来ねーか？」

手を合わせ、遊星に頼み込む十代。

遊星は思わず黙り込んで、彼の真つ直ぐな瞳を見詰めた。

「……解りました」

「え？」

「俺は貴方を信じます。貴方にこの決闘を託します」

そして遂に遊星が折れた。遊星は十代に決闘の全てを託したのだ。

次の瞬間、十代の顔がパアツと明るくなる。雲が除かれ、輝きを取り戻した青空のように。

太陽の様な笑みを顔に浮かべ、十代は直ぐ様遊星の両手を取り、ブンブンと振った。

「サンキュー！ マジ恩に着るぜ！！！」

「あ、はい……」

次の瞬間から突然変わる十代の態度に困惑する遊星。

だが十代はそんな事お構いなく、彼の腕をブンブンと振り続けた。

「よおし、絶対に勝つからな！ 見ててくれよ遊星！！！」

「え、ええ……」

遊星の手を離すや否や、眩し過ぎる太陽は再びデュエルロボの前に立ち塞がり、決闘盤を構えた。

「あ、それと」

諦めて、仲間の許に戻って十代の決闘を見守ろうとした遊星。

だが十代は、声を掛けて彼を引き留めてしまう。

何かと思い、振り向いた遊星が見たものは、やはり眩し過ぎる程明るい笑顔を浮かべた彼の顔。

「俺の名前は遊城十代！ 宜しくな、遊星！」

遊星は思わず小さな笑みを溢した。

そのまま後ろを振り返り、十代のやる気の籠った声を聞きながら、遊星はジャックやアキ達、更に共にいる翔や剣山達とも合流を果たす。

「お、おい遊星！？ 本当に奴に戦わせるつもりか！？」

「……ああ」

「そんな！？ 彼はこの戦いとは無関係なのよ？」

「駄目よ遊星！ このままじゃあの人じゃられちゃうー！」

引き返してきた遊星を待っていたのは、仲間達からの雨の様に振り掛かる言葉の数々だった。

ジャックは怒鳴り、アキは心配そうに十代に目を向ける。龍可は遊星のズボンを掴み、訴えるように声を張り上げる。

「大丈夫つすよ、アニキなら！」

だが、そんな彼等にある者が声を掛けた。目を下に向ければ、1人の少年。

丸藤翔だ。

彼は全く心配していない、寧ろ信頼しきった顔で十代の方を見詰めていた。

「アンタ達の事情は、確かに俺達には解らないドン。でもアニキなら、きつとやってくれるザウルス！」

「十代なら、きつとあなた達の力になってくれる。それだけは保障出来るわ」

しかし穏やかな表情をしていたのは翔だけではなく、十代側の面々全員が、彼に信頼を委ねていた。

鼻の下を指で拭う剣山。穏やかな顔で十代を見詰める明日香。同

じく吹雪やレイ、万丈目と、誰も彼のことを心配している素振りや言動を見せない。

そんな彼等の態度を見て、ジャック達も漸く静まる。

「今は、あの十代さんの勝利を信じるしかない。それが俺達に出来る唯一のことだ」

遊星の一言を耳にすると同時に、彼等は静かに十代の戦いに目を向けるのだった……。

「行くぜ、デュエルロボ!!」

「返り討チニシテクレル!!」

「決闘!!!」

崩壊したドームの中心ステージで、決闘の開始を告げる十代とデュエルロボ。

先ず先攻はデュエルロボ、彼のドロウから決闘は始まり、続いて彼のメインフェイズ。

1枚のカードを手札から迷わずに抜き取り、そのままスロットにそれを装填した。

「俺 hands カラ『増援』ヲ発動! デッキカラ戦士族モンスターヲ1体ヲ選択シ、手札ニ加エル」

そう言うつと、デュエルロボの決闘盤からカードが自動的に1枚選出され、それを抜き取ると同時にデッキが決闘盤の内臓システムによって自動的にシャッフルされる。

「戦士族専用のサーチカード。奴のデッキは戦士族主体なのか……」
「いや、そうと決めるにはまだ早い」

ジャックと遊星が思考を巡らせ、今回のデュエルロボのデッキの構築を見抜こうとする。

だが、増援という魔法カードだけでは絞り込むまでには至らず、2人は敵の次なる行動を待った。

「俺ガ加エタノハ……コノ『D-HERO ダイヤモンドガイ』!」

「何っ!? それはエドしか持ってない筈の『Dヒーロー』シリーズのカード!？」

「加工タダイヤモンドガイヲソノママ攻撃表示デ召喚！」
十代が驚愕している暇も無く、デュエルロボは加えたモンスターを場に召喚。

身体の一部がダイヤモンドになっている、男性のHEROがデュエルロボの場に現れた。

【D・HERO ダイヤモンドガイ 星4/闇属性/戦士族/ATK 1400/DEF 1600】

「気を付けて下さい！ 奴は様々な時代の決闘者からカードを奪い取って、強力なデッキを組んでいるんです」

「それで奴がエド・フェニックスのカードを……」

「で、でも様々な時代って……？」

遊星の言葉で状況を理解した万丈目。反対に困惑する明日香。

それと同時に十代はデュエルロボに対して激しい怒りを覚えていた。

「エドの大切なカードを……許さねえ。この決闘、尚更お前には負けられねえぜ！！」

「フン、戯言ヲ……。ダイヤモンドガイノモンスター効果ヲ発動、デッキトップノカードヲ捲リ、ソノカードガ通常魔法ダツタ場合ハ墓地ニ送り、次ノ自分ノメインフェイズニ発動サセルコトガ出来ル違ツタ場合、カードハデッキノ一番下ニ戻ス」

そう言っでデュエルロボはデッキの一番上に指を置き、スツとカードを捲って確認する。

刹那、彼の顔には笑みが浮かび、そのまま彼はカードを提示する。

「コレハナントイウ幸運。俺ガ引イタノハ、『終わりの始まり』。通常魔法、発動決定ダ」

提示したカードを墓地に送るデュエルロボ。反して同時に十代の顔が曇る。

「ねえ、遊星。終わりの始まりって？」

「終わりの始まりは、墓地に7体以上の闇属性モンスターが存在している時に発動可能な通常魔法カードだ。その中から5体の闇属性モンスターを除外して、デッキから3枚ドロウする」

「でも、あいつの墓地にはモンスターはいない！ 発動条件満たせてないから不発じゃん！！」

龍可の質問に決闘を見詰めたまま答える遊星、それに真つ先に反応を見せたのは兄の龍亞だった。

「だが、その不可能を可能にしてしまうのが、あのダイヤモンドがいなんだ」

その時、一番端に立っていた吹雪が、真剣な口調で龍亞の言葉を否定。

龍亞だけではなく、遊星やジャック達全員が場違いなアロハシャツを着込む吹雪の顔を見る。

よく見れば、万丈目や翔達も真剣な眼差しで立っている。彼等もダイヤモンドガイの効果で不可能が可能になると考えていることが直ぐに解った。

全員の意識が自分に向いたことを確認した吹雪は、そのまま言葉を繋げる。

「ダイヤモンドガイの効果で捲られたカードは、墓地に送られて効果のみを場に残す。つまりダイヤモンドガイは、発動条件とコストを無視して、魔法カードの効果だけを発動させる特殊なモンスターなんだ」

その事実を知った時、遊星達の顔色が変わる。中でも特に大きな反応を見せたのは、やはり龍亞だった。

「じゃ、じゃあイツは次のターン、何のコストも無しに普通に3枚カードを引けるってこと！！？」

「いや、通常ドロウを含めれば4枚。一挙に4枚ともなれば、手札を使い切ったとしても、直ぐに潤いを取り戻す」

更にクロウも龍亞の発言に割り込む。今回ばかりは幸運という文字をクロウは嫌った。

「更ニ俺八場二三枚ノカードヲセツト。コレデターンエンドダ」

そしてデュエルロボの足下に伏せ表示のカードが3枚出現する。

「奴の残りの手札は2枚」

「だが、結局次のターンになれば、奴は一気に手札を6枚にまで回復する」

次のターンのことを考えていた遊星とジャックが小さく舌を打つ。

そんな2人を嘲け笑うようにデュエルロボの顔にはまだ笑みが浮かんでいた。

「俺のターン、ドロー！」

そして十代にターン権が移り、ドローフェイズに入った彼はカードを引く。

合計が6枚となった手札を見詰め、十代はその中の1枚に指を掛けた。

『十代、解っているね』

「ああ、解ってるさ。どんなに相手に怒りを覚えても、絶対に決闘を楽しむ心は忘れない！」

心の中に響くユベルからの言葉。聞き入れた十代はそのまま一気にカードを引き抜いて、決闘盤のカードスロットに差し込んだ。

「魔法カード発動、『融合』！」

そんな彼が発動させたのは、モンスター2体以上を合体させる融合の魔法カードであった。

「スパークマンとクレイマンを手札融合！ 『E・HERO サンダー・ジャイアント』を融合召喚！！」

十代の手札から飛び出した2体のHERO。青い稲妻を操る『E・HERO スパークマン』。そして強固な身体を持つ『E・HERO クレイマン』が十代の手札の中で融合。

黄色い巨体と強力な雷を操る光の戦士、サンダー・ジャイアントとなつて十代の場に降り立った。

【E・HERO サンダー・ジャイアント 星6 / 光属性 / 戦士族

／ATK 2400／DEF 1500】

「出たああ！！ アニキのサンダー・ジャイアント！！」

「アニキのHEROデツキは健在だドン！！！」

登場したモンスターを前にして、興奮のまま騒ぐ翔と剣山。明日香やレイ達も彼の操るHEROを見て、十代が在学していた頃の学生時代のことを懐かしがっている。

対し遊城十代の決闘を初めて拝むことになった遊星達、彼等は十代の決闘をハラハラと落ち付かない心持で眺めていた。

「更にサンダー・ジャイアントの効果発動！ １ターンに一度、手札1枚を墓地に送って、サンダー・ジャイアントより攻撃力が低いモンスターを1体、破壊することが出来る。当然俺が対象に選ぶのは、ダイヤモンドガイ！！」

手札を減らした十代が、デュエルロボの場で腕を組むダイヤモンドガイを指差す。

それと同時にサンダー・ジャイアントの人差し指が、青白く発光する。

「打ち碎け、『ヴェイパー・スパーク』」

サンダー・ジャイアントの稲妻を受けたダイヤモンドガイは、粉々となつて完全消滅。

「おっしやあ！ これで奴の場はガラ空き。直接攻撃のチャンスだぜ！」

「攻撃が通れば、奴に一気に2400もの大ダメージを与えられるドン！」

それを見て、クロウや剣山達はグツと拳を握る。心なしか気持ちも先程より高揚している。

「行くぜ、サンダー・ジャイアントの攻撃！！ 『ボルティック・サンダー』！！！」

十代の指示を受けたサンダー・ジャイアントは、両手の間にエネルギー球を収束。球状となった雷の光をデュエルロボ目掛けて、一気

に投げ付けた。

T U R N - 1 5 ヒーロー見参(後書き)

今回の最強カード

【デステニーヒーローD・HERO ダイヤモンドガイ 星4/闇属性/戦士族/A T
K 1400/DEF 1600】

『このカードが自分フィールド上で表側表示で存在している時、自分のデッキの一番上のカードを確認することが出来る。』

それが通常魔法カードだった場合そのカードを墓地に送り、次の自分のターンのメインフェイズ時にその通常魔法カードの効果を発動させることができる。

通常魔法カード以外の場合にはデッキの一番下に戻す。

この効果は1ターンに1度しか発動できない。』

攻撃力守備力とも中途半端なカード。戦闘を行ってもリクルートモンスターと同等。守備力も正直心もとない為、場に残し続けるのは少々困難。

しかし、注目すべきはその効果にある。

この効果で通常魔法カードを捲った場合、発動条件を無視した上、ノーコストで発動できる。これがこのカードの魅力である。

この効果を利用すれば、劇中の『終わりの始まり』は勿論のこと。『デス・コーラス死の合唱』や『おジャマ・デルタハリケーン!』も簡単に発動できる。これを活かしたデッキも存在している程である。それだけこのカードは強力な効果を秘めているのだ。先程は攻撃力の低さを語ったが、それを活かせる『クリッター』や『キラー・トマト』に対応している点も見逃せない。

更にこの効果に対し、『マジック・ジャマー』等のカウンターを放つことも出来ない。一度引いてしまえば、大抵のカードが発動で

きるのだ。しかもこれはダイヤモンドガイがフィールドに存在しなくても発動可能。

だが、墓地に送ったカードが除外されてしまった場合や、『大寒波』を使われた場合は例外。魔力カウンターも載らない等、完全無欠という訳ではないので注意。更に捲った通常魔法は意に問わず墓地に送らねばならなかったりする。『最終戦争』を引いたプレイヤーはどうするのであるう？

アニメに於いては、D・HERO使いであるエド・フェニックスが使用。OCGでもそうだが、何気に4星以下のD・HERO中、最も攻撃力が高い為、登場回数が多い。しかし、何故か途中までは効果で墓地に送ったカードに対しコストを払っていたりと旧裁定だった為に現OCGとは異なる効果となっていたが後に改正。

更にエドはこの効果を外したことは皆無と言っている程なく、百発百中の成功率を誇っていた。某の積み込みバカイザーといい勝負である。因みに殆どの場合デッキからカードを引くドロー強化カード。……積み込み確定ではないか？

そして余談だが、このカード、一部のゲームではなんと不動遊星が使ってくる。サテライト暮らしに嫌気がさして名前だけでも高価なカードを入れたかったのか、その真意は謎のままである。……いや単にカード効果だろう。

TURN - 16 ライバル登場！（前書き）

皆さん、突然ですが地震の影響は大丈夫だったでしょうか！？ 死傷者は続出、行方不明者も数多く、それ程影響が無かった此方としても、かなり心配です。

ユーザー仲間の活報にも、帰宅できない。影響が大きいといった内容が書き記されているのが数件。もう本当に心配です。

私が今まで付き合ってきたユーザーさん達が、全員無事であることを心から祈ります。勿論、他の方々も無事である事を……。

TURN - 16 ライバル登場！

十代が繰り出したモンスター、『E・HERO サンダー・ジャイアント』の放つ雷光、『ボルティック・サンダー』が対戦相手であるデュエルロボを襲った。

「速効魔法、『終焉の焰』発動」

「関係無い！ 攻撃を続行だ、サンダー・ジャイアント！」

だが、攻撃が炸裂する寸前に伏せていた3枚のカードの中の1枚が表を向いた。同時に2体の闇のような焰のモンスタートークンが出現する。

しかし十代は構うことなく攻撃を続行。問題無く、サンダー・ジャイアントは1体の焰を打ち砕いた。

刹那、焰は無残にも離散、衝撃波と煙を上げた。遊星が口にした「ダメージが現実のものとなる」というのはこういうことなのだろう、と十代は無言のまま悟る。

聴て煙が晴れ、中からデュエルロボが姿を現す。不敵な笑みを浮かべ、2枚のカードを手に煙の奥の十代を見据えていた。

【黒焰トークン 星1/闇属性/悪魔族/ATK 0/DEF 0】

「やるな！ 終焉の焰なんてカード、エドのデッキには入ってなかったぜ」

「当然だ。俺ノデッキハ最大限ニカヲ發揮出来ルヨウ、緻密ナ計算ヲ踏マエテ構築サレテイルノダ」

「へえ〜。それはつまり、お前のデッキはエド以上に強いってことか？ そいつはちょっと楽しみだぜ！」

鼻の下を指で拭う十代の顔は、興奮と期待が浮かんでいる。彼が決闘を楽しんでいるということに気付かない者は、この場には誰も

居なかった。

バトルを終えた十代は、メインフェイズ2に移るや否やカードを1枚伏せ表示で足許にセツトする。

「それじゃあ、その計算されたデッキの力ってヤツを見せてくれよ。俺はモンスターをセツトして、ターンエンド」

「ナラ俺ノターン、ドロー！ ソシテ『終わりの始まり』ノカード効果デ更ニ3枚ノカードヲドロー！」

ターン権を受け取ると同時にドローするデュエルロボ。

彼は、スタンバイフェイズから直ぐにメインフェイズに移行し、前のターンで発動決定させていたドロー強化カードで手札を補充する。

「これで奴は一気に戦略の幅を広めた」

「対し、あの十代とかいう奴は一気に手札が0……」

「面白くなってきたぜ。次は一体どんな手でくるんだ？ ……ワクワクしてきたぜ！」

一気に不利になった戦況を前にして、遊星とジャックが固唾を飲む。対し、十代はまだ笑っている。

「手札ノ『D・HERO ダッシュユガイ』ヲ墓地ニ送り、『デステニー・ドロー』発動！ カードヲ更ニ2枚ドロー！ ソシテ『強欲な壺』ヲ発動、2枚ドロー！」

「そっか。この時代じゃ強欲な壺は健在なんだ」

「奴め！ 一体何枚カードをドローするつもりなんだ！？」

「最初の終わりの始まりで3枚。デステニー・ドローと強欲な壺で合計4枚。ドローフェイズのドローを加えれば、奴はこのターンで8枚のカードをデッキから引いたことになる」

此処にきて、まだカードをデッキから引くデュエルロボにジャックが拳を握る。遊星の表情も、7枚というデュエルロボの手札枚数の前に思わしくない。明るい声を発しているのは龍亞だけだ。

そしてカードを引いたデュエルロボが、ニツと笑みを浮かべた。

「デハ、ソノ期待ニ応エテヤルトシヨウ。手札ヨリ魔法カード発動

墓地ノダツシユガイヲ選択シテ『オーバー・デステニー』。更ニ『デビルズ・サンクチュアリ』。コノ2枚ノ効果デ、デッキカラ『D - HERO ディスクガイ』、ソシテ『メタルデビル・トークン』ヲソレゾレ特殊召喚！」

【D - HERO ディスクガイ 星1 / 闇属性 / 戦士族 / ATK 300 / DEF 300】

【メタルデビル・トークン 星1 / 闇属性 / 悪魔族 / ATK 0 / DEF 0】

姿を次々に現すモンスター達。全て闇属性というだけあって、雰囲気がとても重苦しい。

だが次の瞬間、デュエルロボの場合全てのモンスター達は消滅。入れ替わる形で、言葉では言い表せない程の凄まじい姿をした漆黒の戦士が姿を現した。

「ソシテD - HEROヲ含む3体ノモンスターヲ生ケ贄ニ『D - HERO ドグマガイ』、特殊召喚！！！」

【D - HERO ドグマガイ 星8 / 闇属性 / 戦士族 / ATK 400 / DEF 2400】

「嘘おっ！？ 特殊召喚で攻撃力3400！？ しかも普通トークンってリリースには使えないんじゃないの！？」

「り、りりーすって何すか？」

「あ、ああ、生け贄のことです。俺達の世界では、生け贄にする事をリリースというんです」

驚愕の連続、目を見開いた龍亜の声がドーム全体に響く。

そして翔の質問に答えたのは遊星だ。彼は一応、時代の流れから翔達に対し敬語で丁寧に説明する。

「もう龍亞、忘れたの？ トークンはトークンでも、アドバンス召喚の為のリリースに使えない物が多いけど、特殊召喚の為やコストの為のリリースには、殆どのトークンが使えるのよ」

「あつ、そっか！」

「あの……」

「アドバンス召喚は、モンスターを生け贄にして召喚する。つまり生け贄召喚のことです」

まるで先生のように、龍可が兄である筈の龍亞に説明する。翔が再び頭上に「？」を浮かべたのは言うまでも無く、同様に遊星が説明したのも言うまでも無いだろう。

「ドグマガイハ、自分ノ場ノ3体ノモンスターヲ生ケ贄ニ特殊召喚出来ル」

「トークンはその補助カードって訳か。確かにエドのデッキには無かったコンボだな」

「ソウイウコトダ！ コノデッキハ既ニ貴様ノ知ル『Dヒーロー』ノ次元ヲ遙カニ越エテイルノダ！！」

「でも！ 俺はお前に負けるつもりなんて全くないぜ」

「ホザケ！ 手札カラ装備魔法、『早すぎた埋葬』発動。800ポイントノライフヲコストニ墓地ノディスクガイヲ特殊召喚！ ディスクガイハ墓地カラ蘇ツタ時、デッキカラカードヲ2枚ドロロー！！」

【デュエルロボ LP4000 3200】

デュエルロボの場に新たなモンスターが現れる。円盤、文字通りディスクを身に付けた小柄な戦士だ。

同時にまたデュエルロボの手札が数を増す。計5枚と、片手だけで納めるに丁度いい枚数だ。

「更ニ手札カラ『沼地の魔神王』ヲ墓地ニ送り、『融合』ヲ1枚サ一チ」

「うええっ！？ 融合のサーチカード！？ そんなカードがあつた

のかよ!? ……知らなかったあ」

それを見た遊星は、彼のデッキはドロ―強化、またはデッキ圧縮に長けたデッキコンセプトなのだと思信を持った。

「続イテ魔法発動!」

「げえ! まだあのかよ!? 好い加減待ちくたびれちゃったぜ……」

「発動サセタノハ『戦士の生還』! 墓地カラ『D・HERO ダイヤモンドガイ』ヲ手札ニ戻シ、ソノママ回収シタダイヤモンドガイヲ場ニ召喚!」

長いメインフェイズに苛々とストレスを感じずにいらなくなってきた十代。

だが、デュエルロボのメインフェイズはまだ終わらず、今度は場に召喚したダイヤモンドガイの効果が発動させた。

「ダイヤモンドガイ、効果発動。『異次元からの埋葬』ハ残念ナガラ速効魔法。ヨツテ、デッキノ一番下ニ戻ス」

互いにカードを確認し、デュエルロボはデッキにカードを戻す。

だが空かさず彼はバトルフェイズに入り、強烈な一撃をサンダー・ジャイアントに見舞う。

「ドグマガイでサンダー・ジャイアントを攻撃!」

「畏発動、『ヒーロー・バリア』!」

サンダー・ジャイアントの眼前で、ドグマガイの攻撃が防がれる。

だがその攻撃は、振動波となって十代に衝撃という形で襲い掛かった。

十代は思わず頭を両腕で覆い隠す。

「E・HEROがフィールド上に存在している時、相手からの攻撃を一度だけ無効にする」

片目を瞑りながらも、あくまでも決闘を楽しんでいることを証明するように笑みを浮かべる十代。

「ダガ、マダ攻撃ハ残ッテイル。ダイヤモンドガイ、『ダイヤモンド・ブロー』デセットサレタモンスターヲ攻撃」

攻撃指示を受けたダイヤモンドガイが、強烈な打撃で十代のモンスターを粉碎。犬を模した機械族モンスターが、爆発を起こして消滅する。

「戦闘で『フレンドッグ』が破壊された時、墓地に存在する融合とE・HEROを1枚ずつ手札に戻すことが出来る。俺はクレイマンと融合を戻す」

十代の手札にカードが2枚加わる。

対し、これ以上何もすることが無かったのか、デュエルロボはそこでターン権を十代に渡した。

「俺のターン、ドロー！」

「コノ瞬間、ドグマガイノモンスター効果発動。相手ノライフヲ半分ニスル」

「げっ！？ そうだっ……うああああああああっ！！？」

【十代 LP4000 2000】

同時に十代の身体から淡い緑色の光が、ドグマガイによって抜き取られる。

悲鳴を上げる十代の肉体には、強い虚脱感と疲労が襲った。

「なんてモンスターだよ、特殊召喚効果に攻撃力3400。その上相手のライフ半減って、インチキチート効果過ぎんだろ！？」

「あの人、遊城十代さんの手札は3枚。場にはモンスターが1体。こんな状況、どうやってら覆せるの……？」

『裁きの龍』の際と同様、クロウがドグマガイの効果に苛立ちを覚える。

加えて、龍可はもう勝ち目が無いのではないか、とまで思い始めていた。

アキや龍亞、ジャックも口にこそ出していないが、正直考えていることは龍可とそう変わらない。

俯き、悔しそうに唇を噛むその顔が、彼等の内心の全てを物語っ

ていた。

「そんなことないわ」

だが、この状況下でも十代の勝利を信じ続ける者がいた……明日香だ。

「そうよ。十代サマは、こんなピンチで諦めたりしないんだから！
同様にレイも十代の勝利を信じている、と輝く瞳を遊星達に向けて言葉を発する。

「アニキなら、きつとやってくれるっす」

「そうともドン。アニキはこれまで、どんなピンチも乗り越えてきたザウルス。こんなことでアニキの強い闘志が折れる筈はないドン
！！」

引いたカードと睨めっこしている十代を見詰め、翔と剣山も叫ぶ。
十代という男に心から信用を寄せていることが伺える。

「俺達もあの人を信じよう」

そして次の瞬間、彼等の視線は口を開いた者に向けられる。

不動遊星だ。

「それにあの人はまだ、勝負を諦めてはいない」

「手札から、魔法カード発動！」

そう言った次の瞬間だった。十代がドローフェイズに引いたカードを寸座に発動させたのだ。

ダブルマジック

「『二重魔法』！ 融合をコストとして墓地に送り、相手の墓地の魔法カードを1枚、自分のカードとして使用する。俺が選んだのは強欲な壺、よってデッキから2枚ドロー」

手札を整える十代、それを見たジャック達の表情が啞然とした物に変わる。

2枚のカードを手札に加えた十代は、その中の1枚に視線を落とした。そして驚愕する。

「アニ……キ？」

「アイツ、一体何のカードを引いたんだ……」

思わず心配げに声を洩らす翔。クロウはどんなカードを引いたの

かに興味を覚えた。

誰もが覗き込むように、十代の次なるプレイングを見詰める。

そして十代の顔つきが変わり、行動に移した。

「『フュージョン・リカバリ
融合再生』を発動！ 墓地に存在するスパークマンと融合のカードを手札に戻し、魔法カード、『ダーク・フュージョン』を発動！」

「なっ!？」

「何ですって!？」

「ダーク・フュージョンだと!？」

十代が発動した2枚目の魔法カード、ダーク・フュージョンに翔達は目を疑った。彼等の驚愕の視線は一斉にそのカードへと釘付けになる。

剣山や万丈目は目を見開き、明日香は身体に走る寒気を感じ取った。

「手札のスパークマン、クレイマンをダーク・フュージョンして、『E・HERO ライトニング・ゴーレム』を攻撃表示で融合召喚する！ 来い、ライトニング・ゴーレム!！」

そうしている間にもカードは効力を発揮。歪んだ闇の空間に飛び込んだ2体のHEROが、正義のHEROではなく、邪悪な悪魔の姿となって十代の場に参上する。

【イービルヒーロー
E・HERO ライトニング・ゴーレム 星6 / 光属性 / 悪魔族
/ ATK 2400 / DEF 1500】

「ア、アニキ……どうしてそのカードをデッキにつ!？」

サンダー・ジャイアントに酷似した邪悪な悪魔が姿を現すと同時に、翔が嘆くように十代に訴えた。他の者達も同じ考えなのか、翔と全く同じ言葉を視線に乗せて十代に向けている。

遊星達にはどういふ訳なのか、全く解らない。

だが、今十代が使用したダーク・フュージョンというカードが、

彼等の中ではトラウマ的存在のカードであることは、直ぐに理解出来た。

十代の場に並ぶ正義と悪のHERO。召喚した十代は、黙り込んで俯いている。

だがその次の瞬間、十代は信じられない行動に出た。

「き……きたあああああああああああああつ！！！！」
突然、歓喜の叫び声を上げる十代。仲間達の鼓膜を破らんばかりの大声だ。

その意味不明の叫びに疑問を感じなかった者はいなかった。十代に関して全く知らない遊星達は兎も角、彼をよく知る筈の翔達まで、今の彼の言動には訳が解らず困惑している。

「正義のヒーローと悪のライバルヒーローの夢にまで見た共闘！俺が子供の頃からずっと思い描いてきた光景が、遂に実現した。くうううう、もう興奮が全然治まんねーぜっ！！！！」

「あの……アニキ？」
「あつ、わりいわりい！」

1人、待ち望んでいた光景を前に狂喜乱舞する十代。翔の声が届いたのはその数秒後だった。

「俺さ、皆と別れた後も決闘三昧でさ。それでずっと考えてたんだ……この『E・HERO』達のこと」

十代の視線がライトニング・ゴレムに向けられる。心なしか、サンダー・ジャイアントまで向いているように仲間達には見えた。

「確かにこいつ等は俺が犯した罪の象徴。心の闇に支配され、『霸王』となった俺はこいつ等を使って、大勢の人達を苦しめてしまった」

悲しそつに言う十代。表情も先程とは打って変わり、完全に落ち込んでいる。

そして心の闇という言葉に遊星が僅かに反応を見せた。

「でも、こいつ等に罪は無い！！ 本当に罪があるのは俺だけ、こいつ等は全く悪くないんだ！！！！」

顔を上げた十代、その表情は悲痛そのもの。見ているだけで気が滅入る。

「モンスター達に罪は無い。罪があるのは、モンスター達を使って悪いことをした奴にだけなんだ！」

十代の言葉をライトニング・ゴレムは背中受けて止める。その哀愁漂う背中、とても寂しそうに十代には見えた。

「どんなモンスターだって、使う決闘者しだいで善にも悪にもなる。こいつ等だって元は正義のHEROだ。俺が使い方さえ間違わなければ、きつと正義の為に戦ってくれる筈なんだ！！！」

「十代さん……」

「だからこそ、俺はもう一度こいつ等をデッキに入れる。霸王の僕しもへとしてじゃなく、共に闘ってくれる仲間のHEROとして、俺はこいつ等と一緒に戦う！！！！」

龍可は胸を打たれた。モンスターを此処まで大切に見る決闘者を彼女は見たことが無かったからだ。

遊星や龍可も、確かにカードを大切にしている。仲間なんだから当然だと今まで彼等は考えてきた。

だが、十代のように悪の烙印を押されたカードまで愛することが彼等に出来るだろうか。例として、人の命を犠牲にして召喚される『地縛神』が上がる。

無理だ。

だが彼なら、遊城十代なら災いの権化である地縛神でさえも、正しい方へと導けるかもしれない。

龍可は十代の強い思いにそんな期待が淡く浮かんだ。

翔達も、改めて遊城十代という男の器量の深さを知った気がした。「……ってカッコ付けたけど、ホントはさっき言った通り善悪のHEROと一緒に戦う姿を見たかったのが大きいんだけどな」

知った気がしたただけだったかもしれない

余計な一言を継ぎ足し、十代は一斉に呆れられた眼差しを浴びる。

「アニキ……」

「それを言わなければ、とてもいい台詞だったんだけど……」

「な、何だよ！ 良いじゃねーか、ホントに見たかつたんだし！！
それに可哀想だろ、使って貰えないカードなんてさあ……」

子供っぽく腕をブンブンと回し、言い訳を語る十代。思わず呆れの表情が崩れ、笑みが零れる。

だが、その言い訳は正に十代らしい。これが遊城十代だと翔達は改めて思い知らされた。

「ちえっ、取り敢えず決闘を再開するぜ。融合召喚したライトニング・ゴーレムの効果発動！」

可愛らしく舌打ちをして、決闘に意識を戻した十代。

同時に彼の場のライトニング・ゴーレムが、翳した両腕に雷を宿す。

「１ターンに一度、相手の場のモンスター１体を破壊することが出来る。攻撃力の高さを問わずにな！！ 喰らえ、『ボルテック・ボム』！」

その名の通り、雷の爆弾がデュエルロボのモンスターを襲撃。破裂すると同時に１体のモンスターを木っ端微塵に吹き飛ばした。

「馬鹿ナ！？ ドグマガイガー瞬デ！？」

「やっぱり強いなあ、ライトニング・ゴーレム！ 味方になってくれるとマジ心強いぜ……」

その強力な効果に感激する十代。続いて彼はバトルフェイズに入った。

「そしてバトルだ！ ライトニング・ゴーレムでダイヤモンドガイを攻撃、『ヘル・ライトニング』……」

「畏発動、『D-シールド』。ダイヤモンドガイヲ守備表示ニ変更シ、コノカードヲ装備。装備モンスターハ戦闘デハ破壊サレナクナル。更ニ畏発動、『和睦の使者』」

だが、強烈な雷攻撃は防御態勢を取るダイヤモンドガイの前で離散してしまう。

続いて発動された畏が、完全に十代の攻撃を阻む壁となった。

「和睦の使者ノ効果デ、コノターンノダメージヲ0ニスル」

「妙なことをするんだな。……まあいいや、俺はターンエンド！」

「ドロー……！」

出せるカードが尽きた十代は此処でターンを終了。デュエルロボがまたカードを引く。

「ダイヤモンドガイノ効果発動！ デッキトップノカードハ『鳳凰神の羽』、通常魔法ダ」

「鳳凰神の羽、デッキトップを操作出来るカード」

「つまり彼は次のターン、確実にダイヤモンドガイの効果を発動させることが出来る」

「またも通常魔法カード。遊星と吹雪の言葉が次のダイヤモンドガイの効果成功を告げた。」

「手札カラモンスターヲセツト。カードヲ更ニ3枚セツト」

「これで奴は魔法、罫をフルセツトつす……」

「全テノモンスターヲ守備表示ニ変更シ、ターンエンド」

「おっしや、俺のターン！ ドロー……！」

殆どのスロットにカードを置き、ターンを終了するデュエルロボ。攻め難く見えるこの状況下、勢いが止まると思われていた十代の声は、予想に反して明るかった。

「行くぜ、ライトニング・ゴレムの効果発動！ 対象はダイヤモンドガイだ。ポルティック・ボム……！」

手札を持った手でダイヤモンドガイを指すと同時にライトニング・ゴレムが不敵な笑みを浮かべる。

ドグマガイを消し去った雷の爆弾を投げ付け、ダイヤモンドガイを粉微塵と化させた。

「更に手札から、『カードガンナー』を召喚！」

十代は少ない手札を惜しまず、破天荒に攻める。手札から1体の機械族モンスターを召喚する。

【カードガンナー 星3 / 地属性 / 機械族 / ATK 400 / DE

「カードガンナーの効果発動！ デッキからカードを3枚まで墓地に送って、エンドフェイズまで1枚に尽き攻撃力を500ポイントアップさせる。俺は当然3枚全部送るぜ！」

十代の勢いは留まることを知らない。次々に彼は墓地にカードを送る。

【カードガンナー 星3/地属性/機械族/ATK 400 1900/DEF 400】

同時にカードガンナーの攻撃力が一気に1500ポイントアップ。下級モンスター内でも、高い部類に入る程の攻撃力を手に入れる。心なしか、カードガンナー自身、張り切っているようにも見える。

「あいつ、相手のリバーズカードは5枚だつてのに攻撃する気満々だな」

「まあ、それがアニキだからね……」

少しは警戒しろ、と言わんばかりにクロウが苦言。

翔は思わず苦笑いを浮かべて、彼の行動を弁護するが、内心はクロウと同じらしい。

「そしてバトルだ！ カードガンナーでディスクガイを攻撃!!」

バトルフェイズに突入した十代。直ぐ様カードガンナーの銃口が火を噴いた。

打ち抜かれたディスクガイは沈没。再び墓地に埋葬される。

「あれ？ あれだけリバーズカードがあるのに攻撃阻止用のカードは無かったのかな？」

「もしかして、ただのブラフ？」

あつさりと通った攻撃に龍亞と龍可は不信感を覚えずにいられなかった。

2人は互いに顔を見合わせ、デュエルロボの不気味さに顔を歪ま

せる。

「……わざとだ。奴はわざと攻撃を通したんだ」
その疑問に答えたのはジャックだった。

「奴のカードスロットは完全に埋まってしまっている。だが、ディスクガイは早すぎた埋葬で蘇生させたモンスター。つまり、ディスクガイが破壊されると同時に装備魔法となっている早すぎた埋葬も破壊され、奴の場には空きが出る。……それを狙っていたんだらう」

続けて口を開いたのは遊星だ。ジャックも同様の考えだったらしく、彼はコクリと頷いた。

（へへっ、奴が今の攻撃をわざと通したってことくらい、俺にだって解ってる。さて、奴は次に何を見せてくれるのか）
一方、十代も同じことを考えていた。彼にも今の行動がわざとだと解っていたのだ。

だからこそ、彼が何を伏せているのか興味を覚える。見てみたいという欲求が湧き上がる。

（楽しみだぜ！！）

そして十代は敵の誘いに乗る。

「行け、サンダー・ジャイアント！ ボルティック・サンダー！！」
正体が解らない伏せモンスター目掛け、巨大な雷光を投げ付けた。だが全員の予想に反し、攻撃は軽々と伏せてあったモンスターを粉碎。壺の形をしたモンスターが、粉々に弾け飛んだ。

「『メタモルポット』ノリバー効果発動。お互いニ全テノ手札ヲ墓地ニ送り、デッキカラ新タニ5枚ノカードヲドロースル」

「お互いに5枚！？ ラッキー、やったぜ！！」

発動するモンスター効果に十代は歓喜。手札の融合のカードを墓地に捨て、5枚のカードを引く。

「またデッキを大幅に圧縮する手札増強カード……」

対し、遊星は何やら不気味な気配を感じていた。口元がへの字に曲がっている。

「何故だ……奴は何故わざわざ敵に塩を送るような真似をする。HEROデッキに於いて、手札消費は最大の弱点。それを補つようなことを何故……」

「単純に自分の手札を整えたかっただけなんじゃないの？ デュエルロボもかなり手札を消費していたし」

「それでも相手の手札を増やすようなことはしない筈だ！」

アキの言葉も途中で遮り、遊星は声を上げる。どうにも彼には敵の戦略に納得が出来なかった。

そうしている間にも、デュエルロボは手札を墓地に送り、カードを引く。

何か裏がある。

デュエルロボの怪しげな笑みを見詰めながら、遊星はそう呟き続けた……。

T U R N - 1 6 ライバル登場！（後書き）

今回の最強カード

【E・HERO ライトニング・ゴーレム 星6 / 光属性 / 悪魔族
/ ATK 2400 / DEF 1500】

『「E・HERO スパークマン」+「E・HERO クレイマン」
このモンスターは「ダーク・フュージョン」による融合召喚でし
か特殊召喚出来ない。

フィールド上に存在するモンスター1体を破壊する事ができる。
この効果は1ターンに1度しか使用できない。』

正義を司る「E・HERO」^{エレメンタルヒーロー}が邪悪な融合をすることによって誕
生する悪のHERO。それが「E・HERO」^{イービルヒーロー}である。このカード
はその群に属する内の1体で、素材は『E・HERO サンダー・
ジャイアント』と同じである。

『融合』と違い、このカードを速攻でサーチするカードがない為
召喚条件はサンダー・ジャイアント以上に厳しい。しかし効果面で
言えば完全にこのカードは上位に値する。

先ず、サンダー・ジャイアントのネックである手札を消費する必
要が無くなったこと。ただでさえ融合は3枚ものカードを使用し、
尚且つ手札まで消費する為、この効果は非常に使い難かった。更に
表側、サンダー・ジャイアントより攻撃力が低くなければならない、
1ターンに一度等、色々と制約が多い。

だが、このカードにはそれが殆ど無い。先ず手札コストが無い。
コレだけでもかなり強い。更に裏表、攻撃力に関わらず無条件で破
壊出来る。実は、裏側でも破壊出来るというのは中々無い効果なの
である。（今回は戦闘耐性を持つモンスターを破壊する為、敢えて

十代は裏側のモンスターを破壊しなかった) 1ターンに一度でも、充分強力。そもそも、1ターンに何回でも行えたら堪ったものではない。見た目や名称も相まって、生きる『サンダーボルト』と化してしまう。何処かの雷帝も真つ青である。

更にダーク・フュージョンで召喚されたターンは、対象を取る効果を受けない。『次元幽閉』や『炸裂装甲』リアクティブ・アーマーから身を守れるのも嬉しいところ。勿論、光属性なのでその恩恵も受けられる。

融合代用モンスターを使用する事も可能なので、『沼地の魔神王』を活かすことも可能。『ダーク・コーリング』で2体揃えば、相手には恐ろしい存在となるだろう。

アニメでは、闇に堕ちてしまった遊城十代こと霸王十代が使用。ジム戦にて登場し、彼の『フォツシル・ダイナ パキケファロ』を戦闘破壊している。その後、『地球巨人 ガイア・プレート』によって攻撃力を半減させられ、戦闘破壊されてしまった。

因みに上記のモンスター、『フォツシル・ダイナ パキケファロ』が存在する場合、お互いに特殊召喚は不可能。よってライトニング・ゴーレムは本来召喚する事すら出来なかったのだが、どうやらアニメでは特殊召喚封じの効果は無かった模様。

更にこの決闘、続いてオブライエン戦。実は霸王十代にプレイングに於いて、ライフ計算ミス、存在していないカードが存在していた等のミスを制作側はしており、特にジム戦ではそのミスさえ無ければ、ジムが勝利していたというのは有名な話である。

TURN - 17 ネオス・フォース（前書き）

今は地震で日本中が大慌て。影響が殆ど無かった此処、西日本でも毎日地震の影響で苦しむ人達のニュースでいっぱいです。……何も出来ないだけ心が痛い。そして何もしていない自分が憎い。

兎に角願います。皆様が安息のひと時を再び得られるよう、心から。

さて、今回で十代のデッキ内容の殆どが露見。様々なカードが十代のデッキに入ってる訳ですが……扱い難っ！？ 何でこんなやり難いんだ！！ 特に手札、融合とかの所為でめっちゃくちやに消費激しいんですけど！！？

という訳で第17話、はっじまりま〜す！！！！

「よおし！ 手札もバツチリ増えたし、攻撃続行だぜ」
思わぬところで手札増強に恵まれ、上手く5枚にまで手札を増やした十代。

更に今はまだバトルフェイズの最中。十代の場には、まだ攻撃行っていない『E・HERO ライトニング・ゴーレム』が、自分の出番を今か今かと待ち構えていた。

対し、デュエルロボの場には壁となるモンスターは存在しておらず、あるのは正体不明のリバースカード3枚のみ。当然、十代は攻撃の手を止めなかった。

「ライトニング・ゴーレムでプレイヤーに直接攻撃！ ヘル・ライ
トニ
」

攻撃を続行しようとする十代、ライトニング・ゴーレムも既に攻撃態勢に入っている。

だが、そんな彼等の攻撃は中断されてしまう。既にデュエルロボの畏が2枚発動していたのだ。

刹那、辺りから光が消えた。完全に視界は真っ暗となり、何もかもが見えなくなった。

「あれ？ 急に夜になった？」

呑気なことを言う十代。

「うわああああああっ！！ 真っ暗だ真っ暗！！？」

「ひいひいひいひいっ！？ 怖いっす！ 誰でも良いから早く電気付けてえっっ！！！！」

「えっい！！ 引っ付くなあっ！！！！ たかが暗闇如きで一々怖がるなあっ！！！！」

対し、仲間達は大混乱。突然の出来事に悲鳴を上げて騒ぐ者達。声からして翔と龍亞。巻き込まれたであろうジャックの声も十代の

耳に入ってきた。

そして次の瞬間、彼等の上空から一点だけを照らす光が二ヶ所に現れる。

「おつ、非常灯か？」

「いや、僕には解る。これは間違いなくスポットライトだね」

「吹雪さん、明かりなら今は何だって良いっすよ。兎に角、助かったっすう」

唯一の光、一斉に向けられる多くの視線。皆が光を求めて、砂糖に群がる蟻のように目を向けた。

そして十代達は驚く。そこにはHと酷似した何かのマーク。それは十代達にとつて、とても見覚えのあるシンボルだったのだ。

「あれは……まさか『ヒーロー・シグナル』？」

「貴様ガ『メタモルポット』ヲ破壊シ、墓地ニ送ツタト同時ニ俺モ発動サセタノダ。ヒーロー・シグナルノ効果ニヨリ、デツキカラ『E・HERO オーシャン』ト『E・HERO フォレストマン』ヲソレゾレ守備表示デ特殊召喚スル！」

次の瞬間、シグナルに照らされた2体のモンスターがデュエルロボの場に降り立つ。大木を想像させるHEROと、海の如く青い身体を持つHEROだ。

【E・HERO フォレストマン 星4/地属性/戦士族/ATK 1000/DEF 2000】

【E・HERO オーシャン 星4/水属性/戦士族/ATK 1500/DEF 1200】

「な、何だそのHERO!? それもE・HEROなのかあっ!?!?」
見慣れないモンスター、しかも2体共E・HEROだと告げられた十代は大層驚いた。

だが、同時に何か熱いものが胸の奥から込み上げてくる。

十代の身体は、興奮という情熱で武者震いを起こしていた。

「ねえ、遊星？ 何で十代って人、あんなに驚いてんの？ フォレストマンは兎も角、オーシャンって普通のHEROデッキでも入ってるよね？ 確か俺、そう学校で習ったよ」

一方、それを見て驚かずにいられた者が居た。

龍亞、チーム5D'sの面々はまるで驚いていない。

寧ろ、当たり前だろうといった顔をして遊星の上着の袖を引っ張った。

「そうだ。『融合』を補助するフォレストマン。そしてHEROを再利用出来るオーシャン。強力な効果を持つが故にHEROデッキなら投入は必須とまで言われているカードだ。恐らく、この時代ではまだ出回っていないんだろ」

「そんな強力な効果をあの2体のHEROは持っているというの！？」

「HEROには融合カードがほぼ必須。そして素材を融合させてしまふ為にモンスターの数が足りなくなることも多い。HEROの致命的弱点をあの2体が補えるというのか……」

遊星の言葉を聞いて血相を変える明日香、深刻な顔で吹雪が驚く。そしてその話し声は、十代の耳にも届いていた。

「マ、マジかよ……そんなE・HEROが居たなんて
歯を食い縛り、身体をワナワナと震わる十代。」

「ほ、欲しい！ 欲しいぞ、そのHEROカード！！！」

「ア、アニキ……」

そしてその拳を更に強く握り締めて、キラキラとした崇拜の眼差しと声を発する。

反面、敵に対して憧れの感情を顕わにする十代に翔は言葉を失い、目尻に指を当てて涙を流した。

「でも、そんな強力な効果持ってんなら、今の内に2体共ブツ倒しかかねーとな！！ ライトニング・ゴーレムで攻撃を続行するぜ！！」

指差されたオーシャンを狙って、ライトニング・ゴーレムが動く。両手に充填させた強力なエネルギーが、電撃波となって襲い掛かった。

だが次の瞬間、どういう訳か攻撃がグニヤリと捻じ曲げられてしまふ。電撃が強い何かの力で押し付けられ、オーシャンに当たる前に消滅してしまったのだ。

「ライトニング・ゴーレムの攻撃が掻き消されちまった!？」

驚愕の声を上げるクロウ。

だが、既にカードは次なる効力を発動していたのだ。

「見る！ サンダー・ジャイアントとライトニング・ゴーレムが…」

万丈目の声に者達は異様な光景に気付いた。歪んだ空間に十代の2体のHEROが吸い込まれようとしていたのだ。

もがく2体のHERO、だが抵抗も虚しく2体は歪められた空間に吸い込まれ、その姿を消した。

「なっ、何いっ!?!? でもコレって」

「ソウダ。オ前モヨク知ル、『超融合』ダ!！」

その一言の直後、歪んだ空間から1体の白い影が飛び出し、敵としてデュエルロボの場に降り立った。

輝く白銀の身体。無表情で腕を組んだそのHEROは太陽のように明るい。

「手札1枚ヲコストニ、オ前ノ場ノE・HEROト名ノ付クモンスタート、光属性モンスターヲ融合。『E・HERO The シャイニング』ヲ融合召喚スル」

【E・HERO The シャイニング 星8 / 光属性 / 戦士族 / ATK 2600 / DEF 2100】

「また俺の知らないE・HERO。……カードを伏せて、ターンエンドだ」

次々に登場する未知のHERO。十代の顎を冷や汗が伝う。

【カードガンナー 星3/地属性/機械族/ATK 1900 400/DEF 400】

同時に攻撃力が増加していた『カードガンナー』の攻撃力も元の400に戻り、ターン権もデュエルロボに移った。

「俺ノターン、ドロー！ 墓地ノ『D-HERO ダッシュユガイ』効果発動、ドローシタモンスターヲ互イニ確認シ、ソノモンスターヲ特殊召喚。『ダンディライオン』ヲ特殊召喚」

【ダンディライオン 星3/地属性/植物族/ATK 300/D EF 300】

場に現れたのはタンポポとライオンを組み合わせた様な愛らしいマスコットのようなモンスター。十代も所持、デッキに投入しているダンディライオンだ。

「こいつ、超融合だけじゃなく、ダンディライオンまで持つてるのか!？」

「フォレストマン、オーシャンノモンスター効果発動。墓地ノ『D-HERO ダイヤモンドガイ』、融合ヲソレゾレ手札ニ加エル」
驚愕する十代を他所に、更に2枚のカードを手札に加えるデュエルロボ。再び手札が大きく潤った。

「ソシテメインフェイズ、墓地ノ『鳳凰神の羽』ノ効果発動。ソノ効果デ、墓地ノ『終わりの始まり』ヲデッキトップニ戻ス。更ニ加エタ『D-HERO ダイヤモンドガイ』ヲ召喚! ……ソシテモンスター効果発動」

再びダイヤモンドガイの手によって墓地に送られる終わりの始まり。同時に次のターン、デュエルロボの手札がまたも一気に4枚回復することを十代や遊星達に告げた。

「また手札増強、奴の手札は尽きること知らんのか!？」

「続イテ手札カラ魔法発動、融合。場ノ水属性モンスター、オーシヤン。HEROト名ノ付クダイヤモンドガイヲ融合。『E・HERO アブソルトZero』ヲ融合召喚」

【E・HERO アブソルトZero 星8 / 水属性 / 戦士族 / ATK 2500 / DEF 2000】

「また属性での融合HERO! ……しかも、何かめちゃくちゃカツコいい!」

雪の結晶に身を乗せて現れる氷のE・HERO。その名の通り、絶対零度を青白い装甲で表現している。

恐ろしい程冷たく鋭い目をしたHEROは、対戦相手である十代を睨み付けた。

「更二魔法発動、融合!」

「げっ!? まだ融合があつたのかよ!？」

「場ノE・HEROト名ノ付クフォレストマン、地属性デアルダンデライオンヲ融合。『E・HERO ガイア』ヲ融合召喚!」

【E・HERO ガイア 星6 / 地属性 / 戦士族 / ATK 2200 / DEF 2600】

「ガイア、モンスター効果発動。相手ノ場ノモンスター1体攻撃力ノ半分ヲエンドフェイズマデ吸収スル。コノ場合、カードガンナーノ攻撃力ノ半分、200ポイントガE・HERO ガイアノ攻撃力ニ加算サレル」

「な、何いっつ!? 攻撃力吸収う!？」

十代は先程から驚かされてばかりだ。

だが地属性HEROは十代に驚いている余裕も与えず、自身の効果を発動する。

【E・HERO ガイア 星6 / 地属性 / 戦士族 / ATK 220
0 / DEF 2600】

【カードガンナー 星3 / 地属性 / 機械族 / ATK 400 20
0 / DEF 400】

出現した漆黒の身体を持つ頑強なE・HEROは、十代の場のモンスターから力を奪う。

ガイアはその剛腕を掲げ、自らの力を誇示。自然を思わせる緑のオーラがモンスターを包み込んだ。

「ソシテ墓地ニ送ラレタダンディライオンハ、場ニ2体ノ『綿毛トークン』ヲ残ス」

【綿毛トークン 星1 / 風属性 / 植物族 / ATK 0 / DEF 0】

「うげげげっ!? 強力HERO3体にトークンが2体!? 一気にモンスターが並んだ!?!」

完全に場を制圧され、十代が顔を引き攣らせる。その表情は明らかにヤバイと告げていた。

「更ニ魔法カード、『ミラクル・フュージョン』!」

「此処にきて、また融合カード!」

「も、もう勘弁してくれえ〜っ!?!」

遊星の驚愕、十代の嘆きも虚しく行われる更なる融合。墓地に送られた筈のフォレストマン、そして場の綿毛トークンが空を舞い、一瞬の輝きと共に奇跡の合体を果たす。

他の3体と同様、風の属性を司るE・HEROは竜巻にマントを靡かせて、デュエルロボの場に降り立った。

「融合召喚サレタ『E・HERO Great クレイト TORNADO』
トルネード」

八、相手ノ場ノ表側表示ノモンスターノ攻守ヲ半減サセル」

「しかもまた半分ぐっ!!!?」

「ソレダケデハナイ。シャイニング八除外サレテイルE・HERO一枚二尽キ、攻撃力ヲ300ポイントアップサセル」

【E・HERO The シャイニング 星8 / 光属性 / 戦士族 / ATK 2600 2900 / DEF 2100】

【カードガンナー 星3 / 地属性 / 機械族 / ATK 200 100 / DEF 400 200】

「嘘だろお、攻撃力2000越えのHEROが4体!?!」

「バトルフェイズ! ガイアデカードガンナーヲ攻撃、『コンティネンタルハンマー』!」

十代には怯んでいる暇も無い。強烈な剛腕から繰り出される地鳴りが衝撃波となり、弱ったカードガンナーを襲う。

「まずいつ、この攻撃が通れば十代さんのライフは0だ!!!」

「十代?!?!」

遊星、明日香が声を上げるが、同時に十代の伏せカードも上がる。それが攻撃回避の為のカードだと彼等が気付くのに、そう時間は掛からなかった。

「カウンター罠、『攻撃力の無力化』!」

渦巻き状に歪んだ異空間に消える攻撃。これ以上やっても、結果は全て同じ。……そう、バトルフェイズは強制終了されたのだ。

「カードヲ一枚伏せ、ターンエンド」

【E・HERO ガイア 星6 / 地属性 / 戦士族 / ATK 240 0 2200 / DEF 2600】

【カードガンナー 星3 / 地属性 / 機械族 / ATK 100 300 / DEF 200】

「あつぶなかつたあゝ、もう少しでやられちまうところだったぜ。よし、俺のターン、ドロー！」

手札を1枚残し、エンドフェイズを迎えるデュエルロボ。同時にステータスの変動していた互いのモンスター達の能力値も再び変動する。

「俺は手札から魔法カード、『融合賢者』を発動。デッキから融合のカードを1枚、手札に加える。更にカードガンナーを守備表示に変更。再び効果を発動し、デッキから3枚を墓地に送る。そしてカードを2枚セット！……これでターンエンド」

防戦一方な十代。仲間達がこの状況で次のターンを乗り越えられないのか、と生唾を飲む。

「俺ノターン。終わりの始まりデ更ニ3枚ドロー！」

「また手札の数が逆転しちゃった……」

易々と手札を増やすデュエルロボ。思わず十代に対する心配の吐きがレイの口から洩れる。

十代も苦々しい顔をして、相手の出方を伺っていた。

「手札カラ魔法発動、『サルベージ』。墓地ニ存在スル攻撃力1500以下ノ水属性モンスターヲ回収。墓地ノオーシヤント『沼地の魔神王』ヲ回収。ソシテ再ビ魔神王ノ効果、融合ヲデッキカラサーチ。」

融合を見せ付けるデュエルロボ。その顔にはいやらしい笑みが浮かんでいる。

「更ニ場ノ綿毛トクンヲ生ケ贄ニシテ、モンスターヲセット。……バトルフェイズ」

バトルフェイズ突入と同時にアブソルトZeroの目が翡翠色に輝く。心なしか、十代は肌寒さを感じ始める。

「アブソルトZeroデ、カードガンナーヲ攻撃。『Freezing Of Moment（瞬間氷結）』」

カードガンナーに向けて、猛烈な吹雪が繰り出された。

「畏発動、『スーパージュニア対決!』」

だが次の瞬間、吹雪が止む。アブソルートZeroの動きが静まり、代わってガイアが両腕を振り上げる。

ガイアが繰り出す強烈な一撃はカードガンナーを粉碎。その破片が衝撃となつて十代を襲つた。

「俺の場の表側守備表示モンスター、カードガンナーとお前の一番攻撃力が低い攻撃表示モンスター、E・HERO　ガイアを戦闘させ、バトルフェイズを終了させる」

緊張感を全く感じさせない笑顔。その顔つきから、彼がまだ決闘を諦めていないことがよく解る。

反面、もし今の畏が無効にされていたら、と不安が絶えない仲間達。十代の後先考えない行き当たりばつたりな決闘の前には、額から流れ出る冷や汗や、溜め息が絶えない。

「更に破壊されたカードガンナーのモンスター効果、カードを1枚ドロー!」

「……カードヲ伏せ、ターンエンド」

「おっしや、俺のターンだ!」

ドローしたカードを確認する十代。

(『コンバート・コンタクト』のカード……)

引いたカードはコンバート・コンタクト。更に手札を見れば、発動に必要な『N』^{ネオスペーシアン}と名の付くモンスター、『N・グロー・モス』がある。

十代は直ぐ様2枚を手に取り、決闘盤に差し込んだ。

「魔法カード、コンバート・コンタクト!　自分の場にモンスターが存在していない時、手札とデッキからNと名の付くカードを墓地に送り、デッキから2枚ドローする。俺は手札のN・グロー・モスとデッキの『N・ブラック・パンサー』を墓地に送って、2枚ドロー!」

「ねおすペーしあん?　……それって、何かしら遊星?」

「解らない……俺も初めて聞くカード群だ。十代さんだけが持つて

いるカードなのかもしれない」

聞き慣れない単語にアキが首を傾げる。思わず彼女は遊星に尋ねたが、彼にも詳細は解らなかった。

取り敢えず2人は視線を決闘に戻し、ドローによる戦況の変化に意識を集中する。

「いよつしゃあつ！ 更に魔法発動、『コクーン・パーティー』。墓地に存在するNと名の付くモンスター一種類に尽き、デッキから『コクーン』を特殊召喚する。俺の墓地にはさっきのコンバート・コンタクトで送った二種類、そしてカードガンナーで墓地に送られた『N・グラン・モール』の計三種類。よって3体のコクーンを特殊召喚出来る。来い、『C・ドルフィーナ』、『C・チッキー』、『C・ラーバ』！」

【C・ドルフィーナ 星2 / 水属性 / 魚族 / ATK 400 / DEF 600】

【C・チッキー 星2 / 風属性 / 鳥獣族 / ATK 600 / DEF 400】

【C・ラーバ 星2 / 炎属性 / 昆虫族 / ATK 300 / DEF 300】

「あつ、可愛い！」

出現する3体の蛹モンスター。それぞれイルカ、小鳥、幼虫をその姿から想わせる。

そして可愛い容姿に龍可の心が弾む。確かにどれもこれも子供が描いたようなモンスターだ。

「へへっ！ 更に此処でフィールド魔法発動、『ネオスペース』！」

十代の決闘盤のフィールド魔法のスロットに1枚のカードが装填

される。

次の瞬間にはカードが効力を発揮し、一瞬でフィールドが神秘的な虹色の空間に変わった。

「す、すげえ……初めて見たぜ、こんなフィールド魔法」

「綺麗……」

初見のクロウ達が声を上げる。中にはウツトリと恍惚の顔で見上げる者も居る程、この空間は美しかった。

「まゝだまだ、こっからが俺のNの本領発揮だぜ！ ネオスペースが存在している時、Cを生け贄にすることで、手札がデッキから記載されているNを特殊召喚出来るんだ」

「つまり、Cモンスターは名の如く、Nの準備段階という訳か」

「行くぜ、全てのCを生け贄に『N・アクア・ドルフィン』、『N・エア・ハミングバード』、『N・フレア・スカラベ』をデッキから特殊召喚！」

十代の言葉を合図にC達の起動効果が発動した。

【N・アクア・ドルフィン 星3 / 水属性 / 戦士族 / ATK 60 / DEF 800】

【N・エア・ハミングバード 星3 / 風属性 / 鳥獣族 / ATK 800 / DEF 600】

【N・フレア・スカラベ 星3 / 炎属性 / 昆虫族 / ATK 500 / DEF 500】

進化を遂げるC達。それぞれネオスペース内で成長し、本来の姿であるNとして参上する。

「うおおおおおおっ！！ スッゲーカッコいい！！」

「そうかしら、私はさっきの方が良かったなあ……折角可愛かったのに」

今度は龍亞が興奮し、1人大きく盛り上がる。対し、龍可のテンションは少し落ちたようだ。

「フン、低い攻撃力ノモンスターガ何体出揃オウト、雑魚八雑魚二過ギン」

「俺のデッキに雑魚なんかいるもんか!!」

デュエルロボの言葉に一瞬遊星の顔が曇る。雑魚という言葉をも嫌うが故、今の発言は許せなかった。

だが、遊星が言葉を発する前に十代が叫んだ。彼も同様に雑魚という言葉を好んではいなかったのだ。

「フレア・スカラベは、相手の魔法、罫カード1枚に尽き、攻撃力を400ポイントアップさせる。お前の場にカードは2枚、よって900ポイントアップだ!」

【N・フレア・スカラベ 星3 / 炎属性 / 昆虫族 / ATK 500
1300 / DEF 500】

ネオスベーションエクステン

「そしてリバーズカードオープン、『NEX』!! このカードでアクア・ドルフィン^{ネオスベーションエクステン}はマリ^{ネオスベーションエクステン}ン・ドルフィンに更に進化する!!」

【N・マリ^{ネオスベーションエクステン}ン・ドルフィン 星4 / 水属性 / 戦士族 / ATK 90
0 / DEF 1100】

更に進化を遂げる十代のN。水色だった身体は群青色に変わり、身体も一回り大きくなる。……そしてまた龍亞が騒ぐ。

「まだまだ行くぜ! エア・ハミングバードの効果発動。相手の手札1枚に尽き、ライフを500ポイント回復する。『ハニー・サクク』!!」

刹那、デュエルロボの手札に咲く花。ハチドリの名を持つNは、次々にその花から蜜を集めていく。

「お前の手札は4枚。俺のライフは一気に4000まで回復する!」

【十代 LP2000 4000】

「一気にライフが2000も回復したっ!?!」

「これがNの力……」

「す、すっげー!!! N、めっちゃめっちゃカッコいいっ!?!」

遊星は驚愕した。半減させられたライフを一瞬で回復させてしまうNの力。その効果はとても雑魚という言葉では片付けることが出来ない。

それにはアキやジャックも驚愕を隠せなかった。龍亞など先程から喜びつつ放した。

「そして手札から『スペーシア・ギフト』を発動。場のNと名の付くモンスター一種類に尽き、カードをドロウする。この際、マリンドルフィンにはアクアドルフィンとしても扱う為、4枚のカードをドロウ!!!」

「一気に4枚モノカードドロウダト!?!?」

手札増強を図る十代。一拳に彼の手札は6枚にまで回復する。

「手札も増えたトコで、マリンドルフィンのモンスター効果発動! 手札を1枚墓地に送って、相手の手札を確認してモンスターを選択。そのモンスターより攻撃力が高いモンスターが俺の場に存在すれば、そのカードを破壊して、相手に500ポイントのダメージを与える! 手札の『E・HERO ネクロ・ダークマン』を墓地に捨て、お前の手札の……よし、『D・HERO ダイハードガイ』を破壊するぜ!!!」

「グヌヌッ!?!」

マリンドルフィンがイルカ特有の超音波デュエルロボの手札を破壊。音波は彼の聴覚機能を刺激し、そのままライフを削り取る。

【デュエルロボ LP3200 2700】

「攻撃力アップにライフ回復。そして手札破壊……なんてカード達だ」

「ステータスは決して高くはないが、それを補う特殊効果をN達は持っているんだ」

次々に発揮されるN達の力に驚き呆れる遊星達チーム5D's。翔達は驚いてこそいなかったが、その強力な効果に改めてNの力を実感する。

「さあて、此処でいよいよ俺のデッキのエースHEROの登場だぜ！！！」

1枚のカードを手にする十代。

臆てそのカードは決闘盤のモンスターゾーンに表側表示で置かれ、彼の場に攻撃表示で召喚された。

「墓地のネクロ・ダークマンの効果でE・HEROを生け贄無しで召喚出来る！！ 来い、『E・HERO ネオス』！！！」

【E・HERO ネオス 星7/光属性/戦士族/ATK 3000/DEF 2000】

「来たドン！ アニキの切り札、E・HERO ネオスだドン！！！」

「ネオス……また、俺達の知らないカード」

白い身体に青いコア。強靱な身体を持ったHERO、ネオスが地に足を着ける。その鋭い目は敵のHERO達を見据えていた。

「E・HERO ネオス、それはNと共にネオスペースからやって来た奇跡のHERO。その力が今、N達によって解き放たれる！！ マリン・ドルフィン、エア・ハミングバード、E・HERO ネオス、トリプルコンタクト融合だ！！！」

コンタクト融合という聞き慣れない言葉に困惑している暇は無い。既にHERO達はネオスペース上空へと飛び上がり、ネオスを中心に融合を果たしていた。

空の如く青い身体。風を空ごと切り裂く巨大な翼。何もかもを貫く爪

「出でよ、『E・HERO ストーム・ネオス』!!!!!!」

【E・HERO ストーム・ネオス 星9 / 風属性 / 戦士族 / AT
K 3500 / DEF 2500】

水と風の力を得て、暴風雨をも操る強力なE・HEROが誕生した。

TURN - 17 ネオス・フォース（後書き）

今回の最強カード

【E・HERO アブソルトZero 星8 / 水属性 / 戦士族 /
ATK 2500 / DEF 2000】

『「HERO」と名のついたモンスター + 水属性モンスター

このカードは融合召喚でしか特殊召喚できない。

このカードの攻撃力は、フィールド上に表側表示で存在する「E・HERO アブソルトZero」以外の水属性モンスターの数×500ポイントアップする。

このカードがフィールド上から離れた時、相手フィールド上のモンスターを全て破壊する。』

『E・HERO』の群に属する1体で、属性により融合するモンスター。HEROデッキを相手にする場合、必ずといっていい程登場するのがこのアブソルトZero、通称アブソ、別名Zeroである。因みにトマトとしては、後者の方が好み。

このモンスター、何と『サンダーボルト』内臓という恐ろしい効果を持っている。発動要件もフィールドを離れる、とかなり容易普通に破壊された場合は勿論のこと、『亜空間物質転送装置』や『マスク・チェンジ』等の場合でも発動し、相手フィールドを氷を操る癖に焼け野原に変えていく。

そして攻撃力アップ効果もかなり強い。相手フィールドも換算するので、攻撃力は上がり易いのだ。『ガエル』、バウンスの鬼である『氷結界の竜 ブリユーナク』も『超融合』でカモに出来たりする。そしてこの効果を活かし、『DNA移植手術』を発動させれば凄まじい脅威となる。因みに限界は7000と、予想通りかなり高

い。

更に実はこのカード、他の属性融合HEROと違い、素材にするのはE・HEROではなくてもいい。HEROならD・HEROだろうとE・HEROだろうと問わないのも魅力。HEROデッキにとって、超融合は最高の武器にもなり、最高の脅威になってしまった。

因みに相性のいいカードとして、他にも色々と上げよう。先ずはお馴染み、素材兼融合サーチの『沼地の魔神王』。寧ろ必須である。そして『スキルドレイン』ともこのカードは相性がいい。フィールド外で発動する効果の為、スキドレも圏外なのだ。相手は効果を使えない、コレだけでも中々鬱陶しいのにサンダーボルト喰らわされ続けられたら堪ったものではない。『パラドックス・フュージョン』は言わずもがな。

反面、『天罰』や『スターダスト・ドラゴン』には弱い。当然だが、『王宮の弾圧』を発動されれば召喚すら出来なくなる。絶対無敵という訳ではないので注意。……でも強い。

実は、水属性に対する炎属性に『E・HERO ノヴァマスター』が存在しているのだが、実はこの2人かなり似ている。案外ライバルなのかもしれない。因みにこの2体の相性はあまり良くない。片や破壊効果、片や戦闘破壊効果だ。

見た目も相まってかなりカッコイイこのHERO。その強さは君自身の手で実感しよう。但し、友人と決闘する時はこのカード、かなり嫌がられる。

上記のカードを組み合わせると、本当に嫌がられる。是非ともZeroは三積みにしよう。……但し、Zeroを複数並べるのはお勧めしない。

TURN・18 ヴィシヤス・クロー（前書き）

漸く更新、今回で決闘はクライマックスに突入。GX編も残すところ……2、3話で終わるのではないかと予測しております。（予測ってお前なあ）

さて、展開としては前回とそう変わりません。相変わらずHERO達が殴り合いを繰り返す。今回もHEROで一杯。そして私の趣味が大暴走。取り敢えず好きなカードを片っ端から叩きこんだといった感じに仕上がっています。

そして修正点。一度その決闘で登場したモンスター達のステータスが表示されなくなりました。理由は単に私が面倒だということとしつこいということから。

話が変われば、そこでもちゃんと表示していましたが、これからはそれが無くなります。どうぞご了承ください。

TURN - 18 ヴィシヤス・クロー

十代の場に颯爽と現れた暴風雨の戦士、『E・HERO ストーム・ネオス』はその鋭い目を更に輝かせた。その視線の先には、敵のE・HERO達が4体。彼等も恐ろしい目付きでストーム・ネオスを睨んでいる。

「あれが十代さんのエースモンスターの力……E・HERO ストーム・ネオス」

「Nとネオスには『融合』のカードも必要無く合体出来るのか！」
「すっげー！ すっげー！ ストーム・ネオス、カッコいいっつー！！」

登場したHEROの姿を前に、先ず最初に声を上げたのは遊星だ。続いてクロウ、龍亞は胸の高鳴りが抑え切れず、世界の一大事だというにも関わらず、大はしゃぎで喜んでいる。

「行くぜ、ストーム・ネオスの効果発動！ 1ターンに一度、全ての魔法、罨を破壊することが出来る！！ 全てを吹き飛ばせ、『アルティメット・タイフーン』！！！」

ストーム・ネオスの翼が引き起こした強烈な風が、互いの魔法と罨を『ネオスペース』ごと吹き飛ばした。

【E・HERO ストーム・ネオス 星9 / 風属性 / 戦士族 / ATK 3500 DEF 3000 / DEF 2500】

【N・フレア・スカラベ 星3 / 炎属性 / 昆虫族 / ATK 1300 DEF 500 / DEF 500】

同時にネオスペース等の恩恵が無くなり、ストーム・ネオスと『N・フレア・スカラベ』の攻撃力が僅かに下がる。

「バ、馬鹿ナ!? 俺ノ伏セカードガ全テ破壊サレタ!?!?」
「おっと、まだまだ行くぜ! ストーム・ネオスで『E・HERO
ガイア』を攻撃、『アルティメット・サイクロン』!!!」
大地を司る漆黒のHERO、ガイアを襲う一陣の風。ストーム・
ネオスの起こした突風は、まるで刃のようになってガイアの強靭な
身体を楽々と切り裂いた。

そして攻撃の余波がデュエルロボを襲う。

【デュエルロボ LP 3200 2400】

「オ、オノレッツ……」

胸を押さえるデュエルロボ。余程精巧に造られているらしく、茶
色い液体を傷口から流している。

そのポタポタと滴るオイルが、まるで血のように遊星には見えた。

「よし! 上手く奴のHEROを倒した!」

拳を握り、歓喜の声を上げるクロウ。変わりつつある戦況に彼を
含む5D'sの面々の心が躍る。

だが、そんな彼等に対し、翔や明日香達の表情は暗い。

遊星は思わず翔達に向かつて、どうかしたのか、と尋ねた。

「相手の場には強力HEROが3体。でも融合を果たしたネオスは、
ネオスペースが無ければ、その存在を保つことが出来ないの……」

「つまり、1ターンしか実態を保てないネオスは、エンドフェイズ
に融合デッキに戻っちゃうんす」

明日香と翔の苦しげな言葉が、仲間達の驚愕を誘う。

そして一斉に皆の視線が、ストーム・ネオスへと向けられた。

「そ、そんな!? じゃあ、折角召喚したストーム・ネオスも……」

「……このターンのエンドフェイズには、デッキに戻る」

「俺はこれでターンエンドだ!」

「なっ!? 十代さん!!」

龍可の言葉を頷いて肯定する万丈目。空かさず十代の宣言で、彼

のターンがエンドフェイズを迎えた。

そして遊星が驚愕の声を上げる。十代の場には、このターンにデッキに戻るストーム・ネオス以外のカードは、攻守共に低くなってしまうたフレア・スカラベのみ。次のターンのことを考えれば、遊星は声を上げずにはいられなかった。

「アニキ！！ どうして伏せカードも何も残さずにエンドするんだドン！？」

「これじゃあ、奴の次のターンに3体のHEROからタコ殴り喰らっちまうぞ！！？」

声を上げたのは遊星だけではない。剣山、クロウも十代のプレイングには抗議の言葉が飛び出た。

対し十代は、深刻な顔で立ち尽くすだけで、何も答えようとはしない。

「哀レダナ、遊城十代。マサカノプレイングミストハナア」

「……そうと決めつけるには、まだ早いんじゃないか？」

十代の笑いを含んだ一言を合図にストーム・ネオスが静かに風を起こし始めた。

一体何が起きているのか……デュエルロボや遊星や翔達は、風が吹き荒れる辺りを見回す。

「確かにこのターンのエンドフェイズ、ストーム・ネオスはデッキに戻る。だが、同時にストーム・ネオスのモンスター効果が発動する。ストーム・ネオスがデッキに戻る時、同時に全ての場のカードを互いのデッキに戻すんだ！！」

「何ダト！？ 全テノカードダト！！？」

「全部ぶっ飛びまえ！！ 『アルティメット・ハリケーン』！！！！」
次の瞬間、ストーム・ネオスが起こした風の勢いは最高潮に達し、大きな竜巻を引き起こした。

デュエルロボのHERO達はそれに次々に巻き込まれ、吹き飛ばされていく。十代のフレア・スカラベも同様、風に乗って十代のデッキに舞い戻る。

聴て、風は治まった。

「あれだけ沢山いたHEROが、全部デッキに戻った」

「すげえ……あの野郎、たった1ターンで、しかも1体のモンスターだけで相手の場のカード全部ぶっ飛ばしやがった！」

「見たかあ！　これがアニキのHEROの凄さなんだあ！！！」

「アニキはやっぱり、最っ高だドン！！！」

あまりの強風に目を閉じずにいらなかった。そんな翔達が再び目を開けた時、映ったのは綺麗さっぱりに片付けられていたフィールドだった。

啞然と感嘆の声を出すアキ。興奮で目を見開き、たった1ターンに感動するクロウ。そして十代をアニキと慕う翔と剣山が、腕を上げて十代を讃えた。

そんな彼等に対し、十代は親指を立て、グツとサムズアップを返す。

「さあ、これでフィールドは完全に振り出しに戻ったな」

「オノレ……ダガ貴様ノ場ハ完全ニ無防備！　俺ノ有利ニ変ワリナイ！！！」

不敵に笑う十代に苛立ちを覚え、鬼気迫る勢いでカードを引くデュエルロボ。

あまりの勢いに先程の破損した腕の傷口から、ピュツと赤茶色のオイルが飛ぶ。

「俺ハ手札カラ『E・HERO エアーマン』ヲ召喚！」

苛立ちの感情を顕わにデュエルロボは1体のモンスターを召喚。

大きなプロペラと一体化した翼を備えたモンスターが風に乗って出現する。

彼は登場するや否や、主人の怒りの感情を読み取ったかのようにヒーローらしからぬ咆哮を上げた。

【E・HERO エアーマン 星4/風属性/戦士族/ATK 1

800/DEF 300】

「更ニエアーマンノ特殊効果発動。召喚時、自分ノデッキカラ『HERO』ト名ノ付クモンスター1体ヲ手札ニ加エルコトガ出来ル！
『エア・コーリング』！」

するとエアーマンのプロペラが突然になつて逆回転。風がデッキを吹き曝し、中から1枚のカードが飛び出し、デュエルロボの手札に表側で加わつた。

「俺ハ『E・HERO ザ・ヒート』ヲ加エル」

「召喚と同時にHEROを加えられるだつてえっ！？ ……そいつも欲しいなあ」

デュエルロボの繰り出したカードを羨ましそうに見詰める十代。

十代も確認したことを見計らい、デュエルロボはカードを裏側に戻し、それを手札と混ぜた。

「貴様ノ場ニ壁トナルモンスターハイナイ。エアーマン、プレイヤー
―ニ直接攻撃！」

「うおおああああつ！！？」

エアーマンが起こした竜巻が十代を包む。実体化した攻撃が、十代の身体に衝撃を与えた。

臆て身体がその重圧に耐え切れなくなり、十代の身体は地面にドサリと叩き付けられた。

【十代 LP4000 2200】

「ああっつ！！ やっぱりガラ空きだから直接攻撃喰らっちゃったあっつ！！！！」

「折角回復したライフが、また半分近くまで削られちゃったわ……」
慌てた表情で、ガシガシと頭を両手で掻き耨る龍可。龍可の心にも、また負けてしまうのではないか、と不安が戻ってくる。

「痛てて……やっぱ、フィールドをすっからかんのままにしたのはマズかったな。エア・ハミングバードで回復しといて正解だったぜ」

対し、当の本人の十代には、不安の感情はまるで見られない。寧ろこの状況を楽しんでいるようにも、遊星を含む数人には伺えた。

頭を摩りながら半身を起き上がらせる十代。散らばった手札を拾い上げ、再び彼は立ち上がった。

「カードヲ一枚伏せ、ターンヲ終了スル」

「よし、反撃開始だ。俺のターン！」

エンド宣言が耳に届いた十代は、直ぐ様楽しそうにデッキからカードを引いた。

5枚となった手札を確認する十代、その目に畏を受け付けない『E・HERO ワイルドマン』が映る。

すると十代は手札の中から一枚のカードを手に取り、直ぐに決闘盤に装填した。

「俺は手札から魔法カード、『E・エマーシエンシーコール』を発動！ デッキから『E・HERO』を1体、手札に加えることが出来る。俺は『E・HERO エッジマン』を加えるぜ！」

黄金の上級HEROを加え、改めて手札を確認する十代。次の瞬間には、彼の顔に笑みが浮かんだ。

「よっしゃあつ、こつからはHERO合戦だ！ 俺は手札から融合発動、手札のワイルドマンとエッジマンを手札融合。『E・HERO ワイルドジャギーマン』を特殊召喚！」

現れる筋肉質のE・HERO。黄金の鎧を身に纏い、鋭い剣を構え、十代の味方として場に参上する。

【E・HERO ワイルドジャギーマン 星8/地属性/戦士族/
ATK 2600/DEF 2300】

「行くぜ！！ ワイルドジャギーマンでエアーマンを攻撃。『インフィニティ・エッジ・スライサー』！！」

剣を構えたワイルドジャギーマンが、エアーマン目掛けて突進。そのまま剣を振り被り、脳天から叩き切る勢いで、一気にそれを

振り下ろした。

「速効魔法発動、『月の書』。フィールド上ノモンスター1体ヲ選択シ、裏側守備表示ニ変更スル。当然、対象ハワイルドジャギーマンダ！」

「くっ!？」

「コレデ貴様ノ場ニハ、攻撃可能ナモンスターハ存在シナイ。結果、バトルフェイズハ必然的ニ終了ダ」

「カードを伏せて、ターンエンドだ」

思惑通りに事が進み、思わず笑みを溢すデュエルロボ。十代には冷や汗が浮かんだ。

「俺ノターン！」

続いてカードを引き、手札を確認。引いたカードに目が止まり、デュエルロボの目が大きく見開いた。

それを見た遊星に悪感が走る。そして敵がデッキのキーカードを引いたことを理解した。

「手札カラ魔法カード発動、『テラ・フォーミング』! コノカードハデツキカラフィールド魔法ヲ1枚、手札ニ加エル。加エルノハ才前モヨク知ル」

そう言つてデュエルロボはデッキから抜き取つたカードを提示。

「『フュージョン・ゲート』。融合ヲ主軸トシタデツキニハ、中々欠カセナイフィールドダ」

「融合を使わなくても、素材モンスターを除外することで、融合召喚を可能となるフィールド魔法!」

加えられたカードは、直ぐに決闘盤のフィールド魔法専用スロットに装填された。

怪しげな暗雲が上空に渦を巻き、歪んだフィールドを場に展開させる。

「早速、フィールドノ効果ヲ使ワセテ貰オウ。手札ノ炎属性モンスター、ザ・ヒート。E・HEROト名ノ付クエアーマンヲ除外。炎ノHERO、『E・HERO ノヴァマスター』ヲ融合召喚!」

飛び込む2体のHERO。エアーマンの身体を主軸にザ・ヒートが変化した炎が包み込み、中から炎を想わせる鎧を身に付けたE・HEROが現れた。

【E・HERO ノヴァマスター 星8/炎属性/戦士族/ATK
2600/DEF 2100】

「消エロ!! 目障リナHEROME!!!」

「ワイルドジャギーマンが!？」

炎の拳で守備を取るワイルドジャギーマンを一蹴するノヴァマスター。強烈な攻撃を前に十代のHEROは打ち倒され、敗北と同時に墓地に埋葬される。

「更ニノヴァマスターが相手モンスターヲ戦闘破壊シタ時、カードヲドロースル」

そしてデュエルロボは効果に従いカードをドロ。枯渇していた再び彼の手札が息を吹き返していく。

「ドロ効果を持つHEROか。手札消耗が激しいHEROデッキとは、相性が良いカードだな」

「ああ。それにしても、またあの十代という奴の場には、モンスターが無くなってしまったぞ!」

遊星の何処か呑気な発言にジャックが噛み付く。

十代も少しは危機感を覚えたのか、表情に焦りが浮き出していた。

「カードヲ伏せ、ターンエンド」

エンドフェイズを迎え、ターン権を受け取った十代はフウと息を吐いて、指をデッキの上に置く。

「俺のターン、ドロ!」

ドロフェイズを終えた現時点で、十代の手札は2枚。

だが十代の顔は曇っている。

「カードを1枚伏せて、ターンエンドだ」

手持ちのカードが少ないが為に、十代は直ぐ様ターンを終了して

しまつ。

デュエルロボに再び余裕が戻りつつあった。

「俺ノターン！」

その表れか、カードを引くと同時にまたもデュエルロボの口元がいやらしく釣り上がる。

次の瞬間、彼の引いたカードが十代に牙を向き、彼の唯一の守りである伏せカードに襲い掛かった。

「遊城十代、俺ノ勝ちダ！ 魔法発動、『ハリケーン』！！」

「ハリケーンだと！！？」

「それを使われたら、全部の魔法や罫が手札に戻っちまう！ あいつの場にカードが残らなくなっちまうぞ！」

発動と同時に襲い来る強風。ストーム・ネオスにも負けないそれは、次々に十代達の魔法を手札に戻していく。

「くっ！ 永続罫発動、『リビングデッドの呼び声』！ 墓地の『カードガンナー』を復活させる！」

だが、ハリケーンの効果が及ぶ寸前に十代は伏せていた1枚のカードを発動。墓地から、先程十代が使用したモンスターが蘇生される。

だが、リビングデッドの呼び声がフィールドを離れると同時に、カードガンナーは再び破壊されてしまった。

歪んだ空間、フュージョン・ゲートも手札に戻り、風が止んだ時にはもう何も残っていなかった。

「破壊されたカードガンナーの効果で、カードを1枚ドロ！」

「ドロ！ノ為ニ蘇生サセタイウ訳力。ダガソレモ、貴様二次ノターンガ回ツテ来ナケレバ意味ヲ為サナイ……」

デュエルロボの的を射た一言、遊星達は悔しそくに唇を噛む。

対し、十代はまだ勝負を諦めていないのか、真剣な表情で敵を見据えている。

「行ケ、ノヴァマスター！ 奴ヲソノ拳デ燃ヤシ尽クシテシマエ！！」

だが、非常にもモンスターは壁となるカードを完全に失った十代を襲う。炎を纏ったストリートパンチが、十代に向けて一気に伸ばされた。

止めとなる一撃を前に、仲間達が一斉に悲痛な声で十代の名を呼ぶ。

だがその時、十代の場に現れた何者かがノヴァマスターの攻撃を防いだ。

半透明な存在、黒と赤の鎧で身を包む、白い長髪の戦士モンスターだ。

「墓地の『ネクロ・ガードナー』を除外することで、相手モンスターとの戦闘を一度だけ無効にする！」

「チツ!? コイツモカードガンナーノ効果デ墓地ニ送ツテイタノカ!?!?」

してやつたりと十代がチラと舌を出す。それはデュエルロボの心の怒りを更に駆り立てた。

「よし、上手く敵の攻撃を凌ぐと同時に手札を増やせたドン！」

「しかも手札に戻ったから、また十代サマはリビングデッドの呼び声が使える！」

ホッと一息を着けるひと時が訪れ、剣山とレイは一先ず、と安心感を覚えた。

「これでお前の場にも攻撃可能のモンスターはいなくなった。バトルフェイズは必然的に終了だぜ！」

「オノレッツ、俺ヲ愚弄スルツモリカ!! 手札カラ、『E・HERO レディ・オブ・ファイア』ヲ召喚！」

十代の発した言葉通り終了宣言せざるを得なくなったデュエルロボは、苛立ちながらもバトルフェイズからメインフェイズ2に移行し、通常召喚権を行使してモンスターを召喚。

炎をイメージさせる容姿、綺麗と称するより、可愛らしいといった女性HEROが場に現れる。

【E・HERO レディ・オブ・ファイア 星4 / 炎属性 / 炎族 / ATK 1300 / DEF 1000】

「おお、女の子のE・HEROだ！ バーストレディ以外にも女の子のHEROっていたんだなあ。……しかも結構可愛いし」

「ソナナコトヲ言ツテイル場合力？」

「へっ？」

手札に戻ってしまったカードを再度場に伏せるデュエルロボ。

対し、十代は素っ頓狂な声を上げて、私はマヌケですと言っかの如く、頭上に「？」を浮かべる。……そして気付いた。

デュエルロボの場に先程召喚された可愛い女の子モンスター。よく見れば、彼女の両手には炎が宿っているではないか。

そしてその凜々しい表情を見れば解る。

彼女はその宿した炎を明らかに投げ付けようとしている。

「エンドフェイズ、レディ・オブ・ファイア八場二存在スルE・HEROノ数×200ポイント、相手ノライフニダメージヲ与エル！」

「いいっ！？ 嘘おおおおおっ！！！？」

次の瞬間、レディ・オブ・ファイアが宿した炎を十代目掛けて投げ付けてきた。

身を翻して、どうにか避けていく十代。ドッジボール以上のスリルを彼は痛い程味わった。

「あちちちちっ！？ か、髪が……俺の髪が焦げたああ！！？」

【十代 LP2200 1800】

慌てて頭を素手でパンパンと叩き、煙を抑える十代。ライフと頭に400ポイントのダメージを受ける。同時にターンが十代に廻された。

「サア、ドウシタ。貴様ノターンダゾ？」

「あちち、可愛い顔して効果は強力だな。……さてと、俺のターンだ」

手札を見ず、早速十代はカードをセット。誰しもが、あれはリビングゲッドの呼び声だと予測した。

しかし、そこで十代の手が止まる。彼はそのまま手札と場にチラチラと交互に見比べる。

（リビングゲッドの呼び声でエッジマンを蘇生させれば、ノヴァマスターの攻撃は止められる。だがそれでも、発動出来るのは相手ターンから。レディ・オブ・ファイアの効果を確実に受けてしまう）
そう心で呟きながら、十代は相手の場の可愛い女の子モンスターを見る。

次のターン、またE・HEROが増えたらと思うと、十代の中に今の内に倒さなければ、という意味が込み上げてくる。

（でもそうしたら、今度はノヴァマスターの攻撃を受けてしまう上に相手の手札がまた増えちまう。だからといって）

手札を順に見回していく十代。その中で攻撃に使えるそうなのは、生け贄が必要な『E・HERO マリシヤス・エッジ』だけであった。効果でそれを緩和できるとはいえ、生け贄が必要ということから、直ぐに十代の頭からマリシヤス・エッジを使うという選択肢が消え失せる。

「十代、大分考え込んでいるわね」

「このターン、十代さんのプレイヤーつで展開がガラリと変わる。考え込んでしまうのも当然でしょう」

長いメインフェイズ、明日香と遊星の頬に冷や汗が流れる。

まるで、あそこに自分が立っているかのような緊張感を彼等は感じた。

（……やっぱり、このカードに懸けるしかないか）

チラリと手札の右端のカードに十代の目が行く。それは先程ドロフェイズで彼が引いたカードだ。

決めるや否や、直ぐ様十代はそのカードをスロットに差し込む。

カード効果は直ぐに発動した。

「魔法カード、『天使の施し』！ デッキからカードを3枚ドロ―し、その後手札から2枚捨てる！」

先ずは3枚、手際良くカードを引く十代。手札に加えたカードを含め、そこから何を捨てるか、カードを確認しつつ十代は慎重に考える。

そして、その中の1枚に十代の目が止まった。

『まったく、女の子に鼻の下を伸ばしているからそうなるんだ』

(ユベル！)

自分の身体に宿る自分とは別の魂。『ユベル』のカードが手札に舞い込んだのだ。

同時に十代の隣に、やや不機嫌そうに腕を組むユベルが姿を現した。

「あら……」

「どうした龍可？」

「う、うん。あの十代って人の隣にカードの精霊がいるの。さっきは気配だけしか解らなかつたけど、今ははっきり見える。彼を支えているちよつと刺々しいけど、温かな存在……」

それに気付く同じく精霊を視認することが出来る龍可。十代が精霊を宿す決闘者だと、改めて確信を持つ。

優しい龍可の表情を見て、遊星も彼女の口にするのが事実だと信じた。

(何だよ。まさかまた嫉妬か？ 勘弁してくれよ、またあんなことになるのは御免だぜ？)

『フフ……そう思うならもっとボクのことを見ていて欲しいなあ。』

……ねえ、十代』

腕を十代の首に向けて回すユベル。

対し、十代の態度はさっぱりとしている。

(用件を言え。何か言いたいことがあるから、出てきたんだろ？)

『フフフ、流石はボクの十代。ボクのこととは全てお見通しというこ

とだね』

(……冗談はやめろ)

そついうとユベルはフツと鼻で笑い、次の瞬間には真剣な眼差しと口調で十代の心に語り掛けた。

『そろそろカレを使ってあげたらどうだい?』

(彼? ……誰のことだ?)

『カレは君を守れなかったことをデッキの中でとても悔いていた。使われなくなったあの時から、ずっと君と共にもう一度戦える日を待ち望んでいたんだよ』

(だから誰のことだ?)

『ボクには解る、カレの気持ちだ。カレもまた君を守ろうとする、HEROの1人だからね……』

そこまで言った時、十代はユベルの目が自分の手札に向けられていることに気付いた。

手札を改めて確認する十代。今度は加えたカードごと全て事細かに確認する。……ユベルの意図に気付くのにそう時間は掛からなかった。

「そついうことが……」

思わず呟く十代。視線を再びユベルに戻せば、それを肯定するように首を縦に振ってくれた。

十代は手札の2枚を取り、天使の施しの効果に従ってそれ等を墓地に送る。

「十代って人、何のカードを捨てたんだろう?」

「此処からでは解らん。だがこのターンで何かしらの手を打たねば、奴は次のターンで確実にダメージを受ける」

ジャックからの返事に龍亞の表情が思わしくないものになる。

小さな身体がガタガタと緊張感で震えた。

「フッフ、俺二八才前ノ目算ガ解ル。オ前ガ伏セタリビンゲデッドの呼び声、ソレヲ使エバオ前八墓地カラエツジマンヲ蘇生デキ、ノヴァマスターノ攻撃ヲ防グコトガ出来ル。ダガ、レディ・オブ・フ

アイアノモンスター効果ヲ防グコトガ出来ナイ。逆ニレディ・オブ・
ファイアヲ攻撃スレバ、確實二次ノターン、ノヴァマスターノ攻撃
デ大ダメージヲ負ウ！」

いやらしい笑みを浮かべ、デュエルロボが内蔵された機械音声を
用いて喋る。

翔やジャック、万丈目やクロウ達には、それを認めざるを得ず、
悔しそうに拳を握り締め、歯を食い縛った。

「さあて、そう思い通りに事が運ぶかは解らないぜ！」

だが十代は全く不安を感じていない様子で、決闘盤に1枚のカ
ードをスロットに挿した。

すると上空に暗雲が立ち籠め、雷が生じ、辺りには不穏な空気が
満ちる。

何事か、と周りを見回す者達。さしものデュエルロボも、これに
は冷静でいられず、目を白黒させて何が起きようとしているのかを
伺っている。

そして背中に寒気が走った。

爆発と共に突然響き渡った甲高い悲鳴。デュエルロボを襲う衝撃
と爆風。レディ・オブ・ファイアが何者かに戦闘破壊されたのだ。

【デュエルロボ LP2700 500】

そして大幅に削られるライフ。モンスター越しの余波によるダメ
ージにも拘らず、恐ろしい程デュエルロボのライフが一気に削り取
られた。

まだ完全に煙は晴れていない。煙越しにだが、確かに十代の場に
人型のモンスターが存在している。

仲間達にも、まだそのモンスターの正体が確認出来ない。

隙間風で徐々に晴れていく煙。吹き飛ばされていく煙に包まれな
がら、その奥で十代が口を開く。

「俺が使ったのは、悪魔族専用の融合魔法カード……『ダーク・コ

「リング」

「ダーク・コーリングダト!?」

「ダーク・コーリングは手札と墓地から素材となるモンスターを除外して、悪魔族融合モンスター1体を特殊召喚する。俺は天使の施しで墓地に送ったマリシヤス・エッジと、レベル10の悪魔族モンスター、ユベルを除外し」

その時、急に強い風が吹き、十代の前から煙のカーテンを完全に吹き飛ばした。

中から現れたのは、1体の悪魔族モンスター。素材のマリシヤス・エッジを想像させる禍々しい漆黒の翼と身体。腕に装備された鋭い爪をはじめ、全身の至るところに武器となる鎧を纏っている。

「霸王の忠実な僕にして最凶の切り札、『E・HERO マリシヤス・デビル』を融合召喚したんだ!」

その名はマリシヤス・デビル。

『E・HERO ダーク・ガイア』と双壁を成す、最強のE・HEROの1枚だった。

TURN - 18 ヴィシヤス・クロー（後書き）

今回の最強カード

【E・HERO ワイルドジャギーマン 星8 / 地属性 / 戦士族 /
ATK 2600 / DEF 2300】

『E・HERO ワイルドマン』 + 『E・HERO エッジマン』

このモンスターは融合召喚でしか特殊召喚できない。

相手フィールド上のモンスターに1回ずつ攻撃をする事ができる。

『

今回も以前と同様に融合E・HEROを紹介する。但し、今回漫画出身ではなく、れっきとしたアニメ出身のカード。しかも採用され易いカードである、ワイルドジャギーマンを紹介。決してワイルド・ジャギーマンではない。

畏を受け付けないワイルドマンと貫通効果を持つ上級モンスター、エッジマンの融合により誕生する。その結果、両方の効果がどう合わさってこうなってしまったのか解らないが、全体攻撃効果を持つようになった。当然、素材の強力な効果は消えてしまっている。

だが、攻撃力2600での全体攻撃は中々強力。『魔天楼 - スカイスクレーパー』が存在していれば、攻撃力3599以下のモンスターを破壊出来る。相手フィールドを一瞬で片付けてしまうことも可能で、『スケープ・ゴート』にも強い。上手くコンボで貫通効果を持たせれば、えげつない攻撃を繰り出すことが出来る。更にそこから『融合解除』を決めれば痛快モノ。1ターンKillも可能となるロマンコンボが完成する。

素材が強力、尚且つ融合代用モンスターによるレパトリー、使い分けとその出し易さから、HEROデッキなら投入する価値は充

分にあると言っていていいだろう。

アニメでは勿論の如く遊城十代が使用する。初登場からいきなりのフィニッシャーとして、視聴者にその強力な効果を見せ付けた。他にも展開された『サイバー・ドラゴン』一掃や、『毒蛇神 ヴェノミノン』のループ等、此処ぞという時に活躍している。特にゲームではどういう訳か、かなりの確率で召喚してくる。更に『ミラクル・フュージョン』により、2体並べるとというのがお約束となっており、意地でも召喚しようとしてくる。

だが、ネオス登場以降はやはり他のHEROと同じく出番が激減。最後の登場は、なんと『融合破棄』によるコストとして墓地に捨てられてしまう。結果としては、それで特殊召喚したエッジマンがフィニッシャーとなった為、勝利に貢献しているといえれば貢献しているのだが……。

因みにこの時、十代は召喚しようと思えばワイルドジャギーマンを融合召喚することが出来た。精神問題で行わず勝利したが、寧ろあれは召喚したら駄目だろうという手札だった。

TURN・19 デステニー・デストロイ（前書き）

漸く此処まで漕ぎ付けた。

という訳で、今回で十代とデュエルロボの決闘はしゅう……とは
一歩届かず、恐らく次回で終焉を迎えるかと。

という訳で今回もずっと決闘。しかしこの決闘何気に長い。基本
4話位で毎度終わっていたのにも拘らず、今回に限って何だから話
近く……長いなあ。

さて、いよいよ本編ですが、今回も禁止のオンパレードです！！

（一応禁止カードはこのGXの世界の物を基準にしております）

TURN・19 デステニー・デストロイ

「十代さんの新たなE・HERO、マリシヤス・デビル。攻撃力3500」

「俺の『スカーレット・ノヴァ・ドラゴン』に匹敵するというのか、あのHEROは……」

「攻撃力なら、この決闘で召喚されたどのモンスターより遥かに高いぜ！」

今まで十代が召喚した、どのHEROとも違う。漆黒の身体より醸し出す、その全てという全てを凍り付かせる威圧感と殺気に遊星とジャックの身体は震えを来した。

クロウも言葉では明るく振る舞っているが、顔には汗が浮かんでいる。明らかにその力に脅威的な何かを感じ取っていた。

【E・HERO マリシヤス・デビル 星8 / 炎属性 / 悪魔族 / ATK 3500 / DEF 2100】

「恐ろしいわ……なんて恐ろしいモンスターなの」

「まるで本物の悪魔みたい……」

「でも！ 今あのマリシヤス・デビルは味方なんですよ！？ だったらこれ以上頼もしいものは無いよー！」

アキと龍可も恐怖を感じずにいられない。唯一龍亞だけが、あのモンスターに信頼を寄せようとしていた。

自分を言い聞かせるように叫ぶと、龍亞は恐怖を無理矢理押し殺し、潤んだ瞳で十代のマリシヤス・デビルを見詰めた……。

「ヨモヤ、コンナモンスターヲ呼び出ソウトハ……」

一方、デュエルロボは眼前のE・HEROを見詰め、苦々しそうにそう呟き、舌を打つ。

マリシヤス・デビルの攻撃力3500という破格の数値、それを前にして内蔵されたコンピュータで組み立てられていた目論見が全て叩き潰されてしまった。

思わず自分の場のノヴァマスターに視線を移すものの、攻撃力では2600とマリシヤス・デビルには遥かに劣る。

再びデュエルロボは苛立ちを感じ、チツと舌を打った。

「俺はこれでターンエンドだ！」

そうしている間にも十代はプレイし終え、終了宣言。デュエルロボにターン権が移り、直ぐ様ドローフエイズに移行する。

「ドロロー！」

引いたカードを手に持ち、先ずデュエルロボが行ったのはモンスターが表示形式の変更だった。

「ノヴァマスターヲ守備表示ニ変更」

決闘盤に縦に設置されたカードを横に変更した途端、ノヴァマスターは守備の体勢を取る。

続いてデュエルロボは先程ドローしたカードを魔法、罫用のスロットに差し込んだ。

「手札カラ速効魔法、『サイクロン』！ 貴様ノ『リビングデッドの呼び声』ヲ破壊スル」

「なら、リビングデッドの呼び声をチェイン発動！ もう一度『カードガンナー』を復活させる！」

十代の伏せカードを対象に竜巻が発生。風がカードを包み込むが、破壊される寸前に十代が対象となった永続罫を表にあげた。

先程十代の手札増強に一役買ったモンスターが蘇生。続いてサイクロンのチェイン処理で、リビングデッドの呼び声が破壊。特殊召喚されたカードガンナーも力を失い三度墓地に埋葬される。

「カードガンナーが破壊された時、そのモンスター効果が発動。デッキからカードを1枚ドロースする！」

「マタカ。……ナラ、俺ハモンスターカードヲセットシ、ターンエンドダ」

先程と全く同じ流れに苛立ちを覚えながら、デュエルロボは手札から新たなモンスターとカードを1枚ずつセットする。

立体映像のカードがデュエルロボの足下に2枚出現。場にカードを並べて守りを強化して彼はターンを終了する。

そして十代にターン権が渡された。

「俺のターン、ドロー！」

十代の手札が初期枚数にドローを加えた6枚に達する。十代の顔には余裕の笑みが浮かんでいた。

「いよっしゃあ、行くぜ！ 『E・HERO ヘル・ゲイナー』を攻撃表示で召喚！」

十代の場に新たな悪魔族HEROが登場。マリシヤス・デビルに並び、十代の頼もしい味方として颯爽と立つ。

【E・HERO ヘル・ゲイナー 星4/地属性/悪魔族/ATK
1600/DEF 0】

「こうしてみると、お前達E・HEROって、ホント強えなあ。一緒に戦ってみると改めて実感するぜ！」

場に並ぶ2体の悪のHEROを前に十代の心が躍る。彼の口調も過去にE・HEROを使用していた時より遥かに弾んでいた。

そして召喚されたモンスター達も、そんな十代の期待に応えようと自身の効果を発動させる。

ヘル・ゲイナーの身体が淡い輝きを放ち始めた。

「ヘル・ゲイナーのモンスター効果発動！ このモンスターを2ターン先の未来に除外して、場の悪魔族モンスター1体に2回攻撃の能力を与える。当然、対象は『E・HERO マリシヤス・デビル』だ！」

懸てヘル・ゲイナーは光の滴となって消滅。それ等は雨のようにマリシヤス・デビルに降り注ぎ、強力悪魔族モンスターをより一層強化。

効果を受けたマリシヤス・デビルは天に向けて大きく咆哮。同時にヘル・ゲイナーと同様、輝きのベールを持つ。

「行っけええつ、マリシヤス・デビル!!!」 『エッジ・ストリーム』

そしてバトルフェイズ、新たな力で強化されたマリシヤス・デビルが風の如く速攻を仕掛けた。

肉を引き裂く悪魔の爪が、残虐にも一瞬にしてノヴァマスターの息の根を止める。えげつない光景には龍可が思わず目を背けてしまっただ。

「続けて攻撃！ エッジ・ストリーム・セカンド!!!」

そして空かさず追加攻撃を仕掛ける。1体のD・HEROが串刺しとなり、墓地に埋葬された。

最凶を誇る悪魔なりの戦いなのだろうか、自分を守りたいと心から願っているユベルから聴いてはいたものの、容赦の一欠片も見せない攻撃には、流石の十代の顔にも苦笑いが浮かんだ。

「俺はカードを1枚伏せて、ターンエンド!」

気を取り直し、十代はカードを1枚場に伏せ表示でセット。ターンもそこで終了する。

デュエルロボにターン権が移り、セオリー通りに彼のドローフェイズからターンが開始された。

「俺ノスタンバイフェイズ、前ノターンニ戦闘破壊サレタ『D・HERO ドウムガイ』ノモンスター効果発動。墓地カラ『D・HERO』ト名ノ付クレベル4以下ノモンスターヲ1体選択シテ、特殊召喚スル」

ドローフェイズを終え、スタンバイフェイズを迎えたデュエルロボ。

そんな彼の場に1体のモンスターが守備表示で出現。身体に円盤を取り付けた、低ステータスのD・HEROだ。

「同時ニ墓地カラ特殊召喚サレタ『D・HERO ディスクガイ』ノ効果発動。カードヲ2枚ドロー」

「またドロー……」

「同じHEROデッキなのに、あいつはまるで手札切れを起こさないわね」

モンスター効果により手札増強を図るデュエルロボ。それを見たレイと明日香が思わずクツと声を洩らす。

ディスクガイの効果で無事手札を5枚にまで増やしたデュエルロボ。そのドローした2枚のカードを見た次の瞬間、その目がカツと見開いた。

デュエルロボは今引いたカードの内、1枚は手札に加え、もう一枚のカードはそのまま決闘盤のスロットに装填する。

「続ケテ魔法カード、『貪欲な壺』。墓地ノモンスター5枚ヲ選択シテデッキニ回収シ、シャッフル後ニデッキカラ更ニ2枚ドロースル」

「くそつ！ 一体奴のデッキには何枚のドローソースが組み込まれているんだ!？」

「手札は、時にライフポイント以上に重要になる。十代君と同じHEROデッキを操る彼はそれを理解しているからこそ、ああいったドロー戦法を取るんだらう」

拳を握り締めた万丈目が怒りを吐きだし、腕を組んだ吹雪が冷静に相手を分析する。

そんな彼等が見詰める中、デュエルロボは『E・HERO エアーマン』、『E・HERO オーシャン』、『ダンディライオン』、『E・HERO ガイア』、『E・HERO ノヴァマスター』の5枚を回収を宣言。

選択したそれ等全てをデッキに戻し、シャッフルし終えた彼は2枚カードをドローする。

再びデュエルロボの顔に笑みが浮かんだ。

「モンスターセット。カード3枚セット。ターンエンド」

「随分、あっさりターンエンドしたな……まあいいか。俺のターン！」

拍子抜けを感じつつ、ドローする十代。スタンバイフェイズを終え、メインフェイズに突入した彼は、直ぐ様手札の右端のカードに指を掛けた。

「『E・HERO フェザーマン』を攻撃表示で召喚！」

【E・HERO フェザーマン 星3 / 風属性 / 戦士族 / ATK 1000 / DEF 1000】

そのままモンスターを召喚。緑の身体に純白の翼、空を舞うE・HEROが出現した。

「よし！ この攻撃全てが通ればアニキの勝ちっす！！」

「アニキ！！ これで勝ちは頂きだドン！！！！」

フェザーマンの出現に翔や剣山達の気持ちが高揚。緊張の走るバトルフェイズ、彼等の喉がゴクリと鳴る。

「よし、バトルフェイズだ！ フェザーマンでディスクガイを攻撃、『フェザー・ブレイク』！！」

腕の爪を活かし、フェザーマンの攻撃がディスクガイに命中。切り裂かれ、戦闘に敗北したディスクガイが消滅する。

同時に相手が畏を発動させたなかつたことに仲間達の緊張が僅かに解れた。

「続いてマリシヤス・デビルでセットモンスターに攻撃だ。エッジ・ストリーム！！」

相手の伏せに畏は無いと直感的に判断した十代は攻撃を続行。マリシヤス・デビルに指示を出す。

マリシヤス・デビルは十代の期待通りにモンスターを撃破。強烈な一撃によりデュエルロボのモンスターが戦闘破壊される。

「『幻影の魔術師』ノモンスター効果、戦闘で破壊サレタ時、デッキカラ攻撃力1000以下ノ『HERO』ト名ノ付クモンスターヲ1体、表側守備表示デ特殊召喚スル。俺ハ『D・HERO ディアボリックガイ』ヲ特殊召喚」

【D・HERO デイアボリックガイ 星6 / 闇属性 / 悪魔族 / ATK 800 / DEF 800】

入れ替わる形で現れる1体のD・HERO。見た目は『Diabolic』、と文字通り悪魔のような姿をしており、一目見ただけでは悪魔と誤解しそうな容姿をしている。

「直接攻撃は叶わなかったけど、どっちみちマリシヤス・デビルより遙かに攻撃力も守備力も低い！ 関係無しにブツ叩くぜ、エツジ・ストリーム・セカンド！」

だが、登場早々ディアボリックガイはマリシヤス・デビルの攻撃の前に敗北。ズズンと崩れ落ち、消滅を喫した。

「カードを1枚伏せて、俺のターンは終了だ！」

「ナラ俺ノターン、ドロー！」

再びデュエルロボにターンが回る。惜しい、と翔達が嘆いているが、それでも彼等が見た限り確実に十代が決闘の主導権を握っている。

だが、それでもデュエルロボの余裕の表情は消えることはなかった。未だにいやらしい笑みが顔に浮かんでいた。

「……フッフ、コレ全テガ揃ッタ。」

「ん？」

デュエルロボの笑みを浮かべた表情が更にいやらしく歪んだ。

仲間達の心にまた不安が過ぎる。

そして次の瞬間、またもフィールドは暗雲と共に歪んだ空間を作り出した。

「これは……フュージョン・ゲート……！」

「また融合を仕掛ける気かつ!?」

発動されたフィールド魔法に遊星とクロウが声を上げる。

空かさず、更にもう1枚の伏せカードが表を上げた。

「ソシテ畏発動、『チェーン・マテリアル』！」

「あのカードは!?!」

表を向く罨カードを見て、十代は驚愕。同時に彼の隣に精神体であるユベル、そして魂だけの大徳寺が現れる。

「気を付ける十代。あのカードはデッキ、手札、墓地、除外以外の全ての場所から融合を行えるカードだ!」

「しかも、彼の場にはフュージョン・ゲートがあるから、ホントに彼はこのターン幾らでも融合が出来てしまっんだにや〜!」

「そいつはマジで厄介だな……」

2人の忠告を聴き、十代の頬を冷や汗が伝う。

「チエーン・マテリアルヲ発動シターン、俺八除外ヲ除ク如何ナル場所ヨリ融合ガ可能トナツタノダ!」

「そんなっ!? 除外以外の場所から融合を行えるなんて!?!」

「ズルいじゃんそんなの!?!」

アキと龍亞の文句も聞き流し、デュエルロボはデッキと墓地から2枚のカードを抜き取る。

刹那、フュージョン・ゲートが効力を発揮し、選択された2体のモンスター、『D・HERO ドグマガイ』と『D・HERO B_{ブルーデー}100-D』が歪んだ空間に吸い込まれる。

「フュージョン・ゲートノ効果デ2体ヲ除外! 我が最強ノ僕ニシテ、最強、最凶、最恐のHERO」

「そいつはエドだけが持つ究極のDのモンスター!!!」

「『Dragon D-END召喚!!!』」

歪んだ空間、禍々しい暗雲に出来た渦の中心から闇の焰が降り立つ。

それは徐々に竜の形を作り、纏てそれは人の姿に変化。

竜の腕と鎧を纏う、最後のDが姿を現した。

【Dragon D-END 星10 / 闇属性 / 戦士族 / ATK 3000 / DEF 3000】

「こ、攻撃力3000!? この期に及んで、まだあんな強力なモンスターを隠していたってのか!？」

「いや、これまで奴が使用していたカードや、これまでの展開から考えて、恐らく奴のデッキはこれをメインにして構築されたデッキなんだろう」

今度はクロウが声を上げ、遊星が歯を食い縛る。隣では、かつてD-ENDと対峙した経験を持つ万丈目も、拳を震わせて、その究極の存在に畏怖している。

「驚クノハマダ早イ! 更ニ墓地ノディアボリックガイノモンスター効果、墓地ノコノカードヲ除外シテ、デッキカラ同名カードヲ特殊召喚! ソシテ伏セテイタ『異次元からの埋葬』ヲ発動! 墓地ノD-ENDノ素材トナツタ2体、ディアボリックガイヲ戻ス。…ソシテ再ビフュージョン・ゲートデ融合ヲ行ウ!」

目まぐるしくカードが効果によってデッキから墓地、除外から墓地へと移動を繰り返す。

展開されるモンスター、更に新たなDragon D-ENDが場に出現した。

「2体のD-ENDを同時にフィールドに並べただと!？」

竜の腕から熱の籠った息を吐く2体のD-END。

この世界に1枚しか存在しない筈のカードが2体並ぶという有り得ない筈の光景に驚きを隠せない万丈目達。十代も思わず深刻な顔で身構えた。

「でも攻撃力ならまだマリシャス・デビルの方が上だし、何とかなるんじゃない」

「そ、そうだよ! 攻撃力なら充分勝ってるし、負けることなんて」

「ソウデアレバイイガナア?」

希望に縋り付くような声で、思わしくない表情をした皆に話し掛ける龍可。龍亞もそれに乗り、仲間に頷いて貰えるような言葉を発した。

だが、デュエルロボがその凍り付くような笑みと耳障りな機械音声で、少女達の希望を完膚なきまで叩き潰してしまう。

「チエーン・マテリアル特殊召喚サレタD・END達ハ、コノターン攻撃スルコトガ出来ズ、エンドフェイズニハ破壊サレル。ダガ、モンスター効果ハ発動スルコトガ出来ル」

次の瞬間、D・ENDの竜を模した腕が闇の炎を十代のマリシャス・デビルに向けて一気に吐き出した。

「1ターンニ一度、バトルフェイズスキップヲ代償ニシテ、D・ENDハ相手ノモンスター1体ヲ破壊。更ニソノ攻撃力分ノダメージヲ相手ライフニダメージトシテ与エル」

「そんなっ!?!」

「十代さんの残りライフは1800! 選択されたマリシャス・デビルの攻撃力はその倍近くの3500!」

「これを喰らったら、アニキのライフは一瞬で0になっちゃっす!?!」

アキ、遊星、そして翔がそれぞれ悲痛な声で叫ぶが、彼等の意に反して漆黒の炎はマリシャス・デビル目掛けて一進に向かっていく。「3500ノダメージヲ受ケテ消エ去ルガイイ! インビンシブルD!」

迫る炎を前に、マリシャス・デビルが願いをこめるように十代を焦燥の目で見詰めた。

「畏発動!」

十代がその声を上げた時、畏が表を向いた時、マリシャス・デビルの表情が安心感で穏やかになった。

「『アルケミー・サイクル』! このカードは発動ターンのエンドフェイズまで、俺の場に存在する表側表示のモンスター全ての元々の攻撃力を0にする。よって、D・ENDの効果ダメージも0となる!」

【E・HERO マリシャス・デビル 星8 / 炎属性 / 悪魔族 / A

TK 3500 0/DEF 2100】

【E・HERO フェザーマン 星3 / 風属性 / 戦士族 / ATK
1000 0/DEF 1000】

満足げな笑みを口元に浮かべ、業火によって燃え尽きるマリシヤス・デビル。

「すまない、マリシヤス・デビル。お前と一緒に勝利を掴み取るこ
とが出来なかった。……でも」

十代の手札を持つ左手に思わずグツと力が籠る。

更に彼の両目が、再び二色の輝きを発した。

「お前が作ったこの機会、^{チャンス}絶対に無駄にはしないぜ!!!」

自身を守り、勝利の礎として倒れていったHEROが眠る決闘盤
の墓地に向け、十代が勝利を約束する。

次に十代は手札を見た。逆転出来る可能性があると信じて……。
それぞれ左右で異光を放つ両の瞳には自身の切り札であり、デッ
キの象徴、『E・HERO ネオス』が映った。

「アニキ、その意気だドン!!!」

「おっしやあつ！ まだライフはこっちの方が充分に残ってるんだ。
あんな奴一気に畳んじまええっ!!!」

士気を上げるように声を張り上げる剣山とクロウ。他の者も十代
に声援を送った。

「成ル程、手札1枚二尽キーツノ可能性……トイウ訳力。ナラ」

対し、デュエルロボの表情は冷たく狂気に歪んでいる。そこまで
言った時、チェーン・マテリアル、異次元からの埋葬に続けて、彼
はもう1枚の伏せカードを表にあげた。

「畏カード、『魔のデッキ破壊ウイルス』!」

「ウ、ウイルスカード!？」

「自軍ノ閻属性、攻撃力2000以上ノモンスターヲ1体生ケ贄ニ
シテ発動。発動後、場ト手札、相手ターンデ数エテ3ターンノ間ニ

ドローシタカード全テヲ確認シ、攻撃力1500以下ノモンスター
全テヲ破壊スル！」

「なっ！？ 攻撃力1500以下のモンスター全て！！？」

デュエルロボの場の1体のD・ENDが発動コストとして消滅。
その身体は微粒子のウイルスと化し、十代の場と手札に襲い掛かっ
た。

十代が驚愕する暇も無く、カードに感染していく最悪のウイルス。
彼の持つ手札の内の数枚が感染を意味する紫に染まる。

「場ノフェザーマン。オ前ノ持ツ3枚ノ手札ノ内、2枚ノカードガ
ウイルスニ感染シタ。ヨツテ、ソノカードハ破壊サレル」

ウイルスに感染し、もがき苦しむフェザーマン。手札でもそれぞ
れ『E・HERO バブルマン』と、『ヒーロー・キッズ』がその
影響を受け、フェザーマンと共に息絶えていく。

「そんな！？ 十代サマのフィールドが一瞬でがら空きにされちゃ
った！？」

「ソシテエンドフェイズ、チェーン・マテリアルノ効果ニヨリ、D
・ENDハ破壊サレル」

絶大な被害を十代に齎したウイルスカード。レイが口を押さえて
その恐ろしさに身体と声を震わせる。

消滅するD・ENDが、彼等にとつて僅かながらの救いとなった。
「ダガ、D・ENDハ不滅。決シテ滅ブコトハナイ……次ノスタン
バイフェイズニハ、墓地ノD・HEROヲ除外スルコトデ特殊召喚
サレルノダ」

「つてことは、次のターンにはまた2体のD・ENDが奴の場に復
活するってことか！？」

「勿論、今度ハデメリットヲ一切持タナイ、完全体トシテナア！？
D・HEROガ墓地ニ存在シ続ケル限り、何デモ蘇ルノダ！！」
「や、奴の墓地には、既に充分過ぎる位のD・HEROが埋葬され
ている！？」

十代の身体がブルルと緊張に震える。デュエルロボの決闘盤、そ

の墓地からは確かに強大な力が渦巻いているのをひしひしと感じていた。

思わず目を反らし、手札に視線を移す十代。唯一ウイルスを撥ね退けた、ネオスがそこにはあった。

（だが、まだ俺の手札にはネオスがいる。絶対にこの境地を逆転してみせる！）

身体の震えを気力で抑え、十代はE・HERO　ネオスのカードを手に身構える。

「D・ENDノ効果ヲ使用シタコノターン、俺ハバトルフェイズヲ行エナイ。カード2枚ヲ伏セ、俺ノターンハ此処デ終了トナル」

「なら、俺のターンだ！」

素直にエンドフェイズを迎えるデュエルロボ。自動的に十代へとターンが移る。

デッキトップに指を置き、十代は一気にカードを引き抜いた。

ウイルス効果が発動するかどうかが決まるドローフェイズ。ドローと同時にデュエルロボが声を上げ、仲間達の心に緊張の一瞬が走る。中には生唾をゴクリと飲む者も居た。

ドローしたカードを確認する十代。彼はニヤリと笑い、引いたカード仲間にも見えるよう提示した。

「俺が引いたのは、『E・HERO　プリズマー』！　攻撃力は1700、よってウイルスカードの効果は受けないぜ！！」

「よし！　上手く攻撃力1500以上のモンスターを引いた！」

上手くウイルスに影響されないカードを引いた十代。そのドローに対する強運に遊星をはじめとする仲間達は歓喜する。

「更にこのターンのスタンバイフェイズ、効果で除外していたヘル・ゲイナーが復活する。現れる、E・HERO　ヘル・ゲイナー！！」

更にマリシャス・デビルに力を貸す為、自らを一時犠牲にしていたヘル・ゲイナーも十代の場に復活。それを見た仲間達は更に一層歓喜した。

「相手の場には低い守備力のディアボリックガイのみ。これで十代

君が手札からプリズマーを召喚して、直接攻撃を決めれば、500しか残っていない奴のライフを削り切ることが出来る。それで十代君の勝ちだ！」

「やったあつ！ D・ENDが復活する前にあいつを倒せば、問題ないもんね！！」

「うん！！」

勝利へ王手を掛けた十代に吹雪が拳をグツと握る。彼に便乗した龍亞と龍可も頷き、ぴよんと飛び跳ねた。

だが、デュエルロボは全くと言っていい程、動じていなかった。

「フン、ソウ上手ク事が運べバ良イガナ」

「何っ？」

「リバースカードオープン！」

それを証明するように、彼等全員を嘲笑するように、デュエルロボは1枚のカードを表にあげる。

「伏せていたカードは『死のデツキ破壊ウイルス』！ 攻撃力1000以下ノ閻属性モンスター、ディアボリックガイヲ生ケ贄ニ効果発動。相手ノ場ト手札、相手ターンデ数エテ3ターンノ間ニドロ―シタカード、ソレ等ニ含マレテイル攻撃力1500以上ノモンスターヲ全テ破壊スル」

「なっ！？ またウイルスカード!?」

2枚目のウイルス発動に驚愕する十代。

そしてハツと気付く。

「確力、才前ノ手札……中々面白い中身ダツタナア？」

「しまっ」

声を上げた時には既に時遅く、カードは既にウイルスによって蝕まれてしまっていた。

次々に十代のカードに感染していく死のウイルス。場のヘル・ゲイナーの身体が腐り落ち、手札でもプリズマーが、希望を託していたネオスまでもがウイルスの被害を受け破壊、消滅を喫する。

その結果

「じゅ、十代の場と手札に……」

「カードが完全に無くなった……」

明日香と遊星が呟いた通り、予め伏せられていたカード1枚を残し、遊城十代は最悪にも手持ちのカードを全て失った……。

更に悪いことに次のターンには2体のD・ENDが同時に完全復活を遂げる。その残酷な事実と酷過ぎる現状に絶句せざるを得ない仲間達。

遊星やジャック、吹雪達は呆然。クロウ、アキ、明日香も手が届き掛けていた筈の十代の勝利を完全に見失う。

十代を心より慕うレイ、翔、剣山もこれには言葉も出ない。龍亞、龍可は青ざめた顔で、何も語らない十代の背中を見詰めていた……。そしてデュエルロボが勝利を確信した顔で、自分と対峙する十代の顔を見る。

「歴戦ノ決闘者、遊城十代。ウイルス効果ガ切レルマデ、残り3ターンダ」

TURN - 19 デステニー・デストロイ（後書き）

今回の最強カード

【死のデッキ破壊ウイルス】

『自分フィールド上に存在する攻撃力1000以下の闇属性モンスター1体をリリースして発動する。』

相手のフィールド上に存在するモンスター、相手の手札、相手のターンで数えて3ターン間に相手がドロウしたカードを全て確認し、攻撃力1500以上のモンスターを破壊する。』

現時点では禁止カードであるが、全盛期ではほぼ確実と言っている程採用されていたカードである。理由は単純、使い易く強力だからである。1体の犠牲で相手の場と手札をボロボロにした上、相手のカードを覗くことまで出来るのだから、採用されて当然だろう。

だが、それを引き金に『ネフティスの鳳凰神』、『ヴァンパイアロード』の効果が発動してしまうこともあり得る。特に前者は下手をすれば一気に場の魔法罫が一気に全壊されてしまうことになってしまうので完全無欠という訳ではない。

過去に於いて、闇属性で攻撃力1000以下をリリースにすると、いう容易な発動コスト。現時点でも採用され易い『クリッター』等は良いリリース要因として使用された。多くの決闘者を苦しめ、尚且つサーチするという極悪なコンボはよく見られていたのだ。他にも効果を終えた『闇の仮面』、現在なら他にも有能な闇属性攻撃力1000以下のモンスターはゴロゴロしている。特に今回のデュエルロボのデッキ、『D・HERO』とはとても相性がよく、确实採用とされていたりする。『Dragon D・END』のデッキでは、稀にだが全てのウイルスが同時に発動するという場面を見る

事も出来るかもしれない。

因みにアニメでは海馬が使用する。……が、役7割近くの確率で失敗、または利用されて自分のカードをズタボロにされてしまうのがお約束となっていた。流石に決められれば決闘の展開としても面白くなってしまうのだろう。

しかもアニメ版はなんと相手のデッキ、手札、場、恐らく墓地も含めて全ての攻撃力1500以上のカードを破壊、使用不能にするという極悪カードとなっている。お陰で遊戯は『青眼の究極竜』相手に苦戦を強いられ、海馬はデッキ切れによる敗北を喫してしまった。

余談だが、この時海馬は残されたカードはこの1枚と言って『死者蘇生』から攻撃力が唯一1500を下回る『闇道化師・サギー』を召喚しているが、実際彼のデッキには他にも『ケンタウロス』や『邪悪なるワーム・ビースト』。『サイクロプス』や『ガーゴイル』も投入されていた筈なのだが、どういう訳かまるで最初から入っていなかったかのように、華麗にスルーされてしまっていた。

TURN・20 ヒーローフラッシュュ!! (前書き)

どうも、どうにか直ぐに更新出来ましたトマトです。いやはや
漸くデュエルロボとの決闘に終止符を打つことが出来ました。いや
はや良かったよ。

勝敗はどちらに……なんて、言わなくても解ってしまう方もいら
っしゃるでしょう。というよりも、殆どの方が既に勝敗の行方は解
つてらっしゃると思います。寧ろ皆さんが知りたいのは、どうやっ
て決着がついたか、ですよね。

それは勿論、今回を読めば解るのですが……何気に決闘が短かつ
たり。しかも決闘内容にこれ有り得そうだけどマジで有り得んの！
？ といった内容となっております。……毎回そうなんですけどね。

さあ、皆さんは何処で脳内BGM、『十代のテーマ』を流すので
しょうか？ 恐らく今回はこれが最も内容に合うBGMだと思っ
ております。知らない方は是非とも、読みながら動画サイト等での
曲を聴いてみてください。逆転劇にはこれ以上ない位、持って来い
のBGMです！！……決してもけもけする為の曲ではありません。

TURN・20 ヒーローフラッシュ!!

絶対不可能。

果てが見えない程拡張され、技術がどれ程発展しようと、この世にはどう足掻いても覆せない世の理というものが存在している。

一般的に人間に訪れる「生老病死」という4つの事実。そういったものは誰がどうやっても覆すことは不可能と言われている。

現在、繰り広げられている十代とデュエルロボによる決闘。現在十代に課せられたこの最悪な状況もまた、その類型の1つなのだ、と遊星は鬨が掛かった頭で考えた。

何しろ十代のフィールドには伏せカードが1枚あるのみ。壁となるモンスターも無ければ手札も無い。おまけに敵が使用したウィルスカードの前に、十代はモンスターカードを3ターン完全に封じられてしまっている。

対し、敵であるデュエルロボには凶悪無比の極悪モンスター、『Dragon D-END』が次のターン、十代に止めを刺す為に戻って来る。

無理だ、絶対に勝てない。

沢山の窮地を凌いで来た筈の遊星、彼の心がそう内側で騒ぐ。

「無理よ……」

そんな時、諦めきつた暗い声で誰かが遊星と同じようなことを呟いた。……アキだ。

いや、意気消沈してしまっているのはアキだけではない。ジャック、クロウ、龍亞、龍可。遊星を含め、殆どの者が、この決闘での十代の勝利という光を完全に失ってしまった。

他にも翔や剣山達も、顔に殆ど精気が見られない。此処にいる者全員が、ほぼ揺るがない十代の敗北に絶望感を感じていた……。

「どうやったらこの状況を覆せるっていうんだよ」
冷や汗を顔に浮かべ、まるで自分がこの絶体絶命の境地に立っているかのようにクロウが吐き捨てる。

「ウイルスカードの所為でモンスターは使えない。手札もねえしモンスターも0。しかも相手には超強力モンスター、D・ENDが2体。どうやったらこの状況であいつが勝てるっていうんだよ!!!」
?

そのままクロウは嘆いた。普段の彼からは考えられない程、その口から発せられる声は弱々しく情けなかった。

「……不可能だ」

「ジャック!？」

「この絶対的不利を跳ね返すのは、不可能だ」

続いて泣き言を口にしたのは、普段誰よりも強気で高圧的態度を振る舞うジャックだった。

その彼らしくない弱々しい言葉が引き金となり、龍亞と龍可の幼い心に絶望の亀裂を入れる。希望を失い、それに比例するように彼等の瞳も絶望の涙で潤んだ。

「遊星!」

突如、龍亞が遊星の名を叫んだ。必死の形相に涙を浮かべ、嗚咽を繰り返しながらも強い口調で遊星の名を呼ぶ。

遊星はそんな龍亞にゆっくりと目を向ける。そんな兄の後ろでは、妹の龍可も龍亞と同じく絶るような瞳で遊星の顔を見詰めていた。

「そんなことないよね? 負ける筈ないよね!? あの人はきつと無事に勝ってくれる、そうでしょ!!!? そうだって言っつてよ遊星!!!?」

悲痛な叫びが遊星の耳と心に突き刺さる。彼の表情も僅かに歪み

苦しげに2人から完全に目を反らした。

「!?!」

「そ、そんな……遊星まで」

遊星のその行動は最後の引き金となり、2人の心を完全にへし折った。僅かな希望を失うと同時に、彼等の顔をボロボロと涙が伝う。「悔しいが、俺には解らない。この絶体絶命の状況を覆し、勝利する方法が……」

数々の視線を潜り抜けてきた遊星のその言葉は、2人以上の説得力があり、アキ達の心に外れ難い楔を打ち込んだ。

「残念だけど、確かに彼の言う通りだ」

「幾らアニキでも、こんな状況を覆すなんてことは……」

「十代サマでも、やっぱり」

遊星達以上の交流をしてきた翔や万丈目も、その言葉には動揺を隠せない。吹雪、剣山、レイが思わず弱音を吐いた。

心配そうな表情が更に深いものとなり、残念そうに顔を俯かせる。「オイオイ、皆して何勝手なこと言ってるんだよ？ まだ決闘は終わっちゃいないんだぜ！」

だが、そんな彼等の心の闇を晴らすかのように明るい光の言葉が差した。

十代の声だ。

そこには絶対的不利な状況にあるにも拘わらず、明るい顔をした遊城十代が決闘盤を構えていたのだ。

しかもその太陽のような表情には全く曇りがない

寧ろ、この状況を楽しんでいるように遊星達には見えた。

「貴様……マダ決闘ヲ続ケルツモリカ？」

「当たり前だろ？ こんなめっちゃくちゃワクワクする状況で、諦めて投げ出すなんて出来るかっての！」

ジャックは耳を疑った。同時に彼の顔も驚愕で変に歪む。

周りの者達も明らかに今の十代の言葉に困惑していた。

「お、お前……まだ勝つのを諦めてねえってのか？」

「ん？ 当たり前だろ！ さっきも言ったけど、こんな楽しい決闘、途中で諦められるかって……！」

クロウが改めて聞き直すが、十代はやはり諦めない口にする。

その表情は仲間達と完全に真逆、興奮を隠せない笑顔を向けていた。「だってさ、俺の場はカード1枚。手札もモンスターも無し。しかもウィルスでモンスターは使えない。そして次のターンには相手の場にD・ENDが2体復活する。……最高だぜ、むっちゃくちゃワクワクするうっっ!!!」

更に気分が高揚する十代に仲間達は完全に置いてけぼりを喰らう。尋ねた張本人、クロウなど先程から「有り得ねえ」と小さく呟いている。本気で勝つ気にいるのか、と十代のその神経を疑った。

だが同時に翔達は密かに表情にフツと笑みを浮かべる。

「じゅ、十代さん!!! もういいです!!!!」

そこへ遊星が声を荒げて叫ぶ。

十代はキョトンとした表情で遊星の顔を見た。

「もう充分です。十代さんは俺達の為にとてもよく戦ってくれました。だから、もう」

遊星は、内心十代の今の言動は、自分達を想いやつてのものだと考えていた。

そう思うと、とても申し訳なく、何も関係無い彼を巻き込んだ自分を恥じた。気付いた時には、彼を戦線から離脱させなければ、と叫んでいたのだ。

「何言つてんだよ遊星!」

だが、十代からの返答がそれを遮った。そして遊星の考えていたことを真っ向から否定した。

同時にキョトンとした十代の顔つきが、再び明るく優しい表情に変わる。

「確かにさ、状況は圧倒的に俺が不利。正直言って、俺も勝てるかどうかなんて解らねえ。でもさ」

「もし! これでホントに俺が勝っちゃったら、それってめちゃくちゃカッコよくねえっ!!!?」

十代が口にした言葉には、誰も驚愕を隠せなかった。

白い歯をニカツと見せ、明るい笑顔でそう言う十代。今度は仲間達の表情がキョトンとしたもの変わる。

「まつ！ 決着がつくまで勝負は解らないんだ。だから俺は最後まで諦めずに戦うぜ。……俺のことを信じて、勝負を託してくれたお前の為にもな！」

「十代さん……」

そう言う十代はターンを終了し、デュエルロボにターン権を廻す。

遊星は手を伸ばし、彼を再び引き留めようとするが、不意に背後から肩にポンと手を置かれる。

「ああなつたアニキは、もうだれにも止められないっすよ。それこそアニキがこの決闘で勝つより難しいっす」

振り返れば、そこには諦めた顔をした翔が立っていた。翔は軽く首を振ると、遊星に十代を止めるのは、それこそ不可能だと告げる。

「それに十代は別にお前等のことを想ってああ言っているんじゃない。あれは奴の本心だ」

「だったら、あの言葉を信じて、十代が勝つのを信じましょう。私達に出来るのはそれしかないわ」

続けて遊星に語り掛けてきたのは、万丈目と明日香だ。2人とも何処か呆れている口調だが、それも仕方がないといった顔で口を開く。

「何故、貴方達はそのままであの人を信じる事が出来るんですか？ この絶望的な状況で、どうして十代さんの勝利を信じられるんですか……？」

遊星の問い掛けにフツツと静かな笑みを浮かべる翔達。彼等に続けて、今度は剣山、吹雪、レイが口を開く。

「そんなこと、決まってるザウルス」

「それは」
「あの人」
そして彼等全員の声が重なった。

「遊城十代だから」

完全に呆気にとられる遊星。

そしてその一言を境にデュエルロボのターンが開始され、ドローフエイズに突入した。

「俺ノターン、ドロー。更ニコノ瞬間、墓地ニ存在スル『D・HERO ドウームガイ』、『D・HERO ダイヤモンドガイ』ヲゲムカラ取り除キ、2体ノD・ENDヲ墓地ヨリ特殊召喚！ 更ニ永続罨発動、『王宮のお触れ』。ソシテ更ニ永続罨、『女神の加護』！！」

再び姿を現す竜の力を得た究極のD。漆黒の戦士が出現すると同時に、デュエルロボの場に伏せられていた、最後の2枚が表を向いた。

「王宮のお触れ！？ 罨カードを全て封じる永続罨！！」
「ソウ、コレデ互イニ罨カードハ一切使エナイ。貴様ノ伏セカードガ、例工罨ダツタトシテモ、モハヤソレハ無意味トナツタ。ソシテチエーン発動サレタ女神の加護ノ効果デ、俺ノライフヲ3000ポイント回復スル」

【デュエルロボ LP500 3500】

更に苦しくなる状況に十代は思わず舌を打つ。仲間達の顔も更に青くなった。

「これじゃあ、もしあいつが伏せていたカードが攻撃回避の罨だっ

たとしても、使うことさえ出来ねえ!!」

「しかも、女神の加護のデメリットである場を離れたら回復した3000ポイントのダメージを受けるといった効果も、王宮のお触れの効果で無効にされている」

「やはり駄目なのか……勝つ可能性を見出すことは出来んのか」

クロウ、遊星、ジャックが苦々しい表情で言葉を発する。

それを耳にしたデュエルロボの顔に、更にいやらしい笑みが浮かんだ。

「全テヲ圧倒スルDragoon D-END。全テヲ抹殺スルウィルスカード。全テヲ封ジル王宮のお触れ。コレデ俺ノコンボ八完成シタ。……貴様ノ完全ナル敗北ダ、コノ結末八決シテ揺ルギハシナイ」

「そんなこと、最後までやってみないと解らねえっ！ お前の言うそんな結末、ちやぶ台のように俺が根っこからひっくり返してやるぜ!!!」

「愚力ナ」

デュエルロボの口から言葉が発せられると同時に、ユラリと動き出す2体のD-END。竜の首を模した腕を十代に向けて。

「ナラ、ソノ身ヲ以ツテ味アワセテヤル！ D-ENDデ直接攻撃、

『アルティメット・D・バースト』!!!」

竜の腕の発射口から、全てを焼き尽くす漆黒の獄炎が飛び出す。

徐々に迫る炎を前に皆が十代の名を一斉に叫んだ。

「速効魔法、『クリボーを呼ぶ笛』！ 出番だぜ相棒!!!」

だが攻撃が炸裂寸前、残されていた十代の伏せカードが表を向く。笛の音色が奏でられると同時に十代の場には、1体の天使族モンスターが守備表示で出現した。

「ソ、速効魔法ダト!?!」

「クリボーを呼ぶ笛の効果で、俺はデッキから『ハネクリボー』を守備表示で特殊召喚!」

【ハネクリボー 星1 / 光属性 / 天使族 / ATK 300 / DEF 200】

可愛らしい鳴き声を上げ、特殊召喚されたハネクリボーが十代の身代わりとなってD・ENDの攻撃を受ける。

爆発四散するハネクリボー。爆発による熱風と衝撃が十代を襲った。

「サンキュー、お前のお陰で助かったぜハネクリボー！　そしてこの瞬間、ハネクリボーのモンスター効果発動。ハネクリボーが破壊されたこのターン、俺への戦闘ダメージは全て0となる！」

「オノレ！！　小賢シイ雑魚モンスターガ。……バトルフェイズ終了、メインフェイズ2に移行ダ！！」

ハネクリボーのカードを提示する十代を前に苛立つデュエルロボ。十代はわざわざ敵にカードを見せてから、ハネクリボーのカードを墓地に送った。

「ふうっ、助かったぜ。危うくやられちまうトコだった」

その十代の呑気な一言一言が、デュエルロボの神経を逆撫でする。彼小顔に浮かんだ笑顔すらも、デュエルロボにとっては腹立たしく感じられた。

「往生際ノ悪イ奴メ、負ケヲ1ターン伸バシタニ過ギン！　コレデ俺ハターンエンドダ！！」

どうにかターンを凌いだ十代。翔や遊星達は思わずホッと胸を撫で下ろした。

「あいつ、マジでこのターンを凌ぎやがった」

「まったく、大した奴だ。……だが」

それにはクロウもジャックも感嘆の言葉を発さずにはいられない。一時的とはいえ、危機的状況を凌いだ十代に驚愕を全く隠せなかった。

そして十代にターンが廻る。十代は自分のデッキの一番上に指を置いた。

「だが、本番は此処からだ」

「ああ」

緩んでいた表情が一瞬で真剣な物に移り変わるジャック。彼の口にした言葉に遊星が頷いて賛同する。

「ハネクリボーがダメージを無効に出来るのは、破壊されて墓地に送られた1ターンのみ。今の十代さんは、完全にドロークカード頼りの戦術を已む無くされた」

今度は遊星の言葉にジャックがコクリと頷く。

龍亞と龍可が生唾をゴクリと飲み、十代のドロークに目を凝らす。

他の者達は、沈黙の状態で彼のドロークフェイズを見守った。

「解ッテイルナ？ モンスターカードヲ引イタ時点デ、貴様ノ敗北ガ決定スルトイウコトヲ。オ前ガドロークシタモンスターハ、攻撃力ヲ問ワズ、ソノママ墓地ニ送ラレル。更ニ、例エモンスターヲ引カズトモ、ソレガ罫カードダツタ場合、貴様ハソノ効果ヲ発動サセルコトハ出来ナイ」

「勿論、解ってるさ。つまり、このターンが勝負ってことだろ？

……行くぜ」

カードに置かれた指にグツと力が籠る十代。

「ドローク!!!」

そのままドロークの掛け声と共に、一気にカードを引き抜いた。裏側のまま十代の手に加わるドロークカード。十代の心臓がドクンと一際大きな鼓動を打つ。

一体、何のカードを引いたのか、仲間達にも緊張が走る。

遊星やジャック、万丈目達は真剣な表情で十代を見詰め、クロウ、龍亞は拳を握って彼の引いたカードが魔法カードであることを願う。龍可とレイも目を瞑り、手を組んで仲間達と共に祈った。

そして引いたカードを先ず十代が確認する。

カードの種類を確認すると、十代はフツと笑ってこの場にいる全員にも見えるようカードをバツと上に提示した。

「俺が引いたのは、コレだあああっ!!!! 魔法カード、『戦士の

生還』！！」

それは明らかな緑色。……間違いなく、唯一制限を受けていない魔法カードであった。

「クツ！？ 本当二魔法ヲ引イタダト！！？」

有り得ない、と悔しがるデュエルロボに対し、遊星達の緊張が僅かに緩む。中には、ホツと息を着く者も居た。

「早速、戦士の生還を発動！ 墓地の戦士族モンスター1体を選択し、手札に加える。この効果で加えたカードは、ウイルスの効果も受けないぜ！」

「上手い！ 発動ターン以降にウイルスの効果を受けるのはドロークードだけ。デッキや墓地から直接手札に加えたカードには影響しない！」

「ウイルスの盲点を着いて、上手くモンスターを手札に加えられるって訳か！」

「俺は、お前のウイルスカードで墓地に送られていた、『E・HERO バブルマン』を手札に加える」

手札にモンスターを加えるのを見て、吹雪とクロウの心が躍る。

徐々にだが、彼等の顔にも希望の光が戻りつつあった。

「更に！ バブルマンは手札がこのカード1枚だけの時、特殊召喚することが出来る！ バブルマンを守備表示で特殊召喚！！」

【E・HERO バブルマン 星4 / 水属性 / 戦士族 / ATK 8
00 / DEF 1200】

水色の身体を持つHEROが場に出現。腕を胸の前でクロスさせ、守りの体勢を取って十代の前に立った。

「更にバブルマンが召喚、特殊召喚された時、俺の場と手札に他のカードが存在していない時、デッキから新たに2枚ドロークード出来る！」
そう言っ、十代は更にカードを引く。

だが、仲間達には先程の様な緊張感は訪れなかった。寧ろ勝利へ

の希望さえ抱き始めている。

そしてドロ―し終えた十代は、直ぐ様カードを確認。戦士の生還の際と同じく、絵柄が見えるよう腕を伸ばしてそれ等2枚を上へと翳した。

「ラッキー、全部魔法カードだぜ！」

カードを掲げながら、十代が嬉しそうに声を出す。

握られていたカードは、確かに緑一色であった。

「まだまだ行くぜ！ 続いて魔法カード、『強欲な壺』を発動。デッキから更に2枚ドロ―！」

「バブルマンに続いて、また2枚のドロ―!？」

十代の引きの強さに思わず声を上げてしまったのは龍亞だ。

そして十代は、ドロ―したカードを確認させる為、三度ドロ―カード2枚をデュエルロボに提示した。

「またまた全部魔法カード！ ウイルスと王宮のお触れの影響はないぜー！」

「ソ、ソナナ馬鹿ナ!!？ 此処ニキテ魔法カードバカリ……コンナコトハ有り得ナイ、有り得ル筈ガナイ!!？」

「悪いな、俺のデッキのモンスターはもう殆ど使い切っちゃったんだ。だから後の残りは、殆ど魔法が罨って訳さ」

その強過ぎる引き運にデュエルロボが驚愕の声を上げ、首を左右にブンブンと振る。十代はニコニコと笑うだけだ。

しかし、十代はまだ止まらない。強欲な壺の効果で手札に加わった、新たなカードを専用のスロットに差し込む。

「そして更に俺は魔法カードを発動、『ホープ・オブ・ファイブ』出現した魔法カードには5人の『E・HERO』が描かれている。その名の通り5つの希望を現しているのだろう。」

「墓地から5体のE・HERO、フェザーマン、ネクロダークマン、プリズマー、クレイマン、ワイルドマンをデッキに戻してシャッフル」

5枚のカードを扇状に広げ、その後それ等をデッキに加える。

決闘盤からデッキを外し、言葉通りシャッフルを行う十代。その後改めてデッキを決闘盤にセットし直し、デッキトップに指を置く。「その後、デッキから2枚のカードをドロー！」

そして三度2枚ドロー。当然の如く、確認の為に提示された十代ドローカードには、魔法カードしか見受けられなかった。

「すげえ、このターンにあいつは計7枚ものカードをドローしてるっていうのに、1枚もモンスターや罫を引きやがらなかった」

「0だった手札も一挙に4枚。恐ろしい程の強運、正に驚異的だ」
「それが、遊城十代っす」

繰り返しドローを行う十代。その連続ドローも凄いと感じたが、何よりそれで制限を受けたカードを1枚も引かなかったという事実にはジャックやクロウ達は驚きを覚えた。

遊星、アキ、龍亞、龍可、他の4人も同じく呆気に取られた顔で、目の当たりにした受け止め難いその驚愕の事実を無理矢理飲み込む。だが、以前から十代を知る者達、翔や剣山、万丈目達はそれ程驚いている様子はなかった。まるで、こうなることを予期していたような表情で、次に十代がどういった行動を起こすのかに目を向けている。

「オノレエエ……運ノ良い奴メ。ダガ、貴様ガドレ程魔法カードヲ引コウガ、俺ノD・ENDコンボヲ打チ破ルコトナド不可能ダ」

脅威の連続ドローに驚愕こそしたが、デュエルロボは十代に勝利を譲る気は毛頭なかった。

尚且つ彼の言うことも尤もであり、再び遊星や翔達全員の顔に汗が浮かぶ。

「そいつはどうかかな？」

だが、それを十代は否定した。

明るい笑顔でドローした4枚の手札を持ち、決闘盤を胸の前に構える。

「俺はこのターン、お前と2体のD・ENDに止めを刺してやるぜ！」

「何ダト!!!？」

デュエルロボはまたも耳を疑った。今、目の前で対峙する決闘者は、明らかに勝利宣言をしたのだ。

「馬鹿モ休ミ休ミ言エツ!!! ソンナコト、出来ル訳ガナイ!!!」

「そ・れ・が、出来ちゃうんだよなあ。じゃあ、今からそのとっておきのコンボをお前に見せてやるぜ」

有り得ない、出来る訳がない。そう彼の脳内コンピューターが言葉を示すが、十代の表情から見て嘘とは考え難い……。

だが、そう考えているのは他の者も同じ。彼等には十代が如何にしてこの状況を突破するのか、見当もつかなかった。

そして次の瞬間、十代が動き出した。

手札のカード一枚を決闘盤のスロットへと装填した。

「魔法カード、『O オーバーソウル』! 墓地の通常E・HEROを特殊召喚する。現れる、『E・HERO ネオス』!!!」

淡い紫で彩られた「O」のシグナルが、墓地に送られた十代の切り札を復活させる。逞しい白い身体を持つネオスが、再び十代の場に颯爽と返り咲いた。

「やったあつ、ネオスだあつ!!!」

「アニキのエースモンスターだドン!!!」

再びその姿を見せるネオス。龍亞が飛び上がり、剣山がグツと両の拳を握って歓喜した。

「だが攻撃力は僅かに届かない……」

遊星も小さく呟くが、他の者のように明るい内容ではない。

だがしかし、その表情は決して暗いものではなかった。遊星は、どちらかといえば期待と読み取れる表情で十代を見ていた。

「そして手札から『ヒーローハート』発動。こいつは場のE・HERO1体を選択し、対象のモンスターの攻撃力を半分にする。その代わり、選択したモンスターはこのターン、2回の攻撃が可能となる。対象は勿論、ネオスだ!!!」

予想に反する十代の行動に、翔達の心が思わず驚きで飛び上がる。

刹那、ネオスの身体を赤いボールが一瞬包み込み、その輝きがネオスから攻撃力を奪い取った。

【E・HERO ネオス 星7/光属性/戦士族/ATK 250
0 1250/DEF 2000】

「馬鹿メ！！ タダデサ工攻撃力GD-ENDニ及バントイウノニ、コレ以上攻撃力ヲ下ゲルトハナア！！？」

「まあな！ でも、まだまだこれからだぜ。続いて装備魔法、『ネオス・フォース』をネオスに装備。攻撃力を800ポイントアップさせる」

【E・HERO ネオス 星7/光属性/戦士族/ATK 125
0 2050/DEF 2000】

装備カードが装備されるや否や、ネオスの右拳が青白く輝く。同時にネオスの右腕に凄まじい力が宿った。

「ネオスの攻撃力が上がったわ。でもそれならヒーローハートを使わずに装備魔法で攻撃力を上げれば良い筈なのに」

「いや！」

尤もらしい疑問が脳裏に浮かび、龍可がその疑問をそのまま口にする。

だが、それを隣にいた龍亞が遮って、言葉を発した。

「まだ手札にはもう1枚カードが残ってる！」

龍亞に気付かされた龍可は、十代の手元を見た。確かにそこには兄の言う通り、手札が1枚だけ残されている。

「いよいよこれが最後の1枚だ。フィールド魔法、『魔天楼 カイスクレイパー』発動！」

そして残された最後のカードが、決闘盤のフィールド魔法用のスロットに装填される。

次の瞬間、デュエルロボの『フュージョン・ゲート』が作りだした歪んだ暗雲を突き抜け、次々と地面から何やら建物のような物が飛び出した。

「な、何だこの高層ビルはっ!？」

「やべえ、次々にビルが建つていくぜ!！？」

次々に建造されるビル。辺りはそれ等によつて完全に包み込まれ、ドーム内は一種の大都会と化した。

「コレハッ……!！!？」

「HEROにはHEROの戦う舞台がある。それがこのスカイスクレイパーだ!」

魔天楼となつたフィールドを前にデュエルロボは困惑を隠せない。気付けばネオスも何時の間にもやら建物の中で最も高い高層ビルの頂上に位置していた。

「行くぜ!！ ネオスでD-ENDを攻撃!！ 一気に駆け降りろ、スカイスクレイパー・フォース・オブ・ネオス!！」

十代の指示を受けたネオスは、そこから一気に大地目掛けて飛び降りた。

隕石の如くD-ENDの許へ飛び込むネオス。攻撃の為に振り上げられた右腕が、更に赤い輝きを放つ。

「攻撃力はネオスの方が下。それなのにどうして」

「いや違う、このフィールド魔法は」

アキの言葉を途中で遮つた遊星が声を発する。それと同時にネオスのステータスにも変化が起きた。

【E・HERO ネオス 星7/光属性/戦士族/ATK 2050 3050/DEF 2000】

「攻撃力が上がったぞ!？」

クロウが声を上げると同時にネオスは1体のD-ENDに向けて手刀を一気に振り下ろした。

強烈な一戦を前にD・ENDは爆散。その僅かな差、50ポイントがデュエルロボのライフから削られる。

【デュエルロボ LP3500 3450】

「スカイスクレイパーが存在している時、E・HEROと名の付くモンスターが攻撃を仕掛けた時、攻撃対象のモンスターの攻撃力よりも低い場合、ダメージ計算時に攻撃モンスターの攻撃力を1000ポイントアップさせる！」

「クッ!!!? ウオアアアアアアッ!!!?」

「そして装備されたネオス・フォースの効果発動。戦闘で破壊したモンスターの攻撃力分だけ、相手ライフにダメージとして与える！」
驚愕している暇を与えず、追撃に掛かるネオス。胸の青いコアから発せられた一筋の光線が、デュエルロボの胸を撃ち抜いた。

【デュエルロボ LP3450 450】

苦悶の声を洩らし、激痛が走った胸を押さえるデュエルロボ。戦闘ダメージに加え、効果ダメージがそのライフを大きく奪った。

「まだだ！ ヒーローハートの効果で、ネオスはこのターン、もう一度攻撃を仕掛けることが出来る！」

再び腕を振り上げ、ネオスはもう1体のD・ENDに向けて、輝く右腕を振り下ろした。

手刀による致命傷を受け、最後のD・ENDが爆発四散。その身体は木っ端微塵となり、消滅を喫する。

そして再び50という小さな数値が、超過ダメージとしてデュエルロボのライフを削り取った。

「再びネオス・フォースの効果発動。Dragoon D・ENDの攻撃力、3000ポイントがお前のライフから削られる！」

「馬鹿ナ」

【デュエルロボ LP450 4000】

ライフが0になり、敗北を喫したと同時にガクンとデュエルロボは崩れ落ちた。どうやら機能停止したらしい。

「し、信じらんねえ……あいつ、ホントに勝ちやがった」

「この不利な状況を撥ね退けて……」

「これが……遊城十代」

翔や剣山、レイ達が大声で歓喜する中、感嘆の声を上げる遊星達。クロウは目を疑い、アキも目をパチパチと瞬く。遊星もクスツと笑みを浮かべた。

仲間から手厚い祝福を受けている十代。聴て彼は一步前へと踏み出すと、機能が停止したデュエルロボへ向けて手を伸ばし、最後の締めとしてこう口にする。

「ガツチャ！ 楽しい決闘だったぜ！」

T U R N - 2 0 ヒーローフラッシュュ!!! (後書き)

今回の最強カード

『E・HERO ネオス 星7/光属性/戦士族/ATK 2500/DEF 2000』

別名過労死、その名の通り凄まじくデッキや墓地、手札を行き来するモンスターである。それだけこのカードはサポートカードが豊富なのである。

先ず、基本的にHERO関連のサポートの恩恵が受けられ、故にサーチに於いても召喚に於いても容易に行える。今回のように『Oオーバーソウル』での帰還はもとより、通常モンスターである事を活かして、『正当なる血統』といったその系統の蘇生カードを使用することも当然可能。しかも攻撃力も2500と何気に無視できない数値である。

更にこのカードは光属性なので、『オネスト』の恩恵も受けるところが出来る。しかもサポートに豊富な戦士族なので、『青眼の白龍』や『ブラック・マジシャン』以上に扱い易いと感じる者も少なくはないだろう。

では墓地関連系との相性がいいのか、と聞かれれば、決してだけという訳ではなく、実は除外とも中々のシナジーを見せてくれる。除外スキドレネオスというデッキも世には存在しており、これがまた中々強く鬱陶しい。

こういった様々なカードとシナジーするので、興味のある方は是非ともデッキを組んでみることをお勧めする。因みに私自身が組んだ中では、純粹に墓地復活のネオスが最も勝率が高かった。因みにネオスは3積みであった。

アニメでは、遊城十代のエースカードとして二期から登場。それ

までのエース、『E・HERO フレイム・ウイングマン』に代わり、新たなエースとして十代の為にその身を粉にして戦った。

設定では、十代が幼少時に描いたものをKCがカード化したという設定だが、何が支社長にしては珍しく凄まじくオカルト染みた企画であった。結果、宇宙の波動を取り込み、正義の闇のHEROとして意気消沈していた十代の許にやってきた。……光属性なのにね。

しかも何気に冷酷で、人質に取られた十代の仲間に対し、見捨てて戦えと十代に促すこともあった。更に宇宙に飛び立つことも可能、十代に『衛星を止めてくれ』と言われ、衛星をボツカンする等、ぶつとんだ一面も見られた。

因みに過労死は此処でも健在で、アニメに於けるネオスの登場回数は60近くになるといふ。……ホントに死ぬのではないだろうか？

余談だが初期カード、ジャンプの付録のウルレア仕様のこのカードにはテキストに誤植があり、『ネオスペーシアンからやってきた』とある。

見た目は完全に某の光の巨人だが、実はこのネオス登場回の脚本家は、かの有名な『ウルトラマンネオス』の脚本家と同じだったそうだ。

TURN・21 H ヒートハート(前書き)

という訳で、全ての感想に返事も書いていない癖に更新する馬鹿。その名はトマト、英語で言えばトウメイトオという発音らしいのですが、それはさておき。

今回は決闘展開は無し。当たり前といえば当たり前なのですが、今回はキャラクターの会話が主、此処からDMの時代へつなぐ架け橋を……。

5D・sも終わっちゃいました。個人的には、遊アキは未来のあのシーン、あそこでは既に引つ付いと妄想。

だって、ドクター十六夜じゃなくてドクターアキだし。未来の遊星だけ登場しなかったし……コホン

しかし如何せんキャラが多い。5D・sにGX、これにDMまで加えたらどれだけのキャラになるんだろう。読者だって、こんがらがって台詞だけの判断なんて無理だし、こうなれば何人かに絞らないとなあ……。

皆さんは、ある程度キャラクターの判別が出来ますか？私の書く説明文で、このキャラが喋っているのだな、と想像出来ますでしょうか？

……以上、トマトの不安報告でした。

「ふう〜、危機一髪だったなあ」

「ええ。危うく、もう少しで瓦礫の下敷きになるところでした」

崩壊したドームの前で、十代と遊星が笑いながら顔を見合わせる。煤で黒くなった十代の顔に、ニカツと笑顔が浮かんだ。遊星も思わず十代程ではないが、小さな笑みを返す。

あの十代とデュエルロボの決闘直後。まるで待っていたかのように海馬ドームは限界を迎え、デュエルロボに接近する間も無く崩壊を再開した。

遊星やクロウ、十代や明日香、全員が無事に脱出すると同時に、ドームは音を立てて積み木の城のように完全に崩れ落ち、今となっては面影すらない。

この状態では、機能停止したデュエルロボの残骸も、彼が他の時代から奪い取ったカードを回収することも、もはや不可能。出入り口を失くした瓦礫の山を前にして、そう思わざるを得なかった。

これからどうするか。脱出に成功し、改めて挨拶と自己紹介を交わし合った彼等は、誰かが話を切り出すのを待った。

「でもよかったわ。全員が無事に脱出出来て」

「そうね。一時はどうなるかと思ったけど、こうして皆傷一つ負わずに脱出出来た。……正に奇跡的だわ」

それを担ってくれたのはアキだった。

緊張の連続から漸く解放され、これでやっと一息着ける。そうアキが、遊星の無傷の顔を見ながら、口元を緩ませた。

続いて明日香が全員の顔を見回す。彼女の両目で見た限りは、全員に外傷と言える外傷は見当たらなかった。肌の弱い子供である龍亞と龍可も、無邪気な笑顔を浮かべてその両の足で地に立っている。「ほ、僕の顔が……美しい僕の顔に傷がああっ!!!?」

「し、師匠！？ 落ち着いて下さい、ちょっと顔に傷が付いただけですから!？」

「万丈目君！ 顔は僕にとっての命その物なんだよおおおっ！！!?」

例外も居たようだが、明日香は聞かなかったことにして、呆れの意味を含む溜め息を一つ。その隣では翔も首を振って、そんな吹雪を身内に持つ明日香に同情する素振りを見せた。

「……十代さん」

「ん？ 何だよ、遊星改まって」

その時、十代の前に遊星が歩み寄って来た。2人は向かい合う形で互いを見合わせる。その瞳に互いの姿が映り込む。

すると、次の瞬間遊星は上半身を45度一気に傾け、十代に向けて綺麗なお辞儀の体勢を取った。

「本当に有難うございました！ 貴方は俺達の為に危険を承知で奴との決闘に臨んでくれた。本当に感謝の言葉もあります」

「お、おいおい、そんなに頭下げんなって！ 俺はただ決闘をしただけなんだからさあ！」

まるで命でも救われたかのような遊星の畏まった態度に慌て、十代は思わず遊星の顔の前に右手を差し出した。

今度はそれを見た遊星が少々戸惑いを感じ、数度瞬きさせる。

「握手しようぜ、遊星！ それに助け合うのは当然だろ？ ……俺達はもう仲間なんだしさ！」

「十代さん」

差し出された手をグローブを嵌めた手で、十代と握手を交わす遊星。周囲の者達は、そんな全く世界が異なる2人の友情を前に思わず笑みを溢した。

そして仲間という単語を嬉しく感じたのか、遊星の顔は一気に明るくなった。十代の手にもう片方の手も添えられる。

「有難うございます。本当に有難うございます、十代さん！」

「あはは。何か遊星ってドの上に超が付く位、真面目な奴だなあ。」

……ちよつと予想外かも」

両手で自分の手を握り締め、何度も何度も丁寧に頭を下げる遊星。そんな遊星を前に、十代は何だか申し訳ないなあと考えた。明るかった笑顔が一転して苦笑いになり、そのまま空いた左手で頭を掻いた……。

「つまり、奴等の目的はデュエルモンスターの抹殺と歴史の改変という訳か。これはまた随分と壮大でぶっ飛んだ話だな。未だに前等が先の未来から来たという話も、俺にはまだ半信半疑だ」

「ですが、これが事実です。奴は……パラドックスは俺達から5枚のドラゴンのカードを奪い、更にこの世界で後にデュエルモンスターズ界にプロとして名を馳せる貴方達を観客諸共抹殺しようとした」
瓦礫に腰を下ろし、何とも言えない顔をした万丈目を見ながら、同じく近くに腰を下ろしていた遊星が、万丈目を含めたこの世界の者達に懸命に説明する。

信じ難く、鵜呑みに出来ない驚愕の事実を耳にしたレイ達は、思わず未来の世界から来たという遊星達の顔を見て様子を伺うが、誰もが深刻な顔をしており、誰も嘘を着いているようには見えなかった。

そして次の瞬間、十代が突然声を上げて立ち上がった。

「しっかり許せねえ、そのパラなんとかってヤツ!!」

「パラドックスつすよ、アニキ」

「遊星達から大切なカードを奪うなんて……そんな奴を俺は絶対に許せねえっ!!」

拳を握り締め、強火のような勢いで声を張り上げる十代。これには思わず周囲の者達はその気迫に、瓦礫の椅子ごと一歩下がった。

「ア、アニキが燃えているドン」

「暑苦しいところは変わってないわね。寧ろ、卒業前の時の方が十代は冷めてたわ」

感嘆の声を上げる剣山、その目にはまるで十代が本当に燃えているように見えた。

反面、明日香の声と態度は殆ど呆れ果てている。思わずやれやれ、と彼女は首を振った。

「で、でもやっぱり十代サマは熱血だよ！ そうだよな、冷めてる十代サマなんてホントの十代サマじゃないよね！」

「うおおおおおおおおおっ、燃えてきたあああああっ！！俺は今、モーレツに燃えてるぜっ！！！！！」

レイの言葉で心に燃え上がる炎を促され、更に火事の如く熱くなる十代。

次の瞬間、十代は鬼気迫る勢いで素早く遊星の両手を握り、今度は遊星の顔に苦笑いが浮かんだ。その構図は、傍から見れば手を取り合う王子と姫のよう……に見えなくもない。

「遊星、俺も協力するぜ！ そのパラなんとかってヤツを倒す戦いに俺も参加させてくれ！！！」

「で、でも」

「でもモイモもないっ！！ もう俺はお前等に協力するって決めたんだっ！！！」

強引に戦いに関わろうとする十代。遊星の顔が更に引き攣った。

すると十代は遊星の手を離すと、今度は近くにあつた瓦礫に足を掛け、大声で咆哮を上げた。

その叫ぶ姿は正しく熱血馬鹿の典型。クロウはジャックの浪費癖とは別に、頭が重くなるのを感じた。

「うおおおおおおおおおっ、待ってるよパラなんとか！！ お前の計画なんて、絶対に俺達の手で完膚なきまでブツ潰してやるぜええええっ！！！！！」

「お前のアニキ、ネジが一本抜け落ちてるんじゃないのか？」

「大人になって、締め直ったと思ってたんすけどね」

今にも十代は何処かへ走り出してしまっそうだ。

そうなる前に、と明日香が慌てて声を上げた。

「ちょ、ちよつと待ちなさいよ十代！ 貴方勝手に1人で盛り上がってるけど、そのパラドックスの居場所が解るの？ 彼等から了解も得てないのに」

「あつ……………そっか」

十代の燃え上がる闘志と昂る興奮は、その一言を前に冬を迎えた。それには誰もが呆れ顔を隠せない。ユベルや翔でさえ頭に痛みを感じ、それを抱えた。

「十代さん。確かに貴方の気持ちは嬉しいし、とても感謝してます。ですが、この戦いは命の保証さえ出来ない戦い。やはり、これ以上貴方が俺達の戦いに関わるのは、とてもじゃないですが賛成は出来ません」

十代の申し出を遊星は丁重に断る。口に出してこそいないが、アキやジャック達も目でそう語っている。十代の頬が餅や風船の様に膨らんだ。

「もう諦めましょうよアニキ。遊星君達もアニキのことを想ってこう言ってくれてる訳なんですし」

「いっつゃ！ 俺は絶対に遊星達に協力するったら協力する！！」

「アニキィ〜！」

翔が遊星達に続き、更に彼を説得しようとして背後より声を掛けるが、十代は真つ向からそれを拒否。まるで小さな子供のように首を振ってそれを嫌がった。

そして空かさず十代は遊星に詰め寄り、縋るような声で頼み込んだ。

「頼むよ遊星。お前等が俺を巻き込みたくないのと同じように、俺もお前等の助けになりたいんだ。折角時代を超えて、こうして知り合えた仲間が危険な目にあってるってのに、呑気にこの時代で決闘なんてしてらんねえよ！」

「で、ですが……………」

顔の前に拝むように手を合わせる十代を、先程の件もあって遊星は切り捨てることが出来なかった。

「それにデュエルモンスターズが消えちまうなんて聞かされたら、こんなトコで待ってなんかいらんねえよ。俺は絶対にお前等にへばり付いてでも付いていって、そのパラなんとかを倒す為に戦う。俺の大切な相棒を、仲間を、皆の大切なデュエルモンスターズを俺の手で守りたいんだ！！！！」

真っ直ぐに遊星を見詰めて、腹の底から精一杯の気持ちを込めて、声を張り上げる十代。

心に突き刺さる言葉。……遊星は言葉を失った。

「遊星」

そんな遊星に声を掛ける者がいた……クロウだ。

「ここまで言ってくれてんだ。連れてってやるうぜ、お望み通りによ??」

クロウの予想外の言葉に、遊星の驚愕を含んだ声が鋭く飛び上がる。同時に十代の顔が晴れた空の様になる。こいつはどうやって俺達

に協力する、絶対に諦めさせることは不可能だと

「だ、だがジャック!??」

「それにあの戦況で勝利を収めたり、彼の力は私達にも負けない位大きなものがあるわ。気が進まないけど、十代の力は私達にとって大きなプラスとなる」

「アキ、そんなことは俺にも解っている！　だが、俺は」

「だったら、もう認めてあげようよ」

「十代と一緒に戦えば、きっとパラドックスにも勝てるわ！」

龍亞と龍可にまで論された遊星。十代には真っ直ぐな瞳で見詰められ、仲間達からそれぞれ言葉を受け、その頑なに遠ざけようとしていた心は、遂に限界を迎える。

先程から顔に浮かべていた思い詰めた表情が、優しげな許容の笑みを浮かべたのだ。

「解ったよ皆……十代さん！」

緊張と共に生唾を飲む十代。まだその目は真っ直ぐに遊星へと向

けられている。

「どうか、宜しくお願いします！ 俺達に貴方の力を貸して下さい！！」

「勿論さ！！ 未来の為、新しい仲間の為、そしてデュエルモンスターの為に、俺も精一杯の力を出して一緒に戦わせて貰うぜ！！」
そう言つて遊星と十代は、再び握手を熱く交わす。

2人の顔、そしてそれを目に映す5D'sの面々の顔は、晴れ晴れとした明るい笑顔であった。

「アニキが行くつていうんなら、僕も行くつす！」

だが、戦いに参加することを意に決したのは十代だけではなかった。

自称、十代の一番の舎弟を名乗る丸藤翔、後にプロとして大きく名を轟かせることとなるカイザー翔も、十代と共に参加すると言葉を発した。

十代の顔が思わず凍り付く。

「しよ、翔、お前は無理すんなよ。お前や万丈目にはプロでの戦いがあるだろ？」

「何言つてんすかアニキ！ プロリーグ本会場の海馬ドームがこうなった以上、暫くは大会自体が無期延期つす。だったら、僕もアニキと一緒に遊星君達のお手伝いをしてあげたいつす！」

「それなら俺も行かせて貰おう。このルーキープロの中でも最強と謳われた、一、十、百、千、万丈目サンダーが付いていれば、どんな敵が来ようと鬼に金棒だ！ それに十代と翔だけには任せておけん！」

「私も行くわ。研究にも少々疲れてたし、丁度いい機会ね。……もう一度自分の実力を試してみたいわ」

翔に続けて万丈目、そして明日香も参加を申し立てる。表情から、全員参加する気満々だ。

当然、剣山やレイも参加しようとな名前を上げたが、それには十代が反対した。

「でもレイ、剣山、お前等は駄目だぞ。お前等2人はこの週末が明けたら、またアカデミアに戻るんだ」

「そ、そんなあつ!?!」

「俺だってアニキと一緒にいきたいドン」

反対する2人、だが依然として十代は首を縦に振らなかつた。

「駄目だ。それに確かお前等、もう直ぐ卒業必修の実技テストだろ? テツキの調整とか、テスト内容の把握とか、色々やる必要がある筈だ。……留年はしたくないだろ?」

そう言つと剣山とレイは何も言えなくなつてしまい、悔しそうな目付きで十代を見た。剣山は唸り声を上げ、レイは頬を膨らませて不満を態度に現す。

だが、十代の言う通り、アカデミアを留年する訳にもいかない。仕方なく2人はこの時代に残ることを小さく頷くことで承認する。

十代もそれを見て、うんと頷いた。

「後は吹雪さんだけど」

「僕も残るよ。顔にこんな傷を作つた状態で別の時代に向かうなんて、僕のプライドが許さないよ。どうせ向かうなら、美しいままの僕で行きたいからね。今は世界のことより、僕の美しい顔に付いた傷の治療の方が大切さ」

顔に出来た引つ掻き傷のような切り傷に心で嘆き、吹雪が笑いながらそう答える。

苦笑する十代。明日香など、もう何も言おうとはしない。寧ろ、視界に入れることさえしなかつた。

「皆さん、本当に有難うございます。どうかよろしくお願いします」
遊星は自ら危険に飛び込もうと申し出てくれた翔達にも、その頭を下げた。

「いよお〜っし!! それじゃあ行くこうぜ、そのパラなんとかつてヤツの許へ!!!」

「おおおおおっ!!!」

共に向かうメンバー、所謂GXのパーティが決定。5D・sのパ

「ティと共に闘うことに心躍らせた十代が、仲間達の中心へと一歩踏み出し、拳を上にして飛び上がった。」

他の者達も十代のその高揚した気分魅せられたのか、時代に問わず彼等も十代に便乗。翔達は勿論、遊星やアキ、龍亞達と老若男女問わず、彼の熱い気持ちに興奮を覚え、自らも、と声を張り上げて腕を伸ばした。

「おい。盛り上がるのは別に構わねえけど、お前等全員あいつの居る場所解つてんのか？」

だが、次の瞬間彼等の高揚した気分は一瞬にして氷河期を迎えた。5D・sきつての常識人、クロウの冷めた一言に一瞬にして凍り付く熱き集団。所謂、真つ黒なバツクに全員が白くなった状態。

「い、いよお〜し！！ それじゃあ行こうぜ。取り敢えずどっかへ！……！」

「お、おおお〜」

「……全然仕切り直せてねえよ」

仕切り直しに、と台詞の最も重要な部分を訂正し、改めて言葉を発する十代。再び腕や声が上がったが、それには先程のような覇気は無かった。

中途半端に腕を上げる十代達に、クロウは苦笑いと冷や汗を浮かべて、オレンジの髪を掻き上げながら一人そう呟いた……。

「でもクロウの言う通りね。でも、闇雲に捜していたんじゃキリがないわ」

だが、それは決して楽観視できる問題ではなかった。龍可の言葉に全員の表情が曇る。

そして少女もまた可愛らしく、且つ小さく腕を組み、口元をへの字に曲げた。

「遊星さん達は、どうやってこの世界の情報を見付けたんですか？」

「此処の出来事は、俺達の時代の図書館で知りました。デュエルモンスターズ関連の過去の新聞や記事を漁って、此処の出来事を知ったんです」

「また図書館に情報を捜しに行くのか？」

「そうね、それが一番の近道かもしれない」

レイの質問に遊星が答え、それを聞き、ジャックとアキも互いに顔を見合わせる。

それはまるでリレーの様に繋がり、アキが遊星に向かって頷きでそれを伝える。遊星はすんなりと頷いた。

「この町にも図書館はある。まずはそこで情報を捜そう。そうすればきっと奴の足取りが掴める筈だ」

「うっしやあ！ 絶対に見付けてやるぜ」

遊星がそう言うと、十代は真つ先にやる気を見せる。そのまま我先にと近場の図書館へ走り出した。

「待て！」

だがその次の瞬間、十代は蛙が拉げたような声を出して、その場に蹲り、咽込んでしまう。

万丈目が十代の襟首を掴み、真逆に位置する自分の方へと力強く一気に引き寄せたのだ。

「な、何だよ万丈目」

「まったく。お前は少し落ち付きという言葉を知れ」

涙目になりながら掴まれたところを両手で抑え、蹲りながら文句を言う十代。

そんな彼を軽く言葉であしらうと、万丈目は何処からともなく極薄型のノートパソコンを取り出し、その電源を入れて、キーボードを操作し始める。

一瞬にして全員の視線がパソコンの画面に集まった。

「おお！ 万丈目、お前荷物なんて一切持ってなかつたのに、一体何処にこんなパソコン隠し持ってたんだ！？」

「下らないことを聞くな十代。今はそれどころじゃないだろう」

キーボードを見ずに指先を器用に動かして操作を続ける万丈目。

幾つもの複雑な英数のパスワードを入力し、彼は目的のページを指してスムーズにアクセスを続けていく。

「万丈目さん。一体、これは？」

「サンダー。これは我が『万丈目グループ』が誇る、世界最高峰のデータベースサイトだ。様々な分野に於いての情報が、此処には大量に蓄積されている」

遊星の質問に検索を続けつつ万丈目が答える。

そしてそれを聞いた万丈目以外の者達は首を振って相槌を打った。「成程な、それならわざわざ図書館に出向く必要もない。上手くいけば、この場で敵の情報や痕跡を見付けられるという訳か」

「そういうことだ。取り敢えず、今は過去のデュエルモンスターズ関連の記事を片っ端から開いている。暫く待て」

ページを開いては戻る、それを繰り返す万丈目。日本に限らず、海外に関する情報にも目を通していただけあって、検索はかなりの時間を必要とした。

「まだかよ万丈目！？ 急がねえとこの先どんな影響が出るか解らねえんだぞ！」

「ああもう、お前は少し黙っている！ 俺だってかなりハイペースでやって」

遂に待ち切れなくなった十代が万丈目の肩を揺する。同時に反動で万丈目の首が、座っていない幼児の首のように前後に大きく揺れを来す。

対し、思わず苛立ちの感情のまま、振り向いて文句を発する万丈目。彼は十代の赤い服に掴み掛った。

だがその時、パソコンの画面が変わった。

「こ、これは!？」

「おいマジかよコレ!!!？」

揉み合っていた2人も、その他の者達も一瞬にしてその画面に目を奪われた。正しく釘付け状態、誰もが我こそが、と画面に顔を近づけた。

そして画面を一瞬でも目の当たりにした者は言葉を失い、驚愕の表情に変わる。

遊星は目を見開き、翔は顔を歪ませて驚愕を表現している。アキやジャックは深刻な顔でそれを凝視し、明日香と吹雪は兄妹揃って記事の内容に目を移していた。

「嘘だ」

そんな中、その記事に最も衝撃を受け、ショックを隠すことが出来なかったのは十代であった。

明るい笑みを浮かべていた顔には冷や汗が浮かび、身体も震え、声も動こうとしない唇から絞り出している。

聴て彼は、何かに突き動かされているかのように、震えた手を自分のデッキに伸ばし、カードの束の中から1枚のカードを抜き取った。……『ハネクリボー』のカードだ。

その尋常じゃない様子に心配した遊星が十代に恐る恐る声を掛けたが、困惑した彼の耳は正常に機能をしていないのか、返事はない。虚ろな目で、ただ悲痛な声で「信じないぞ」と繰り返した。

そしてその目は、それぞれ異なるオレンジと緑のオッドアイに変わる。口内では歯がギリリと音を立てて軋んだ。

そんな十代を前に、ジャックは軽く息を吐くと、再び画面に視線を移した。同時にジャックは、内心に渦巻く怒りを拳を握り締めることで小さく現した。

パソコンの画面に表示されたのは、数年前の日本国内で起きたデュエルモンスターズに関する記事。

見出しには、黒い文字でこう書かれていた

「遊戯さんが死んだなんて……俺は絶対に信じねえぞおおおおお
おおおおっ！！！！！！」

『大会を突如襲った悲劇。惜しまれる中、決闘王若くして他界』と。

T U R N - 2 1 H ヒートハート（後書き）

今回の最強カード

【ハネクリボー 星1 / 光属性 / 天使族 / A T K 3 0 0 / D E F 2 0 0】

『フィールド上に存在するこのカードが破壊され墓地に送られた時に発動する。』

発動後、このターンこのカードのコントローラーが受ける戦闘ダメージは全て0になる。』

「ご察しの通り、今回カードで登場したのはこの1枚のみ。よって、自然にこのカードが今回の最強カードに抜擢された。……少々不本意だが。」

内蔵効果は、簡単に言えば破壊されて発動するプレイヤーのみの『和睦の使者』と考えて貰えば解り易いだろう。つまりモンスターは守れないので、その点に於いては和睦の使者に劣ると言える。

だが、ただ破壊されればいいので、発動条件はかなり緩い。当然、前話の『カードガンナー』の時と同じく、蘇生されて蘇生カードが破壊されて共に墓地に送られたという状況でも効果を発揮出来る。更にこのカードを補助する『クリボーを呼ぶ笛』や『進化する翼』、『バーサーカードクラッシュ』も存在しているので、中々侮れない。おまけに光属性なので、極稀に『オネスト』が飛んできて返り討ちにあう場合もある。……ダメージ300だが。

一時は1K i e e デッキの対策として投入する者も多かった。現在でも、レベルが1で墓地発動という点から、『ジャンク・シンクロン』を主軸とするデッキに入れる者もいる。この際にも進化する翼が使えるので、相性はいいだろう。

……こう書いてみると、非常にこのカードが攻撃し辛いモンスターだということが解る。なるべく相手にしたくない、関わり合いたくないカードだ。

アニメGXでは、初期から登場している十代の相棒カード。ご存知の通り精霊が宿っている。因みに元々の所持者は武藤遊戯。此処からクリボー一族の系譜が続くのだろう、と誰もが考えたが、その系譜は自作品で龍可の『クリボン』に受け継がれる。

初登場は記念すべき最初の決闘、VSクロノス。『アンティーク・ギアユー古代の機械巨人』の攻撃から十代のライフを守り、反撃に転じる切っ掛けを作った。どうやら当時は貫通ダメージからも防げたらしい。勿論、実際は不可能なので注意。

更に神楽坂戦、VS遊戯デッキではなんと『クリボー』とこのカードによるクリボー対決を拝む事が出来る。だが結果はハネクリボーの敗北、墓地に送られた。

以後、壁モンスターとしてクリボーを呼ぶ笛で特殊召喚されるのが主になる。これが十代のライフを守り、時にはそこから進化する翼とのコンボに繋げることもあった。

だが、その後は大きく出番が減少。遂には登場する描写さえ無くなってしまふ。最終決戦であるダークネス戦では、『超融合』の手札コストとして捨てられる始末……哀れとしか言いようがない。それでいいのか十代？

最後の遊戯戦でも手札には舞い込んだが、結局使用されず終い。主に十代の精神を支える役割としての出番が多かった。

因みに十代の中の人がこのカードに非常に愛着を持っているのは有名な話。実際彼も決闘を行うのだが、作るデッキには欠かさずこのカードを入れているという。GXファン、そして十代ファンからすればとても嬉しい話である。

更に余談として、遊戯の中の人も遊戯というキャラを非常に大切にしており、遊戯の声で注文を行ったというエピソードがあったらしい。

TURN - 22 ハングリーバーガー（前書き）

知っていましたか？

実はハングリーバーガーって、戦士族なんですよ。

「すっげーな、これに乗って遊星達は過去にやって来たのかぁ」

「ホント、流石は未来人ってトコっすね」

時空を超える希望タイムシップ。それに乗船した十代と翔の一言目がそれだった。

決闘王の武藤遊戯が標的として狙われていることが発覚し、遊星達の次なる目的の時代は定まった。

彼等は素早くブルーノが待つタイムシップを隠した場所へと走り、大して理由も説明せずに乗船。

そしてタイムシップ乗船というこの時代の人類初の体験に、十代と翔は目を輝かせて声を上げた。

奥行きもあって数人が横になれそうな広い船内、近未来を想わせる機械の内壁、複雑なキーボードで操作するコックピット、その様々な箇所に興奮と感激を覚えたのだ。

「ホントに良いのかい遊星？ 何の関係も無い彼等を巻き込んでしまつて」

そんな十代達から、ブルーノが視線を遊星に戻す。何処か能天気な彼等に少々心配になったブルーノは、出発する前に、と遊星に問い直した。

「関係ならあるさ。彼等はデュエルモンスターズを心から愛している決闘者達だ。デュエルモンスターズを守りたい、これ以上の参加理由はないだろう」

穏やかな顔でそう言う遊星にブルーノはもう何も言わなかった。

そのままコックピットの座席に腰を下ろし、器用な手つきでキーボードを操作してデータを入力していく。

「遊星、時代の時間軸と座標は？」

「此処から約数年前、20XX年の 月×日。時間帯は午後1時ジ

ヤスト。丁度、伝説の決闘王と謳われた武藤遊戯の全盛期だ」

万丈目の弾き出したデータが映るノートパソコンを手に、記事の年月を遊星はブルーノに伝える。

遊星に言われた年月と時間軸をブルーノはタイムシッポのメインコンピュータへ正確に入力していく。

「この日の童実野町時計台前。あの伝説の決闘都市の開催場所となつた中央広場で、海馬コーポレーションとインダストリアル・イリユージョン社の共同で、大きなデュエルモンスターズ大会が開催されている。決闘王も、どうやらゲストとしてこの大会に招かれていたらしい」

「成る程。正に決闘者を根絶やしにするなら持って来いの機会だった訳だね」

「しかも、武藤遊戯だけではなく多くの参加決闘者達もこの日に死亡している。原因は開始同時に起きたビルの倒壊、その影響が引き起こした二次災害。大会の会場は崩れてきた周辺のビルの瓦礫で大混乱に陥り、そこに居た殆ど関係者がその下敷きになったとある。

……ビル倒壊の原因は未だ不明のまま」

「どうやら間違いなさそうだね。この件、間違いなくパラドックスが関与している」

深刻な顔で黙々と作業を続けるブルーノに補足説明として遊星が言葉を発し続ける。

彼の話を目で聞き、手を動かすという器用な芸当を行いながら、ブルーノは最後にキーボードの「Enterキー」に指を置き、素早くそれを押し込んだ。

「よし。これで時間軸と座標の入力完了。発進すれば、ものの1時間位で現地に辿り着けるよ」

「おっ！ 準備出来たのか！！」

ブルーノは驚いた。遊星に話し掛けたつもりで振り向いたのだが、そこにいたのはなんと十代。

超ドアップで視界に入った顔にブルーノは思わず飛退いた。

「急いでくれ、早くしないと遊戯さんがホントに殺されちゃう！」
「わ、解ったよ。それじゃあ、皆何かに掴まってて。直ぐに発進するよ。」

十代があまりにも迫って来るので、ブルーノはその迫力に負け、発進スイッチに手を掛けた。

同時に遊星達の身体に強烈な重力が掛かる。発進という言葉の意味を未経験の十代達はこれでもか、という程味わった。

「うううっ、凄いGだ！」

「か、身体がまるで鉛になったみたい」

「こ、こいつはどうにも慣れねえぜ」

近くにあつた手摺に手を掛けていた万丈目と明日香だが、それでも身体に掛かる負担を軽減し切れなかつた。手摺を持った手をそのままに彼等の身体が重力で下へと沈んでいく。

だが、未経験者ではないクロウ達も表情を苦痛で歪ませていた。彼等も全員苦しそうに険しい顔をして目を固く瞑り、強烈な重力を堪えた。

「ボク……も、もうダメ」

「レ、レイちゃん押さないで!？」

「あ、ちよつと駄目だドン!？」

その時だ、端に積まれていたダンボールが倒れると同時に中から3つの人影が次々に傾れ込んできた。

目の前に倒れてきた彼等の顔を見て、十代は負担も忘れて驚いた。
「ああっ！ 剣山にレイ、それに吹雪さんも！ 何で此処に!？」
先程自分達の時代に置いてきた筈の3人が、密航して船内に潜り込んでいたのだ。

話を聞こうにもこの重力の中では動くことも出来ない。十代はこの状態が終わりを迎えるのを待った。

臆て唐突に身体の負担は治まる。どうやら船体が軌道に乗って安定したらしい。

「あっ、身体が急に楽になった」

「もう大丈夫。機体は安定したから、後は目的の時代に辿り着くまで、船内で楽にしておくの良いよ」

急激に身体が軽くなったのを感じた翔が、沈んだ身体を立ち上がらせる。

ブルーノがそう言いながら座席を離れる。同時に十代は、忍び込んでいた3人の密航者に向けて声を掛けた。

「何でお前等が乗ってるんだ。お前等は駄目だって言っただろ？」

「だ、だって……」

「兄さんまで。どうして彼等と一緒にこの船に乗っているのかしら？」

「い、いやね。この子達がどうしてもって言うから……ね？」

少々キツめの口調で話し掛ける十代に、レイが何処か怯えた声を発する。吹雪も明日香の鋭い目に睨み付けられ、小動物のように小さく竦み上がっている。

そんなレイと吹雪に代わり、代弁役を買って出たのは剣山だった。「アニキ、やっぱり俺達だけ留守番だなんて、我慢出来ないドン」

正座の体勢で声を張り上げる剣山。思わずレイ達を含めた全員の視線が剣山に集まった。

「俺達だって決闘者ザウルス。デュエルモンスターの危機に俺達だけ留守番だなんて、冗談じゃないドン。例えアニキ達にこの船から放り出されたとしても、俺達3人は意地でも喰らい付いていくザウルス！」

「私も！ 私だって、アカデミア留年覚悟で来たんだもん。絶対に、十代サマ達と一緒に行くから！！」

十代達に負けず劣らず、強い口調でレイと剣山が言う。今度は十代達がたじろぐ番だった。

明日香はそう言う彼等2人の目を見る。瞳の輝きから、彼等が真剣だということは直ぐに判断出来た。

「十代君、彼等は本気だよ」

そしてそれを口を開いて肯定したのは、珍しく真剣な顔をした吹

雪だった。今度は一斉に彼へと視線が集中する。

「本気で彼等は君達の助けになりたいと考えている。僕はそんな彼等の気持ち尊重したいと思ったから此処に連れて来た。彼等は決して遊び半分で来てる訳じゃない。それだけは解ってあげて欲しい」
そう言う吹雪に対し、十代は思わず口籠る。アロハに正座と、かなり滑稽な格好をしてはいるが、その顔つきだけは本当に真剣だった……顔つきだけは。

剣山、レイも同様。吹雪に負けず劣らず真剣な顔で十代の顔を見詰めている。

十代は返答に困った。

言葉が出て来なくなった十代は、何かを誤魔化すかのように頭を乱暴に掻き毟り、舌を打ちながら息を吐き出した。

「ったく、留年しても知らないからな」

「アニキイツ！」

「十代サマ！」

眉をへの字に曲げた十代のその一言が、剣山とレイの顔に喜びの光を与えた。

2人は溢れる喜びに感激しながら十代へ強烈なタツクル。年の割に小柄な十代の身体へと、迷惑にも2人揃って同時に抱き付いた。十代が奇声を上げるのも、それとほぼ同時のことだった。

「やっぱりアニキはサイコーだドン。俺、アカデミアを卒業しても、一生アニキに付いていくザウルス」

「私も！ 十代サマとずっと一緒にいるんだ」

剣山は十代へ巻き付けた腕に更に強く力を込め、同じくレイも十代の顔へ小動物のように頬擦りする。

対し、当の十代本人はやつれた顔で剣山からのベアハッグと、レイからの頬擦りを受けていた。それを横で見ていた吹雪が、愛だ愛だと呟きながら腕を組んで頭を数度頷かせる。

翔が剣山に文句を言ったり、明日香とユベルがレイに嫉妬したり、と色々問題はその後もあったが、取り敢えずこの件に関しては、

丸く収まったのだった。

「……………なあ、遊星」

「何だクロウ？」

「今気付いたただけだな。どうせ、全部片付いたらあいつ等全員、元居た時代から1分位経った世界に戻すんだろ？ だったら別に留年だの何だの心配しなくて良かったんじゃないのか？」

そんな中、それを離れて見ていたクロウが隣に立っていた遊星に声を掛けた。

尻上がり調のクロウの言葉に一瞬詰まる遊星。僅かに下に傾けられた遊星の無感情の顔に、周囲も気付かないくらいに極々僅かな変化が起こる。

「そつだな」

再び顔が持ち上げられると同時に遊星はその一言だけを呟いた。

まさかマジで気付いてなかったのか、とクロウが彼の天然な一面の存在に確信を持ったのは、その直ぐ後だった……………。

「みんな、お昼にしようよ」

「十代達の間もあるわよ」

レイや剣山達が遊星達と打ち解けて10分程経った後、龍亞と龍可が、何か沢山詰まった箱を両手で抱えてやって来た。箱の中からは鼻腔を攪り、食欲を刺激する良い香りが漂っている。

遊星が時計を確認する間もなく、一斉に龍亞達の許へと集合するクロウ達。箱の中身を覗いた彼等は、そこにD Aというイニシャルの水色の包装紙に包まれた大量の何かを見付けた。

「えへへ、デュエルアカデミア名物ドローパンだよ。龍可と一緒にた〜つくさん買ったんだ！」

「といつても、龍亞は殆どお金出してないけどね」

中身を覗くクロウ達にその正体を笑いながら明かす龍亞。呆れつつ笑いを浮かべている龍可も続く。

「ドローパン？ 龍亞、龍可、一体どういったパンなんだそれは？」

その見知らぬ単語に疑問を感じ、声を上げたのは遊星だ。パンを食したことはあっても、学生生活を営んだことがないクロウやジャック達は遊星を含めて、初めて耳にしたパンの名前を前に、疑問を浮かべた顔を見合わせた。

「ドローパンはね、龍亞も言った通りデュエルアカデミアで大人気のパンなの」

そんな彼等にドローパンについて説明したのは、同じくアカデミアに在籍するアキであった。

「一般的な焼きそばやコロツケ。ちょっと変わったサラダや唐揚げなんかを具材にしたパンが、この通り包装紙で外からは中身が解らないようになっていて、購買部のちょっとした名物パンなのよ」

「へえ、つまり決闘のドローのように中身を見るまで何が入っているのか解らないってことか。好みの具を当てるも、嫌いな具を引き当てるのも、自分のドロー運次第という訳か」

「結構面白そうじゃねーか。正にデュエルアカデミアの名物には持つて来いのパンだな」

アキの説明に納得がいく遊星。クロウも早速このパンに興味を示したのか、色々と触感で中身を探ろうとパンの袋に手を伸ばし始めた。ジャックはといえば、自らの引きの強さに自信があるのか、その鋭い目でコレだと思っパンの包みを捜している。

「中でも中でも。アカデミアで飼われている黄金の鶏が1日に一度しか産まない黄金の卵を贅沢に使った黄金の卵パン。それを食べる為に皆がこのドローパンをドローするんだ！」

「つまり、その黄金の卵パンがレアカード扱い、つまり当たりという訳か」

「でも、沢山あるドローパンの中からこれ一つだけを見付けるのはとても難しいの」

黄金の卵パンを説明する龍亞。そしてその封入率と出現率の凄まじい低さを説明する龍可。

2人の説明に遊星達は更にこのドローパンというパンに興味を持

った。

「実は俺もまだ見たことがないんだ、その卵パン。なあ龍可」

「うん。私も龍亞も皆と一緒に、結構頻繁にドローパーンを買ってるんだけど、誰もその黄金の卵パンをドローパーンしたことがなくて……」

龍亞と龍可は少々沈んだ口調で遊星達に補足を付け足す。特に龍亞は龍可以上に悔しそうに言った。

「アキは見たことはないのか」

「残念だけど、私もないわ」

遊星は彼等と同じ身分であるアキに尋ねるが、返答は首を横に振るという否定だった。

「何か良い匂いがすると思えば、ドローパーンじゃん。いやあ、懐かしいなあ」

そこへ十代や明日香、翔やレイに剣山達、とこの船に先程初乗船を遂げた者達がやって来る。

中でも十代は、龍亞達の持つ箱の中身を見て、その中身がドローパーンだと直ぐに気づき、感慨深そうにその中の幾つかに手を伸ばした。

「十代、ドローパーンを知ってるの？」

「知ってるも何も、俺はアカデミアの卒業生だぜ」

そう言っつて、十代は他のパンにも手を伸ばしていく。

「それにしてもホントに懐かしいなあ、ドローパーン。未来のアカデミアにも黄金の卵パンとか、まだあんのかな」

龍亞の持つ箱のドローパーンに色々と手を伸ばし、十代が笑う。

その詳しそうな口振りから尋ねた龍亞も、成る程と納得。十代が色々とパンを入れ替えていくのを首を上げて眺めた。

そしてハツとある事に気付いた。

「もしかして十代って、黄金の卵パン食べたことあるの!？」

気付けば黙っていられなかった。聞かずにはいられなかった。龍亞が血相を変えて十代に尋ねる。

すると十代は笑みを浮かべ、両手にパンを持ちながら、龍亞の質

問に答えようと口を開く。

「控え控え〜っ！」

「この方を何方と存じ上げるザウルス！」

が、それより早く翔と剣山が十代の前に出て、十代を某三代將軍の如く手の動作と言葉で崇めた。

他の者達は啞然。十代でさえ、困惑した表情で2人を見ている。

「このお方こそ、かのデュエルアカデミアの購買部にて！」

「黄金の卵パン連続20回ドロ〜という偉大な記録と！」

「キング・オブ・卵パンという偉大な称号を持つ！」

「遊城十代のアニキだドン！」

切れの良い口調で言葉を交互に発し、学生時代に十代の達成した偉大な記録を語る翔と剣山。

最初こそ戸惑いを見せていた遊星達であったが、その驚くべき事実を知った途端、一転して表情が驚愕の表情へと移り変わった。

「すっげ〜っ！ 十代って、黄金の卵パン食べたことあるんだ〜っ！」

「それも20回連続だなんて、ホントにすごい！」

真っ先にそのことに食い付いたのは龍亞と龍可だった。味はどうだった、本当に具材の卵は金色なのか、と代わる代わる次々に十代に質問を投げ掛ける。

遊星は十代の引き運の強さを頭で考えながら、箱の中に積まれているドロ〜パンに目を移した。

「じゃあさ十代、早速ドロ〜パンをドロ〜してよ！ 十代なら卵パンをドロ〜出来るかもしれないしさ」

「ん。ああ、良いぜ」

龍亞に差し出されたパンの箱に手を突っ込み、どのパンをドロ〜するのか探りを入れる十代。

目を瞑り、神経を集中。自分がコレだ、と思うパンを沢山の視線を浴びながら捜していく。

「俺のターン、ドロ〜！」

次の瞬間、目を見開くと同時に十代はパンの山から1つのドローパーンをドロ―。

こいつに決めたぜ、とその引いたパンを仲間達に見せ付けた。

「なら次は俺のターンだ」

そう言つてジャックもドロ―パンの山に手を突っ込む。

他の者達も順々に手を箱の中へと入れ、それぞれ自分の信じたパンをドロ―していった。

そして次々に袋の切り口を音を立てて破いていく。

「うう。外したあ、あんパンだああ。……龍可は？」

「私もハズレ。クリームパンだわ」

中身の具材を確認した龍亞が、真つ先に悔しがる。

龍可も龍亞に自分のパンを見せながら、残念そうに溜め息を着いた。

「僕も外れちゃったツス。剣山君は？」

「俺も駄目だったドン。残念ザウルス」

「やっぱり黄金の卵パンともなれば、そう簡単にはいかないわね」

同様に翔、剣山、明日香と彼等も黄金の卵パンを引き当てることは出来ず、顔を失望で歪ませて自分のパンに噛り付いた。それぞれ甘い、辛い、且つ何処か苦い味がそれぞれの口の中に広がった。

「おっしやああああああっ！！！」

そんな中、1人いやに明るい声で歡喜を現す者がいた。……十代だ。

子供のように喜ぶと、十代はクルリと仲間達の方を向き、手に持った下半分を包装紙に覆われたパンを彼等に見せた。

「見る！ 黄金の卵パン、召喚だ」

「うおおおっ！ すっげえ十代」

「ホントに卵が黄金だわ」

十代の手に納まっているパン。その上下の合間から、神々しい金色の光を発する目玉焼きが見える。

初めてお目に掛かるそのドロ―パンを前に、龍亞と龍可、密かに

アキも感激を覚えた。

「へっへ〜ん、凄いだろ。まだ俺の腕も鈍ってないようだな」

「美味しそう……いいなあ、十代」

「龍亞、よだれよだれ」

龍亞と龍可に向け、珍奇なパンを中身も見えないよう提示する十代。黄金の卵パンの香りとその魅力は、食いしん坊な龍亞の唾液腺を刺激する。

龍可もそんな龍亞を宥めつつも、自分の口内が唾液で満ちるのを感じた。

そんな物欲しそうな顔をする2人を前にして、十代はある事を思い付く。手に持ったパンを均等になるよう綺麗に引き裂き、彼等にも味わせてやるうと前に出した。

「ほら、半分ずつな」

密かに心の底で望んでいた十代からの一言。それを聞いた次の瞬間、龍亞と龍可は驚き、喜んだ。

そして黄金の卵パンを見詰めた目を更に輝かせ、彼から半分になった黄金の卵パンを受け取る。

「有難う十代！」

「有難う！」

満面の笑みを浮かべてお礼を言う2人。笑う十代に感謝を感じながら、早速2人は口を大きく開けてパンにかぶり付いた。

「うま〜い！！」

「おいし〜い！！」

「だろだろ。やっぱり最高だよな、黄金の卵パンは」

パンと中の卵を同時に口にした途端、2人は口々に味の感想を叫んだ。

十代はそれを聞き、素直に相槌を打って2彼ら兄妹の言葉を肯定する。

そんな微笑ましい光景を前に翔と剣山は改めて十代の器の大きさを実感。万丈目と明日香も十代の成長振りに思わず笑みを溢した。

(そういえば)

そんな時、アキは唐突にあることを思い出した。

(遊星は一体何のパンをドローしたのかしら)

遊星が片手でパンを食べている構図がアキの脳裏に浮かぶ。……

とはいえ中身までは流石に想像が付かない。

「はっはっは、皮肉だなクロウ。BFブリックフエザー使用の貴様がチキンパンとはお笑い草だなあ！」

「うるせえっ！！ てめえこそ何だよそれ、ラーメンパンだあ？

んな汁っ気たつぷりでベタベタになったモンを美味そうに食うんなざ、一体どういっつ見だよ。その凶太い神経疑っちゃうなあ！！」

「何だと貴様！！ カップラーメンをこよなく愛するこの俺に向かって、その言い草は許せん！！ 今直ぐに前言を撤回しろ！！」

隣ではジャックとクロウが自らのパンについて仲良く良い争いをしている。これは良い機会だ、と内心アキはほくそ笑むと、彼等と本人にも気付かれぬよう密かに一人離れていた遊星に近付いた。

一日中作業や修理の仕事を受け持つことが多い遊星は、基本何かを食べることが少ない。その為、食べている姿を他人に見せるのは珍しい。こういつた機会でもなければ、彼は食事を摂ろうとはしない。……故に彼の好物を知ることがアキには出来なかった。

(これを機に、絶対に遊星の好物を見付けてみせるわ。見てなさい遊星)

アキは何処か間違っているような決意を固め、忍者のように音と音と音を消して遊星に歩み寄る。

聴て遊星の背中がアキの瞳に映る。都合のいいことに彼は絶賛食事中であった。

「ね、ねえ遊星！」

片手でパンを口にする遊星に向かって、上擦った声をアキは投げ掛ける。

話し掛けられた遊星は、自分のドローパンを左手に持ち替えながら、アキの方を振り向いた。

「どうしたんだアキ？」

「あ、あの、その……ゆ、遊星のドローパーンは一体何だったのかなあ……なんて」

優しげに言葉を返してくれた遊星に、アキは身体が熱くなるのを感じた。

緊張で言葉が無茶苦茶になりながらも、アキは第一の目的を果たすことに成功。遊星からの返答を待った。

だが次の瞬間、遊星の顔に何処か寂しげな薄暗い影が浮かんだ。

「……カニパン」

「へっ？」

「カニパンだった」

その何とも言えない表情で自分のパンを見せる遊星に、アキはこれ以上言葉が出て来なくなってしまふ。結局アキは遊星の好物を知ることが出来なかった。

取り敢えず、蟹だけは彼に与えてはいけない。……それが今回の十六夜アキの得た収穫であった。

T U R N - 2 3 ヒーロー・キッズ（前書き）

今回でGX編は終了。次回からはいよいよDM編、つまり初代遊戯王の世界こと遊戯達の世界に入っていきます。……長かったなあ。

さて、今回の話では途中を端折りますが、決闘描写あり。対戦するのは……5D's対GXという夢のカード。彼等の中から代表として私が選んだ2人の決闘者によって、熾烈を争って貰います。

普通では絶対に見られない夢の対決。それではどうぞ。決闘スタンバイ！！

「なあ遊星。此処で決闘してもさ、別に構わないだろ？」

「え、ああ、機体には特に問題はない筈だから、大丈夫だとは思いますが」

すると十代の笑顔が更に明るくなる。素早く残りのカレーパンも口の中へと放り込んだ。

「よっしゃあ！ なら龍亞、お前との決闘受けるぜ。売られた決闘は買わなきゃ損だつてなあ！」

顎を口くに動かさずに口の中のもの全てを飲み込んだ十代は、再び龍亞に向かって口を開いた。

手に付着したパン粉を払い落とし、食事の時には外していた決闘盤を腕に装着して、龍亞との決闘に十代は臨もうと腰を上げる。

「やったああつ！ 決闘だ決闘、早速やろう。待っててね、今直ぐ決闘盤取ってくるから」

龍亞は素直に両手を上げて喜びを表現。十代が決闘を受けてくれると解るや否や、自分の青い決闘盤を探す為、慌てて自分と龍可の荷物が詰まった鞆の中を手当たり次第に漁り始めた。

「龍亞の大馬鹿」

対し、龍可は心底呆れ果てる。痛む頭を押さえ、条件反射のように溜め息を洩らした……。

船内の中央で対峙する十代と龍亞。2人の決闘盤は同時に起動し、立体映像システムが作動する。

「もう龍亞つたら。ホントに我が儘ばかりで、しょうがないんだから！」

「龍可ちゃん、そんなに怒ることないよ。それにアニキだつて、何だかとても楽しそうだし」

「確かに、あんな楽しそうな十代は久し振りに見たわね。あれは何かにワクワクしてる顔だわ」

龍亞に頬を膨らませる龍可。十代が浮かべた笑みに疑問と確信を持つ翔や明日香。他にも遊星や万丈目、と仲間達全員が見守る中で

彼等2人の決闘が開始される。

「行くよ十代！ 俺のDデッキデュフォーマーの強さを見せてやる！！」

「でいふぁーまーってというのが龍亞の扱うデッキなのか。一体それはどんなカードなんだろ。楽しみにしてるぜ！」

「決闘っ！！！！」

2人の声が合わさると同時に、決闘の幕が上がる。

予め引いておいた5枚のカードを手札として持ち、向かい合う相手に向けて左腕の決闘盤を構えた。

「俺の先攻。ドロー、シャツキーン！」

先手を取ったのは龍亞。彼は指を置いたデッキトップから勢いよくカードを引き抜く。

そのまま引いたカードは手札に加えられ、龍亞のメインフェイズが開始される。

「しゃつきーん？」

そんな中、十代は決闘とは全く関係ないことに疑問を感じ、首を傾げていた。ドロー時に龍亞が口にしたシャツキーンという謎の言葉。それが十代の困惑を招いた。

「万丈目君、シャツキーンって何すか？」

「俺に聞くな」

周囲のギャラリー、万丈目や翔、剣山達も困惑した顔を互いに見合わせている。

「ああ、龍亞つたら興奮のし過ぎで悪い癖が再発したわ」

「また独りよがりな決闘を始めなければ良いが……」

対し、その意味を知る龍可や遊星は、またかと頭を悩ませた。

兎にも角にも、目の前でぐるぐると腕を風車のように回す龍亞が冷静に決闘を行えることを願う。龍可達は刻まなくてもいいことをわざわざ頭に刻んで、龍亞の1ターン目を見守った。

「なあ、龍亞。シャツキーンって何なんだ？」

「えへへ、久し振りにやつちゃった。気にしないでよ、ちょっとした気合いを入れる掛け声みたいなものだからさ。それより行くよ、

俺は手札から『D・モバホン』を攻撃表示で召喚」

そう言つと龍亞は手札から1枚のカードを抜き取り、決闘盤に設置。聞き慣れぬモンスター群に十代が頭を悩ませる間もなく、龍亞のフィールドには1体の携帯電話を模したモンスター、もとい携帯電話そのものが出現した。

【D・モバホン 星1/地属性/機械族/ATK 100/DEF 100】

「な、何だ？ でいふおーまーつてのは、携帯電話なのか？」

「此処からが本番さ。モバホン変形っ！！」

すると龍亞の言葉通り、モバホンが変形を開始。携帯電話の形からモンスターは複雑な変形、音で顕すならチャキチャキーンと遂げ、一瞬にして腕も脚もある見事な1体のロボと化した。

そしてそれは正義のヒーローやロボットを愛する十代の心を大きく刺激する。

「うおおおお……すっげええええつ。携帯電話がロボットに変形したああああ！！ かつちよいいいつ！！！！」

吠えるように大声を上げる十代。本人はとても楽しそうだが、彼の知人達はとても恥ずかしそうに顔を赤く染めている。その隣では、龍可が何度も何度も謝罪の言葉を口にしながら頭を下げていた。

「でしょ！ でしょでしょ。この変形を見せたかつたんだ。十代ならきつと解つてくれると思つてたよ」

「ああ、解るぜ。変形するなんて、すっげーカッコいいじゃん！！」
そんな事が起きてるとは露程も知らず、中央で決闘を行っている龍亞と十代は、現在敵対関係にあるにも拘らず大いに盛り上がっている。似た者同士なのか、その感性も殆ど同じのようだ。

「でも、まだまだDの力は此処からだよ。目ん玉引ん剥いてよおく見ててよー！！」

「おおっし！ それじゃあその力つてヤツ、楽しみにしてるぜ」

期待通りの十代からの言葉に、龍亞は声を上げて楽しそうに頷く。十代の期待に応えようと、モバホンに向けて手を翳した。

「Dは表示形式によってそのモンスター効果が変わる。今のモバホンは攻撃表示、よってモバホンの攻撃表示の効果が発動。モバホンが攻撃表示の時、1ターンに一度サイコロを振って、出た目の数だけデッキの一番上からカードを捲る。その中にレベル4以下のDがあれば、召喚条件を無視して特殊召喚することが出来るんだ」

「つまり、出た目の数によっては1ターンに2体のDを並べることが出来るということか」

「中々面白い効果だね。生け贄素材を稼いだりすることも出来るし、特殊召喚なら自分が望む表示形式でDを呼び出せる。これでまたモバホンが来れば、下手をすれば一気に3体のDが並ぶ。決して攻守共に強いモンスターじゃないけど、面白いカードであることに間違いないね」

龍亞の説明を耳に挟んだ万丈目と吹雪が、素直に感想と自分なりの考察を述べる。流石はプロ決闘者、と思わず龍可が考えてしまう程だ。

「それじゃ早速効果発動だ、『ダイヤル・オン』」

風車のように腕を回す龍亞。するとサイコロではなく、モバホンの胸のダイヤルキーがランダム順に次々と点滅を開始。

聴て胸右上部、3のキーでダイヤルの光は停止した。

「3が出た。デッキから3枚捲ってと……よし、俺は『D・ボード』を守備表示で特殊召喚だ」

龍亞は捲ったカードの1枚を決闘盤に横向きで設置。フィールド上にはスケートボードが出現した。

【D・ボード 星3/地属性/機械族/ATK 500/DEF 1800】

「おお、今度はスケボーのDだ。守備表示のこいつは、一体どんな

効果を持つてるんだ？」

「聞いて驚かないでよ！ このボードンが表側守備表示の時、他のDは戦闘では破壊されないんだ！」

十代は感嘆の声を思わず吐き出す。このDも変形するかと思うと、十代の心は期待と興奮で躍る。

反面、妹の龍可の心は羞恥でこじんまりと縮こまった。

「カードを2枚伏せて、ターンエンド」

「よっしゃ、俺のターンだ」

自分の時代では決して拝む事が出来ない、未来にしか存在しない未知のカード群。次々に登場する、しかも自分好みの彼等に興奮と感激を覚え、十代の機嫌は既に良い方へ最高潮に達している。

それ等を前に十代は、満足そうな笑みを浮かべてデッキの上を指を置いた。

「俺も行くぜ。ドロー、シャッキーン！」

そのまま龍可と殆ど差異の無いドローを披露。ドロー時に発する掛け声まで同じときたものだ。

「ア、アニキ……何やってんすかぁ」

「あのアカデミアの恥がっ」

「ごめんなさい。龍可の所為で、本当にごめんなさい」

が、仲間達から不評の様子。翔は赤くなつた顔を背け、万丈目は怒りを言葉にして吐き出す。

龍可は改めて彼等に謝罪。先程より数回多く頭を下げた。

「どうだ龍可、こんな感じか？」

「カッコいいっ！ 十代のシャッキーン、バッチシ決まってるよ！」

「そっかぁ？ えへへ」

思わずやつちやつたぜ、と手を頭の後ろに回す十代を龍可は素直に拍手で讃えた。本当に似た者同士なのだ、とそれを見た遊星は感心しつつ頭を抱える。

そして十代は照れながらも、決闘を続行。ドローカードを加えた

手札に手を伸ばし、その内の数枚を手にとった。

「龍亞、悪いけど全力で行くぜ。俺は手札から魔法カード発動、融合」

「うわっ、いきなり融合HERO!?!」

「スパークマンとネクロ・ダークマンを手札融合。『E・HERO
ダーク・ブライトマン』を攻撃表示で融合召喚」

【E・HERO ダーク・ブライトマン 星6 / 闇属性 / 戦士族 /
ATK 2000 / DEF 1000】

現れたのは『E・HERO スパークマン』と酷似した身体を持った闇の融合HERO。

だがその漆黒の身体から醸し出される殺気や闘志は尋常ではない。傷付き罅割れたバイザーからは、敵を射抜くような鋭い目が覗いていた。

「スツゲースツゲー!! 十代の新しい融合HEROだ。色も雰囲気も何だか渋くてカッコいい〜っ!!!」

「だろだろ? 変形もいいけど、E・HEROも同じ位カッコいいだろ?」

今度は龍亞が盛り上がる番だった。十代の場に現れたモンスターに心を奪われ、思わず手札を握り潰してしまいそうになる。

そのまま2人は大声で腹の底から笑い出した。

「ちよつと龍亞、もう少し静かに決闘出来ないの?」

「十代も。貴方ちよつと前よりも煩いわよ、興奮し過ぎ」

その時青筋を立てた龍可が声を荒げた。明日香もそれに便乗して十代に呆れを含ませて文句を告げる。その迫力は隣で立っていた万丈目や翔が飛退く程だ。

「何言ってるんだよ明日香。合体と変形は男のロマンだぞ!」

「そつだ龍可、十代の言う通りだ。これは男のロマンなんだ!」

それでもまるで堪えず、しかも逆に説教するような口調で熱弁す

る十代と龍亞の2人。明日香と龍可は、もはや何を言っても無駄だということを知る。

同時に頭痛が更に酷くなったのを感じ、頭を押さえた。

「遊星、私の目はおかしくなってしまったのかしら？ 私の目ももし正常なら、今あそこには龍亞が2人いるわ。……見間違いかしら？」

「見間違いじゃないさアキ。……多分な」

そしてそんな4人の繰り広げる笑劇の前に、アキは顔に何の感情も込めずにポツリと洩らした。

遊星も彼にしては珍しく曖昧な言葉で彼女の発言を肯定する。：

「2人は揃って後頭部に漫画のような一滴の冷や汗を浮かべていた。おっしやあ、まだまだ行くぜ。更に手札から『E・HERO ワイルドマン』を攻撃表示で召喚」

続けて召喚されたモンスターがダーク・ブライトマンに並ぶ。筋肉隆々の猛々しい戦士。背中に大剣を背負った、文字通り野性的なHEROだ。

【E・HERO ワイルドマン 星4/地属性/戦士族/ATK
1500/DEF 1600】

「バトルだ、ダーク・ブライトマンでボードンを攻撃。『ダークフラッシュ』だ」

高く宙に舞い上がったダーク・ブライトマンの掌から、闇を想わせる紫の雷が発せられる。

それはまるで龍のような形を作り、真っ直ぐボードンへ飛び掛かった。

「永續罫、『D・バインド』！」

だが放たれた雷は、突如龍亞達の前に張り巡らされた十文字の電磁網によって完全に遮断。触れれば感電しそうな鉄壁の防御網が十代の前に立ち塞がった。

「D・バインドは、俺の場にDが存在している時、相手のレベル4以上のモンスターからの攻撃を全て防ぐ。これでレベル6のダーク・ブライトマンは攻撃出来ない！」

「だったらワイルドマンで突破してやるぜ。行けワイルドマン、攻撃表示のモバホンを攻撃だ！！」

続けて剣を構えたワイルドマンが飛び出す。ワイルドマンの身体は電磁網によつて一瞬動きが止まったが、次の瞬間にはその網を切り裂き、一目散に攻撃表示のモバホン目掛けて剣を突き出した。

「成る程。ワイルドマンは罠全てを完全に受け付けない特殊な効果モンスターだ」

「例え、攻撃を防ぐ永続罠を言えど、ワイルドマンなら関係無く攻撃を仕掛けられるという訳か」

遊星とジャックが声を上げている間にも、構えられた剣先はモバホンに着々と迫っていった。

「そうはいくもんか！ 手札から『ガジェット・ドライバー』の効果発動。このカードを墓地に送つて、俺の場のDと名の付くモンスターの表示形式を変更する。俺はモバホンを選択して守備表示に変更！」

次の瞬間、モバホンは再び携帯電話の姿に変形。同時に剣がその黄色い身体に触れる。

「そしてボードンの効果で、モバホンは戦闘では破壊されない！」
攻撃を仕掛けたワイルドマンだったが、その刃はモバホンを切り裂くまでには至らず、仕方なくワイルドマンは十代のフィールドに戻り、剣をその背中に納めた。

そして龍亞は安堵の溜め息を着く。
「やるなあ龍亞、今の攻撃は絶対に決まったと思っただけだなあ。上手くかわされちまったぜ」

笑みを浮かべながら後頭部を掻き、失敗したにも拘らず、十代はバトルフェイズを満足げに終了。残った僅かな手札に手を伸ばし、その中の1枚を選んで、決闘盤に装填した。

「リバーズカードを1枚伏せて、ターンエンドだ。さあ、そっこのターンだぜ」

「よし……俺のターンだ!!!!」

深呼吸で酸素を多く取り入れ、緊張して固くなった身体を解す龍亞。気持ちが幾分か落ち着いたところで、改めて彼はデッキに指を置き、ドローの声と共にカードを引き抜いた……。

そして数分の時が流れる。

緊迫した空気、その中で行われる2人の決闘は、今や総計ターン数10を超えていた。

「あいつ等、結構やるじゃねえか！」

「うむ。十代は兎も角、あの龍亞があそこまで善戦するとは」

これまでのターンを振り返り、ジャックとクロウは素直に2人の健闘を讃えた。今も、彼等の目の前で2人の決闘者が激しくぶつかり合っている。……気楽な顔ではなく、相手の隙を伺う獣の顔で。

「アニキ！ 負けるなドーン！」

「龍亞君も頑張ってる！」

彼等の決闘に目を離せなくなった者は応援の言葉を両手でメガホンを作って叫ぶ。

だが、今戦いを繰り広げている彼等には、その声さえ遠くに感じている。

「俺のターン、ドロー！」

気合いの籠った歯切れの良い一言。真剣な口調で十代と対峙する龍亞がカードを引く。ドローカードは手札に加え、直ぐに状況を分析し、頭を限界まで使って、どう動くかを図る。

既にこれまでのターンに、特に罠を完全に受け付けられないワイルドマンの所為で、龍亞のライフは僅かとはいえ削られてしまっている。その数値現在3400、まだ戦える分のライフは残っているが、龍亞本人はこれでも足りないと感じていた。前に立つ十代の余裕の笑みからも、それは十二分に伺える。

そして場には守備表示のモバホンと、その効果で守備で特殊召喚された全Dの守備力を1000底上げしてくれている『D・ラジオン』。先程召喚に成功した、守備表示の時に対象を取るカード効果からDを完全に守ってくれる『D・キャメラン』の3体。

戦闘耐性を備えるポードンは既に前のターンで十代の『ヒーローブラスト』によって破壊されている。故に今自分の防御網はD・バインドのみ、他に魔法や罫が存在しない龍亞にとって、このカード1枚だけが生命線となっていた。

対し、ワイルドマンはラジオンで消し去った為、十代の場にはダーク・ブライトマンが1体のみ。

更に伏せカードが1枚、そして手札は4枚。龍亞は顔に焦りを浮かべ再び自分の手札に目を落とした。

3枚の内、あるのは2枚の装備カードと1枚は
(もつと壁を厚くしきや)

そう頭で考えるや否や、無意識の内に龍亞は右端にあつた『ディフォーム』のカードを手に取り、決闘盤に素早く装填。

「カードを1枚伏せて、ターンエンド」

「俺のターン、ドロロー」

龍亞からのエンド宣言が告げられて直ぐ、十代がカードを引く。そして引いたカードを確認するや否や、ニツと笑みを浮かべて、ドロローカードを持ったまま、手札のカードに手を伸ばした。

「俺は手札から、スパークマンを攻撃表示で召喚」

【E・HERO スパークマン 星4 / 光属性 / 戦士族 / ATK
1600 / DEF 1400】

決闘盤に設置したカードから颯爽と参上するスパークマン。十代の場に酷似したモンスターが両手を組んだ状態で並ぶ。

「更に手札から魔法カード、『R ライトジャスティス』。このカードは俺の場に存在している表側の『E・HERO』1体に尽き、

魔法または罨カードを破壊する」

得意そうに説明する十代を前に龍亞の顔が青褪める。続けてRのシンボルから二筋の光が飛び出した。

「俺はD・バインドと、もう1枚の伏せカードを破壊する」

発射された光が龍亞の伏せていた2枚のカード全てを包む。カードはまるで火でも点けられたかのように軽く燃え上がり、場から完全消滅。

同時に場を遮断していた電磁網も、まるで最初から存在していなかったかと思わせる程、一瞬で場から消滅を喫する。

更に龍亞の顔が青褪めた。

「や、やべっ!？」

「これで龍亞の防御網は消え去った。行くぜダーク・ブライトマン!」

目障りな境界が消えた途端、今までの鬱憤を晴らすかのようにダーク・ブライトマンが行動を起こした。空を舞い、腕から闇の雷を飛ばしてラジオンを焦がす。

「うわあっ!？」

更に破壊されて粉々となったラジオンの破片が龍亞を襲う。……貫通効果を持つモンスターだと龍亞が気付いたのは、ライフが削られて直ぐのことだった。

そして十代は残ったスパークマン、龍亞の場に存在する、守備のステータスが大幅にダウンした2体の電化製品モンスターにそれぞれ目を移す。

【龍亞 LP3400 3300】

【D・モバホン 星1/地属性/機械族/ATK 100/DEF 1100 100】

【D・カメラン 星2/光属性/機械族/ATK 800/DEF

「更にスパークマンで守備力が下がったカメランを攻撃だ。行けっ、『スパークフラッシュ』だ」

続けてスパークマンも青白い稲妻でカメラに形を変えたカメランを狙う。守備力が下がったカメランは何もすることが出来ずに破壊され、墓地に敢え無く埋葬された。

「ターンエンドだ」

エンドフェイズを迎えたことを確認し、龍亞はデッキの上に指を置く。無意識の内にか、龍亞の指に力が入る。

「……ねえ十代」

だが次の瞬間、龍亞は突然になって指をデッキから外した。呼び掛けられた十代の顔には、そのことも相まってキョトンとした表情が張り付けられる。

何処か間抜けな一言を上げた後、十代は龍亞に何か、と尋ねた。

「俺、こんなに楽しい決闘は初めてだよ」

「な、何だよ。そいつは嬉しい話だけど、何か突然だな」

照れ臭そうに十代は頬を指で搔く。龍亞はそんな彼に対して笑みを浮かべた。

「今まで遊星や龍可達と一緒に決闘してきて、すっげー大きな戦いに巻き込まれて……俺何回か絶対にこの決闘だけは負けたくないっと思ってることがあった。アルカディアムーブメント、ダークシグナール、ルチアーノ。……でも殆ど命懸けの決闘で、全然楽しむ余裕なんてなかった」

「龍亞……」

淡々と語る龍亞に龍可は申し訳ない気持ちと深い後悔を覚えた。龍の痣がある右腕を自ら傷付けるように力強く掴み、唇から誰にも聞こえない位の小さな音を立てた。

「だけど！ この決闘、どういふ訳か今までになかった位、すっげー楽しいんだ。もうさっきから興奮のしっ放しで、身体の震えが止

まらない。それにこの決闘、別に命も世界も何かを失うって訳でもないのに、俺無性に負けたくないんだ！！ 十代、俺この決闘、絶対に負けないからね。全力で十代にぶつかって、勝利をもぎ取ってやる！！」

握り拳を突き出し、強い眼差しと熱い笑顔を向ける龍亞に十代の顔も自然と綻ぶ。

そして十代もまた腕を伸ばし、龍亞の拳に対抗して熱く言葉を発した。

「よおっし！ だったら俺とお前にしか出来ない、最っ高に楽しい決闘をしようぜ。俺もお前に負けないよう、全力でこの決闘に挑む。だから、2人でこの決闘を目一杯楽しもうぜ！！」

龍亞が肯定を首を強く縦に振って示す。刹那、彼は改めてデッキの上に指を置いてカードを引く。十代も決闘盤を前に出して身構えた。

そして彼等2人の言動に周囲の者達には笑みを溢す。

(十代は敢えて厄介な効果を持つてるカメラランから破壊した。お陰で俺の場には特殊召喚効果を持つモバホンが生き残った。上手くいけば、まだこの決闘、俺にも勝機がある)

手札に加わった新たなDモンスター、『D・チャツカン』のカードを手に龍亞はどうすればこの状況を打開できるかを必死に考える。表情も必死さが伝わる険しいものに変わっている。

そして脳裏に浮かぶ自分の持つ最強の龍が浮かび上がった。

「やっぱりこれしかない。モバホンの効果発動、守備表示の場合は出た目の数だけデッキのカードを上から確認出来る。ダイヤル・オン！」

携帯電話と化したモバホンのダイヤルが3を照らす。龍亞は3枚のカードを捲り、それを隈なく確認すると、そのままの順番でデッキに戻す。

十代には少年が何を待っているのかは解らなかったが、希望のカードを見付けることが出来なかったことは理解出来た。

「なら、モバホンを攻撃表示に変更。そして攻撃表示の時のモンスター効果、出た目の数だけカードを捲り、その中にあるDを1体選択して特殊召喚する」

人型に変形したモバホンが、龍亞の希望を乗せてダイヤルを点滅させる。

光は次々にダイヤルを移動し、沢山の視線を浴びながら、遂に5の場所で光を止めた。

「やったあつ、5だ！ ……俺は4枚目の『D・スコープン』を攻撃表示で特殊召喚。来い、スコープン」

望みの目以上の数字が出たことに声を上げて歓喜する龍亞。素早くデッキから対象となったカードが決闘盤から排出され、手に取った龍亞は素早くモンスターゾーンにそれを設置した。

【D・スコープン 星3 / 光属性 / 機械族 / ATK 800 / DEF 1400】

「おつ、こいつ顕微鏡そっくりだな。こいつは顕微鏡のDってことか」

「まだまだ、俺は手札からD・チャツカンを攻撃表示で召喚」

【D・チャツカン 星3 / 炎属性 / 機械族 / ATK 1200 / DEF 600】

更に龍亞の場に召喚されるD。その姿から、ライターのDなのだということを十代は悟る。

モバホンを中心に龍亞の場、十代の目先に3体のDがそれぞれ並んだ。

「これで準備は整った、行くよ十代。これが俺の切り札だ」

「おつ、いよいよ真打登場って訳か」

十代が心を躍らせた次の瞬間、スコープンを中心にモバホンとチ

ヤツカンの3体が宙に舞い上がった。

「レベル3のD・チャツカン、レベル1のD・モバホンにレベル3のD・スコープンをチューニング」

「チュ、チューニング!？」

目を白黒させる十代、絶句する翔達の目の前で、輝く緑の星と化すモバホンとチャツカン。彼等が構成した計4つの星が、スコープンによって美しく纏められる。

「世界の平和を守る為、勇気と力をドッキング!!」

聴てそれは1体の龍と化し、龍亞の場にふわりと降り立った。

「シンクロ召喚! 愛と正義の使者、『パワー・ツール・ドラゴン』」

メタリックな身体、イエローカラーが鮮やかに輝く。赤い眼光で全てを見詰め、両腕のツールで全てを貫く。龍亞の切り札であり、彼のデッキの象徴。パワー・ツール・ドラゴンがその姿を現した。

【パワー・ツール・ドラゴン 星7/地属性/機械族/ATK 2300/DEF 2500】

「シンクロ召喚。僕達が未だ出会ったことがない、未来の召喚技法」
「驚いたわ。融合でも儀式でもない、デュエルモンスターズには、まだこんな新しい可能性があったのね」

当然その未来の召喚方を前にした万丈目達は言葉を失った。未だにどういった手順であるの龍を呼び出したか、その正体さえも全く掴めない。レベルが関連しているということだけは、辛うじて解ったが、それ以外に関しては全く不明だった。

だが、その特殊な召喚方以上に、この後の龍亞のプレイングから起こるであろう未知の展開に、万丈目達は期待の感情を抱く。特に十代はといえば、興奮のあまり身体が火のように火照るのを感じていた。

「これが龍亞の切り札……すげえ。もう一体何が何だか全然解んね

えけど、兎に角すげえよ龍亞！」

十代が砂糖のようにベタベタに褒めるので、龍亞の頬が赤く染まる。

そのまま照れ臭さから頭を軽く摩り、そのまま決闘盤に手を伸ばした。

「パワー・ツール・ドラゴンのモンスター効果発動。1ターンに一度、デッキから装備魔法を3枚選択して、その中からランダムに1枚、手札に加えることが出来るんだ。『パワー・サーチ』！」

龍亞が望んだ3枚が決闘盤にセットされたデッキより、それぞれ排出される。

選択されたのは『巨大化』、『ダブルツールD&Amp;C』、そして『ロケット・パイルダー』の3枚。それ等が龍亞の決闘盤にセットされ、十代の前にリバーズ状態で現れる。

「さあ、選んで十代。俺は十代が選んだカードを手札に加える」

「そういうことか。……よし、なら俺は真ん中のカードを選択するぜ」

十代が指差したカードが龍亞の手札に加えられる。残された2枚はデッキに回収され、自動シャッフルシステムがデッキを公平なく混ぜ切った。

選択されたカードを確認する龍亞。次の瞬間、その顔にははつきりと笑みが浮かんだ。

「俺は手札から装備魔法、ダブルツールD&Amp;Cをパワー・ツール・ドラゴンに対して発動。装備したパワー・ツールの攻撃力を自分のターンのみ1000ポイントアップする」

【パワー・ツール・ドラゴン 星7/地属性/機械族/ATK 2300 DEF 2500】

パワー・ツールの腕のツールが、さも強力そうなドリルに変化。装備魔法で強化された龍は、その赤い瞳に炎のように美しい光を灯

した。

「まだまだ！ この時の為にずっと使うのを我慢してきたんだ。続けて装備魔法、『パワー・ピカクス』。そして更に装備魔法、『ブレイク・ドロー』。これ等全てをパワー・ツールに装備！！」

次々に装備魔法によって、目まぐるしく強化されていくパワー・ツール・ドラゴン。十代が驚いている暇もなく、装備に装備を重ねたパワー・ツールは身体を打ち震わせ、天に向かって大きく咆哮した。

「パワー・ピカクスの効果発動。装備モンスターの1ターンに一度、装備モンスターのレベル以下のモンスターを相手の墓地から除外して、エンドフェイズまで装備モンスターの攻撃力を500アップさせる。パワー・ツールのレベルは7、俺は十代の墓地からレベル5のネクロダークマンを選択して除外する」

【パワー・ツール・ドラゴン 星7/地属性/機械族/ATK 3
300 3800/DEF 2500】

「攻撃力3800って、嘘だろおっ!？」

「パワー・ツールでダーク・ブライトマンを攻撃、『クラフティ・ブレイク』」

一気に攻撃力を増したパワー・ツールが、その腕のドリルでダーク・ブライトマンに攻撃を仕掛けた。

強烈な一撃が黒い身体を易々と貫き、十代のモンスターを粉々に爆散させる。

襲い来る衝撃を前に思わず上げた十代の悲鳴、共に2700と残っていたライフが一気に削り取られ、900と極僅かな数値が十代の決闘盤のカウンターに表示された。

「更にブレイク・ドローの効果。装備モンスターが相手モンスターを戦闘破壊して墓地に送った時、デッキからカードを1枚ドロースする」

「だが、同時にダーク・ブライトマンの効果も発動。このカードが破壊され、墓地に送られた時、相手モンスター1体を選択して破壊することが出来る。俺が対象に選ぶのは、パワー・ツール・ドラゴン！」

パワー・ツールを狙って、破壊されたモンスターの魂が風に乗って襲い掛かる。

だが、パワー・ツールはそれを腕の一振りで掻き消してしまつた。

「なっ!? パワー・ツール・ドラゴンが破壊されない!？」

「パワー・ツールのモンスター効果、装備魔法を墓地に送ることで破壊を免れる。ブレイク・ドローを墓地に送って、ダーク・ブライトマンの破壊効果を無効にする」

臨んだ結果が叶わず、十代が苦しげに舌を打つ。

無事にドローを終えて、手札を1枚補充した龍亞は、そのカードを手にターンを終了。十代の場には、スパークマンと伏せカードだけが残つた。

【パワー・ツール・ドラゴン 星7/地属性/機械族/ATK 3800 DEF 2500】

十代にターン権が移る。ドロー宣言と共に彼はデッキからカードを引いた。

「龍亞はさっきのパワー・ピカクスで十代の墓地からネクロダークマンを除外している。これで十代は墓地で発動する上級E・HEROの簡易召喚を行えなくなった」

「さっきの決闘で、その効果は龍亞にもしっかりバレてるからな。十代の奴にとつても痛手になつた筈だ」

腕を組んだジャック、腰に手を当てたクロウが、それぞれ顔を真っ直ぐ決闘に向けたまま語り合う。

2人は互いの意見を口にしながら、次の十代の一手に意識を集中

させた。

(一体此処から十代はどう逆転する為に動いてくるだろう)

必死に手札と睨めっこする十代を前にして、龍亞がゴクリと生唾を飲み込む。

同時に上手くは言えないが、身体の中を渦巻く寒気のような、且つ熱い何かを感じ取る。よく見れば手札を持つ右手もはつきりと震えている。

だが龍亞に畏怖はこれ微塵も無かった。

寧ろ、此処から十代がどう逆転するか、それを見たいとさえ感じている。手の震えが期待からによるものだと言いたのは、その直ぐ後の話だ。

「さあ十代、此処からどうする！？ フィールドにはアドバンス召喚のリリースするモンスターもないし、墓地で効果を発揮するネクロダークマンも取り除いた。これなら十代自慢のネオスだって、召喚出来ないでしょ！」

「へっ、そいつはどうか。決闘は最後までやってみなきゃ解らないだろう？」

十代の言葉に、「やっぱり」と龍亞が顔に笑みを浮かべる。

彼がまだ勝負を諦めていないことを再確認した龍亞は、此処から起こすであろう十代の奇跡の逆転劇に胸を躍らせながら、彼のプレイングに目を輝かせた。身体の熱も上昇しているらしく、息が異常に荒い。

そして十代は知ってか知らずか、そんな龍亞の期待に応えようと、手札の『E・HERO ネオス』を見ながら、手札から1枚の魔法カードを手を取った。

「俺は手札から魔法カード、『フェイク・ヒーロー』を発動。手札からE・HEROを1体、特殊召喚することが出来る。俺は手札のE・HERO ネオスを攻撃表示で特殊召喚！」

【E・HERO ネオス 星7/光属性/戦士族/ATK 250

飛び出すと同時に颯爽とポーズを決めるネオス。十代の勝利の為、主人の前に着地したネオスは、龍亞のパワー・ツール・ドラゴンと対峙する。

「このタイミングでネオスを呼び出したという!? …… 本当に脅威的だわ」

「だがフェイク・ヒーローで特殊召喚されたモンスターは、殆どデメリットの塊。効果で召喚されたネオスは、このターン攻撃出来ず、しかもエンドフェイズには手札に戻ってしまう」

「でもな遊星、アキ。例えばデメリットの塊でも、融合にはちゃんと使えるんだぜ！」

遊星とアキの会話に、密かに耳を傾けていた十代。手に持ったカードをチラつかせ、彼は通常召喚件を行使し、新たなモンスターを場に召喚した。

「この窮地を逆転に導く俺のヒーロー、『N・グロー・モス』を召喚だ」

全身を淡い緑に発光させ、勇ましく登場したのは、その人型の見た目からは全く想像出来ない植物族のN。何も読み取れないその無表情の顔で、グローモスは戦友のネオスを視認する。

【N・グロー・モス 星3 / 光属性 / 植物族 / ATK 300 / DEF 600】

「ネオスとN達との融合には、『融合』カードは必要ない。ネオス、グロー・モス、コンタクト融合!!」

融合のタイミングを確かめているのか、互いに頷き合って合図を交わすネオスとグロー・モス。空に浮かんだ銀河へ向かって2体が飛び込んだその時、神々しい光のネオスが姿を現す。

「『E・HERO グロー・ネオス』召喚」

【E・HERO グロー・ネオス 星7 / 光属性 / 戦士族 / ATK
2500 / DEF 2000】

グロー・モスの特徴を受け継ぎ、グロー・ネオスの身体が美しく輝く。

「これが、十代の新しいE・HERO。……やっぱりカッコいいっ！！」

新たなヒーローの登場に龍亞の心が騒ぐ。感動のあまり目頭は熱くなった。身体にも余分と思える程の力が籠る。

「だろ！ こいつが俺達の戦いに終止符を打つ、この決闘、俺の最後のHEROだ！」

「でも俺のライフはまだ充分にある。パワー・ツール・ドラゴンにも出来る限りの装備魔法を装備させて強化した。まだ俺の有利に変わらない。俺だって絶対、負けるもんか！」

2人の決闘者が獣のように吠える。手には汗が滲み、快適な気温を保ち続ける筈のタイムシップは、一転して温室のような熱を持った。戦っていない筈の外野でも所々で顎の汗を拭う者が増えてきている。

「なんて熱気なんだ。こつちまで無性に熱くなってきやがったぜ」
「私も。あんな戦いを見せられたら、私まで決闘したくなってきやうわ」

「アニキも龍亞も凄いドン。2人共、誰かをワクワクさせる天才ザウルス！」

クロウ、明日香、剣山の3人が戦意高揚を感じ、その握り拳に力を込める。

ジャックも自分の決闘者としての魂が燃えるのをはつきりと理解。普段は落ち付いている遊星や吹雪でさえ、2人の決闘を前に戦闘欲求を刺激され、無性に決闘に対する飢えを感じ取る。

その近くでは、龍可が祈るような目と仕草で龍亞を見詰めていた。

「行くぜ龍亞っ！！！」

「来い十代っ！！！」

次の瞬間、2人の顔つきがはつきりと変わった。真剣や険しいといった言葉が生易しいと思える程、その目はまるで相手を睨み殺そうとしているように万丈目には考えられた。

そして十代が行動を起こす。手を真っ直ぐに自軍のモンスターへと翳した。

「グロー・ネオスのモンスター効果。1ターンに一度、相手の表側表示のカード1枚を破壊して、そのカードの種類によって異なる効果を得る。俺はパワー・ツール・ドラゴンに装備されたダブルツールD & amp ; Cを選択して、破壊する！！！」

グロー・ネオスの両腕に集まる青白いエネルギー。光輝くそれを球体になるよう丸め込み、パワー・ツールの腕に向けて、勢いよくそれを一気に投げ付けた。

「ぶっ飛べ、ダブルツールD & amp ; C。『シグナルバスターブルー・ライトニング』！！！」

発光体が炸裂し、パワー・ツールの腕から装備が一つ轟音と共に消し飛ぶ。

更に襲い来る立体映像の衝撃が、龍亞の足を後方へと僅かに下がらせた。

「これで厄介な装備魔法は消えたぜ」

「くっ！？ でもまだパワー・ツールにはパワー・ピカクスが装備されている。グロー・ネオスに攻撃されたとしても、パワー・ツールは倒せない」

汗ばんだ手で顔を拭いながら、龍亞が得意そうに叫ぶ。

対し十代は口元を上へ釣り上がらせた。

「へへへ。残念だけど、そうはいかないぜ。効果でグロー・ネオスが魔法カードを破壊した時、このターングロー・ネオスは相手プレイヤーダイレクトアタックに直接攻撃出来るんだ！」

「だ、直接攻撃っ！？ そんなあっ！？」

「一気に畳み掛けさせて貰うぜ、龍亞!!」
脳裏に浮かび上がった、たった二文字の言葉で龍亞の顔が青くなる。

十代の余裕の笑みも相まって、余計にその小さな身体は強張った。しかしそれは決して杞憂などではなく、十代は最後に残っていた伏せカードを表に上げた。

「永続魔法、『魂の共有 コモンソウル』発動。場のモンスター1体を選択して、手札からNを1体特殊召喚する。そして召喚したモンスターの攻撃力分だけ、選択したモンスターの攻撃力をアップさせる」

そう言う十代の目は確実にグロー・ネオスに向けられていた。それが何を意味するのか解らない程、龍亞も馬鹿ではない。逆に清々しいものを感じ取り、龍亞の顔には何処か諦めたような笑みが浮かぶ。

「俺はグロー・ネオスを対象に、手札から『N・ブラック・パンサー』を守備表示で特殊召喚。そしてブラック・パンサーの攻撃力、1000ポイントがグロー・ネオスの攻撃力に加算される」

【N・ブラック・パンサー 星3/闇属性/獣族/ATK 1000/DEF 500】

【E・HERO グロー・ネオス 星7/光属性/戦士族/ATK 2500/DEF 2000】

ブラック・パンサーの周りを覆う紫のオーラが、グロー・ネオスにも分け与えられる。同時にその攻撃力も大幅に上昇。上乘せされた分だけ、グロー・ネオスが召喚した光の槍が巨大化した。

決闘盤のカウンターに目を落とす龍亞。表示されている残りライフの数值は3300。視界に広がっている場には装備魔法とパワー・ツール・ドラゴンのみ。

それを見ていた遊星をはじめとする周囲の者達が十代の勝利を確信する。

龍亞の身体が緩み、微妙に上がっていた肩が降りる。十代はそれに釣られるように笑った。

「楽しかったぜ龍亞。グロー・ネオスで直接攻撃、『ライトニング・ストライク』」

次の瞬間、グロー・ネオスが上空より龍亞に最後の攻撃を仕掛けた。

更に青白く輝かせた精神で創造した槍を用い、パワー・ツールを避けて龍亞の身体を貫く。

【龍亞 LP33000】

一瞬胸に走る痛みにも似た衝撃。表示されていたライフカウンタ―が0を示し、龍亞の敗北を告げた。

そして糸の切れた人形のように龍亞は音を立てて両膝を着き、その場に座り込んで顔を俯かせた。

「る、龍亞……」

まるで燃え尽きたような龍亞を前に、兄を心配した龍可が一步足を前へ踏み出す。

だがそんな彼女の肩を軽く何者かが掴む。……殆ど同じ背丈の翔だ。

万丈目や明日香を後ろに、翔は穏やかな顔で首を横に振る。

無音になった船内に足音が響く。決闘盤を畳んだ十代が、龍亞に少しずつ歩み寄っていく。

涙を堪え、顔を僅かに上げる龍亞。聴て十代は龍亞の前に立ち、刹那大いに声を張り上げた。

「すっげーじゃねえか龍亞、お前のデッキ！ Dにシンクロ召喚、そしてパワー・ツール・ドラゴン。俺こんな楽しい決闘生まれて初めてだ。ガッチャだぜ龍亞！」

「十代……うん、俺もすつごく楽しかった。十代、ガツチャー！」
龍亞は明るく笑うと、十代と全く同じ形を手についた。

その手と彼の顔に浮かんだ笑顔を見て、十代は龍亞の手を取り立ち上がらせる。

握手の体勢から寸座に2人は互いに肩を組み合い、腹の底から大声を出して、馬鹿のように笑い始めた。

「俺、解った気がするぜ。十代がどうしてあんな絶望的な状況でも決闘に勝つことが出来たのか。そして如何してあいつの仲間達があそこまであいつを信じる事が出来るのか」

「考えてみれば実に当たり前のことだったな、クロウ」

ジャックの言葉にクロウが「ああ」と一言だけ返して頷く。

そのままジャックは、とても楽しそうに目の前に戦う赤い服を着た決闘者に目を移して、口を開いた。

「あの遊城十代という決闘者はこの上なくデュエルモンスターを愛している。そんな男が弱い筈がないし、あの程度の窮地で屈する筈もない」

「それを知っているからこそ、あいつ等は心から信じる事が出来る。……遊城十代って決闘者を」

2人の目が、今度は十代の仲間達へ移される。真剣に決闘を楽しむ2人を前にして、心から声援を送る彼等もまた、デュエルモンスターズを愛する者達だと2人は直ぐに気付いた。

「……俺は忘れていたのかもしれない」

「遊星」

同じ頃、遊星もまた2人と同じようなことを考えていた。

頭に浮かんだ言葉は遊星の口を通して、小さな声となって近くで並んで観戦していたアキに届く。

アキは野暮だと感じながらも、「何が」と返し、自分より背丈が高い遊星の顔を見上げる。目に入った遊星の笑顔は、これまで幾つもの死線を潜り抜けてきたとは到底思えない程、とても穏やかだった。

「デュエルモンスターズで最も大切なのは、決闘自体を楽しむ純粹な気持ち。此処のところ、ずっと命や世界を懸けた決闘ばかりで、俺達は決闘を楽しむという気持ちを忘れていた気がする」

「でも、龍亞だけは私達より早くそれに気付いた」

遊星が、アキと共に眼前の龍亞へ目を移す。龍亞はまだ楽しそうに十代とはしゃいでいる。

「龍亞は何時だって楽しそうに決闘をするから。だからかな、龍亞と決闘する人は、皆とても楽しそうに笑っているの。……勝敗はどうであれね」

「アニキも同じですよ。勝ち負けより先ずは楽しむ。アニキと龍亞君はホントに気が合いそうっすね」

言いながら翔が微笑む。龍可も「そうですね」、と小さくクスリと吹き出した。

「今回は龍亞と十代さんに教えられたな」

そしてそこへ遊星達もやって来る。彼等は合流し、温かい眼差しでそれぞれ笑い合う。

笑みを溢さずにはいられなかった。

「まあ、楽しむのは勝手だ。それは別に構いやしねえ。……だがな

」

しかし、そこに水を差す者が現れる。龍可が振り向けば、そこにはクロウが物凄く呆れ果てた顔をして顔を引き攣らせている。付近では壁に腕を組んで寄り掛かった万丈目も軽く息を吐いて頭垂れる。

「あいつ等、幾らなんでもちよつと騒ぎ過ぎだろ」

「……それには同感」

周囲に居た全員の意思と言葉が初めて重なった瞬間だった。

まるでプロの合唱団の如く、声が完全調和を果たす。

頭を抱える者。溜め息を着く者。目を反らす者。反応の仕方は様々だったが、顔は全員呆れの表情を浮かべている。遊星でさえ眉間に皺を寄せていた。

「HERO最っ高おっ!!」

「Dサイコーッ!」

「やっぱり決闘はサイコーッだあああああっ!」

龍可が最後に大きな溜め息をつく。

こうして1時間という時は何の障害に出くわすこともなく、安全に流れていった。

T U R N - 2 3 ヒーロー・キッズ（後書き）

今回の最強カード

【E・HERO グロー・ネオス 星7 / 光属性 / 戦士族 / ATK
2500 / DEF 2000】

『E・HERO ネオス』+『N・グロー・モス』

自分フィールド上に存在する上記のカードをデッキに戻した場合のみエクストラデッキから特殊召喚が可能（「融合」魔法カードは必要としない）。

エンドフェイズ時にこのカードはデッキに戻る。

相手フィールド上に表側表示で存在するカード1枚を破壊し、そのカードの種類によりこのカードは以下の効果を得る。

この効果は1ターンに1度だけ、自分のメインフェイズ1に使用することができる。

モンスターカード：このターン、このカードは攻撃出来ない。

魔法カード：このカードは相手プレイヤーに直接攻撃すること
ができる。

罠カード：このカードは守備表示になる。』

その名の通り、『E・HERO ネオス』と『N・グローモス』
による融合体。それがこのカードである。

だが、結果的にステータスに変化はなく、ネオスにモンスター効
果が加えられた位しか大きな変化はない。寧ろ状況によってはデメ
リット効果になってしまつので、ネオスとの使い分けが必要になつ
てくるかもしれない。

だが、それでも1ターンに一度の破壊効果は魅力的。特にこのカ
ードは『光の護封剣』や『平和の使者』等を使用するロックデッキ

に対してかなりの戦力として活躍するだろう。勿論魔法に限らず罨やモンスターも破壊出来るのはかなり優秀。因みにモンスタートーカーを破壊した場合はモンスターを破壊した扱いとならず、デメリットを持たずに攻撃を仕掛けられる。その反面、宝玉獣といった永続魔法扱いのモンスターを破壊しても、魔法としてみなされず、モンスターとしてみなされてしまうカードも存在するので、破壊するカードはよく選んでから破壊したい。

『コンタクト・アウト』とは相性がよく、一度に2枚のカードを破壊出来ることもある。無論、モンスターを破壊して融合を解除し、再び融合して攻撃を仕掛けるといったパターンも取れるので、このカードを投入するネオスデッキなら、1枚位は採用しよう。

だが、やはり他のコンタクト融合体と同じくエンドフェイズに戻ってしまうデメリットが痛い。『ネオスペース』や『インスタント・ネオスペース』などのカードで補助をしない限り、これ等を長時間場に留めておくのは不可能だろう。

……それが光の戦士の宿命だからだろうか？ 因みに公式大会において、基本プレイヤーに与えられている1ターンは3分までとのことらしい。

アニメでは遊城十代が使用。デュエル理論の教授、ツバインシュタインとの決闘で初登場し、フィニッシャーとなった。この時、ツバインシュタインは融合には融合カードと素材モンスター、計3枚程のカードが必要と踏んで、『融合禁止エリア』をデッキに戻してしまうが、このカードの召喚には融合が要らないという予想外の出来事を前に敗北してしまった。この時はオリジナルカード、『相対性フィールド』というフィールド魔法を破壊している。効果名は『シグナルバスター』、攻撃名は『ライトニング・ストライク』。後者は実は『D・HERO ダッシュユガイ』と同じ攻撃名である。

後にも斎王戦でも登場。この時もやはりフィールド魔法の破壊に一躍買っている。しかし効果名はどういう訳か『シグナルバスターブルー・ライトニング』となっていた。この時の十代の声はかな

り気合が入っていてかなりカッコイイ。是非一度視聴して欲しい。

因みに正確に言えばコンタクト融合というルールは厳密には存在しない。十代が勝手に言っているだけである。カードテキストにはそういった記述は無く、単に戻した場合のみエクストラデッキから特殊召喚が可能と書かれている。

そもそもネオス達と同じようにデッキに戻って融合というカードは他にも在り、それが泣く子も黙る『剣闘獣』だということは言うまでもない。寧ろこっちの方が公式大会ではメジャー。

ゲームでは『ミラクル・コンタクト』というオリジナルカードが登場しており、ゲーム内にてコンタクト融合を主軸とするデッキは、墓地からも融合化可能となり、かなり高レベルで強力なデッキと化している。

この小説、常識を持つ者はいるのにギャグキャラと化さない奴が1人もいないという謎の不思議。そもそも遊戯王は真面目方面、GXは確かにギャグ路線からのスタートであったが、5D・sは最初っからシリアス方面だった。

……なのに、何だこれは？

ジャックと龍亞は解る。そもそも本編でもナイスなギャグをかましているくれた彼等が、今更どんなギャグしようと別に皆様にとっても違和感を与える程ではないと思われる。クロウは良きツツコミとして、ギャグが混じるのも仕方ないだろう。

だが、一方主役であるうちの不動遊星。ぶっちぎりぎりのシリアス野郎、クールに決めるぜの遊星には何時の間にかクールだけど若干天然キャラという称号が。もはや、『……そうだな』と『カニパシ』は彼のイメージをぶち壊してしまっている。

アキは遊星が絡んだ時のほっちゃけ振りが凄まじい。想像しただけで私自身が爆笑してしまった程。遊星の為なら泥棒だろうとホントにやっつてしまえそう。正にデレデレならぬデレンデレンだ。

唯一の非ギャグ要員として頑張ってきた龍可。大人しく、大人びている彼女も最近兄の龍亞に付き合わされてギャグ泣き、ギャグ謝罪を繰り返す始末。これはもうどうにも止まらない気がします。

童実野町。

数多くの決闘者達デュエリストが、歴史に残る戦いを繰り広げた舞台として名が馳せた街。特に幾つもの名勝負を繰り広げた伝説の大会、決闘都バトルシ市としての名は未来に於いても有名だ。

「此処ここが決闘王と謳われた遊戯さんの生まれ育った街、童実野町」
そしてそんな栄光ある街に足を踏み入れた遊城十代の第一声がそれだった。両目を興奮と歓喜に輝かせ、通行人も多い童実野商店街のど真ん中で、十代は汗ばんだ拳を握り締めて唸る。

彼の後ろで万丈目と明日香が、あからさまに呆れを含ませて深い溜め息をついた。

現在、彼等はタイムシップを空き倉庫が多い童実野埠頭に隠し、パラドックスが襲撃すると予測されている童実野時計台前広場に向けて足を運んでいる途中だ。

パーティメンバーは、5D・S勢からブルーノを除く全員。GXチームはレイ、吹雪を留守番兼情報収拾役として船に残して全員が下船している。

「この時代で間違いないのだろうか。遊星。本当にこの時代にパラドックスに繋がる手掛かりがあるのか」
訝いぶかるジャックに対し、遊星は万丈目が持っていたパソコンを広げた。

既に液晶画面には歪められた時代が引き起こした悲劇の記事が映し出されている。

伝説の決闘王デュエルキング、武藤遊戯が事故により大勢の決闘者と共に亡くなったという内容だ。

「ああ、確かにこの時代だ。今日この日、童実野時計台前で行われている大会に奴が介入する筈だ」

「それで遊星君。そのパラドックスがやって来る時間は何時なんすか」

翔に尋ねられ、記憶を辿る遊星。一度全てに目を通しただけはあつて、答えは直ぐに見付けられた。

「時間は、確か午後1時丁度だった筈です」

「ということは、今は12時43分だから17分後にはパラドックスが会場に現れるわ」

1時という言葉に真つ先に反応したのはアキだ。腕時計に目を映し、現在の時刻を遊星に伝える。

遊星が肯定のつもりで頷くと、アキは嬉しそうに彼に向かって微笑んだ。

「何だつてえっ!? 　　つてことはやべえじゃん!」

その時だ。先頭を軽快な足取りで進んでいた十代が、突然血相を変えて大声で叫んだ。

一体何事かと目を丸くする遊星達。

すると十代はその場で足踏みを始め、まるで我が儘を言う子供のよう^にに叫んだ。

「それつてつまり、急がなきゃ大会が滅茶苦茶にされて終わっちゃうってことだろ!? 　　だつたらやっぱりやべえじゃん、急いで広場に行かなきゃ折角せっかくの決闘デュエルが見られなくなっちゃう!」

言つと十代は周囲の目も気にせず声を張り上げ、他の者を置き去りに目的地へ向かつて走り出した。

向けられる背中、背負われたリュックからは猫のファラオが呑気に首から上を覗かせている。

『まったく、相変わらず決闘に目がないな十代は。……少し妬いちやうよ』

『あらら、待つて欲しいのにや。私を置いていかないで欲しいのにや』

唯一付いていくことが出来たのは十代と付き合いが長いユベルと大徳寺だけ。精霊体であることを活かし、彼等はふわふわと浮遊の状態で身体を前へ進ませる。

啞然とした表情で取り残される遊星達。万丈目が顔に手を当てた音でさえ、彼等には大きな音として捉えられた。

万丈目はそのまま言葉を発する。

「あの馬鹿、本来の目的を忘れてるんじゃないだろうな」

「まさか、流石さすがに十代だってそんなことは」

「いや、アニキなら充分有り得るっす」

続けて明日香、翔の2人も溜め息をつきながら、その十代が同期だという事実に関を赤く染める。

遊星達も眉をへの字に傾け、やれやれと首を横に振った。

「でも、同じような馬鹿が私の隣にも約一名……」

悲嘆に暮れる声、発したのは龍可だ。少しずれた桃色の袖口から伸ばされた白い手、小さな人差し指が真っ直ぐに伸ばされている。

「俺も見たい。待ってよ十代、ずるいよお、俺だっけ行くよお
っ！」

刹那、幼い子供のように両腕を振り回し、十代の後を追って龍可が走り出す。直ぐに彼の後ろ姿は先に走った者と同じく、足を前へ動かすごとに小さくなり、臆やがて見えなくなった。

「どうやら十代と龍可の脳内構造は全く同じみたいだな」

「早い話が、2人共とことん熱血の決闘馬鹿って訳ね」

「……俺はもう頭が痛い」

顔を引き攣らせ、頭を掻き毟るクロウ。腕を組んだ明日香も首を下に傾ける。

ジャックに至っては、呆れ切って言葉以外の反応をまるで示さなかった。

「ごめんなさい、私の兄が生粋のドが付く程の超大馬鹿でごめんなさい」

「大丈夫っすよ龍可ちゃん。龍可君はアニキと比べると幾分マシっ

すから」

「っていつか、寧ろそこまで言われる龍亞が逆に不憫だドン」

付近ではネガティブ方面に急転直下で突入し、暗くどんよりと落ち込み始めた龍可を十代の舎弟である翔と剣山が宥めている。見ていたアキは思わずハンカチを貸し渡ししたくなつた。

「だが、2人の行動もあながち間違いという訳ではない」

その時、遊星が突然一石を投じる発言を口から溢した。

予想外だつた為か、全員の「えっ」という言葉が重なり同時に、遊星は全員の視線を身に浴びる。

遊星はまるで動じることなく言葉を繋げた。

「ほぼ間違はなくパラドックスは広場に現れる。なら俺達が先回りして待ち伏せすれば、奴を捕えてカードを奪い返すことも可能になるかもしれない」

「あっ」と声を発する一同。呆気に取られた表情は傍から見ると滑稽でならない。

遊星はそんな彼等を他所（そと）にパソコンの電源を落として折り畳んだ。「兎（と）に角（かく）、急いで2人の後を追い掛けよう。どっちみち俺達に無駄に油を売ってる暇はないんだ」

畳んだパソコンを脇に抱え、静かに走り出す遊星。

他の者達も互いに互いの様子を伺うと、遊星の後を追って十代達に追い付こうと一斉に駆け出した。

一方、童実野町の中央に位置する時計台広場。今此処は平日だと言つても拘らず、普段以上にとても賑わっていた。

集まつた大勢の少年少女達。互いに向き合い、鬪志を剥き出しにして互いの僕（しも）をぶつけ合う。中には大人の姿も見受けられた。勤務中のサラリーマンでさえ、仕事を忘れて彼等の激しい戦いに釘付けになつている程だ。

「『大天使ゼラート』でプレイヤーに直接攻撃、最強の天使の放つ『聖なる波動』を受けてみる」

「だったら俺は罠を発動、相手モンスターを破壊する『リアクティブアーマー炸裂装甲』だ」

「甘い、カウンター罠発動。伏せていた『トラップ・ジャマー』で罠を無効にする」

理由は簡単、デュエルモンスターズだ。

老若男女と多くの人達から支持を受けていた全国的人気カードゲーム。つい数ヶ月前に行われた大きな大会、決闘都市によって、その熱狂振りは最高潮に達し、今もこうして頻繁に大会が行われている程だ。

特に現在行われている大会は、かの有名な二大アミューズメント企業による共同作業。海馬コーポレーションとインダストリアル・イリユージョン社という、両社揃ってデュエルモンスターズと大きく関わりを持った国際的な巨大企業によるものだから、参加する決闘者もそれは多かった。

勿論、中には名が少しは知れ渡った決闘者の姿も。

「行くぜ、『人造人間・サイコ・ショッカー』で『マジック・キャンセル』を攻撃。『サイバー電腦エナジーショック』！」

派手な金色の頭髮、青い上着の下から白いシャツを覗かせた高校生くらいの青年が叫ぶ。

指示を受けた人造人間モンスターは両手の間に禍々しい暗黒の球体を構成し、敵の場に浮遊する人工衛星のような機械族モンスターへと投げ付けた。

爆発を起こし、木っ端微塵に吹き飛ぶマジック・キャンセル。

青年と対峙していた少年のライフカウンターが、600から一気に0へ変わる。

『Aブロック準々決勝。勝者、城之内克也』

「いよっしゃあああっ！！ 優勝まで後一步だぜ」

大会審査員の高らかな宣言に城之内と呼ばれた青年は、文字通り

高く飛び上がって勝利を喜んだ。

「やったね、城之内君」

「結構やるじゃねえか、城之内」

「けっ、決闘者王国で準優勝^{デュエリスト・キングダム}。決闘都市でベスト4入賞。そして伝説の龍、『ヘルモス』に選ばれたこの城之内克也様がベスト4なんかで負けちまう訳ないだろっ!？」

そこへ駆け足でやって来る2人の男性。1人は、まるで海星の^{ヒトデ}ような、奇抜な髪形をした低身長少年。もう1人は角狩りの青年、城之内と背丈は殆ど同じだ。

2人を前に、城之内は照れ臭そうに鼻の下を指で拭う。

「でも、ホントに良かったわね城之内。これでベスト4進出よ」

「まあな。これで遊戯との勝負にまた一歩近づいたぜ」

続いてバンダナを巻いた老人を引き連れた、城之内達と同年代と思われる女性が歩み寄ってくる。

女性を見て、少年は杏子と呼び、老人を軽くじーちゃんと言った。「まさか城之内が準決勝まで行くとはのう。これは遊戯もうかうかしておられんぞ」

「うん！ 城之内君、絶対に決勝で戦おうね。僕、待ってるよ」

「勿論だぜ遊戯。決闘都市で叶わなかったお前との戦い、この大会で必ず実現させてみせるからな」

海星頭の少年、現決闘王であり無二の親友である武藤遊戯と握手を交わす城之内。

遊戯の祖父、武藤双六も腕を組みながら感慨深そうに相槌を数度打った。

「でもま、城之内は詰めが甘いからな。次の準決勝で敗退すると俺はみたな」

「煩えっ！ 決闘^{デュエル}のデの字も知らないこのド素人がっ！」

聞き捨てならないぞ、と悪友の本田ヒロトと取っ組み合いを始める城之内。本日もド素人という言葉に噛み付き、城之内からの喧嘩を進んで受けた。

互いに頬を指で摘まみ、頭髪を握り締め、相手の足を踏み合う。思わず溜め息をつきたくなるような下らない喧嘩が広場にて始まった。

小さな争いに遊戯と杏子は迷わずに溜め息をついた。双六などは「城之内の真の決闘者への道のりはまだまだ遠いのう」と小言を漏らす。

「ハロー、遊戯ボーイ」

その時、遊戯は何者かに呼び掛けられた。英語を混じえた少し高めの男性の声、遊戯は直ぐに背後を振り返る。

立っていたのは赤い衣服で身を包んだ、城之内以上に長身の男性。肩辺りまで伸ばされた前後に長い頭髪が、彼の左目を覆い隠している。……遊戯達は男性の名前を知っていた。

「ペガサス！」

「皆さんお久し振りデース」

再会を祝い、握手を求めるペガサス。差し出された右手を代表して遊戯が握る。

ペガサスは嬉しそうに口元を緩ませると、次に城之内に視線を移した。

「城之内ボーイ、先程の決闘はとても素晴らしかったデース。決闘者王国の時と比べて、遙かにプレイングが上達してマース。これは決勝でシードとして控える遊戯ボーイと相まみえるのがとても楽しみデース」

「へへ、やつぱさそうかあ？ ……聞いたかよ本田。これで解つたら、俺の決闘者としてのレベルがどんだけ高いのかがよ」

緩ませた口から白い歯を覗かせ、本田に肘を寄せて、敢えて全員に聞こえるように皮肉る城之内。

本田は面白くさなそうに目を細めて舌を打った。

「でもペガサス、貴方どうして此処に？ 海馬君達と一緒に海馬コーポレーションで観戦していたんじゃないの？」

「Oh、とても良い質問デース杏子ガール。実は先程まで海馬ボー

イ達と一緒に大会を観戦していたのデスクが、あまりに素晴らしい決闘を前にして、居ても立ってもいられなくなってしまったのデース」

「ホツホツホ、解るぞいその気持ち。わしもそれで無理言っつて遊戯に連れて来て貰ったからのう」

「まっただよ。じーちゃん重くて、ホントに大変だったんだからね」

肩を落とし、口内に溢れんばかりの空気を貯め込み、怒りを表現する遊戯。

申し訳なさそうに頭を指で掻く双六に、遊戯を含めて他の者達は腹を抱えて大声で笑った……。

顔を隠す黒と白の仮面。遊星達が探し求めている男、パラドックスは童実野時計台広場付近に建つ最長のビル、その屋上に立っていた。高いだけあって荒々しく吹き抜ける風が、髪を無理に靡かせる。パラドックスは広場を見下ろし、両の眼に蟻のように群がる人々を映した。

「力のみを求める哀れな決闘者。滅びの道を辿るとも知らずに」
言つとパラドックスは懐から一枚のカードを手に取る。

「一足先に滅びへと向かうがいい 愚かな決闘者達よ」

それは正に突然の出来事だった。

街全体を影が包み込む。人の顔は薄暗くなり、ただでさえ暗い紺色の地面は更に深い黒に染まる。

何事か、と顔を空へ上げる者達。晴天だった筈の空を見上げ、原因となる物体を彼等は見付けた。

そして一瞬にして目を奪われた。

「ほっほう、最近の立体映像ソリッドビジョンは進んだものう。まるで本物を見とる

ようじや」

双六の言う通りだ。誰もが上空に浮かぶ物体を圧巻だと感じ、感嘆の言葉を漏らした。

空を泳ぐように舞う1体の巨大な龍。赤黒い身体に頭部の独特の曲線を描いた角。容姿は悪魔にも見えることから、悪魔龍の名が相応しいだろう。

杏子は思わず今日の予定表が書かれた冊子を手の中で広げた。

「すっごくいい、これってイベントかしら？ 予定表には書いてなかったけど」

「へえ、海馬も結構粋なことすんじゃない」

城之内は気楽に言うが、ペガサスと遊戯は少々しかめっ面だ。特に遊戯はペガサス以上に険しい表情だった。

「でもよお、海馬と言えば普通は青眼ブルーフェイスだろ？ 何か海馬らしくねえぞ」

「うん、僕もそう思う」

本田の言葉に遊戯が頷くと、ペガサスもまた深刻な顔つきで同意した。

「海馬ボーイと予定していた今日の大会にあのようなイベントはありませんデシタ。それにあんなドラゴンを私は見たことがありません。あんななモンスターを手掛けた覚えは、私にはありません」

その時だ。空を飛び回っていた龍の翼がビルの外壁を掠めた。

ビルが僅かに揺れる。同時に遊戯の頭に小石と共に細かな砂のような物が振り落ちてきた。

広場に居た者達が徐々に騒ぎ始める。

「あれは立体映像なんかじゃないよ 本物だ！！！」

遊戯が叫んだ次の瞬間、龍は口から悪魔の如く業火の弾を吐き出した。

火球を浴び、瓦礫と化して崩れ落ちるビル。コンクリートの破片が広場に雨のように降り注ぐ。

一瞬にして騒々しくなる広場。その場に居た者達は、皆悲鳴を上げてそれぞれ避難を開始する。

濛々と立ち昇る、焦げた匂いを醸す赤茶色の煙。身体を包まれながらも、悪魔龍は煙をもともせず周囲の物を破壊し続けた。

「一体、何が起きているんだ!？」

「遊戯急げ、こっちだ!」

城之内に手を引かれながら、遊戯も避難を始めた。先頭を走る本田、杏子やペガサス達と共に広場から離れようと足を動かす。城之内と繋いだ手とは別の手に双六の手を握りながら。

しかし避難をしている間も遊戯は空の龍を見詰め続けた。目を離すといけない気がしたからだ。

その内、遊戯達は人混みに突入した。

「こりゃ抜け出すのに一苦労だぜ。遊戯、絶対手を離すんじゃないぞ!？」

「Oh、Berry painful.とても苦しいデース」

「やだ、今誰かにお尻触られたあ!？」

「んなこと言ってる場合かよ杏子。さっさと逃げねえと瓦礫の下敷きになっちまうんだぞ」

まるで通勤ラッシュ時の満員電車のように。遊戯達は身体を引っ張られる痛みにも表情を曇らせる。

「じーちゃん、しっかり! 絶対に僕の手を離さないで……っ」

「うう……年寄りにこれは酷じゃわい」

特に小柄の遊戯と双六は大変であった。既に2人の腕は限界まで伸び切っている。

それでも尚、反発する磁石のように離れようとする2人の手。遊

戯は力を振り絞り、顔に脂汗を浮かべながら双六の手を更に強く握り締めた。

「あっ!?!」

だが不幸は次の瞬間に訪れた。電車が急停車するように人混み全体に強い衝撃が走ったのだ。

悪いことに絡んでいた2人の手もするりと外れてしまった。

「じ、じーちゃんっ!?!」

「遊戯い」

人の波に攫さらわれ、徐々に遊戯達から孤立していく双六。互いに手を精一杯伸ばすが、2人の手が再び結ばれることはなく、双六は無数の人の大群の中に消えていった……。

「遊戯、暴れるんじゃねえっ! 手が外れちまうっ!?!」

「だってじーちゃんが　　じーちゃんがあっ!?!?!」

人混みの流れを逆らおうとする遊戯を、城之内は離すまいと背一杯引つ張る。遊戯が悲痛な声で双六の名を呼ぶ度、城之内は心に針を刺されたような気分になった。

火災は酷くなる一方だ。巨大な塊が地面を抉る音も徐々に大きくなっていく。目を移さずとも、悲惨な光景を浮かび上がらせるのが容易な程だ。

先頭を走る本田は、被害が少ない道を選んで避難しようとするが、人混みが邪魔で上手く前に進めない。思うようにいかない現状は本田に焦燥を植え付けた。

「ちくしょう、このままじゃ埒が」

「本田、上っ!?!」

杏子の声に反応した本田が顔を上げる　　瓦礫だ。

目に映るは巨大な瓦礫。数多くのそれ等が自分達を押し潰そうと降り掛かってくる。やばい、と考える暇も与えず、瓦礫は遊戯達の視界を支配した。

「うわああああああああっ!?!?!」

もう駄目だ、遊戯は素直に感情に従って悲鳴を上げる。同時

に瞼を強く閉じ、目前も真っ暗になった。

「ネオス!!」

遊戯は不思議に思った。瓦礫に潰された筈なのに痛みがまるで無い。

「い、一体何が」

瞼を開けると、先ず怪我一つ負っていない自分の身体が映った。続いて、同じく頭を抱えて固く目を瞑る杏子や本田達。城之内など余程怖かったのか、しゃがみ込んで身体を震わせている。

「遊戯ボーイ、これは一体どういうことでシヨウ?」

「えっ これはっ!?!」

顔を上げた遊戯は驚いた。彼の声に反応し、杏子達も恐る恐る目を開く。

そこにあつたのは、自らの身を呈して瓦礫から救ってくれた白い戦士の姿。筋肉が隆起しているその2本の剛腕が、しっかりとコンクリートを受け止めていたのだ。

空で暴れる悪魔龍。突然引き起こされた悲劇。もはや遊戯達には一体何が起こっているのか、まるで見当もつかなかった……。

TURN - 24 悲劇の引き金(後書き)

今回の最強カード

【人造人間 サイコ・シヨッカー 星6 / 闇属性 / 機械族 / ATK
2400 / DEF 1500】

『このカードがフィールド上で表側表示で存在する限り、お互いに罠カードを発動する事はできず、フィールド上の罠カードの効果は無効化される』

初期から登場している機械族モンスター。罠無効化という強力に加え、リリース1体で打点2400。扱い易い闇属性であること。リクルートモンスターの打点1400を上回る守備力1500。その扱い易さから登場した際は皆が揃ってデッキに投入し、登場するや否やフィールドを支配する活躍を見せた。有名なサーチモンスター、『黒き森のウィッチ』が禁止になったのは、こいつの所為だとも言われている。

だが後々に機械族の代名詞とも言える『サイバー・ドラゴン』が登場。その後もこのカードを更に上回るパワーカードが登場し、サイコ・シヨッカーが撃退される光景も珍しくなくなってくる。その結果、禁止カードから現在は通常の3枚積みが可能になるまで落ちてきている。だがそれでも、召喚されると非常に鬱陶しいことには変わりない。現在も充分前線で通用するだろう。

罠を無効化してしまうので、『落とし穴』系統のカードや『炸裂装甲』などの攻撃反応型も無意味と化す。このカードに通用する罠は、召喚無効化系統のカウンター罠か、既に発動させた『スキルドレイン』くらいである。逆にそれを活かし、『リビングデッドの呼び声』などで蘇生した場合、効果が無効化され、完全蘇生になる。

……『ハリケーン』が欲しいなあホント。

因みに殆ど同じ効果を持つ永続罨、『王宮のお触れ』とは微妙に効果が異なっている。サイコ・シヨツカーに対し、こちらは発動が可能。それを活かし、『サンダー・ブレイク』等のコストを活かし、墓地を肥やす。『裁きを下す者 ボルテニス』の効果を発動条件を満たせたり、とこちらの方が穴が多い。『サイクロン』などで破壊され易いということもあるが、やはりどちらを投入するかはデッキ内容次第だろう。因みに私はお触れを投入している。

アニメではエスパー紹場が初使用。以降は城之内の切り札の1枚として活躍している。『真紅眼の黒竜』がデッキに入ってたなかったこともあってか、このカードの登場数は城之内が手に入れた他のレアカード達より遥かに多い。

モンスター効果も変更があり、罨を無効化ではなく、裏表問わずに破壊出来るという効果になっていた。故にか、原作ではレベル7に設定。アニメではそのまま6としての登場だった。

GXでも何度が登場。どうやらあの世界ではサイコ・シヨツカーを主軸とした流派、サイコ流というものが存在しており、サイバー流と争っている。だが、OCG的に考えると『キメラテック・フォートレス・ドラゴン』に吸収されてしまうので、こちらの方が劣勢になるだろうことが予想できる。

TURN - 25 グレート・スピリット（前書き）

最近、オリカの登場に悩むトマトです。オリカと言っても、アニメに登場する既存オリカのことなんですが……効果をどう変更しようかなど。

早い話が、いずれはオリカも登場することになるでしょうという予告報告です。対象は主に宝札系の手札増強カード。そして種類が少なく、原作と徹底的に異なるSin系のカードです。あのままでは内のパラ様にSinを使わせると、完全にスキドレに頼ったゴリ押しデッキになりそうなので……。

遊戯は目を見開いて絶句した。今まで色々と科学では説明できない摩訶不思議な出来事に出くわしてきた彼だが、今回の驚愕は一際大きかった。仲間達も驚きを隠せないらしく、間抜けそうに口が開き放しになっている。

「こ、これは一体……？」

遊戯の口から掠れた声が呼吸のように漏れる。それも当然といえば当然だろう。自分はいよいよ先程、人生の終焉を迎える筈が、まさかの出来事を前に命を救われることとなったのだから……。

突如として、決闘大会を襲った悲劇。上空に出現した謎の赤黒い悪魔のような龍によって、大会会場周辺は災害規模の被害を負った。遊戯や城之内達も丁度会場に居合わせていたのだ。

炎上し、大混乱する会場。赤黒い煙で視界が不安定ながらも逃げ惑う参加者及び観客。その中で不運にも遊戯は人の波に揉まれ、祖父である双六と逸れてしまう結果となる。祖父に伸ばした手は空を切ってしまう感覚は未だに鮮明に覚えている。

そして避難しようとしていた遊戯達の上空から瓦礫が雨のように降り注いだ。正直、遊戯はそこで人生を諦めた。だが、瓦礫が遊戯達の頭蓋骨を砕くことはなかった。彼等は救われたのだ。

謎の白い人型のモンスターの手によって。

遊戯達を守るように、彼等の眼前に立つ白い謎のモンスター。彼の両の剛腕によって重い瓦礫の落下は食い止められ、遊戯達は命を取り留めた。モンスターは今でも重なり続け、重量を増していく瓦礫を踏ん張って支えてくれている。

「ぼ、僕達を庇って　君は一体？」

「行けっ！！　フレイム・ウィングマン！　プラズマヴァイスマン

！ マッドボールマン！ ネクロイド・シャーマン！」

そして次の瞬間だ。男性の声がしたかと思うと、新たに4つの影が何処いすこから飛び出し、降り掛かる瓦礫を次々に粉碎し始めたのだ。緑の身体、純白の比翼で空を舞う戦士は、赤い龍の右腕で岩の雨に向けて火炎を吐き出す。青い肉体に金色の鉄の鎧を纏う闘士は、青白い稲妻を操って建物の破片を打ち砕く。

全体的に球体を想わせる体付きをした戦士も、その特性を活かし、正攻法の肉弾技で人々を守る。赤い長髪に歌舞伎のような隈取りを入れた顔面、野性的な肉体を誇る4番目の勇士は、繰り出す棒術を活かして瓦礫が人々に降り掛かるのを決して許さなかった。

有無言わず人々を守る、人であらざる異形の者達。もはや遊戯達には訳が解らなかった。

「い、一体何なんだよこいつ等。全部デュエルモンスターズみたいだが、つゝか実体化してるし!？」

「デスガ、私はこんなモンスター達をクリエイイト、作った覚えはありませーん」

城之内とペガサスが瓦礫の下という非常識な状況下で頭を捻る。

だが、当の製作者本人ペガサスが記憶にないというのだから、答えが出る筈もない。彼等は少々無駄な時間をモンスターが支える瓦礫の下で過ごした。

「で、でも敵じゃないってことは確かだよ。だって彼等は僕等を助けてくれたんだから、有難う！」

屈んだ体制のまま、自分達を真っ先に助けてくれた白いモンスターに謝礼する遊戯。同時に遊戯はモンスターが何かを必死に伝えようとしていることに気付いた。

モンスターは言っている、「早く此処こゝから離れるのだ」と。美しい黄色に輝く瞳が、そう遊戯に呼び掛けていた。遊戯は直ぐにモンスターの意図を悟る。

「皆、早く此処から離れよう。このままじゃ、折角助けてくれたモンスター達に申し訳が立たない！」

「お、おう。そうだよな遊戯。ホラ、しっかり立てよ杏子」

「わ、解ってるわよ。あんたこそ腰抜かしてんじゃないわよ、城之内」

「だ、誰が腰なんて抜かすか、誰がつ!!」

遊戯の発言を受け、彼を含めて避難を再開する仲間達。若干足が震えている城之内は杏子と口論をしながら、本田は何処か呆然としているペガサスの身体を支えて歩いた。

当の遊戯は最後尾。仲間達が無事に瓦礫の下から避難したことを確認すると、単身支え続けてくれていたモンスターを一目見る。遊戯の眼差しは「有難う」と言っていた。

理解したのか、遊戯に向けて軽く頷くモンスター。遊戯が離れると同時に、彼は積まれた瓦礫を放り投げ、自慢の手刀で軽々と一刀両断する。

廳て白いモンスターも煙の中に飛び込み、他の4体に合流。遊戯達の目前で、瓦礫の破壊及び撤去作業に取り掛かった。

「 そうだ、じーちゃんっ!?! 」

そんな中、遊戯はハツとした。人の波で逸れた、祖父である双六の存在を思い出したのだ。

「お、おい遊戯! 危ねえぞ、行くな!?! 」

周囲のビルが倒壊する中、城之内の忠告も無視して双六搜索の為に歩み出す遊戯。煙を吸わないように口を手で押さえ、頭髮に火が燃え移らないように腕で覆い、遊戯は必死に祖父の影を探した。

徐々に遠退いていく仲間達の声。一向に見付からない双六。遊戯の中にも不安が募る。

『 相棒、これ以上進むのは危険だ! 早く皆の所へ 』

「大丈夫。大丈夫だから、もう少しだけ。じーちゃんを探さないと心に響く」「止める、引き返せ」という声を無視し、うわ言のように「じーちゃん、じーちゃん」と繰り返しながら、遊戯は歩く。流れ出る汗と煙で沁みる目を擦り、精一杯双六を探し続けた。

「待っててじーちゃん。直ぐに見付けて、必ず助けるからね」

だが、視界は最悪な上に、人々の悲鳴や物が崩れる音のお陰で、耳で双六の声を拾うことも期待出来ない。……双六の発見は正に絶望的だった。

一体どれ程歩き続けただろう。熱が気にならなくなってきた頃、遊戯はある物を見付けた。

それは地に落ちていた僅かに焦げた黒い布。元色が黒の為、本来の色なのか焦げなのかは判別がつかない。……まさか、と遊戯はそれを優しく両手で拾い上げる。

そして見付けた。否、見付けてしまった。布に書かれた「双」という文字を。赤黒い血がこびり付いた双六のバンダナを。

刹那、遊戯は絶望に打ちひしがれ、両膝を折った。

「おい遊戯！ 大丈夫か！？ どうしたんだよ、しっかりしろ！？」

そこへ、ハンカチを口に当てた城之内が遊戯の許へとやって来る。城之内は両膝を着いて頂垂れる遊戯を見て、心配そうに肩に手を置き、顔を覗き込んだ。

遊戯は悲しみに震えていた。両の瞳は潤み、渴き切った地面に滴が垂れる

「どうやら、何とか上手く被害を小さく出来たみたいだな」

『でも、この見渡す限りの大惨事じゃ、本当に被害を小さく出来たのか怪しいものだけだね』

決闘大会の会場、童実野時計台広場入り口にて決闘盤を構えた十代が安堵の息をついた。熱を感じ、額に浮かんだ汗を赤い服の裾で拭う。同時にそれぞれ異色に輝いていた両眼も本来の色に戻る。

降り掛かってくる瓦礫が殆ど小石程度の物と化したことを確認すると、十代は決闘盤に設置された5枚のカードをしまった。同時に宙を舞って人々を守っていたHERO達も十代のデッキに舞い戻る。気付けば、空で町を破壊し尽くしていた悪魔の龍も忽然と姿を消

していた。

「じゅうだあくいつ！」

背後から唐突に名を呼ばれた十代は、思わず声が聞こえた方を振り向いた。

視線の先には、息を切らして此方こちらに向かつて、龍亞を先頭に走ってくる仲間達の姿があった。十代は彼等に向かつて、「自分は此処にいるぞ」と手を高々に上げて振り回す。

気付いた遊星をはじめとする仲間達は、直ぐに十代と合流を果たした。

「十代、この尋常じゃない街の様子は、一体全体どういう訳なんだ！？」

「此処で一体、何が起きたってんだよ！？」

「俺が知るかよ！？」折角、遊戯さんの決闘が見れると思って、いち早く此処に来たつてのに」

空かさず噛み付く勢いで十代に詰め寄る万丈目とクロウ。十代も興奮状態にあるのか、同等の勢いで2人に反論する。

そんな果てが見えないを口論を続ける3人を龍可や明日香、翔が宥めた。

「遊星、これも全部パラドックスの仕業なのかしら」

「恐らくそうだろう。それにしても、本当に酷い有様だ」

傷付き、激痛や悲しみに泣き叫ぶ人々。面影を失い、瓦礫の山と化した街並み。それ等を見渡しながら遊星が悔しそうに歯を喰い縛った。アキは遊星の拳が震えているのを目の当たりにする。

アキには遊星の顔が、とても悲しそうに　とても辛そうに見えるた。

「取り敢えず、救急車は来たみたいだから、怪我をした人達も大丈夫とは思うザウルスが」

「ああ、それでも怪我した人達を少しでも多く助けなきゃな。もう一度来い、エレメンタルヒーロー E・HERO ネオス！！！」

剣山の意を悟った十代が首を縦に振る。空かさず再び決闘盤を起

動させ、救助活動の為にネオスを呼び出した。

現れたネオスは地に積もる瓦礫を手刀や光線で次々に破壊。十代や遊星も次々に人々が大勢集まる瓦礫の前に向かい、力を振り絞ってそれ等を退かしていく。

『十代くん、あそこを見るのにな』

その時、十代の背負うリュックから顔を覗かせたアラオの口を通して、大徳治の魂が十代を呼び掛ける。十代は大徳治に言われるまま、瓦礫を持ったまま彼が差す方を見た

「あれは　もしかして遊戯さん!？」

そこには瓦礫の前で両膝を着く武藤遊戯の姿があった。周辺には彼の仲間と思われる物が数人。

気付けば十代は遊星の名を呼び、遊戯の許へと駆け出していた……。

「　　どうしてなの、どうして、じーちゃんがあっ!！」

遊戯は瓦礫の前で嘆いていた。祖父を襲った過酷な運命に、そして何も出来なかった自分の無力さに。

祖父である双六は見付かったばろきれと化したバンダナから、恐らく海のように広がり、山のように積もったこの瓦礫の下。とてもじゃないが、人数人の力で動かすことは不可能だ。

そして城之内を筆頭に杏子や本田、ペガサス達はそんな遊戯に掛ける言葉が見付からなかった。ただ、心配そうに遊戯を見詰め、彼の名を弱々しく呼ぶだけであった。

「遊戯さん!!　貴方は、決闘王デュエルキングの武藤遊戯さんですよね!？」

「皆さん、大丈夫ですか!？」

そこへ同年代と思われる2人の青年が、血相を変えた顔つきで訪れる。遊戯は潤んだ目で2人を見た。

猫が頭を覗かせたリュックを背負う、茶色の髪色をした赤い上着の青年。もう一人は遊戯に負けず劣らず奇抜な髪形をした、紺色の

上着を羽織る青年だ。

2人は肩を上下させ、汗を頬に伝わらせながら遊戯を見る。遊戯が無傷であることに安心し、同時に目尻に涙を浮かべていることに疑問を覚えた。

「遊星、今は遊戯さん達を一刻も早く避難させようぜ」

「ええ、そうですね十代さん。皆さん、此処は危険なんです。一刻も早くこの場から避難して下さい！」

互いを十代、遊星と呼び合い、避難を促す2人。そんな2人を城之内は怪訝な顔で見る。そして間を空けずに尋ねた。

「な、何なんだあ、お前等？ この騒ぎについて何か知ってるのか！？」

「説明は後です。今は此処から」

「遊星っ！！！！」

その時、十代が遊星の声を遮って叫んだ。険しい顔をした十代の顔が遊星達の目に映る。

視線の先を遊星は自分の眼で追う。そして気付いた、十代が何故あそこまで殺気立っているのかを。

遊星が目で捉えたのは、一つの人影。だが人ではない。人に酷似した別の何かだ。全身を大きな布が包んでいるが、顔部が鈍い輝きを発していることに遊星は気付いた。

「お前は デュエルロボか！！」

言つと、その者は頭を覆う布を外し、機械の顔を周囲に曝した。

「やはりデュエルロボ。これもパラボックスが絡んでいたのか！」

「何だありゃあっ！？ マジで本物のロボットかあっ！？」

「アンビリーバボー！ まさか此処まで精巧なロボットが存在するなんて、信じられませーん！」

城之内とペガサスが驚きを隠せず声を発する中、遊星と十代は決意を胸に腕の決闘盤を構える。決闘盤は起動し、2人は決闘に於ける臨戦態勢を取った。

「アニキ！！」

「十代！！」

「遊星！！」

そこへ避難活動を終え、他の仲間達も集まってくる。デュエルロボを見付けたの言うまでもない。

彼等を前にデュエルロボは口角を少し上に上げる。いやらしい笑みを顔に張り付け、耳障りな機械音声を口に似せた口部の拡声器より発した。

「オヤオヤ。マサカ、コンナ所ニマデ足ヲ運ンデクルトハ 余程無駄ナ努力ガ好キト見エル」

「黙れっ！ よくも憧れの童実野町をこんな滅茶苦茶に 絶対に許さねえぞ！！」

デュエルロボに対し、怒りを顕わにする十代。

だがそれをデュエルロボは、まるで下らないと鼻で笑った。

「チツポケナ奴ダ。タカダガ町ノ広場一ツデー々騒グナ」

冷酷な目付き、同じく冷酷な言葉を発するデュエルロボ。彼の発した「たかだか街の広場の一つ」という言葉に遊星達は更に怒りを覚える。……頂垂れている遊戯の肩も僅かに動いた。

「哀レナモノダ。ドレ程数多^{あまた}ノ時間ヲ費ヤシテ築キ上ゲタ物モ、イズレ八崩レ落チテシマウトイウノニ。人ノ命モ街モ同ジコト、崩レ去ルノハ僅カ一瞬。……ソレガ早マツタダケノ話ヨ！！」

この言葉に、その場にいた全員の顔つきが更に険しくなった。

「貴様っ！ 町を 人の命を何だと思ってるんだ！？」

「腐つてやがるぜこいつ！」

「今の発言は絶対に許せないドン！」
勢いを増していく怒りの度合い。ジャック、クロウ、剣山の口からは罵声が飛ぶ。

しかし、デュエルロボは気にせず嘲る。何時の間にか、その右腕は変形し、決闘盤と化していた。

それを見るや否や、遊星と十代は一步前へと同時に踏み出す。

「遊星！ 俺にやらせてくれ。どうしてもこいつだけは俺の手で倒

したいんだ!!」

「いえ十代さん、俺がやります。我慢ならないのは、俺も同じなんです!!」

「ドチラデモ良イゾ。俺ノ役目八腕ノ立ツ決闘者^{デュエリスト}ノ抹殺。歴戦ノ決闘者ト謳ワレタ不動遊星、ソシテ遊城十代。ドチラモ結局八標的ノ1人、何ナラ2人同時ニ相手ヲシテモ構ワナイゾ!」

「い、言わせておけばこいつ!! やっぱり俺が相手を
「ちよつと待つて!!!!」

十代が更にもう一步踏み出そうとしたその時、背後から大きな声が飛び込んできた。遊戯だ。遊星達は思わず彼の居る方を振り向いた。

遊戯は既に立ち上がっている。背を見せつつも、威圧感をその小柄な身体から醸し出し、先にいるデュエルロボに向けて言葉を強く発した。

「どうして? 君なんでしょ、大会を襲ったのは……。どうして会場を滅茶苦茶にしたのっ!」

「簡単ナ話ダ。俺達ノ計画ノ障害ニナリ得ル可能性ヲ秘メテイルカラダ。……人間モ計画ノ障害トナル邪魔物^{バグ}ハ消シ去ロウトスルダロウ?」

デュエルロボの言葉に遊戯は衝撃を受ける。加えて一瞬、遊戯の脳裏に祖父の双六が浮び上がった。

「だからって、他人の命を犠牲にしても良いというの!? どんな決闘者だつて1人の人間なんだよ!」

「俺達ノ計画ノ前デハ、人間ノ命ガ幾ラ積ミ重ナロウト、取ルニ足ラナイモノダ!!!」

次の瞬間、遊戯の中で何かが吹っ切れた。目尻に浮かぶ涙を袖で拭い、デュエルロボに向き合う。

そのまま仲間達の制止を振り切り、遊星、そして十代より前に出ようと歩んだ。

「例え、どんな理由があろうと人の命を犠牲にするなんて絶対に間

違ってる。お前の言う計画なんて、僕は絶対に認めない！ そんな、そんな人の命を踏み台にする最低な計画なんて」

その時だ。遊戯が首から下げていた逆三角形のペンダントが、突然金色の鮮烈な輝きを発した。強烈過ぎるそれは、遊戯以外の全員の目を眩ませる。

思わず腕で目を覆い隠す遊星達。それでも足りないのか、目を庇う為に瞼を閉じる者もいた。

聴て光は治まり、徐々に視界が鮮明になっていく。完全に視力を取り戻した時、遊星達は遊戯の変化に気付き、驚愕した。

大人しそうというイメージを180度否定する冷静な顔つき。涙を浮かべていた目は鋭くなり、表情には自信が満ち溢れている。正に同一人物か、と疑う程の変わり様だ。

「この俺が、決闘で真っ向から粉碎してやるぜ！！」

強気にデュエルロボを指差す遊戯。見た目と態度の変化に遊戯を知らない遊星達は困惑する。十代に至っては例外なのか、何処か憧れを想わせる眼差しで遊戯を見詰めていた。

「君達が何者で、こいつが一体何なのか、俺には解らない。しかし、此処は俺に任せてくれないか？」

デッキをシャッフルしながら遊星達に声を掛ける遊戯。遊星が我に返ったのはその直後だ。

「で、ですが！！ 奴は貴方達の常識を遥かに超えた決闘を挑んできます。それにこの決闘は、ダメージが実際に決闘者を襲う危険なもの。幾ら決闘王と言われる貴方でも、この決闘は危険過ぎ」

「まあ待てって、遊星！」

遊戯を説得しようとした遊星を、更に引き留めたのは十代だ。肩に乗せられた十代の手に、遊星は思わず発しようとしていた言葉を飲み込んでしまう。

十代は機嫌良さそうに、明るいい口調で言葉を連ねた。

「あの伝説の遊戯さんが、俺達の為にああ言ってくれてるんだ。これ以上心強いものはないぜ？」

「で、ですが十代さん」

「それに、お前見たくないのか？ あの伝説の決闘王、武藤遊戯の生決闘が見られるんだぞ？ こいつはもう、見なきゃ一生の損つてもんだぜ！！」

目を丸くする遊星。そして彼は悟る。十代は遊戯を心の底から信賴し切っていることを。

「アニキ、僕は見たいっす！ もしかしたら憧れのブラマジガールを見れるかもしれないし！！」

「俺も見てみたいザウルス。決闘王の決闘を目の当たりに出来たら、それはきつと俺にとつても一生ものの宝になるドン！」

「なっ！ 翔と剣山もこう言ってることだしさあ、良いだろ？」

顔の前で手を合わせる十代。遊星は余計に断ることに抵抗を覚え、逃げるように視線を仲間達に流した。

ジャックとクロウ、龍亞の3人は遊戯の決闘に興味と期待を抱いているらしい。明らかにそれが顔に浮かんでいる。龍亞はそれが特に著しく、口角が変につり上がっていた。

アキと龍可は心配気に遊星を見ている。恐らく遊星に全てを委ねている。

因みに万丈目と明日香は頭を抱えていた。については単に呆れ果ているのだな、と遊星は解釈する。取り敢えず本件については当てになりそうにない。……遊星は覚悟を決めた。

「解りました。遊戯さん、俺は貴方に全てを託します！」

言つと遊戯、そしてどういふ訳か十代達の顔が明るくなった。十代と翔に至つては、飛び跳ねて喜んでいいる。

「有難う、十代君に遊星君。君達の気持ちは俺が受け取った。この決闘、必ず勝つてみせるぜ！」

羽織っていた上着を脱ぎ、袖無しのノースリーブ状態になる遊戯。シャッフルを終えたデッキを決闘盤に装填し、デュエルロボと対峙する。

「本当に大丈夫なんでしょうか……」

「今は、決闘王と謳われた武藤遊戯の腕と、遊星と十代の直感を信じましょう」

被害が少なかった広場中央に立つ遊戯を前に、明日香と龍可が話している。

そんなことは露知らず、遊戯は決闘盤を起動させ、デュエルロボに向けて言葉を飛ばした。

「用意は良いか？」

「何時デモ、王サマサン？」

「ならさっさと行くぜ」

『決闘ッ！！！！！』

そして、遊戯とデュエルロボ　2人の声が重なり、時代を超えた決闘の火蓋が切って落とされた……。

TURN・25 グレート・スピリット（後書き）

今回の最強カード

【E・HERO プラズマヴァイスマン 星8 / 地属性 / 戦士族 /
ATK 2600 / DEF 2300】

『E・HERO スパークマン』 + 『E・HERO エッジマン』
このモンスターは融合召喚でしか特殊召喚できない。

このカードが守備表示モンスターを攻撃した時、その守備力を攻撃力が超えていれば、その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。

手札を1枚捨てる事で相手の攻撃表示モンスターを1体破壊する。

↳

という訳で、今回も『E・HERO』の融合モンスターを紹介する。理由は単純、今回はHEROしか登場していないからである。……折角遊戯の時代に来たというのに。略名とはいえブラマジガルにでもすれば良かったか？

だが、今回紹介するこのプラズマヴァイスマン。アニメ出身、しかも登場回数が僅か1回とかなり見落とされ易いのだが、実際に使用してみるとこれが中々強い。

先ず、融合素材なのだが、HEROでも比較的使用頻度が高い『E・HERO スパークマン』を使用している為、『沼地の魔神王』等の融合素材代用モンスターとの融合で易々と融合することが可能。勿論、状況に合わせればスパークマンを融合素材とする『E・HERO シャイニング・フレア・ウイングマン』、『E・HERO シャイニング・フェニックスガイ』、『E・HERO サンダー・ジャイアント』、『E・HERO ダーク・ブライトマン』と切り

替えることが可能。当然、エッジマンも同様である。勿論、代用モンスターによれば属性融合HEROに融合することも可能なので、HEROデッキでスパークマンかエッジマンを投入しているのであれば、1枚くらい入れても損はない筈である。

そして効果面だが、これもまた協力。高攻撃力による貫通効果と攻撃表示モンスターの破壊。後者に至っては、サンダー・ジャイアントのほぼ上位効果にあたる。(サンダー・ジャイアントは守備も可能)

しかし、手札をコストとして1枚消費する必要がある為、使う際は考えた方がよい。特に融合モンスターの召喚は手札を大量に消費するので、乱発は絶対禁物。反撃を喰らうと、一瞬で目も当てられない状況に陥ることも。

そして貫通能力だが、これは主に守備力が低いモンスター、特に戦闘耐性モンスターに有効だ。後者は好きなだけ殴ってサンドバッグにすることが出来るので、戦闘に於いてはかなりの活躍が期待できる。

因みに間違われ易いが、地属性である。スパークマンを融合素材にすると、光属性になり易いのだが、これは地属性である。故に『オネスト』や光属性モンスターに関連する効果の恩恵を受けることは出来ない。反対に地属性効果の恩恵は受けることが出来るが、少々少ないのが偶に傷である。

アニメではVSコブラで十代が使用。その際、攻撃力は2800と僅かに実物より高い。『ヴェノム・スネーク』を戦闘破壊し、ライフを削るのに貢献した。

……が、その際モンスターは攻撃表示だった為、実は効果破壊することも出来た。当然その方がライフを大きく削ることが出来たというのと言つまでもない。

攻撃名と効果名は明かされていない。どうでもいいが、『E・HERO ワイルドジャーマン』とステータスが一致している。

うーん、登場キャラが凄く多いよ。遊戯達の決闘に関わっているキャラクターは一体計何人いるんだろう？ 数えるだけで結構いそうな気がします。という訳で願いました

DM編からは決闘を行っている遊戯をはじめ、城之内に本田、杏子にペガサス。ジーちゃんは現在消息不明なので、結果5人。「AIBOOO！」と、何処か遊戯依存症を患っていることで有名なATMを含めれば6人。

GX勢からは十代、万丈目に翔、そして剣山と明日香、とやはり5人です。因みに十代にはユベルに大徳治もいる訳なので、結局は7人近く。因みにシップにはレイと吹雪が居残り班としています。

最後に5D'sはお馴染みの遊星、ジャック、クロウ、アキ、双子、そして敵のデュエルロボの計7人。つまり一番多いチームが5D'sです。皆大好きブルーノちゃんはやはりシップでお留守番なので除外しております。

結果、18人。ユベル達を含めればなんと21人。(正確にはおジャマも含まれるので+3匹)後々になればパラ様達、他のキャラも合流するので、登場人物の総計は30人を越える筈です。取り敢えず、現状の18という数字、これを知った時、トマトさんはこう思いました。

『こんなに一度の場面にキャラが集結しているけど、俺は大丈夫なのだろうか』と……。

以上、トマトの自分勝手な愚痴報告でした。皆さまも、この台詞は誰が言っているのか解らなかつたりした場合は遠慮なく私にお伝え下さい。私が解らないとか、そんなことがない限りは説明いたしますので。

それではごうぞ。

不動遊星は不安だった。最強と謳われた決闘王デュエルキングとはいえ、数十年も前の決闘者デュエリストが自分達と同じく遙か未来の決闘者相手デュエルロボに勝てるものなのかと。

遊城十代に論され、つい遊戯に決闘を託してしまったが、改めて考えると少し軽率過ぎたかもしれない。その十代本人は、もう直ぐ目の当たりに出来るであろう遊戯の決闘展開に目を輝かせている。

「おい、一体これはどういうことなんだ!? あのロボットみたいな決闘者は何なんだ!?!」

その時、遊星達に向かつて何者かが話し掛けてきた。旧式の決闘盤を腕に備えた金髪の青年 この時代の決闘者、城之内克也だ。

後ろには悪友である本田ヒロト、真崎杏子、デュエルモンスターズの制作者であるペガサス・J・クロフォードも一緒だ。

すると城之内に続き、今度は杏子とペガサスも口を開く。疑問の言葉を声に乗せ、遊星達に投げ掛けた。

「一体、この町で何が起きようとしているの? 貴方達は、この事について何か知っているの?」

「もしそうだというのなら、Please give me 是非とも私達にも教えて下さい」

アキ達が一斉に遊星を見る。遊星も話すべきが一瞬戸惑うが、どうにか口は適切な言葉を紡いだ。

「今は、上手く説明することが出来ません。ですが約束します、もし遊戯さんがこの決闘デュエルに無事に勝利した時、今世界に何が起きているのか、その全てを話すと……」

目線を反らさず真剣に、且つ冷静に喋る遊星。それに反応したのは本田だ。

「その話、本当なんだろうな。そもそもお前等全員、本当に信用出

来んだろうなあ」

「あ、当たり前じゃない！」

本田の言葉に身を乗り出して噛み付いたのは明日香。更にそこへ龍可と龍亞も介入、明日香に続いて言葉を発した。

「そうだ！俺達はいっ等の計画を止める為に、この世界にやって来たんだ！」

「お願いだから信じて下さい。私達は、決して貴方達の敵なんかじゃありません！」

信じて欲しいという訴えと、固く強い決意を秘めた眼差し。双子の兄妹の思い、もとい遊星達の思いが、言葉に乗って城之内達に伝わる。……城之内達は黙って彼等の顔つきを伺った。

真つ先に浮かんだのは真剣の一言。誰も嘘を口にはしているとは思えない。仲間達に相談する必要もないと感じ、代表して城之内が遊星に向かって言葉を発した。

「……ホントにお前等を信じても良いんだな？」

対し、遊星は強く頷き、はっきりとした口調で言った。

「はい！必ず約束します。だから今は俺達を信じて下さい！」

気持ちのいい返事を聞くと、城之内は微かに笑う。ゆっくりと彼等から離れ、遊戯の方へと走った。

声が届く程の距離に辿り着いた時、城之内は手で筒を作って口部を覆い、遊戯に向けて大声を上げた。

「遊戯！ そんな機械野郎、お前のデツキでぶちのめしちまえっ！
！！」

声に反応し、振り向く遊戯。城之内に並び、大声を出そうとする心強い仲間の姿が視界に入った。

「そうだ！ やっちまえ遊戯！！」

「遊戯、私達が付いてるわよ！！」

叫ぶ本田と杏子。城之内を含めた3人に向け、遊戯は「勝利を約束する」と握り拳の親指を立てた。

そんな彼等を見てクスリと笑うと、ペガサスは遊星達に語り掛け

る。

「ユー達の強いマインドを見て、彼等はユー達を信用したようデース」

言つてペガサスは、目の前で遊戯に声援を送る城之内達から、遊星達へと完全に視線を移した。

「ですから、ユー達も遊戯ボーイのことを信じてあげて下さい。

遊戯ボーイは必ず勝つと信じている、あの城之内ボーイ達のように

「勿論だぜ、ペガサス会長！！」

ペガサスの言葉に明るく返事をする十代。刹那、彼は駆け出し、声援を送っていた城之内達に並んだ。

「頼んだぜ遊戯さん！俺も貴方の勝利を信じてるぜ！！」

そのまま十代も遊戯に応援の言葉を勢いよく投げ付ける。流石の遊戯もこれには驚いていた。

だが、これで終わりではない。十代達に魅せられ、共感を覚えた者達が続出。次々に彼等は駆け出し、十代や杏子達に並ぶと、それぞれ遊戯に向かつて熱い声援を送ったのだ。

「任せたぜ、決闘王！！」

「見せて貰うぞ。未来の絶対王者^{キング}として、最強の決闘者と謳われたお前の実力を！！」

「そんなポンコツロボットなんて、やつつけちゃえっ！！」

「決闘王と言われた貴方なら、必ず出来る筈よ」

「俺達も、信じてるザウルス！」

「必ず、遊戯さんは勝ってくれるって、僕達は信じてるっす！」

「後釜にはこの万丈目サンダーが控えている 存分に戦ってこい！」

クロウ、ジャック、龍亞、明日香、剣山、翔、万丈目の順で遊戯に声が届く。

そして最後に、遊星が大声を上げた。

「遊戯さん、此処^{ここ}にいる全員が貴方の勝利を信じてます！ だから

絶対に勝つて下さい！！！」

「勿論だ。君達の気持ちは、決して無駄にはしないぜ」

遊戯は全員の言葉を胸にしまい込み、デュエルロボに再び視線を合わせる。

「才仲間カラノ、無意味ナゴ声援ハ如何ダツタカナ？」

「無意味なんてことはない。彼等の気持ちに応えるためにも、俺は必ずお前を倒す！ さあ、決闘開始だ！」

決闘盤に装填された山札デッキの上から、互いに5枚のカードを手札として引く2人。扇状に広げられたそれ等を手に、先ずデュエルロボが行動を起こした。

「俺ノ先攻ダ。カード、ドロー！」

デッキからカードを引き、手札に加えるデュエルロボ。良いたカードを確認するや、直ぐ様左端のカードに指を掛け、決闘盤に設置した。

「俺ハ『アックス・ドラゴニユート』ヲ攻撃表示デ召喚！」

【アックス・ドラゴニユート 星4/闇属性/ドラゴン族/ATK 2000/DEF 1200】

出現したのは翼まで漆黒の鎧で覆った竜人モンスター。手頃な大きさの斧を構え、竜人は遊戯に威嚇を仕掛ける。遊戯の右足が僅かに後退した。

「カードヲ1枚伏せ、俺ノターンハ終了スル。サア決闘王ヨ、無駄ニ足掻クガイイ」

「なら俺のターン、ドロー！」

デュエルロボの言葉に動じることなく遊戯はデッキからカードを引く。

「1ターン目から攻撃力2000……」

「これは難しいドン。攻撃力2000を超える下級モンスターなんて、そうはいないザウルス」

まだ1ターン目だというにも拘らず、緊迫した空気。雰囲気に耐え切れず、翔と剣山は喉に溜まる唾液を無理に喉へ流し込んだ。龍亞と龍可に至っては、唾液を飲み込むことさえ忘れてしまっているのか、決闘に釘付けになっている。

そんな緊張に固まり気味となっている彼等を、城之内が励ました。「な〜に、遊戯なら大丈夫だ。それにお前等、まだ決闘は始まったばっかだぜ」

「そうだぜ。それに遊戯さんがこんなことでビビる訳ないって」

励ましに加わった十代の言葉が終わると同時に、それを証明するかのように遊戯が行動を開始。手札の中から1枚を抜き取り、魔法及び罫用のスロットへとカードを装填した。

「俺は手札から魔法カード、『天使の施し』を発動。デッキからカードを3枚ドロ〜し、その後手札から2枚を捨てる」

決闘盤の墓地、所謂セメタリーゾーンに手慣れた手つきでカードを送る遊戯。

例えるなら　そう、せせらぎのような美しい作業。それを見た十代の顔が、ペアと子供のように明るくなる。

「流石は遊戯さんだ。魔法カードの使い方が絶妙だぜ！」

「おいおい、落ち付けよ十代。まだ魔法カード1枚使っただけだつて……」

興奮気味の十代をクロウが宥める。とはいえ、十代に静まる様子はなかった。次の遊戯の一手は何だ、と十代は目を星のように輝かせている。

クロウは、まるで聞いていない十代に頭を抱えた。

「フフ、1ターン目カラ手札ノ交換トハ。余程、手札ガ悪カッタトミエル」

「……そうとは限らないぜ」

刹那、嘲笑笑っていたデュエルロボの表情が一変。一転して笑みが顔より消え失せ、驚きが張り付けられた。

理由は簡単　見慣れないモンスターが自分、そして遊戯の場に

それぞれ出現したからだ。

遊戯の場には、埃や綿を想わせる愛らしいモンスターが1体。対するデュエルロボの場には、血液を彷彿させる赤い装甲を纏う青い悪魔。しかも悪魔は自分のモンスターであるアックス・ドラゴニユートを羽交い絞めに行っているのではないか。デュエルロボは困惑した。

【アックス・ドラゴニユート 星4 / 闇属性 / ドラゴン族 / ATK 2000 DEF 1200】

【ワタポン 星1 / 光属性 / 天使族 / ATK 200 DEF 300】

「コ、コレハツ 全部貴様ノ仕業力!？」

「ギルファーデーモンが墓地に送られた時、モンスターの装備カードとなり、装備したモンスターの攻撃力を500ポイントダウンさせる。更にこの『ワタポン』は、通常ドロワー以外で手札に加わった時、自分の場に特殊召喚することが出来る」

得意げに語る遊戯に、デュエルロボは腹を立てる。反して仲間達は喜びを顔に張り付けた。

「流石は決闘王と呼ばれた男だ。天使の施しを活かした、全く無駄の無いコンボだ」

「ああ。しかも攻撃力2000だったあいつのモンスターも今や普通並みの1500。今なら軽々と倒せるぜ!」

ジャックとクロウの言葉は、デュエルロボの怒りを誘発させるに絶好の薬。口部から奇妙な音を発して怒りを顕著に現す彼を見て、遊戯は続けて新たなカードを1枚場に出した。

「まだまだ行くぜ。俺はワタポンを生け贄に、手札から『バフオメツト』を攻撃表示で召喚!」

綿埃が場から消滅すると同時に、5つ星モンスターが遊戯の場に

姿を現す。

黒い体毛と純白の翼が生えた褐色の身体。力強い4本の獣の腕を備え、頭部には山羊のような曲角。1体の悪魔族モンスターが生々しく息を吐いた。

【バフオメット 星5 / 闇属性 / 悪魔族 / ATK 1400 / DEF 1800】

「バフオメットのモンスター効果、このカードが召喚に成功した時、デッキから『幻獣王ガゼル』を手札に加えることが出来る。更に手札から『融合』の魔法カードを発動！」

目まぐるしく手札を使う遊戯。最後に発動した融合が時空間を歪ませ、バフオメットとガゼルを飲み込む。

蛇の尾に獅子の胴体、巨大な翼で空を舞う、双頭の合体獣^{キメラ}が誕生した。

「融合召喚！！『有翼幻獣キマイラ』！」

【有翼幻獣キマイラ 星6 / 風属性 / 獣族 / ATK 2100 / DEF 1800】

「やったわ、攻撃力2100！」

「攻撃力が下がったアックス・ドラゴニユートなら、キマイラで充分破壊出来るぜ」

(これが伝説の決闘王と謳われた、武藤遊戯の実力)

歓喜に拳を震わせるアキとクロウ。応えるかのようにキマイラが天に吠える。

そして遊星が内心で呟いた次の瞬間、幻獣は地を蹴って駆け出した。当然先に待ち構えるはデュエルロボのアックス・ドラゴニユートだ。

「キマイラの攻撃、『^{キマイラインパクト・ダッシュ}幻獣衝撃粉碎』！！」

幻獣の岩をも破壊する体当たり。攻撃力が下がってしまった竜人が耐え切れる訳もなく、衝撃を前に竜人の身体は崩れ落ち、余波がデュエルロボのライフを僅かに削る。

【デュエルロボ LP4000 3400】

「やったあつ。融合モンスターを上手く使った、先制攻撃だあ！」

「これで、僅かだけどLPは遊戯さんがリードしたわ」

「カードを1枚伏せて、ターンエンドだ」

龍亞と龍可の声に続き、遊戯はターンエンドを宣言。残り2枚の手札を手に、相手の出方を伺った。

対し無言で自分のターンに突入するデュエルロボ。ドローフェイズを迎え、カードを引く。5枚となった手札を確認すると、中から1枚を手にとった。

「モンスターヲセット、ターンエンド」

裏側表示、横向きで出現するカード。安直な戦法だが、逆に遊戯は疑問と不安を覚える。

考えられる戦略全てを念頭に、それ等を相手に悟られぬよう表情を固定。遊戯は宣言と共にドローフェイズを迎えた。

引いたカードを手札に加え、フィールドを見渡す遊戯。伏せていたモンスターに、ある程度の予測を立て、自軍のモンスターキマイラに攻撃宣言を下した。

「キマイラで伏せモンスターを攻撃、幻獣衝撃粉碎！」

獅子の如く咆哮し、正体不明のモンスターに突撃する幻獣。近付くにつれ、敵の容姿が徐々に明らかとなり、距離が完全に無くなった際には、その姿を公然の前に現した。

幻獣の突進を喰らったのはトマトだった。守備力1100を秘めた顔のあるトマト、それが幻獣の一撃を受けて破壊される。粉々となった『キラール・トマト』は、デュエルロボの墓地に埋葬された。

「キラール・トマト、モンスター効果発動。戦闘破壊ニヨリ、コノカ

ードガ墓地二送ラレタ時、デッキカラ攻撃力1500以下ノ闇属性
モンスターヲ攻撃表示デ召喚出来ル」

「やはり、戦闘することで効力を発揮するモンスターを伏せていた
か」

「ソウイウコトダ。俺ハデッキカラ攻撃力1500ノ『ランサー・
ドラゴニユート』ヲ特殊召喚！」

【ランサー・ドラゴニユート 星4ノ闇属性ノドラゴン族ノATK
1500ノDEF 1800】

出現したのは薄い緑色の身体を持つ竜人。容姿から、先程デュエ
ルロボが使用したアックス・ドラゴニユートと同類のモンスターだ
と思われるが、その手に握られているのは斧ではなく鋭い槍。

ランサー・ドラゴニユートは出現と同時に、遊戯のキマイラに向
けて威嚇のつもりで槍を突き出した。

「俺はこのままターンエンドだ」

遊戯が小さく舌を打つ。残念そうに眼を閉じ、両手を下げ、エン
ドフェイズを告げる。

「フフ、デハ私ノターン。カード、ドロー！」

デッキトップのカードを加え、再び5枚に回復する手札。LPで
は圧されているが、枚数で遊戯を上回っている為か、表情からは余
裕が伺える。クロウとジャックには、それが妙に憎たらしく思えた。
続けてメインフェイズ。デュエルロボは空かさず手札の1枚を決
闘盤と化した腕に差し込んだ。

「魔法発動、『闇の誘惑』！」

ソリッドヴェイジョン

立体映像でデュエルロボの場に現れる緑枠のカード。

見慣れないカードの登場に、遊戯は小さく尻上がり調でカード名
を復唱。同じ頃、城之内達も同様に闇の誘惑について疑問を感じ、
首を傾げる。

「や、闇の誘惑だと？ い、一体どういうカードなんだ？」

「何だあ？ てめえ知らね〜のか？」

「そういうお前は知ってんのかよ本田！」

「知る訳ねーだろ。俺は決闘者じゃねえんだから」

「い、威張れることじゃないザウルス」

「もう、城之内も本田も、遊戯が真剣になつて頑張つてるのに、もつと真面目になりなさいよ！」

剣山と杏子が、効果を知らない2人の漫才のような会話に溜め息を洩らす中、効果を記憶している者は、真剣な表情で互いに決闘に視線を向けたまま会話を続けていた。遊星とアキもその1人である。

「闇の誘惑。確かあれは天使の施しと同様、手札交換用の魔法カードだったわね」

「そうだ。デッキからカードを2枚ドロし、その後で闇属性モンスター1枚をゲームから除外する。デッキを選ぶが、手札交換系統では強力な部類に入る魔法カードだ」

アキを肯定しつつ、丁寧に効果を説明する遊星。彼が発した声は、決闘を行っている遊戯にまで届いていた。

遊星の説明から遊戯は思索した。内容は相手のデッキの中身について。先程のアックス・ドラゴニートに続き、キラー・トマトにランサー・ドラゴニート。加えて今の闇の誘惑。それ等のことから、一つの結論が遊戯の中で導かれた。

（　　）という事は、奴のデッキは闇属性のモンスターを主体としたデッキ！）

そうしている間にも、デュエルロボは2枚のドロを完了。引いたカードを合わせた6枚の手札を確認し、何を除外するべきか、思考を巡らせている。

結果、左から2番目のカードがデュエルロボの目に留まることとなった。

「俺八、手札ノ『終末の騎士』ヲ除外。続ケテ永続^{トランプ}畏発動、闇次元の解放』」

表を向く紫樺のカード、同時にデュエルロボの場に円形の穴が出現。おぞましく不気味な声が響くその中から、1体の戦士族モンスターが、まるでゾンビのように出現した。

「永続罠、闇次元の解放ハ、自軍ノ除外サレタ闇属性モンスターヲ選択シ、場ニ特殊召喚スル。俺ハ、先程ノ闇の誘惑デ除外サレタ終末の騎士ヲ攻撃表示デ特殊召喚」

【終末の騎士 星4 / 闇属性 / 戦士族 / ATK 1400 / DEF 1200】

「同時ニ特殊召喚サレタ終末の騎士ノモンスター効果発動、デッキカラ闇属性モンスター1体ヲ選択シテ、墓地ニ送ル。闇属性ノ、シンクロ・フュージョニスト」ヲ墓地ヘト送ル」

召喚権を行使せず、次々にモンスターを展開するデュエルロボの戦法に、アキ達は頬に汗を伝わせる。

選択したカードを墓地に送ると、デュエルロボは顔に不敵な笑みを浮かべ、くすくすと薄ら笑いを始めた。

「残念ダツタナ武藤遊戯。俺ノ場ニ、1体デモドラゴンヲ残シテシマッタノガ 貴様ノ敗因ダ」

刹那、遊星達の背筋に寒気が走った。何かを仕掛けてくる。その本能が囁いたからだ。直接戦つてもいないというのに、思わず心と身体が身構えてしまう。

同時にデュエルロボの場で槍を構えていたランサー・ドラゴニユニットにも異変が生じた。突然、竜人の身体が内部から淡い光の滴となって、場より消滅したのだ。

滴は竜人を形成するのを辞めて組み換わり、聴て姿形が全く異なる別の龍ドラゴンを形作る

「ドラゴン族モンスター1体ヲ場カラ除外スルコトデ、手札ヨリ特殊召喚。全テヲ制圧スル為ニ今こそ現レヨ、我がデッキかなめノ要
レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン」！

正体を見せる巨大な翼竜。邪悪な赤い瞳、全身を覆う金属、禍々しく鈍い輝きを発しながら、1体のドラゴンが上空よりデュエルロボのフィールドに舞い降りた。

【レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン 星10/闇属性/ドラゴン族/ATK 2800/DEF 2400】

金属の身体に似合わず、口から生々しい息を吐く翼龍。そこから発せられる鳴き声は、まるで金属同士を擦り合せたようだ。

少なくとも人間の感性で考えれば、耳に心地良いものではない。現に杏子や城之内達は、鳥肌が立ち、堪らず耳を塞いで、苦悶の表情を浮かべている。

だがデュエルロボは、まるで美しい音楽でも聞いているかの様、聴覚器に届く音に心を和ませている。反して遊戯の顔には焦燥が浮かんでいた。

「レッドアイズ……俺の『レッドアイズラックドラゴン真紅眼の黒竜』以外にも、まだレッドアイズのカードがあつたのか!？」

「しかも、攻撃力は2800。決闘王のキマイラでは、逆立ちしたつて敵わない!」

「兄さんは『レッドアイズイクネスドラゴン真紅眼の闇龍』に装備カードを装備させることで、あのモンスターにパワーアップさせていたけど……。」

「でもあれは真正銘のレッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン。まさか、あのカードが単体で世界に実在していたなんてな。奴の姿を見ただけで身震いしちまうぜ!」

順に城之内、アキ、明日香、十代が感想を漏らす。特にダークネスメタルを目の当たりにしたことがある後半の2人、中でも実際に戦った過去を持つ十代の声は、かなり重みが籠っている。

流石に危険な状況に陥つたと感じたか、仲間達の殆どが汗を拭う素振りを取った。

「残念ナガラ遊城十代。コノダークネスメタルドラゴンハ、貴様が

戦ツタ紛イ物ト八違ウ 見ルガイイ！ 本当ノダークネスメタル
ノ力ヲ！！」

刹那、ダークネスメタルを覆っていたオーラのような鈍い金属の
輝きが、更に重々しくなる。それはダークネスメタルの全身から離
れ、登場した時と同じように別の形へと変わっていく。

聴て光は1体の橙色の肌を持つ暴君竜へと形を変え、遊戯の前に
他のモンスターと共に立ち塞がった。

「新たなドラゴンを特殊召喚したと！？」

驚きの声を上げる遊戯をデュエルロボは大きく嘲笑った。

「ソノ通りダ！ レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン八、1
ターンニ一度、手札、マタ八墓地カラ1体ノドラゴン族モンスター
ヲ特殊召喚スルコトガ出来ルノダ！」

効果説明を終えると同時に現れた暴君龍が、遊戯に咆哮を飛ばす。
まるで身体が押し戻されるような感覚に、遊戯は思わず身を強張ら
せた。

【タイラント・ドラゴン 星8 / 炎属性 / ドラゴン族 / ATK 2
900 / DEF 2500】

「ふざけんなよてめえっ！ 緩すぎる召喚条件に攻撃力2800。
その上1ターンに一度のドラゴン族特殊召喚能力だあ！？ お前等
デュエルロボって奴は、インチキ効果も好い加減にしやがれえっ！
！」

クロウが憤慨するが、出現したドラゴン達はものともせず獲物達
に照準を定める。鋭い目に睨まれる度、尋常ではない殺気と迫りに、
遊戯の背筋には寒気が走った。

「ど、どうしよう。このまま攻撃を全部受けちゃったら、遊戯さん
のライフは一瞬で0になっちゃうよ」

翔が2体のドラゴン、そして2体に比べると小さく見える剣士1
体を見回しながら、震えた声を上げる。龍亞も真っ青な顔で、脂汗

を浮かべながら歯を震わせている

だがそんな翔の肩に、暖かい感触が伝わる。振り向いた翔は、まるで焦りを見せていない十代の顔を見付けた。

「いや、まだ大丈夫だ。遊戯さんの場にいる有翼幻獣キマイラは、破壊された時に墓地のガゼルかバフォメットのどちらかを選択して、場に特殊召喚することが出来る」

十代が遊戯の場で単身ドラゴン達を睨んでいる獣族モンスターを見て、言う。

対し、翔達はあつと声を上げて、同時に十代の言葉の意味を理解した。

「守備力1800のバフォメットを呼び出せば、終末の騎士の攻撃力1400を凌げる。奴は必然的に2体のドラゴンで先に攻撃しなければならなくなるんだ。そうなれば遊戯さんはこのターン、1400ポイントのダメージだけで済む」

「そつか！ その手があつた」

「いや、駄目だ！」

唐突に否定を受け、翔と十代が驚く。声を上げたのは城之内だった。

城之内は悔しそうに顔を歪ませ、拳を握り、苦々しそうに言葉を発する。

「奴の場に特殊召喚されたタイラント・ドラゴン、あのモンスターは相手の場にモンスターが存在している時、2回の攻撃を行うことが出来るんだ」

「それじゃあ、キマイラの効果もまるで意味を成さない!？」

気付いた明日香が慌てた声を上げる。そして既に事を理解していた遊星とペガサスが頷き、口を開いた。顔つきも心なしかわろしくない。

「例え、遊戯さんの場にモンスターが守備表示で特殊召喚されたとしても、結局それもタイラント・ドラゴンのモンスター効果の前に戦闘破壊されてしまう」

「つまり、遊戯ボーイはダークネスメタルドラゴンと終末の騎士の攻撃力の合計、4200ポイントのライフを一気に失うことになりマース」

「それって、どう足掻いても遊戯が負けちゃうってこと!？」

杏子が慌てた声を上げるが既に遅かった。タイラント・ドラゴンが攻撃の体勢に入ったのだ。

暴君竜は口内一杯に紅蓮の炎を貯め込み、今にもキマイラを燃やし尽くそうとしている。翔達は慌てふためいた。

何かしら打つ手はないのか、本当に万策尽きてしまったのか、と全員は救済策を求めて足掻きに足掻いた。脳内を駆け巡り、蓄えてきた知識を必死に漁った。

誰もが策を練ろうと必死に試行錯誤するが、解決策が出る前に、竜は大きく開いた口から火炎を発射してしまう。……アキ達は遊戯の伏せカードに最後の希望を託すしかなかった。

「燃工尽キテ灰トナレ武藤遊戯。タイラント・ドラゴンノ攻撃

『暴君の業火』」

幻獣に迫る地獄の業火。城之内をはじめ、数人の仲間達の顔が青褪める。

だが遊戯は少しも焦る素振りを見せず、寧ろ何かに安心したように攻撃に対して笑みを浮かべた。

そうしている間にも炎はキマイラの直前にまで辿り着く。デュエルロボは素直に勝利を確信した。

「それはどうかな？」

その時、冷たい言葉が全員の耳を貫いた。誰でもない遊戯の言葉だ。

刹那、遊戯は不敵な笑みを浮かべて決闘盤の操作を行い、伏せていたカードを表に上げる。

「リバースカードオープン! 畏カード、『聖なるバリア ミラーフォース』」

言っと、キマイラの眼前に薄く美しい防壁が出現。それがキマイ

ラを守り、炎を完全に遮る。

「ミラーフォースは相手の攻撃宣言時に発動する罠カード。相手の攻撃を無効にし、相手の場の攻撃表示のモンスターを全て破壊する！」

遊戯の説明通り、防壁で遮られていた火炎は一斉に反射。デュエルロボの場のモンスター全てに襲い掛かる。

「タイラント・ドラゴンは、自らを対象とする罠を受け付けない特殊モンスターだが、俺の発動したミラーフォースは対象を取らない罠カード。よってタイラント・ドラゴンの効果は発揮されず、破壊される！」

反射された炎が次々にデュエルロボのモンスターを焼き尽くす。小柄な終末の騎士は直ぐに焼却され、切っ掛けを作ったタイラント・ドラゴンも、自らの炎に耐え切れず音を立てて崩れ落ちる。

要と称されたダークネスメタルも、身体を覆う金属を熱で赤くしてフィールドより消滅していった。

一瞬にして焼け野原と化すデュエルロボの場、フィールドで健在なのは遊戯のキマイラのみ。デュエルロボは当然、明日香や龍亞達は予想以上の展開に言葉を失った。

だが、平常を保っている者がいなかった訳ではない。1人、解り切っていたかのように穏やかな顔をしている者がいた。十代だ。

十代は遊戯に明るく笑って声を掛けた。

「どうだ遊星？ これでも遊戯さんに任せたのは、間違いだっと思っただけか？」

対し遊星は、静かに笑って返答する。

「いえ。最初は未来のカードを豊富に持つ決闘者相手に、遊戯さんが勝利するのは難しいと考えていました。ですが、今は遊戯さんに任せて良かったと思ってます。彼ならきっと、俺達の期待に応えてくれると思います」

「だろ？ やっぱり遊戯さんは俺の憧れ ホント最っ高の決闘者だぜ！」

十代の言葉に頷く遊星、2人は再び決闘へと目を移す。2人の目に悔しがるデュエルロボが映った。

遊戯はそんな相手に向かって、今までのお返しに、と嘲笑って言葉を言い放った。

「焦るなよ、まだゲームは始まったばかりなんだ。……さあ、次はどんな手でくるんだ？ 俺と、俺のデッキが真っ向から粉碎してやるぜ！」

今回の最強カード

【キラー・トマト 星4 / 闇属性 / 植物族 / ATK 1400 / DEF 1100】

『このカードが戦闘によって破壊され墓地へ送られた時、自分のデッキから攻撃力1500以下の闇属性モンスター1体を自分フィールド上に表側攻撃表示で特殊召喚する事ができる』

レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴンじゃないのかよ、という言葉が聞こえてきそうですが、今回はこのキラー・トマトを紹介。私の名がトマトだから、とかそんな下らない理由で選択したわけではありませんので、誤解の無いように。

属性と攻撃力に縛りはあるが、モンスター特殊召喚効果を持つ。所謂リクルートモンスターである、因みに効果分の通りこのモンスターは闇属性のリクルーターである。同様の効果で、真っ先にサーチ系統のカードで浮かび上がるのは『クリッター』なので、余程必要な場合でなければこのカードは選択されないだろう。植物族デッキや、闇属性を豊富に投入、または素早く闇属性モンスターを召喚する必要があるのでデッキ等ではこのトマトが重宝される。

更にどのリクルーターにも言えることだが、戦闘に対する防御という面でも活かすことが可能。最後に特殊召喚するモンスターを含め、計4回もの直接攻撃から身を守ることが出来る。だがその場合、強制的に攻撃表示となるので、結果的にダメージを逃れることは出来ない。上記のデッキ内容でなければ、『和睦の使者』や『聖なるバリア ミラーフォース』に頼った方がよい。

因みにこのカードで主にサーチされるカードとして数枚を記載。

代表的なクリッターを筆頭に、戦闘耐性を持つ『魂を削る死霊』。他にも特殊召喚サポートとして用いられる『召喚僧サモンプリースト』、チューナーでも『BF - 疾風のゲイル』、『ゾンビキャリア』、と凡庸性が高いものが揃っている。そもそも閻魔性自体がかなり強力なので、リクルーターでは強力な部類に入っている。故にか、新調されたビギナース・エディションでは他のリクルーターと異なり、スーパリアでの封入となっている。……欲しければ素直にストラクを買おう。因みに海外版ではイラストが異なっており、日本の者より遙かに凶悪そうな面をしている。

そして何時もの余談。私は、あの『ハングリーバーガー』の中に見えるトマトの正体こそ、このキラ・トマトではないかと考えている。恐らく『悪魔の調理師』が料理したのだろう。こんな悪質な面をしたトマトを食材に利用しているのだから、あんな凶悪なバーガーになったのも頷ける話である。他の具材である、レタス、にハンバーグにパンが、これはまだ不明。予想として、ハンバーグに使用されている牛肉は『ミノタウルス』か、『暴れ牛鬼』辺りではないかと考えているが、真相は不明である。

アニメではパンドラの手札に見受けられたが、遊戯の手札抹殺によって墓地に埋葬。2枚目はリリース要因とされ、結局その効果を活かすことはなかった。

TURN・27 ドラゴニック・タクティクス(前書き)

漸く更新することが出来ました。お待たせして申し訳ありません、トマトです。

いやはやライダー2作と遊戯王、そして自身の抱える課題等で現在フラフラ。読者の方から尻つぺた叩かれちゃうほど。気付けばもう最後の更新から3ン影つ以上経ってたんですね、申し訳ありません。

なるべく書いていきたいですが、私も自身の生活や他にやらねばならないことなど、色々とありますので、どうかこれについてはご了承ください。宜しくお願い致します。

正に圧倒的、何者も寄せ付けられないその脅威かつ圧倒的なプレイング。決闘王、武藤遊戯の技術は公園に居る残り僅かの者全員の関心を惹き付けた。

挑発を想わせる不敵な笑みを浮かべ、僅かな手札とキマイラを従えて立つ遊戯。対するデュエルロボは、苛立ちからかカードを握り潰さん勢いで布の下で身体を震わせている。

「これが、最強と謳われた決闘王の決闘か。確かに見事なカード技術だ」

「けど何か釈然としねえぜ。決闘者は予め決めたコンセプトに従ってデッキ構築を行うのが普通。だが、武藤遊戯のデッキを見た限り、あいつにはそれがまるでない」

「でも、現に彼が圧しているわ。デッキ内容はどうであれ、ね」

だが、興味を覚えるにも色々ある。ジャック、クロウ、アキは遊戯のデッキ内容に関心を持った。

口々に自らの内心を素直に明かす3人。実際に自分達がコンセプトを整えたデッキを使用している為か、発せられる言葉は何処か否定的だ。浮かぶ表情も少し思わしくない。

「だが、今は遊戯さんに全てを委ねるしかない。そして彼なら、きっと俺達の未来に希望を繋いでくれる」

遊星の言葉に仲間達は口を閉ざす。同時に、広場内に居る全員の耳に、遊戯の対戦相手であるデュエルロボのエンドフェイズ宣言が届いた。

「どうやら、あの後彼は単純にカードを1枚伏せただけで終了したようだ。」

（あいつ、モンスターを召喚しないのか？）

手札を4枚に増やした遊戯は、違和感を覚えつつもバトルフェイ

ズに移行。自分に随従するキマイラに向けて手を翳し、指示を發した。

「お前のフィールドには壁となるモンスターがない！」「有翼幻獣キマイラ」で、直接攻撃！」ダイレクトアタック

無防備状態の敵を見据え、地を蹴って駆け出す二頭の幻獣。その勢いは新幹線にも劣らないだろう。

だが、二つの頭部がデュエルロボを捉えようとした時、唯一彼の場合に伏せられていたカードが表を向き、その正体を現した。……緑色の表面が遊戯達の瞳に映る。

『俺八才前ノ攻撃宣言ヲ引キ金二、速効魔法発動。』スケープ・ゴート！』

刹那、彼の場に愛らしい4体の羊モンスタートークンが出現。それ等はキマイラの進路を阻み、攻撃を一時中断させる。

【羊トークン 星1/地属性/獣族/ATK 0/DEF 0】

「あれって、城之内がよく使うカード！」

「ああ。あれは自分の場に4体の羊トークンを特殊召喚する、攻撃回避用のカードだ」

さすが流石に持ち主だけあつてか、効果をほぼ完全に熟知している城之内。杏子が出した驚愕の声に反応した彼は、冷静な眼差しと声で説明する。

「コレデ直接攻撃ハ不可能ダア！」

「だったらスケープ・ゴート1体に攻撃を仕掛けるまでだ、」キマイラ、インパクト・ダッシュ突撃粉碎』！」

デュエルロボの挑発に惑わされることなく、遊戯は素直に攻撃を続行。身代わりとして特殊召喚された羊が、幻獣の突撃を受けて粉々となって破壊される。

「俺はカードを伏せ、ターンエンドだ」

「デハ俺ノターン！ カード、ドロー！」

表情を変えず、淡々とした口調で言葉を発する遊戯。対しエンド宣言にデュエルロボは顔を綻ばせた。

引つ掛かりを感じる笑みを浮かべたままドロフェイズ、彼はデッキの最頂のカードを引き抜く。3枚となった手札の中から、1枚を抜き取り、自らの左腕が変形した決闘盤デュエルディスクに装填する。

「魔法カード、『増援』発動！ デッキカラ、レベル4以下ノ戦士族モンスター1体ヲ選択シ、手札ニ加エル　　コノ『ジャンク・シンクロン』ヲナア！」

「何っ!? ジャンク・シンクロンだと!?!」

「遊星のとおんなじカード!?!」

宣言カードに、顔を驚愕の色で塗り潰されたのは遊星と龍亞だ。

遊星のデッキ内容を知る者達も、同様の反応を示している。まさか、目を丸くしている者が殆どだ。

だが、確かにデュエルロボが宣言して加えたカードは、自身がよく知る物と同じ、紛れもないジャンク・シンクロン。……彼は加えたそれを直接場に召喚する。

【ジャンク・シンクロン　チューナー/星3/闇属性/戦士族/A
TK 1300/DEF 500】

現れたのは遊星達には見慣れた、またこの時代の者達には見覚えのない橙の服と帽子を纏う子供のようなモンスター。見た目に相應しい低い攻撃力に、城之内と本田は安堵の息を吐き、顎に伝う冷や汗を拭った。

「な、何だよ脅かしやがって。ただか攻撃力1300じゃねえか」「ビクリさせやがって。そんな奴やつちまえっ、遊戯イッ!」

遊戯も拍子抜けを感じたのか、警戒こそ解いていないが、表情から少し硬さが抜け落ちている。攻撃力面での不安が取り除かれたからだろう。

だが遊星やジャック、その秘めたる効果を知る者達は、予測が容

易い先の展開に肝を冷やしている。全員が、次に敵が何をしようとしているのか、目論みの全てに気付いているからだ。

「ジャンク・シンクロン、モンスター効果発動。召喚成功時、墓地ニ存在スルレベル2以下ノモンスターヲ、効果ヲ無効化シテ表側守備表示デ特殊召喚スル。墓地ヨリ『シンクロ・フュージョニスト』ヲ特殊召喚」

続けて呼び出される形で場に出現したのは、これまた橙色の小悪魔のようなモンスターだ。偶然か、「フュージョン」という名を持つだけあって、その容姿は『融合』のカードを何処か想像させる。

遊戯の眼前に並ぶ、トークンを含めた5体のモンスター。デュエル口ポを守るように陣形を組む彼等を前に、遊星は僅かに顔を青くして叫んだ。

「間違いないっ！ 奴の目的は」

【シンクロ・フュージョニスト 星2 / 闇属性 / 魔法使い族 / A T K 800 / DEF 600】

「サア、コレデ全テ出揃ツタ。此処カラ反撃ニ移ラセテ貰オウカ！」
「反撃だと？ だがお前の場にいるのは、どれも低い攻撃力しか持たないモンスターばかり。そんなモンスター達が幾ら束になっても、俺のキマイラは倒せないぜ！」

「サア、ソイツハドウカナア？」

耳にこびり付くような不快な機械音声、自分を嘲笑うような歪んだ笑み。遊戯は悟る、この者の言葉に嘘偽りはないと。何かしらの手立てでキマイラを突破し、状況を優勢に持ち込むことが出来るのだと。

直ぐ様相手の手札枚数を確認し、如何なる手が現状で可能か、遊戯は思考の限り推測する

「気を付けるんだ遊戯さんっ！」

その時だ、何者かが忠告の意を乗せて声を張り上げた 不動遊

星だ。

全員視線が一齐に、口周りを筒のように手で覆っている彼に向けられる。遊戯も背後を振り向いた。

「奴の狙いは、この時代にはない特殊な召喚で一気に上級モンスターを呼び出すこと　守りを固めるんだ！」

「モウ遅イ！　見セテヤロウ、貴様達過去ノ存在ガ、ドウ足掻^{あが}イテモ埋メルコトノ出来ナイ、遙力先ノ未来ヲ往ク者トノ絶望的ナ差ヲナアツ！」

（特別な召喚？　遙か先の未来？）

遊戯が戸惑う中、相手の場に存在していた5体のモンスター全てが、輝く星となって宙を舞った。

本来の姿を完全に失い、直列する星々。何が起ころうとしているのか、まるで理解出来ず、者達は完全に目を奪われる

「な、何だあ！？　5体のモンスターが全部星になったぞ！？」

「一体、何が起きようつてんだ！？」

動揺に目を丸くする城之内。本田は周囲を見回し、杏子も未だ見ぬ光景に言葉を失っている。

片や、全てを理解している者の反応は異なる。遊星やアキ、ジャック達が良い例だ。

彼等は「してやられた」と拳を握り締めている。そんな遊星達の反応を見て、シップで一度目にした十代達も静かに悟る　シンク口召喚だと。

「全テヲ焼き尽クス炎ノ如ク。敵ノ全テヲ侵略セヨ　シンク口召喚！」

星は赤黒い闇の輝きと共に、轟々と燃える業火へと変化。内側に見える眼光、躰^{やが}て炎は竜を形作り、モンスターとしてフィールドに降り立つ。その姿を前に、遊星達は動揺を隠せず目を見開いた。

「ま、まさか、アレは……」

「けど間違いないえっ、あのモンスターは　」

アキとクロウが声を上げているが、出現したドラゴンに見覚えが

あるのは遊戯達も同様だ。忘れる筈がない、町を壊滅寸前にまで追い込んだ、元凶とも言つべき存在と全く同じ姿をしていたのだから

「どういうことだ!? 『融合』も使った訳でもないのに、5体のモンスターがドラゴンに合体した!？」

いきなりの出来事に困惑する遊戯。確かに何も知らない彼や城之内達からすれば、今の光景は融合カード無しでの合体と受け止めても無理はないだろう。

— 先ずシンクロ召喚という言葉に疑問を感じながらも、強力モンスターが出現したという事実を受け入れる。

赤黒く力強い巨体の竜。悪魔を想わせる角を頭頂に備え、指先には全てを引き裂きかねない鋭い爪。口部の合間からは、遊戯のキマイラをも容易に噛み砕けるであろう牙が覗いている。

「ドウダ、恐ろシクモ美シイダロウ? 俺ノ命令ニ忠実ニ従ウ僕ノ姿ハ!」

わざとらしく一部を強調させて言葉を発するデュエルロボ。悪魔竜を侍らせて高笑いする彼に、ジャックは怒りに身を震わせて言葉を絞り出した

「……レッド・デーモンズ」

【レッド・デーモンズ・ドラゴン 星8/闇属性/ドラゴン族/A
TK 3000/DEF 2000】

身を熱く焦がすような激しい屈辱感に身体が震えが増す。今直ぐにでも目の前で笑みを浮かべたその顔に拳をぶち込んでやりたい気分だろう。自身の魂を怪我される歯痒さに拳がギリギリと軋む。

「ドウダ、ジャック・アトラス。貴様ノ安ッポイ魂ガ、俺ニ従ウ光景ハ?」

「貴様アツ!! 俺だけでなく、我が魂レッド・デーモンズをも愚弄する気がアツ!」

追い討ちのように畳み込まれる挑発に腹の底から吠える。怒り狂うジャックを前に、とても愉快そうにデュエルロボは笑みを浮かべた。

「ジャックさんがあそこまで　遊星君、まさかあれが？」

「さっき言ってた、遊星達が奪われたカードの内の1枚なのか」

顔に冷や汗を浮かべた翔と十代が遊星に尋ねる。「ええ」と頷き一つという解り易い返事と共に、彼は説明を施した。

「あのドラゴンの名は『レッド・デーモンズ・ドラゴン』。……ジャックの魂とも言うべきカードです」

やっぱり、そう十代が呟く。彼を含めた明日香、万丈目は、目を血走らせているジャック、続いてフィールドを制圧するドラゴンへと目を移した。

「どうということなんだよ、お前等だけで勝手に納得してないで、俺達にも解るように説明してくれ！」

「一体何なんだよシンクロ召喚って。それに、カードを奪われたって　あのドラゴンがそうだったのか!？」

片や、まるで状況が呑み込めない城之内や本田は遊星に詰め寄る。カードを奪われた、その言葉に酷く興奮しているらしく、城之内の言動は特に荒っぽい。

「シンクロ召喚については、今はレベルによる融合としか説明が出来ません。今言えることは、あのモンスターは紛れもなく、俺達が奪われたカードの中の1枚だということだけです」

文末を微妙に強調させて言う遊星。彼の発した言葉を2人は脳内で静かに復唱する。

「そして、あいつは人からカード奪う、とんでもなく悪い奴だということザウルス！」

続いて補足的な形で言葉を付け足したのは剣山だ。彼もまた城之内と同じく、内心で怒りを感じているのか、言葉には怒気が込められている。翔はそれを擦り込ませるように「そうっす」と、杏子達3人に向けて言葉を投げ付けた　城之内達は戸惑いつつも状況を

把握出来たようだ……。

「貴様ツ、決闘者にとって掛け替えのないカードを奪い取り、あまつさえその持ち主のしている前で侮辱するなんて　それでも決闘者かッ!?」

「何ヲ勘違イシテイル武藤遊戯、カード八所詮カード二過ギナイ。ソシテ強キ僕八強キ決闘者ニ従事スルンダヨ。……ツマリ、コノ俺ニコソナアツ！」

機械音声がここまで腹立たしいと感じたことはない。遊戯は怒りのまま素直に奥歯を強く噛み締める。

だがそれは遊星や十代達も同じ、誰しもがデュエルロボに対して、猛烈な怒りを覚えていた。

熱血漢であり喧嘩っ早い城之内やクロウは勿論、決闘者ではない杏子でさえ表情を険しくしている。普段は大人しい龍可や、暴力沙汰を好まない吹雪、正しく全員が彼に対して敵意を剥き出しにしていた。

誰も我慢ならなかったのだ。

「武藤遊戯ツ！　俺に構うことなく、レッド・デーモンズを破壊しろオツ!!!」

皆が、遊戯さえもが一步踏み出そうとしたその時だった。ジャックが腹の底から声を張り上げたのだ。

「確かに俺にとってレッド・デーモンズは、絶対王者として君臨する俺その者！」

「……元だけどね、モ・ト・キ・ン・グ」

「龍亞つてば、ジャックに殴られるわよ」

背後で余計な言葉を呟く龍亞と龍可の兄妹を殺気だった睨みで黙らせ、誇り高い筈の彼はせがむように叫んだ。

「だからこそ！　レッド・デーモンズがあのような外道の指示に従う姿など、俺は見たくない」

軋む拳により力が入る。握り締められた拳の僅かな隙間からは、地面に向けて赤い血液が滴り落ちた。

「あのカードやシンクロ召喚のことなら心配はいらん、俺が出来る限り助言する　だから頼む！　決闘王と謳われたお前の手で、レッド・デーモンズを、俺の魂を奴から解放してくれッ！」

それを聞いた遊戯は暫しの間沈黙を通す。自身の手札とデッキに目を落とし、最後に目の前に立ちあがる巨大な悪魔竜へと視線を移した。そして鋭い眼差しと共に言葉を発した。

「君の気持ちは解った。……だが、俺への助言は必要ないぜ！」
声に乗って放たれる文字の並び、その意味は彼等を絶句させるには充分だった。

そして耳を疑った。目の前に立つ決闘者は今何と言った、助言は不要だと確かに口にしたのだ。

現状、誰しもが武藤遊戯が絶対的不利だと感じていた。相手は遊星達と同じ未来の技術を操る決闘者、速効性、容易性、様々なカードアドバンテージの面で、過去の住人である遊戯を遥かに上回っている　そのことは遊戯本人も理解している筈だ。

だからこそ、クロウ達は理解することが出来なかった。絶対敗北する訳にいかないこの重要な戦い、どうして眼前に立つ男は、味方からの助言を拒否するのかと。

殆どの物が目を白黒させる中、先程まで声を掛けていたジャックが叫んだ。

「何故だ！？　お前も解っている筈だ！　奴の言う通り、俺達とお前達とでは、行く決闘自体に絶大的な差が開いていることを！　今、奴のフィールドに出現したレッド・デーモンズこそ、その証だ！」
「確かに君の言う通りだ。この相手は、今まで俺が見たことのないカード、そして技術を持った決闘者でだ。俺達が今までやってきた決闘とは、次元そのものが違うのかもしれない」

言って、遊戯は再度レッド・デーモンズに視線を移す。竜は今も自分を威嚇しようと鋭い眼光を輝かせている。その重圧と迫力は、生涯の好敵手ライバルと認められた彼の持つ、青白き龍に負けずとも劣らないだろう。

「しかし！ 例え俺に勝利の可能性が僅か1%も無かったとしても、それでも俺は自分のカードを信じて戦う。そして必ずこいつを倒し、君のカードを奪い返してみせる！」

勝利宣言を口にしながら、眼前の敵を指差す遊戯。言動が癪に障ったのか、デュエルロボの顔が僅かに険しさを増す。挑発を含んだ耳障りな声で、彼は煽るように声を上げた。

「ホオ。俺ヲ倒ス、今確カニソウ宣言シタナ　ダツタラヤツテミ口。貴様ノ信ジル、ソノデツキトヤラデナア！」

「良いだろう！ お前の全力で向かってこい！ 俺の全力でそれを打ち破ってみせるぜ、決闘続行だ！」

「ソウコナクテハ。シンク口素材トシテ墓地ニ送ラレタ、シンク口・フュージョニストノモンスター効果発動　」

すると、左腕が変形した決闘盤が、デッキからカードを1枚選択して排出。デュエルロボは当然の如くそれを引き抜き、手札に加え。遊戯は瞬きも惜しんで、敵の未知なるプレイングを着目し続けた。

「自分ノデツキカラ、『融合』、マタハ『フュージョン』ト名ノ付ク魔法カード1枚ヲ選択シ、手札ニ加エルコトガ出来ル。俺ハ、『未来融合　フューチャー・フュージョン　』ヲ手札ニ加エル」

加えたカードを見るなりニヤリと笑みが零れる。同時に悪魔竜の右拳には、朦々と燃え盛る炎が宿った。

「空カサズバトルフェイズダ！　我ガ僕レッド・デーモンズ・ドラゴンデ、有翼幻獣キマイラヲ攻撃。『アブソリユート・パワーフォース』！」

振り下ろされる業火の鉄槌。狙われた幻獣は無残にも粉々に砕け散り、その余波が主のライフを削る。遊戯は思わず顔を守るように腕で覆い隠した。

傍では杏子や遊星、万丈目達も吹き飛ばされないよう足を地面に押さえ付けている。

(この身体が引き裂かれるような衝撃、彼等が言っていたダメージが現実になるとはこういうことか)

風圧で衣服が翻りそうになる。よく決戦に用いられる闇のゲームを彷彿させる感覚を身体で感じ、風が止むや遊戯は決闘盤の墓地へと手を持っていった。

「破壊されたキマイラの効果発動。このカードが破壊され、墓地に送られた時、墓地にある『幻獣王ガゼル』か『バフォメット』を選択して特殊召喚することが出来る」

すると、決闘盤がカードを排出。それは直ぐ様モンスターゾーンに設置され、フィールドにキマイラの片割れを呼び出した。

出現したのは、褐色の肌と4本の腕を持つ小柄の悪魔だ。

それを見た仲間達は、モンスターを絶やさずに済んだか、と安堵の息を吐く。

「効果で、俺はバフォメットを守備表示で特殊召喚する！」

「フフ、守備力ノ高い方ヲ選ンダカ。……無駄ナコトヲ」

悪魔は全ての腕を前に、防御の姿勢を取っている。それでも、大型の悪魔竜が繰り出す攻撃を防ぎ切るのは不可能だろう。それを理解しているが故にか、デュエルロボは小さく笑う。

「俺八手札カラ永続魔法、未来融合 フューチャー・フュージョンを発動。デッキカラ融合素材トナルモンスターヲ墓地ヘト送り、2ターン後ニ対象トナル融合モンスターヲ特殊召喚スル！」

「デ、デッキからの融合だとオ!? そんなことまであいつは出来るつてののか!?!」

「大幅な墓地肥しに出たわね、恐らく対象となるモンスターは」
「俺八、デッキカラソレゾレ」レッドアイズ・ワイパーン「真紅眼の飛竜」3体ト、2体ノ『レツドアイズ・ダークネスメタルドラゴン』2体ヲ墓地ヘト送り、ファイナル・フレイム『F・G・D』ヲ2ターン後ニ特殊召喚スル！」

その一言に、「やっぱり」と呟く明日香。反面、その名を持つド

ラゴンと実際に対峙した経験を持つ遊戯や城之内、そして十代は、凍り付くような寒気が身体を通過するのを感じた。

F・G・D、その名はデュエルアカデミア小等部である龍亞と龍可でさえ知っている。千を軽く有するデュエルモンスターズにおいて、最高の攻撃力数値を誇るドラゴンの名前だ。

当然、所持する者、もとい実物を目の当たりにした決闘者は少ない。遊星達が生活を送る未来の世界では、既に伝説のカードと称されている程のレアカード。

換金すれば、ジャックが大好きなブルーアイズ・マウンテンを浴びる程飲んでもお釣りがくるだろう。

緊張のあまり呼吸が乱れ始めるアキ。クロウも額に浮かぶ汗を手で拭い去り、唾を喉奥へと流し込む。

残り2ターン、僅か2ターン後には伝説の最強龍が姿を見せる。

そう考えると、様々な感情が湧き上がり、身体の震えが止まらない。

……龍可はぎゅっと龍亞の服を両手で強く掴んだ。

「武藤遊戯、F・G・D出現マデ残り2ターン、精々無駄ナ足掻キヲスルンダナ ターンエンド！」

「勝利を確信するには気が早すぎるぜ。俺はライフが尽きるその時まで、決して諦めない 例え相手がF・G・Dだろうとな！」

怯むことなく凛々しい表情で言葉を返す遊戯。自身のデッキトップに指を置き、素早く最頂のカードを引き抜く

「俺のターン、カードドロ！」

今回の最強カード

【スケープ・ゴート 速効魔法】

『このカードを発動するターン、自分は召喚、反転召喚、特殊召喚する事はできない。』

自分フィールド上に「羊トークン」(獣族・地・星1・攻/守0)4体を守備表示で特殊召喚する。

このトークンはアドバンス召喚のためにはリリースできない』

凡庸性が高く、トークンを生み出すカードとしては最も認知度が高いカードである。理由は言わずもがな原作で使用されていることと、一瞬で4体ものモンスタートークンを特殊召喚することが出来る。これに尽きるだろう。

アドバンス召喚の為のリリースにこそ使えないものの、その他の用途として、防御以外にも様々な活用法が多々ある。例をあげるなら、今回のようにシンク口素材として使う。その他にも一気に4体ものモンスターを場に展開出来ることから、『団結の力』の効力を一気に引き上げることも可能。トークン4体だけの場合でも、羊1体が攻守3200の強力モンスターと化す。因みに、アドバンス召喚のリリースに使えないだけで、特殊召喚などのリリースには使用可能。よって、『D・HERO BLOOD』の補助に用いることが出来たりする。種族さえ変えてしまえば、『幻魔皇ラビエル』も同様である。決して、『突然変異』からの『サウザンド・アイス・サクリファイズ』にしてはいけない。

が、その反面デメリットも大きく、貫通効果持ちのモンスター

ーの前ではサンドバッグにされてしまうことも。更に4体ものモンスターを特殊召喚するので、フィールドには予め空きスペースを用意しておく必要がある。勿論、チェーンを組まれて自分の場にモンスターを召喚され、フィールドに4つ以上の空きスペースが無くなってしまつと不発になってしまう。召喚が出来なくなるのもかなりの痛手だろう。(忘れがちだが、セットは出来る)

原作及びアニメでは、主に我等が凡骨こと城之内が使用。原作では特にデメリットのないトークン召喚カードだったが、アニメではOCGを基準としており、たびたび相手ターンで使用された。防御以外にも『漆黒の豹戦士 パンサー・ウォリアー』の攻撃コストとしてリリースされている。他にも同作品でレベルカ。GXでは明日香とレイ、5D'sでも発動こそされていないものの、登場はしている。

そしていつもの余談。ホントーにどうでもいい話なのだが、スケープ・ゴートのゴートとは「ヤギ」を意味する言葉である。勿論、スケープ・ゴートとは聖書に書かれたヤギの話で登場する身代り山羊たちのことであり、決して羊ではない。……ヤギトークンでは駄目だったのだろうか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2179o/>

遊戯王 3大英雄集結、未知なる時空を超えた絆!!

2011年12月27日00時55分発行